目次

瀬戸正夫の人生　下巻

冷酷な人間社会
親切な近所の住人
生きる苦しさ
屋根に石ころをぶつけられて
蛆虫騒動
逃亡兵
再調査
タイに残った人々
侘しい正月
醤油販売
ぼうふら掬い
賭博
親友ジュワンの死
仕事は辛い
小野商会で学んだ社会学
燕にならないか
両手に花
居候生活
チャロームタイ劇場
独学への道
写真に魅せられて
マーディーパイディーの暮らし
ジーシヤの家
同窓生の消息
職を替えて転々と
ソムタヴィン学校の先生たち
日本人に侮辱されて
職を探して転々と
波止場の阿婆擦れ仲間
花屋レストラン
富士機械貿易公司

ＳＲタピオカ工場
日本語の家庭教師
やっと聴けたＬＰ盤
新興産業
住友商事時代
実母を探し求めて
実母の面影を探し求めて
涙の対面
複雑な運命線
涙に泣き濡れた母
僕の故郷プーケッの孤島
日本国籍を破棄されて
自殺への心境
人生の再スタート
地下潜行工作
国籍調査依頼
住友商事を辞職して
貿易業
我が道
バンコクカレッジ
夢の旅行社
記者の卵
混乱するインドシナ半島
難民キャンプ
切ない野辺の恋
女難の相ありや
結婚にゴールイン
新婚旅行
幻の夢
義理の母テルの死
子宝に恵まれて
タリカの死
ピーィとの出会い
僕の予知感

僕の霊魂
不思議な冷凍病
タイ国内５０万キロ疾走
タイの戦国時代
タイのクーデター
民主革命の渦の中で
初めての日本
浅草の朝
市村家にて
移動事務所
博多にて
弟子と共に
東京の渦の中で
懐かしい須佐の町
敗戦後父が辿った道程
父の墓参り
僕のニックネーム
甘い汁はあとが怖い
情報網の世界
日本の戦争を顧みて
祭部隊の将兵
ナコーンナーヨック最後の決戦場
愛馬の悲劇
思い出すがままに
波多野秀さんの遺稿より

瀬戸の略歴
取材その他でお世話になった方々
あとがき
参考文献及び写真

■冷酷な人間社会

待ちに待った待望のタイ残留許可書が発給されたのは、１９４６（昭和２１）年９月２３日だった。収容所で発給された細長い紙切れに簡単に書き込まれた許可書に、万年筆で「瀬戸正夫」と、日本語で署名し、更に犯罪者みたいに右手親指の指紋を押した。これですべてが終わり、やっと羽を伸ばして自由に飛び歩ける身となった。

タイに残留を許可された人は、バーンブワトーン第１キャンプに収容されていた同胞およびバンクワン刑務所と僕みたいに第１６陸軍病院にいた人たちを含めてみんなで約１２６人だった。

無事にタイに残されたメンバーは長年タイに永住し、永住権を持っている人たちだけだった。バーンブワトーン・キャンプにいた同胞は、船でバンコクのターチャーンで上陸し、其処で解散したのだった。

僕はお世話になった陸軍病院の兵隊さんに別れを告げ、楽しかった病院生活に終止符を打った。前途になにが待ち構えているかわからない未知の冷たい大人の社会へ向かって運を天に任せ、人生のスタートを切った。

暗黒の果てしない茨の道を、知人も頼る者もなく大きな無邪気な瞳を輝かせ、美しい無数の夢を胸に描き、独りでトボトボ歩きだした。

あるときは侮辱され、あるときは騙され、あるときは涙を流し、大人の邪悪な辛苦を味わった。だが、どんなに悲惨な思いをしてもギュッと歯を食いしばり、常に微笑を残し、暗黒の腐敗しきった社会へ潜入し、純真な愛をばら撒き、愛情豊かな心の友を、手探りで捜し求め、自分に定められた人生行路を辿り始めた。

僕は母と小さな手荷物を持ち、表で退屈そうにたむろしていた幌を掛けたサームロー（輪タク）に乗り、１年ぶりに懐かしいスリウォンの旧家に戻った。しかし其処には戦争に勝ち誇った見知らぬ垢抜けした裕福そうな華僑の家族が入っていた。

僕の姿を見た途端に、下のベランダに細い綱で繋がれていたポチが、クンクン、ワンワンと泣き叫び、今にも尻尾が千切れるのではないかと思うくらい尻尾を振り、僕を迎えてくれた。

僕は嬉しくて、「ポチ、ポチ」と呼ぶと同時に、ポチを抱き締めた衝動に駆られたが、次の瞬間、痩せぎすの怪訝そうな顔をした華僑の主が顔を出し、横柄な態度で「お前は誰だ？　なにをしにきたのだ？」と、問われた。

僕は「元この家に住んでいた日本人で、この犬の持ち主です。ポチを返して貰いたいのでずが……」と言うと、「なに日本人？　この犬には毎日飯を食べさせたのだから、飯代を払ったら返してあげる。但し１日１バーツだから３００バーツ払ってくれ」と言われ、カッとした僕が「それは滅茶苦茶だ」と反発すると、「負けた日本人がなにを威張っているんだ、１銭も負けないから」とプイと横を向き、突っ放されてしまった。

僕は悔しかったが、母に「ポチが欲しいから３００バーツ払って」と、哀願した。が、母も知らぬ顔したままだった。アーァ、やっとポチに会えたのに、僕の最愛のポチを助けることがきない、なんと情

けないこと。だが、悲しいかなどうにもならなかった。
ポチのことを諦めて、隣の家主の家へ行こうとしたときだった。クンクン泣き叫んでいたポチが綱を噛み切り、大喜びで僕に飛びついてきた。僕は抱き抱えて「ポチ、ポチ」よしよし」と、頭を撫でてやった。ポチも嬉しいらしく、クンクン泣きじゃくりながら柔らかい舌で僕の顔中をペロペロ舐めてくれた。
1年ぶりに会ったポチは元気だった。「大好きなポチ、やっとお前に会えたけど、どうしても別れなければならない辛い身なんだ。ポチ、ごめんね」と呟き、身を切られる思いでポチと別れたのだった。

■親切な近所の住人

母と2人で家主に会い、預けておいたお金の催促をすると、快く６０００バーツの現金を返してくれた。小さな拳銃は返してくれなかったけど、お金を返してくれたのだから、運がよい方である。
家主に「今日からどうするのですか」と、心配そうに聞かれたが、「まだどうなるかわかりませんが、これから家を探してみます。荷物は家が見付かってから後から取りにきますから」と言って、お礼を述べて別れた。
家主の家から一歩外へ出てみると、僕たちが帰ってきたことを聞きつけた隣近所の人たちが集まって待ち構えていた。誰もが嬉しそうな表情で「よく帰ってきた、無事に戻れてよかったね」と、みんなに優しい目で歓迎され、心温まる思いだった。
なにはともあれ、まずは住家を捜さなければならなかった。みんなに頼み手分けして手頃な安い家を捜し回ったが、家賃の高い家ばかりで、そう簡単に見付かるものではなかった。
夕方疲れ果てていつも行く雑貨屋兼お茶屋で水を飲み、寛いでいると、雑貨屋の親父も心配して「今日からどうするんですか？何処で寝るんですか？」と訊かれた。
途方に暮れ、返事に戸惑っていると、こちらの気持ちを察してか、「家が見付かるまで遠慮なく我が家の二階に泊まってください」と、親切に言われ、親父の言葉に甘えて其処の二階で暫く居候することになった。その日は、店の家族と一緒に夕食までご馳走になり、頭が下がる思いだった。

■生きる苦しさ

母は戦前にソンクラーの我が家で世話をしたことがある友人の西野智歯科医や、滝川虎若ドクターを頼って行き、「親子2人を置いて欲しい」と、「頼んだそうだが、拒否された」と、ブツブツこぼしていた。
お茶屋に一週間ほど世話になった僕は、近くのスリウォン通りに面した二階が倉庫になっていたあばら屋同然の階下を借りて其処で数ヶ月暮らすことになった。数年間誰も住んでいなかった、と言われる曰くつきの幽霊屋敷のようなトタン屋根のあばら屋は、蜘蛛の住家であり、床下は水が溜まり、溝鼠の巣窟と化し、埃だらけだった。
部屋の間取りは、仕切りもなにもないだだっ広い家で、寝室も台所も、水を浴びる浴室もなにもなか

った。トイレはあったが、囲いの板は腐れて崩れかかり、扉もなかったので、入り口にカーテンを掛けてカムフラージュし、トイレ兼、浴室兼、炊事場として兼用した。

着の身着のまま同然だった僕には、日常生活に必要な物はなにもなかった。はじめにやったことは、まず七輪、鍋、釜、やかん、バケツ、箒、ゴミ取、紐、ナイフ、包丁、炭、それと2人分の茶碗、皿、コップ、箸、匙、枕、毛布、枕カバー、蚊帳、ござなどの、どうしても必要な物だけを揃えた。

後は、毎日食べなければならない米、塩、砂糖、醤油、コーヒーやミルク類であった。だが、たったこれだけの物を一編に揃えるには出費も結構嵩み、母は「金ばかりかかってしょうがない」と、渋い顔をしていた。

あばら屋に引っ越して間もなくだった。まだ収容所から出たばっかりで、誰が何処に住んでいるのかよくわからなかった頃だった。が、ミッキーたちが中央郵便局の前で鰐皮製品を売っているトゥンマハーメークのYシャーの家に世話になっていることを聞きだしたので、僕は或る日、新野一家を訪れた。

Yシャーの広い敷地内の池には大きな鰐が放し飼いになっていた。ミッキーたちは庭に小さな松の木が一本植わっている一番奥の二階建ての家に住んでいた。ミッキー、郁子ちゃん、昭子ちゃんたちとは第1キャンプで別れて以来久しぶりの再会だった。

僕は第1キャンプにいたときに英軍の強制送還命令を受けて第１６陸軍病院に連行されていたので、もうみんなとは二度と会えない、と、思っていただけに、とても嬉しかった。

僕等の仲間もみんなバラバラにされてしまい、実際に今誰が何処にいるのかさえもはっきりわからず、実に寂しく、心細い心境だった。

ミッキーと懐かしい日本人学校の話や、バーンブワトーン・キャンプの話をしたが、思い出すと、涙が滲み出る思いに駆られた。僕は最後に「いま学校に行きたくても日本人学校がないから、タイの学校に入るしかないな」と、話し合い、「出来たら一緒に学校に入ろう」と、約束を交わした。

しかし、我が家に戻り、母に「僕タイの学校に行きたい」と、自分の希望を打ち明けると、「金もないのに正夫を学校にやれない。これから先あと何年も食っていかなければならないのだから駄目」と、即座に「ノー」と、拒否されてしまった。

僕は「お金はまだ沢山残っているじゃないの。僕どうしても勉強したい。だから学校に行かせて」と息巻いた。だが、母は顔を強張らせ、冷たい表情で「わからない子だな、駄目だ、と言ったら、駄目なんだ」と、怒鳴られてしまった。

僕は「そんならタイ語の家庭教師でもいいから」と頼んだが、それでも「駄目」と、拒否されてしまった。おまけに「正夫はすぐ働いてもらわないと、食っていけなくなるからね」と、母に、ビシリと釘を刺されてしまった。

ミッキーたちは学校へ行けるというのに……母はまだ大金を持っているのに、どうして僕を学校へ行かせてくれないのであろうか。アーア、なんと切ない気持ち。僕は何故こんなに運が悪いのであろうか、と思うと、夢破れし自分の情けない身を振り返り、温かい涙を瞳に一杯溜めて、青空を仰ぎ見た。

■初仕事

僕が未知の社会へ社会人として仕事に飛び出したのがあばら屋に引っ越して間もない１０月１５日だった。僕の初職場は、母が勝手に僕には相談なしに決めた、元ソンクラーの我が家にいた西野歯科医師と取り決めたものであった。

僕は西野さんの下で医療器具を消毒したり、コップを洗ったり、治療室の拭き掃除などをする、はっきり言って頭を使わないで済む簡単なボーイの仕事だった。仕事は週６日制で、給料はたったの１５０バーツだった。

僕は初日の仕事に行く日に、長ズボンも無く、母からは小遣いも貰えず、懐には１銭のお金もなかったので、電車にも乗れず、スリウォンの我が家からヤワラーの中華街まで歩いた。お昼の食事の時間になり、お腹が空いても無一文だった僕は、水道の水を飲んで我慢するしかなかった。

次の日からは自分でお弁当を作り、スリウォンのあばら屋からヤワラーの勤務先まで歩いて通っていた。勤め始めた初めの頃だったが、患者が来るたびに、僕は「おじさん、お客さんです」と、西野医師に伝えていた。だが数日後に、西野医師から「お客さんじゃない、患者と言うのだ」と注意されてから、初めてなるほど「患者」と言うのか、と、単語を覚えた次第だが、僕はまだ社会用語もなにも知らない幼稚な使いものにならない人間だったのだ。

西野さんの歯科クリニックは、ヤワラー中華街の目抜き通りに面した三階建ての二階にあった。階段を上がりきった右手が治療室になっていて、表通りに面した左手の物置場が工作室になっていた。

治療室の隣はヤワラー薬局社の事務室になっていて７、８人の事務員がのんびりと書類をタイプしていたりして仕事をしていた。三階では大勢の若い娘たちが１日ペチャペチャ喋りながら、頭痛薬や風邪薬などを調合して、紙袋や小瓶に詰める作業をしていた。階下は売店になっていて薬品や医療器具、それに眼鏡なども誂えて販売していた。

薬局の前には金屋や、東舞台、それに西寄りのヤワユーン・レストランの側に西舞台の映画館があった。両方の映画館からは中国語の歌謡曲が流れていた。毎日同じ曲を万遍なく流していたので、僕の頭の中にはいつの間にかいろんな中国の曲が染み込んでいた。

僕は映画館の拡声器から流れてくるいろんなメロディーを聴くたびに、いつも小さな声で口ずさんでいた。音楽が好きだったので全然飽きなかった。

その頃はまだ市内にチンチン、ゴーゴーと路面電車が走っていた時代で、物価も安く、電車の料金は三等が僅か２０サタン（２０銭）バス代は２５サタンだった。バーミーナーム（ラーメン）や、カレーの掛け飯が一杯５０サタンだった。だが、僕には電車に乗るお金も、美味しいバーミーナームを買って食べるゆとりもなかった。毎朝自分でお弁当を作ってヤワラーの勤務先まで歩いて通っていた。

僕は仕事に出たその日から、何故だか我が家の柱となり、生活費一切を切り回さなければならないはめに落ちていた。従って、僕が月々受け取っていたほんの僅かな給料は母に家庭の経費として毎月１３０バーツ渡していたので、自分の小遣いは僅か２０バーツしかなかった。

僕は毎日お弁当持参で通っていたので、薬局の社員や店員は珍しがって時々僕が何を食べているのか

を工作室に覗きにきたりしていた。だが、いつも同じ物ばかり食べていたのを見て「飽きないかい？　何故買って食べないの？」と訊かれたりした。が、僕はいつもただ「お金がないから」とニヤニヤ笑っているだけだった。

僕がヤワラーに通い始めて2、3日経ってからだった。僕と同じような役割をしていた海南島のジュワンと親しくなった。彼は毎朝一人でビルの鉄の扉を開けたり、各部屋の掃除をしたり、薬の包装や荷造り、使い走りなどもしていた。

僕が彼と親しくなったきっかけは、僕には関係なかったのだが、彼と一緒になって窓を開けたり、掃除の手伝いをしたりしてあげてからだった。

店員の中にはいつもわざと僕をからかったり、頭を小突いたりして喜んでいたヘンと言う背の高い意地悪な青年がいた。

僕は彼から何をされても黙って我慢していた。だが、或る朝まだ店が開いてなかったので、横の細い路地の歩道に座って店が開くのを待っていたときだった。

例によって、ヘンが「日本は戦争に負けたんだよな、正夫は恥ずかしくないのかい？」と、せせら笑いながら足で僕を蹴っ飛ばそうとしたので、僕は遂に堪忍袋の緒が切れてしまった。

僕は「このやろう」と、怒鳴ると同時に彼が蹴り上げた足を右手でバシッと払った。途端に、ヘンは重心を失いそのまま汚い溝の中に嵌ってしまった。僕は痛そうに顔をしかめている彼に「ヘン、本気でやる気か？　これからはいつでも貴様の相手になってやるから覚悟しろ」と、相手を睨みつけた。彼はそれ以来猫みたいに大人しくなり、不思議に言葉遣いまで丁寧になってしまった。

二階で仕事をしている事務員の中に、マレー系の英語の商業レターを専門に書いていた眼鏡を掛けた禿ちゃびんの小さなおじさんがいた。

僕は彼に「英語を教えて頂戴」とねだり、暇なときに彼から初歩的な英語を習っていた。彼はとても親切なおじさんで、実費で簡単な英語の会話の本を買ってきて、発音の仕方などを熱心に教えてくれた。僕は彼のお陰で、英語が少し話せるようになった。

二階には男性の中に混じってまだ若い色白の滑らかな肌をした綺麗な小柄な可愛いタイピストが一人いた。僕は彼女にも英文のタイプの打ち方を習った。

最初は10本の指をキーの上に置く指の動かし方から習った。僕は初めていじるタイプライターに興味を抱き昼休みを利用して、バターンバターンと雨垂れ式にタイプライターのキーを叩く練習をしていた。

その淑やかな彼女が時々男の連中からからかわれているようで、僕が工作室で石膏の後片付けをしたり、お弁当を食べているときにそおっと部屋に入ってくることがあった。

僕の横にちょこんと座り、「私みんなからいやらしいことを言われて苛められたわ」と、お下げ頭を振り翳しながら、メソメソ泣き出し、僕にだだを捏ねたりするのだった。僕は彼女を慰める術もなく、いつも「そう、可哀想に」と呟き、ハンカチで涙を拭いてあげたりした。

ヤワラー薬局の社長は、ピチャイ・ラッタクンさんという後に民主党党首になった温和な人物だった。

それにまだ若かった背の高いすらっとした息子のピチッもいた。彼も後に父の党で活躍した人である。

■屋根に石ころをぶつけられて

僕がこのトタン屋根のあばら屋に住み着いて暫く経ってからだった。夕日が沈み、闇が訪れてくると、誰かが毎晩のように大きな石を2、3個続けさまに投げつけるようになった。屋根はトタン屋根だったので、石が屋根に落ちるたびに、ドカーン、ドカーンと響き、僕の神経をいらいらさせ、刺激した。

僕は石を投げられるたびに扉を開けてさっと外へ飛び出すのだが、外は街灯もなく真っ暗で誰が何処にいるのかさえ見えず、さっぱりわからなかった。そこで、僕は相手を捕まえてやろうと考え、長い強力な懐中電灯を買い求めた。

ある晩のことだった。僕は運動靴を履き、直ぐ外へ飛び出せる用意をし、部屋の明かりを消して相手が石を投げるのを待っていた。その晩もドカーン、ドカーンと、石が屋根に落ちてこだましたので、僕は咄嗟の間に外に飛び出し、さっと懐中電灯を照らし、謎の人物の姿を捕らえた。

不意を食った少年はびっくりしたらしく、逃げようとしたが、「このやろう」と、叫ぶなり追いかけて難なく彼を取っ捕まえた。その少年は近所に住んでいたタイ生まれの華僑の二世の子だった。

彼は僕の剣幕にブルブル震え、シクシク泣き出した。だが僕は容赦しなかった。彼を自分の家まで引っ張ってゆき、両親の目の前に突き出し「僕はなにも悪いこともしていないのに、人の家に毎晩石をぶつけるなんて、けしからん子だっ、もっときちんと躾しなければいかん、今度やったら容赦しないから覚悟しろっ」と、隣近所に響き渡るドスの利いた声でどなりこんだ。

両親も僕の凄い剣幕に驚いたらしく、「済まなかった」と謝り、僕の目の前で泣き叫ぶ我が子をバシバシ叩いた。しかしこの事件があってからは「正夫という日本の少年は怖い子だ」という、もっぱらの評判になり、みんなから敬遠されるようになった。

■蛆虫騒動

我が家の二階は家主の物置兼倉庫になっていたので分厚い埃を被ったいろんな物が山積みされていた。二階の天井代わりになっている板は、板が乾ききっていて所々に大きな隙間が出来ていた。家の周囲には窓もなく昼間はジリジリ焼きつける太陽の熱で蒸し風呂に漬かっているような耐え難い暑さだった。

このおんぼろのあばら屋に越してきて、二ヶ月目に入ろうとしていた日曜日の午後のことだった。その日は仕事が休みだったので、僕はなにもすることもなくぼんやりと家で寛いでいた。

母は例によって昨夜から我が家に泊まり込んでいたお花さんや、守屋さんさんのおばさんたちと座布団を敷いて徹夜で花札をして遊んでいた。と、そのときだった。天井の隙間から何か白い物が3人の頭上にポロポロと落ちてきた。

初めはなんだろうか、と思ったが、白い太った蛆虫だった。蛆虫は遠慮会釈もなく、みんなの頭の天辺から体を伝い部屋の中を這い出した。

僕は咄嗟に、裏の細いやっと一人しか上がれない細い梯子を伝い、二階へすっ飛んだ。蜘蛛の巣と埃

だらけになった二階の物置兼倉庫には、何か生き物が死んだムッとする臭い匂いが漂い、吐き気を覚えた。

僕は何が死んでいるのであろうかと、蛆虫が落ちている付近に積み重ねてある建築材の邪魔物を取り除いた。やっと見つけたその代物は大きな溝鼠の死体だった。その鼠の死体にはまだ威勢のいい無数の蛆虫がウヨウヨ動きまわっていた。

鼠は恐らく暑さのために死んだのではないかと思うが、僕は母に「この家は衛生に良くないから早く何処かへ引っ越したほうがいい」と、意見を述べた。

■逃亡兵

インちゃん（春木忠雄）が匿って貰っていたウボンの農村には、数人の逃亡兵が大工の職人に化けたり、農家で農民と一緒に野良仕事などをして身を隠し、親切な農家の農民に助けられて残った人もいた。バンコク市内にも華僑に成りすましたりした逃亡兵がうろうろしていた。

或る日、我が家にも一人のやつれた逃亡兵がひょっこり現れた。僕は直ぐ家の中に招き入れ、外から見えないようにして食事を与えた。僕はその可哀想な逃亡兵を自分の家で匿ってあげたい衝動に駆られた。だが如何ともせん、僕は自分自身が食っていくことすら大変だったし、匿うにもそのようなスペースもなかった。

その人はビルマ戦線で散々な目に遭い、チヤンマイからラムパーンに退却してきたときに終戦になり、暫く北部のある農家に隠れていたのだった。だが、誰かに密告されるのを恐れ、不安に駆られてバンコクに出てきたのだった。

タイ当局は英軍の圧力により、当時、一般邦人を含めて逃走中の日本人の首には、涎を流したくなるほどの膨大な懸賞金が掛かっていた。

タイの新聞やラジオで「不法侵入者。或いは逃げている日本人の居る場所を密告した者には階級に応じて、５千から３万バーツの懸賞金を与えるから申し出るように……」と、宣伝されていた。

現在残っている僕の一部の友人も含め、その頃は見えない魔手を逃れるために、みんな必死に逃げ回っていた。私服の刑事に掴まっても金の威力によって逃げ伸びた人もいたし、運悪く警官に逮捕され、有無を言わせずそのまま警察の豚箱か、バンクワン刑務所に叩き込まれ、英軍の手に委ねられた人もいた。

そうかと思うと、小太りした小川兵士のように数年間バンクワン刑務所に投獄されたまま忘れ去られていた気の毒な人もいたのである。

■再調査

或る日の夕方だった。僕がベランダの長椅子に腰掛けて涼んでいると、一台のジープが家の真ん前で停まった。そのジープには、第１６陸軍病院で一緒の部屋にいた寺尾さんのおじさんと、痩せぎすのほっそりした英軍の将校が乗っていた。

寺尾さんは笑顔で、「今日は通訳を頼まれてきました」と、前置きして、英軍の将校と一緒に僕の横に座った。部屋の中にいた母も呼び出されたので、僕は直感で、今日は何かあるに違いない、と感づき、言葉遣いに気をつけた。

英軍の将校は鞄の中から分厚いアルバムを2冊取り出して「もし知っている人がいたら、教えてください」と言って、初めに母に手渡した。

母はペラペラとアルバムを捲って写真を見ていたが、なにも言わなかった。英軍の将校は、母が見終わってから僕にも「ゆっくり見るように」と、促した。

そのアルバムには、2インチサイズの軍人や軍属の写真がぎっしり貼り付けてあった。国のために尽くした人たちなのに、まるで罪悪人のように正面と真横から撮った顔写真の下に、犯人の背番号が明記されている代物であった。

それはシンガポールのチャンギー刑務所に投獄されていた連合軍が一方的に勝手に決めた、戦犯容疑者の疑いを掛けられた人々の写真だった。

僕はこんなに大勢の人たちがチャンギー刑務所にいるのかと思うと、暗い気持ちになった。僕はゆっくりとアルバムを捲って見たが、厳しい緊張したような強張った顔をした写真ばかりで知っている人は一人もいなかった。

僕は「知っている人はいません」と答えた。すると、「本当にいませんか」と、念を押された。「はい、いません」と言うと、その将校は意味ありげに僕の顔に視線を落とし、含み笑いをしながら、一冊のアルバムを手早くペラペラと捲り、おもむろに「この人は誰だか知っていますか」と、指を指した。僕は写真を覗きハッとした。それは夢にまで見た忘れ得ぬ痩せこけた父の写真だった。

父はシンガポール攻略のために、１９４２（昭和１７）の元旦に軍部と行動を共にし、活躍した父はマラッカで警察署長に任命され、ずっとマラッカに滞在していた。

軍部から特別扱いを受け、裕福に暮らしていた父は、後に特務機関の関係の仕事から手を引き、敗戦時はマラッカの病院長に転職し、わりと楽な役割を与えられていた。

僕の元へは戻る意志のなかった父は、恋人のスズおばさんと同棲していたが、マラッカで戦犯容疑者として逮捕され、チャンギー刑務所に放り込まれていたのだった。

僕はお父さんの写真を見るなり、「僕のお父さんです。お父さんは元気でしょうか?」と聞き返した。寺尾さんの通訳で元気だとわかりホッと安心したが、それからが大変だった。

神経質そうな見知らぬ将校は、父がソンクラーでやっていたスパイ活動のことや、英国人のパイロットがソンクラーの浜辺で父が立会いの下で死刑にされた話や、それに、辻参謀（辻政信中佐後に大佐）に会ったことがあるかとか、今何処にいるか知らないか、といったことなどを、ネチネチと1時間余りも根掘り葉掘り尋問された。

だが僕は、僕はバンコクにいたので父が何をしたのかなにもしらぬ、存ぜぬ、と、最後まで押し通してしまい、無事に難関を逃れることができた。

■タイに残った人々

バーンブワトーン抑留所でタイに残留希望を提出した人は、およそ８００名に及んだ。が、１９４６（昭和２１）年９月２３日に、タイ当局の許可により、タイに正式に残留できた人は、僅か１２６名だけだった。

この他にも、およそ２００名に及ぶ逃亡兵又は脱走兵と呼ばれていた軍部の捕虜収容所から逃げ出した日本の将兵がタイの東北部や北部の農村地帯、特にビルマと隣接している国境周辺に身を潜めていた人たちが多かった。

タイ当局ではみんなの動静を手に取るように感知していたようだが、英軍に圧力を掛けられない限り、見て見ぬふりをし、大目に見逃していた。

僕が英軍の将校から家庭訪問を受け、取調べを受けたのは、第１６陸軍病院から釈放されて間もない１０月初旬だった。その頃軍部と関係があった数人の同胞が僕と同じように取調べを受けていたのだった。

取調べを受けた人たちは、残留組の中に混じっていたスパイ活動をしていた人で、僕が知っている人だけでも２人いたが、証拠不十分で、うっかり名前を明かすわけにはいかない。ただ「この野郎、売国奴」と呪うしかない。

キャンプを出てからでも、同じ同胞である日本人を苛め、日本人狩りしていた現状だったので、油断は禁物であった。今後何かが起こるのではないか、と不吉な予感がしていた矢先だった。

やっとの思いでタイに残留できて一安心していた矢先、１５名の同胞が英軍の命令により、急に強制送還させられることになった。

その中には、僕が知っている人たちも混じっていた。敗戦の日まで藤原鉄工所と、サートーン通りにあったタイランド・ホテルを経営していた藤原一家（タイランド・ホテルは終戦後は一時ソ連大使館になっていた。が、現在の所在地はサップ通りの旧日本人会及び日本人学校だった跡にある）、歯医者をしていた歯科医師だった松尾一家などを含めて１５名の人たちが悪運に見舞われた。

この他に、お産のために第１６陸軍病院に残っていた日高邦夫さん一家がいた。日高さんはタイ当局から正式に残留許可を得ていたのだが、本人の希望で帰国することになっていた。

日高さんは生まれたばかりの可愛い健ちゃんと、小さな長男を含めて４人家族だったので、邦人は総勢１９名となった。一行はおよそ３００名の軍人と一緒にシンガポール経由で日本へ送還されることになった。

人生には様々な悲喜劇があるもので、松尾さん一家の場合は、残留許可がでると、すぐに家まで借りて歯科医院の準備まで整え、開業直前になっていたのに急に返されたのだった。

藤原家の場合は、４人家族だったのだが、移民局長の秘書約をしていると称するチャルーンさんと言う人物から「一人１０万バーツ、現金４０万バーツ払えば正式に残してやる」と言われ、カッとなった藤原さんが「バカを言うな」と、口論したために、故意に返されたのだった。

このような複雑な経緯があったために、最終的にタイに無事に残留できたのは侘しいかな１０７名だ

けとなった。財産をタイの敵産管理局に全部没収された人もいたが、みんな歯を食いしばり、日本の復興のため、そして、自分自身の再建のために、それぞれが異なった人生のスタートを切ったのである。

僕が親しくしていた滝川虎若医師は、ラーマ四世通りからシーパヤー通りに曲がる曲がり角に大きな二階建ての木造家を借りて「滝川医院」を開業し、新野芳四郎歯科医師は、サームジェークで「新野歯科医院」を開業した。

和田ドクターは、ナレー通りに「和田病院」を開業した。チヤンマイにいた波多野秀さんや田中盛之助さんは、チヤンマイの家族の元に戻り、従来通り「チェンマイフォート・スタジオ」の看板を掲げてスタジオの営業を継続した。

一方、１０月中頃バンコクのクローン・トーイ港で小型船に乗船し、シンガポール経由で、日本へ向かった日高さん一行は、生憎日本行きの乗り換え船がなかったために、シンガポールのジョロンのゴム林で足止めを食ってしまい、そこで日本行きの船を待つことになった。

そのゴム林には小屋もなにもなく、寝る処もなかった。ただ木陰にテントが張ってあるだけのお粗末なものだった。

みんなは各々がゴムの木を切り倒し、丸太を土の上に並べ、その上に莫蓙を敷き、寝床を作り、ジョロンで惨めな生活を余儀なくされたのだった。

待ちに待った日本船がシンガポールに迎えに来たのは、１１月１０日頃だった。その船は大砲や魚雷発射菅を取外した旧駆逐艦らしく、１０００トン余りの変貌した改造船だった。

船内は軍人で満員だったが、一般邦人は大きく分けて７家族だけだったので、特別扱いとなり、船室が与えられた。水もバケツ一杯の水を２人で半分ずつ浴びることができた。軍人と比較してわりと楽な恵まれた旅ができたのだった。

船は１９４６（昭和２１）年１１月２３日に、無事に長崎の佐世保に入港した。終戦後タイから在留邦人が送還されたのは、今回を含めて３回目であるが、これが最後の帰還組となった。

■侘しい正月

やっと社会人の卵となったなにも知らない僕は、相変わらず暢気に鼻歌を歌い、蛆虫がポロポロ落ちてくる蒸し暑いあばら屋から弁当持参で仕事に通っていた。

蛆虫事件があってからは、もう少しましな家を、と思い、家賃の安い家を物色していた。だが、なかなか思うような手頃な家がないままに、昭和２２年の正月をこのあばら屋で迎えることになってしまった。

家の中には家具と称するものは恥ずかしいかなまだ何ひとつなかった。どんなに暑くても扇風機を買い求める金もなく、汗がジワジワ滲み出ても我慢するしかなかった。今日は元旦だと言うのに、自分の大好きなお餅もお雑煮もない侘しい正月を迎えた。

いつものことながら床にござを敷き、僅かなあり合わせのおかずを突き、ご飯をかき込んでお腹を満たした。これが正月のご馳走だった。まだご飯にありつけるのだからましなほうであろうと、満足せざ

るを得ない。
お正月だからと言ってボーナスが出るわけでもなく、それにお年玉が貰えるわけでもなかった。お年玉と言えば、小さいときは誰もが「お年玉」を貰った経験があるのではないかと思う。
しかし僕は、今日に至るまでまだ一度も誰からもお年玉を貰ったことがなかった。僕にはソンクラーにいた頃からお金にはほとんど縁がなかったのだからごく自然な成り行きだったのかもしれない。

■醤油販売

僕がスリヴォンの大通りから横道に入ったタングアンスァイに引っ越したのは、蛆虫がポロポロ落ちてくるあばら屋で１６歳のお正月を迎えて数日経ってからだった。今度引っ越した所は細い路地に面した５、６軒ほど連なった古ぼけた平屋の長屋だった。
裏にトイレと広い炊事場があったので、前の暮らしよりはだいぶましだった。但し、家賃の負担は倍になった。対面に醤油や酢、ナンプラーの卸売りをしている顔馴染みだったお人好の華僑の家族が客を相手に忙しそうに商売をしていた。
僕はそれを見て一計を案じ、物は試しにやってみなければわからないので、と、母と相談し、母にガラスのショーケースを購入してもらい、醤油の販売の商売を始めた。
醤油だけではちょっと寂しかったので、僕はその辺で竹を拾ってきて竹とんぼを作り、売り出した。母も余った布で大小様々な人形を作ってショーケースに並べた。
僕が作った竹トンボは珍しかったらしく飛ぶように売れた。しかし、それは初めのうちだけだった。醤油のほうは少しずつではあったが継続して売れたので、これはいけるぞ、と思った。が、これも想像に反して思うようにはいかなかった。
小売価格は１本２バーツだったのだが、利益は１割、たったの２０サタンだった。しかも付けで買う人が結構多く、あとでお得意先をまわってお金を回収するのが大変だった。
人によっては図々しくてなかなか払ってくれない人もいたために、金欠病に掛かり、生計は日毎に苦しくなるばかりだった。
すべての負担が僕の肩に重く圧し掛かっていたが、勤め先の歯医者の給料は年が明けても相変わらず１５０日バーツ止まりだった。母は、僕がどんなに苦しい立場に追い込まれても、生活費に関する金銭面ではノータッチであり、全然助けてもらえなかった。
その頃の僕には情けないことに誰かにお金を借りるにも、相談できる友人も頼れる人も皆無に等しく、懐のお金がなくなればその日から無一文で暮らさなければならない惨めな身だった。
僕はなにも知らないで未知の大人の社会へ独りぼっちで旅立って初めて知ったのだが、何をするにも先立つものはお金であった。お金さえあれば、ひもじい思いをしないでもすむし、なんでも買えた。
しかし１銭のお金を稼ぐにも、想像に外して生易しいことではなかった。自分の体力と血と汗を消耗し、身を切られる思いで生きる苦痛を切々と味わった。

■ぼうふら掬い

ヤワラー薬局店の前に「トカーン」と言う、サンペンの綿布街や、ソンワートの問屋街へ抜けられる細い道があった。丁度サンペン街へ曲がる一角の道端の地べたに大きな盥やショーケースに綺麗な金魚や、熱帯魚を入れて売っている所があった。

そこには浮草や魚の餌にするぼうふらなども売っていた。地べたにペタッと座って売っている売り子はほとんどが華僑だった。

僕は或る日、その中で頭の剥げた小太りした人のよさそうな中国訛りのタイ語を話すおっさんを掴まえて「ぼうふらを持ってきたら買ってくれるかい？」と聞いてみると、「買うとも、ただし綺麗に洗ってこないとダメだぞ」と言われた。

僕はそれ以来日曜日毎に、家の近所でぼうふらを探し歩くようになった。答辞、近所にはタイ式の昔風の高床式の家も残っていたし、まだ下水もなく、汚い水溜りも多かったので、ぼうふらも繁盛し、一杯ウジョウジョ湧いていた。

僕にとって、ぼうふらが多ければ多いほど好都合であった。僕は左手に水を半分ほど入れたバケツをぶらさげ、右手に網を持ち、じめじめした汚い軒下に入り込んでぼうふらを掬って歩いた。

夢中になってぼうふらを掬っていると、汚い汚水がたらたらと流れてきて頭に掛かったりしたこともあったが、我慢するしかなかった。

僕は掬ってきたぼうふらを、何回も水を取り替えて丹念に洗い、最後に水の上にバナナの葉っぱを浮かせ、重いバケツをぶらさげて、金魚売りのおっさんに届けていた。その頃のぼうふらの相場はバケツ一杯が5バーツだった。

僕はぼうふらを売りだしたのがきっかけで、小さな金魚を買ってきて、大きな水がめの中に水草を入れて放し飼いにした。一週間に一回の割で細いゴムホースで水を入れ替え、金魚がだんだん大きくなるのを観察して楽しむようになった。

闘魚も一匹ずつ別々の瓶に分けて（一緒にすると死ぬまで咬み合うので）、瓶と瓶の間を紙で仕切り、相手が見えないようにして飼っていた。闘魚は、青、赤、紫、その他様々な色の種類があり、とても綺麗だった、

目隠しの仕切りを取ると、面白いことに雄同士の場合だと、唇をとんがらせて怒りだし、急に鮮やかな色に変色し、背びれをパッと立てて、尾びれを開き、相手に挑み掛かろうとする。しかし、雄と雌の場合だと、ただ目と目で睨めっこしているだけで、恋を語っているような感じだった。

僕は物好きだったので、闘魚に卵を産ませ、孵してみることにした。雌のお腹に卵ができる頃を見計らって、雌を透明な瓶の中に入れて水がめの真ん中に置き、雄を水がめに放した。雄は直ぐ口からブクブク泡を吐き巣を作りだした。

二週間ほど経って雌の卵が熟した頃に、雌を瓶から取りだして水がめの中に放してやると、白い無数の卵を産み落とした。雄は卵を守るが、雌は自分が産んだ卵を食べてしまうので、すぐ掬い出さなければならなかった。

産後数日で小さな針みたいな可愛い幼魚がチョロチョロ泳ぎだすようになった。が、ある程度大きくなった時点で雄を別に隔離しておかないと、お互いに相手構わず咬み合い自滅してしまう恐れがあった。

僕はこうして闘魚の習性を細かく視察し、いろんなことを、少しずつ覚えることができた。それからは我が家のショーケースの上に、闘魚の入った瓶詰めの闘魚を並べて売り始めた。

僕は同じような要領で金魚も試してみたが、金魚の場合は雌一匹に対して雄を二匹必要とした。それと、注意して見ていないと、雌が卵を産んで暫くすると、雄も雌も一緒になって生んだばかりの白い卵をパクパク食べてしまう習性を持っていた。幼魚も水温によって死ぬ率が高いので、大きくなるまで育てるのは大変だった。

■賭博

僕が金銭面で困り、ぼうふら掬いを始めて暫く経ってからだった。我が家には相変わらず母の賭博仲間が集まり、タバコをスパスパ吸いながら花札やトランプで賭け事に熱中していた。僕は賭博で小遣いを稼いでやろう、と企み、みんなの仲間に入れてもらい、勝負に挑んだ。

僕はソンクラーにいた頃からみんなのカードの繰り方を見ていたので、どうすればよいのかは頭脳の中に叩き込まれていた。お陰で、相手の手の内を敏感に読み取ることができたので、いい小遣い稼ぎになった。

僕はタイ人が家庭で見張りをつけて密かにやっている賭博場を見つけだして、そこへ遠征に行くようになった。そこでは、トランプで２１や、ポーカー、七並べ、それにタイのバイ・トーン（幅２センチ、長さ１０センチほどあるタイのカード）などがあった。

僕は一応全部に手をつけてみた。２１や７並べはその日の運次第で勝負が決まるので、主にポーカーに挑んだ。ポーカーはブラフ（度胸次第でごまかし）も利くし、度胸で相手を負かすこともできるので、スリルがあって面白かった。

当時、僕が主に行っていた場所は、ソーイ・ナーナー（今のスクムヴィッ・ソーイ４）にあった。ソーイの奥の左手に馬を飼っている馬小屋があった。賭博場はその馬小屋の見張りがいる後ろから入った隣の敷地内の家だった。出るときは別の出口から出られるように配慮されていたので、お陰で警官には一度も掴まったたことはなかった。

僕はいつも２０人ほど集まっている大人の中に混じって賭博に高じていた。賭博をやっている人はどうせ一癖も二癖もあるならず者が集まっているわけで、みんなの目の色は血走り、狂気じみ、獰猛になっているのが常だった。

僕はごまかされたりしてスッカラカンにされたこともあった。しかし、ごまかされた相手が誰だかわかった場合は容赦しなかった。僕もチンピラのごろつきのように生意気になっていたし、怖い者知らずだった。「こらっ、俺をごまかす気かっ、この野郎」と、そこら中に響く声で怒鳴り散らし、大きなテーブルを「エイッ」と引っくり返し、グルになっている相手に立ち向かい殴り合いの喧嘩をぶっぱじめ、またく間に２、３人を殴り倒し、ごまかされた金を奪い返したこともあった。

賭博仲間の連中は、僕が無鉄砲にあまりにも華々しく喧嘩をぶっぱじめるので、みんなから敬遠されるようになり、最後にはオーナーから「頼むからもう此処にはこないでくれ」と、断られてしまったのである。

■親友ジュワンの死

日が経つに従い、僕とジュワンは切っても切れない親友になってしまった。何処へゆくにもいつも二人で出かけていた。サートーン通りにあるセンルイ病院のお祭りや、中華民国の双十節なども金魚のうんこみたいに仲良くくっついて歩いていた。

映画を観るにも彼に奢ってもらったりして観ていたが、彼は僕の兄貴分だった。男女が性交すると、男性の精液によって女性が妊娠し、子供ができることを教えてくれたのも彼だった。それに闘魚や金魚の育て方も、彼の細々した入れ知恵があったお陰で育て方を覚えたのである。

僕はジュワンの家へもよく遊びに行くようになった。両親は海南島の人だった。痩せた小柄なお人よしのお父さんは中央郵便局の前にあったスイホンでコックをしていた。

ジュワンは7人兄弟の長男で、一番下にたった一人のポッチャリした可愛い娘がいた。彼の家は並木道に覆われたサートーン通りから横にそれた車が通れない細い赤土の道になっているセンルイ3（今のセンルイ3通り）の傾きかけたお粗末な平屋の長屋に住んでいた。家の構造は折りたたみ式の扉をあけると、外から中が丸見えであった。ジュワンは天井にくっつきそうな中二階を、兄弟4人と分け合い一角を自分のテレトリーにしていた。狭い家の中はギュウギュウ詰めだった。5人の兄弟はまだ学校に通っていたので、生活は苦しそうだった。

夕方になると、将来ボクサーになろうと夢見ている近所の若者が運河の側にある松の木陰に集まり、元気よくムアイタイ（タイのキックボクシング）の練習をしていた。初めの頃、僕はみんなの練習風景を見て楽しんでいたのだが、そのうちに僕もやりたくなり、みんなの仲間に入れてもらい、キックボクシングの真似事を始めた。

初めは大きなグローブでぶらさがっている砂袋をバシッバシッとパンチしたり、足先で蹴ったり、膝を曲げて攻撃したり、肘で肘鉄砲を食らわせたりする練習を繰り返した。

僕は短期間のうちにある程度タイ・ボクシングの要領を覚え、マスターできるようになった。ジュワンは心臓が悪かったので激しいスポーツは一切できなかった。彼はいつも足を蹴り上げたり、お互いの顔をパンチしあったりしている姿を、松の木陰に腰を下ろしてじっと見守っているだけだった。

その親しかったとジュワンは、僕が西野歯科医を辞めて、小野商会に勤めて暫く経ってから亡くなったのだった。しかも僕が知らないうちにこの世を去っていたのだった。

僕は偶然だったのだが、或る日、彼が高い崖の上から滝壺へ落ちて死んだ夢を見て、ハッと目が覚めた。だが、それは正夢だったのだ。

それから数日経ってからだった。ヤワラー薬局で薬を包装している女性からジュワンが死んだことを聞き、僕は「えっ、本当」と、びっくりして聞き返した。

僕は半信半疑でジュワンがいない彼の家へゆき、両親にジュワンの死について聞きただし、唖然としてしまったのである。

ジュワンは僕が夢を見た日に死んでいたのだった。彼はわざわざ僕に「さようならー」と、別れを告げにきたのだった。僕を自分の弟のように労ってくれたジュワンとは僅か2年あまりの付き合いであったが、実に面倒見のよい親切な男だった。僕は暗黒の社会に飛び出し、初めて捜し求めた友人だっただけに、彼の死が惜しまれてならない。ジュワンが死んで以来僕の気持ちは沈みがちだった。

死んでしまいたい衝動に駆られたりし、かろうじて呼吸をし、生きている意識のないロボットのような存在に等しかった。親友に先立たれた僕はただ彼の面影を偲び、数ヶ月間悲観に暮れ、別人のように無口な人間になっていた。

■仕事は辛い

僕が西野歯科医院に勤めて足掛け2年になろうとしていた。なんの変哲もない仕事に飽きがきているときだった。

僕はいつまで経ってもうだつが上がらないボーイをしているのが嫌になり、暇になると、隣の部屋へ行き、タイピストからタイプライターを借りてパタパタパターンとタイプライターのキーを叩き、タイプの練習に没頭するようになった。

だが、時々患者が来ていても気がつかなかったりして西野医師に不満を与えていた。或る日のことだった、僕がいつものようにタイプをしていると、「正夫、何しているんだっ、患者が来ているのがわからないのかっ、もっと真面目に仕事しろっ」と、血相を変えて西野医師に凄い剣幕で怒鳴られた。

僕はソンクラーで西野医師と一緒に暮らして以来、彼の大人しい温和な表情しか見ていなかっただけに、こんなに怖い顔をしたのを見たのは初めてだった。人間は時代が変われば気持ちまでもが急に変わるものなのか、と思うと、悲しかった。

僕はその場に居たたまれなくなり工作室へ飛び込んでしまった。シーンとした狭い部屋で思いに耽り、過ぎ去った過去のことを思い出していると、自然に涙がポロポロポロポロと込み上げてくるのだった。

僕にすれば、西野のおじさんだって困っていたときは、ソンクラーの我が家で寝起きを共にし、父に助けてもらっていた癖に、三食の飯だって母に作ってもらって一緒に食べていたじゃないか、僕の給料だってもっとくれてもいいはずなのに。2年も働いたのにボーナスすら1銭ももらえないなんて酷い。もっと優しくしてくれてもよい関係にある筈なのに……だが、それはもう過ぎ去った過去に過ぎないのだ。そこには義理も人情も何も残っていないのだ。ただ一人の正夫と言う反論もなにもできない能無しのあまり役にたたないボーイが目の前にぽつねんと立っているに過ぎないのだ。

僕はもう嫌だと思うと、徹底的に嫌になってしまう性分だった。決断力も早くその日のうちに「もう仕事を辞めますから」と宣言し、西野さんの所から飛び出してしまった。

母は西野さんの家族とは古い関係があったので、かんかんに怒り、「何故、西野さんの所を相談もしないで辞めたのだ、正夫はけしからん」と、怒鳴り散らされた。

僕は「嫌になったから辞めたのさ、自分の運命は自分で決めるのだから僕の邪魔をしないで」と、きっぱりと突刎ねてしまった。

この経緯のために、母の不満は募る一方で、僕には冷淡な態度を取るようになった。母とは、それ以来いざこざが絶えず、僕は不愉快な暗い家庭にいるのが憂鬱になり、家から遠ざかるようになってしまった。

■小野商会で学んだ社会学

僕が小野政治さんが経営していた小野商会に勤めたのは、１９４８（昭和２３）年１１月１日からだった。その頃のバンコクには辛うじてタイに残留した数人の同胞によって、僅かな資金をやり繰りしながら細々と経営していた小さな個人業や、日本のメーカー及び各企業の代理店を兼ねた、コンミッションベースで貿易をやっていた小さな会社が数社しかなかった。僕が就職した小野商会も日本と貿易の取引をしていたその中の一社であった。

僕には学歴もなにもなかった。バンコク日本人学校小学六年を卒業しただけで、タイ語は日常会話ができる程度で、英語も全然できなかったし、貿易関係の仕事の経験も皆無だった。「正夫ちゃんは現地で生まれたのだから」と、うまいことを言われ、僕の給料は僅か３００バーツだった。

しかし、西野さんの所にいたときよりは多少ましだった。特に、毎朝お弁当の用意をしないでも済むし、それだけでも助かるので我慢して働くしかなかった。

小野商会に勤めた当初は、茶碗皿などの食器類を専門に担当していた痩せぎすの伊藤さん、それに船戸さんが綿布や雑貨関係の仕事を受け持っていた。

タイ人のスタッフは色黒の小柄なアンチャンさんがタイピスト兼会計を受け持ち、美人のノポーンさんが事務及び、外部との交渉などの仕事にかかわっていた。

僕は此処でも決まった担当はなく、そのときの状況に応じて何でもやらされるはめとなった。英文のタイプや、オフィスの拭き掃除からメッセンジャーボーイ、銀行への預金や現金の引き出し、それに、商業省へ提出する商品の輸入申請書（当時日本との貿易はバーターシスタムによっていたために、日・タイ双方の貿易に様々な規制があり、商業省から許可が出ないと、銀行で信用状を開設することができなかった）の申請や、波止場で荷物を引き取る手続きや、荷物番からクーリーの真似事までやらされた。

なにも知らなかった僕は此処で初めて英文のタイプで商業省へ申請するフォームの打ち方や、銀行へ申請する信用状のタイプの打ち方、それにローマ字で１５字に纏めて綴る電文や英文の商業レターの打ち方などを覚えた。

僕は暇なときにはアンチャンさんからタイ語のタイプライターの打ち方を教えてもらい、タイ語も曲がりなりにもパターン、パターンと雨垂れ式に打てるようになった。

僕は社の使い走りや、中央郵便局へも頻繁に通わされた。日本から荷物が着くたびに書類を手にし、船会社へ貨物引換書を貰いに行き、シッピング（通関士）と一緒にクローン・トーイの波止場や、ヤンナワーの側にあったビーアイ・ポートや、オリエンタルホテルの側にあった税関へ赴き、送ってきた見

本や、荷物を受け取りに行く役目も負かされていた。
通関手続きはシッピングがやる仕事だったが、ただ書き込んだ通関手続き用のフォームを決められた窓口に提出し、係りの役人に書類をチェックしてもらい、更に次のセクションへと歩きまわるだけだったので、いつも僕が駈けずり回される役をやっていた。
窓口で込んでいて書類が山積みされているときは、窓口のお役人様に目で合図し、書類の中に１０バーツ紙幣を突っ込んで置くと、先に書類に目を通してくれる便利さがあった。
波止場から大量の荷物を出すときもそうであったが、厳格ありそうなバリッとした純白のユニフォームを着飾った偉そうな荷物検査係りのおっさんに、１００バーツほどのお布施を掴ませ、見本に残す商品の一部をプレゼントすれば、なんのトラブルもなく荷物はスムーズに引き出せる手筈になっていた。
商品の明細や品質が違ったり、あるいはサイズや重量などが多少オーバーしていたとしても、ありがたいことに物事は全てコネで、国王の似顔が印刷してある紙幣の威力によって、うまく解決できてしまう仕組みになっていた。
波止場の倉庫にはこそ泥も多かった。当時は今のような大きなコンテナはなく木箱やボール箱、ガニバッグなどに詰めた荷物がそのまま倉庫に山積みされていた。
商品を盗むのは波止場のクーリーやトラックの運ちゃんたちであった。連中の手口は数人でグループを作り、荷物の中にちょっとでも割れ目があると、そこから手を突っ込み、中の商品を抜き取り、リレー式に仲間に渡していた。
それと荷物を満載して走っているトラックの上からも、クローン・トーイの波止場から市場へ行く間に小物から綿布に至る大きな物までを、トラックの上からドスーン、ドスーンと落とし、待ち構えている仲間に放り投げていた。それを例え警官が見ていたとしても見て見ぬ振りをしていた。
僕は波止場へ行くたびにこのような同じ光景を何回も目撃するチャンスに恵まれた。シッピング自身に至ってもそうであったが、彼らは通関手続きをするために実際に掛かった経費に更に様々な理由を付け足し、およそ二倍もする請求書をいとも簡単にでっち上げ、お得意先から堂々と大金をひったくっていた。
物事は何処かが狂っていたのではないかと思う。だが、これが人間社会の裏で堂々と行われている暗黒の腐敗した社会であり、実際に生き抜こうとしている人間の浅ましい受け入れられない姿だった。

■燕にならないか

僕の日曜日の日課は、午前中に小野さんの家へ行き、日本へ出す郵便物を受け取り、ニューロードの中央郵便局へ手紙を出しに行くことだった。
手紙を出してしまえば後は自由だった。だが、いつもピーピーしていた僕には行く所もなくよく電車に飛び乗り、ヤワラー周辺までフラフラッと出掛け、銀ブラではないが、ヤワラーの中国人街をブラブラ歩き回っていた。
当時、あまりお金が掛からない娯楽と言えば、映画しかなかった。僕は洋画が好きだったので、時々

一番安い前列の２・５０バーツの席を買い、自分の好きな映画を鑑賞して一人で楽しんでいた。
早いもので僕が小野商会で働くようになってからもう既に1年あまりの歳月が経過していた。オフィスの仕事にもすっかり慣れて何でも自分一人で切り回せるようになっていた。しかし、給料は相変わらず３００バーツ止まりだった。
僕の給料は何故上がらないのかわからなかったが、このままの状態では新しい洋服を誂える余裕もなかった。靴下なども直ぐ破れるので、買うときは同系色の靴下を2、3足買い、靴下に穴が開きだすと、また靴下の上から別の穴の開いた靴下を二重に履き、破れ目があまり目立たないようにカバーして大事に使っている有様だった。
僕はそんな或る日、僕がマハーチャイ通りにあったグランド映画館の近くの食堂でカレーライスの掛け飯を食べていたときだった。ボーイがつかつかと歩み寄ってきて、「あちらのテーブルに座っている女性に頼まれて持ってきました」と言って、小さな紙切れを差し出した。
その紙切れには「ちょっと会ってお話ししたい」と、走り書きがしてあった。僕は不審に思い彼女がいるテーブルの方を振り向いた。すると、年のころ２４、５歳と、３５、６歳ぐらいの色白の肉付きのいい二人の裕福そうな美女がこちらを向いて微笑んでいた。
全然知らない女性だったが、二人の見知らぬ美女は直ぐ席を立ち、ごく自然に僕の横の椅子に腰掛けた。
僕が「何か御用ですか」と聞くと、「今ヌーゥ（大人が子供に呼びかけるときに使う、子供の意）何をしているの？」と聞かれたので「仕事をしていますけど……」と答えると、「私の家で働かない？　給料は弾むわよ、月５０００バーツどう興味ある？」と言われ、僕は思わず「えっ、５０００？」と聞き返した。
「そう５０００だよ、三食付で家も車も自由に使わせてあげるわよ」と、目を輝かせて答えるので、僕は「どんな仕事？」と、飛びついてついてしまった。
「それはね、とっても楽しい楽な仕事なの、私と一緒に寝るだけなの、ヌーは男だものセックスは好きでしょう？　私はね、ヌーとセックスして楽しみたいの、但し、1日2回だよ、できるでしょう？」と言って、意味ありげな眼差しで僕を凝視していた。
まだあどけない子供っぽい顔をしていた僕は、丁度思春期に入っていたときだった。性に関する知識はほとんどなかったが、性に目覚め、女性に対して敏感になっていた。女が欲しくてたまらないときもあった。遊び相手になってくれるガールフレンドが欲しいと思ったこともあった。だが、性の捌け口を求めるにしても女を抱いて遊べる金もなかった。どうしても我慢できないときは部屋へ飛び込み、自慰で性の処理をして我慢するしかなかった。
今勤めている小野商会で時々便所掃除までやらされている僕にしてみれば、矢も盾も溜まらず飛びつきたくなる話である。
こんなに綺麗な彼女たちと毎晩ただでセックスができるなんて願ってもないことだ。しかも５０００バーツの大金がもらえるなんてまるで夢のような話である。

しめしめ、柔らかな肌をした胸のでっかい相手が今目の前に二人もいるんだ、素っ裸になって力一杯抱き締めて大いにセックスして楽しんでやろう、と思うと、あら不思議、急に性欲がめらと燃え上がり、眠っていたぐんなりした皺くちゃになった倅が硬調し、ニョキニョキと頭を持ち上げそうになった。

僕の胸は高鳴り、今からでも彼女たちとセックスしてみたいと、話に乗り気になっていた。しかし、よくよく考えてみると、毎晩彼女たちとセックスして楽しんでいたら、いずれは体内の精子も全部吸い取られてしまい、最後には倅も役にたたなくなり、骨皮衛門にされてしまい自分の身を滅ぼす結果になるのではないのか、と思い、「僕燕になるのは嫌です」と、心が浮き浮きする性欲のパラダイス、ただで遊べるセックスの話をあっさりと断ってしまった。

この世の中には、男女間の不倫や、このような信じ難い嘘のような事実が拾おうと思えば常に目と鼻先にゴロゴロと転がっているものである。僕は男だけが家庭に内緒で二号さん、三号さんを囲って楽しんでいるのかと思っていた。

しかし、大人の複雑な社会では、金持ちの女も男に負けず自分の好きな若い燕を囲い、飢えた性欲を満たし、性の快楽を求めている別世界があった。人間とは何故こんなにも卑しい動物であるのかと思うと、僕は人間に生まれた自分自身が悲しかった。

■両手に花

僕が小野商会を辞めて暫く経ってからだった。先輩にあたる二人の女性、アンチャンさんとノポーンさんとは気が合い、いつの間にか3人で食事に行ったり、映画を観に行ったりする仲になっていた。

映画を観に行ったりするときは両手に花で、二人の間に挟まれて座り、新聞紙の袋に入っているお菓子を摘み、口に放り込みながら好きな映画を観て楽しんでいた。

僕の懐が寂しいときは、二人が争って入場券を買ってくれたりした。が、そのうちになんとなく変な雰囲気になってきた。僕は二人から別々に「私が奢るから二人で映画を観に行こう」と、誘われるようになってきた。

僕は自分の好きな映画をただで観られるので、いつも素直にＯＫしていた。だがそのうちに、二人の間に嫉妬心が生じ、火花を散らした眼差しを感じ取るようになった。

このままでいけばいずれは喧嘩の元になるだろうと思い、僕は映画や食事に誘われてもきっぱりと断り、二人から遠ざかるようにした。

なにも知らなかった暢気な僕は、二人の女にしつこく絡まれても別になにも考えたこともなかった。二人の問題が起こってから、かなりあとになってからであったが、或る日、タイ人の先輩から「タイでデートして二人で映画を観たりした場合は、もう性も全てを任せます。彼女を抱いてもいい、という意味なんだ。なにも知らない正夫はバカなんだな。俺だったらとっくの昔にものにしているのに」と言われ、僕は「へえ、そうなの、そんなこと全然知らなかった」と、びっくりすると同時に、初めて二人の女性が嫉妬した意味を理解したのだった。

■居候生活

僕の居候生活が始まったのは、僕が小野商会に勤めて暫く経ってからだった。それは或る日、母が長屋に訪れたビルマの戦火から逃げてきた城村照雄さんと知り合ったのがきっかけだった。

二人の間で話が急速に具体化し、城村さんの家へ引っ越したのは１９４８（昭和２３）年の１２月末だった。

当時、城村さんはバンカッピのソーイ・マーディーパイディー（今のスクムヴィッ・ソーイ５３）にあった木造の二階建て一軒家に住んでいた。敷地も割りに広く、裏には魚が一杯いる大きな池があった。

その池は隣の家まで伸びていたが、真ん中に竹の垣根で仕切った境界線があった。家のオーナーは、頭にターバンを巻いた片目のシワセンセンさんと言う、インド人だった。

城村さんの家には、日本語の上手なインド人のゲネさんや、椿さん、それに白垣さんが同居していた。時々ナコーンパトムで医者をしていた斉藤さんなども泊まりにきたりしていたが、城村さんの家にいたメンバーは、ゲネさんを除き、後は当時未だ身を潜めていた「逃亡組」と言われていた、ビルマの死線から運よくタイに逃げ延びてきた人たちだった。従って、それぞれの生きる道は厳しいものだった。

僕は二階の窓際の個室を頂戴し、久しぶりに落ち着いた気分になった。学歴も能力もなかった僕はどんなに頑張って働いても給料は上がるわけでもなく、とてもじゃないがやっていけなかった。

なにしろ家賃を含め、給料のほとんどを母に渡していたために、自活してやっていくのは並大抵のことではなかった。

人生のドン底生活に追い詰められ、長ズボンを誂えることも、靴一足すらも買い悩み、欲しい物は何一つ買えない惨めな身だった。しかし、僕自身は「そのときの運次第さ」と、わりに暢気な気持ちで割り切っていた。

僕は母からは、家庭内のいろんなことにつき一度も相談を受けたこともなかった。城村さんの家へ引っ越すときもそうであったが、何の相談もなくいきなり引越したのだった。いつものことながら、母は、僕の立場などはそっちのけで何でも自分勝手に決めてしまう悪い癖があった。

しかも、ありもしない僕の悪口までをまことしやかに言いふらしていたために、僕としてはバンコクの狭い口うるさい日本人社会から冷たい眼で見られ、非常に辛い立場に立たされていた。

従って僕は不愉快な思いをし、他人様の家に居候していても、母とは相変わらずいがみい合いが続いている有様だった。

僕はこの時点から城村さんの所を皮切りにおよそ６年間に及び、母の知人宅を転々と移転しながら肩身の狭い思いをし、居候生活を続ける身となったのである。

僕は城村さんと知り合ったお陰で、ここでもいろんなことを体験し、社会学を学ぶチャンスにも恵まれた。それに運がいいことに、城村さんは僕を我が子のように面倒を見てくれ、「正夫ちゃん、正夫ちゃん」と言って、可愛がってくれた。

僕はマーディーパイディーに引越してからは、毎朝暗いうちに起きて、道の両側が広々した田圃だらけだった静かなパークナーム街道（今のスクムヴィッ通り）を、牛や水牛がのろのろ歩いていた朝の長

閑な風景を見ながら、バーンナーの先辺りまでスタスタとスピードをだして走っていた。
当時バーンナー通りにはガソリンスタンドは何処にもなかったので、田圃の木陰で野糞をしたこともあったが、その頃の僕は毎朝元気よく２０キロほど走っていた。休みの日などには時々サムップラカーン県のパークナーム（河口）電車の終着駅周辺まで走ったこともあった。
夕方も勤め先から帰ってくると、僕はいつも裏のなにも見えない濁った池で１時間ほど泳ぎ、自分の好きなスポーツを楽しむようになった。
僕は不思議なことにどんなに辛い環境に直面しても自分の好きな曲を口ずみながら運動していると、気が弾み、心が浮き浮きして楽しくなるのだった。
マーディーパイディーのひっそりした道の両側には背の高いすらっとした松並木が路地の奥くまで間隔を置き行儀よくずらりと並び、じりじり照りつける暑い陽射しを遮り、涼しい陰を投げかけてくれた。僕はこのざわざわ揺れる松並木の木陰を一人で口笛を吹きながら歩くのが好きだった。
僕はこの「行きも帰りもよいよい」と言う、意味のある心地よい並木道を静かに歩き、片道ヌンスルン（２５サタン）だったナーイロートバス会社の白バスでプラパーチャイの終点まで乗り、そこから歩いてラーチャヴォン通りにあった小野商会へ通っていた。
コールタールで舗装された道路にはバス停もなにもなく、道端に立って手を上げれば、バスは何処にでも停まってくれた。
バスに乗り、車掌に２５サタン渡すと、細長い筒の中に入っている丸まっている切符を筒の蓋でガチャガチャと音を立てて切り取ってくれるのだった。
バスには運ちゃんと車掌の他に、バス代を猫ババされないように監視するために、別に切符をチェックする係りのおっさんが、軽業師みたいに走っているバスからバスへと、ヒョイヒョイ身軽に飛び乗り、車掌の手元に残っている切符のランニングナンバーをチェックして、今にも破れそうな運行用紙に明細を書き込んだり、乗客の切符を点検し、切符の両端を少しちぎり、二度と使えないようにしたりしていた。
バスは両側にクローンが流れている細い道をノロノロと走るのだが、次のソーイに差し掛かると、「次はソーイワッタナーでーす、降りる方はいませんかー」と、車掌の口元から声が響いてくるのだった。
バスは時々誰も停めないのに、勝手に屋台の前でスゥウーッと停まったりした。運ちゃんがタバコを買ったり、屋台のおばちゃんに（オーリヤン（ブラック・アイスコーヒーをひと缶）と注文し、ミルク缶の蓋の真ん中にバナナの紐（バナナの幹で作った紐）で吊ったオーリヤンの缶を受け取り、運転席の運窓際にぶら下げ、短く切ったストローに口をつけ、いともうまそうにチューチュー吸いあげながらハンドルを握って又トコトコ走り出すのだった。

■チャロームタイ劇場

僕が勤めていた小野商会にいつ頃からだったのか、城村さんと白垣さんが勤めるようになった。２人の担当はタイの経済問題に関する記事や、商業文の書簡などを便箋に両面のカーン紙を入れ、下敷きを

敷き、鉄筆で報告書を書いていた。しかし、２人が小野商会に勤務していたのは短期間だけだった。

僕が城村さんの所に世話になってからは、いつも金魚のうんこみたいに彼のお尻にくっついて歩き回るようになった。そのお陰でローンリヤンデック通りにいた野村ドクターや、チュラー大学の前にいた掻爬を専門に手がけていた鈴木ドクター、シーカックピヤシーにいた遠藤さん、ヨマラートの鉄道沿いにいたクラシック音楽が好きだった浜田さん、それとタイ人の奥さんと暮らしていた後に肺病で亡くなった片岡さんや、バーンブワトーンで絵を描いていた横田さんなどの酒飲み仲間と知り合うチャンスを掴むことができた。

僕も先輩の仲間に入れてもらい、ビールやタイのメーコーン・ウイスキーやー洋酒を飲むようになった。初めて酒を飲まされた日は、アルコールが体内を駆け巡り、体中がホカホカし、皮膚に赤い斑点が吹き出てめちゃめちゃに痒くてたまらなくなった。だが、二度目からはもう出ないようになった。僕はそれ以来酒をがぶがぶ飲み続けるようになった。

ラーチャダムヌーン通りの、パーンファーの角にチャロームタイ劇場の工事が始まったのは１９４０（昭和１５）年だった。しかし、日本の大東亜戦争の戦災に巻き込まれ、バンコク市内が空爆を受けたりしたために工事が大幅に遅れていた。

タイで近代的な一番大なき劇場、と言われた、チャロームタイ劇場が完成したのは、まだバンコクのあっちこっちに爆撃の傷跡が残っていた終戦後の１９４８（昭和２３）年だった。それは時期的に丁度僕が酒を飲みだした頃で、アルバイトの仕事を探し求めていたときだった。

その頃チャロームタイ劇場で公演していた劇団は、元サームジェークのチャロームナコーン劇場で劇のショーを披露していたソーォ・アッサナチンダー（後に有名になった俳優）さんなどがメンバーに加わっていた劇団だった。

僕はあるきっかけで、この劇団のメンバーの人と知り合い、劇団の練習風景を見学するチャンスに恵まれた。大勢の俳優が劇に出演する自分の役割のシナリオを読み、台詞を暗記しながら演技の練習を繰り返していた。

劇団の中には仕事をしながら練習に通ってくる真面目な人もいた。舞台の大道具を運ぶ裏方もいたが、たまたま人手不足だったので、僕は運よく裏方のアルバイトをする仕事にありつけた。

劇団の連中はいつも本番が始まる前から早めに劇場に集まっていた。役者はリハーサルを兼、舞台の上で本番そのものの練習を重ねるのだった。

僕たち裏方組は、舞台の背景に使う道具を担ぎ、風通しの悪い薄暗い狭苦しい楽屋裏で大粒の汗を流し、溝鼠のようにサッサーッとり走り回り、開幕の時間までに音がしないように使用済みの道具を解体し、新たに使う道具をセットしなければならない秒針との競争が待ち受けていた。

ライト係り、音響係りとみんな目が回る忙しさで大変だったが、本番が始まり、劇が進行しだすと、今度は常に監督の視線に注意を払い、劇の進行状況に応じて指示された通りに垂れ幕を取り替えたり、重たい大道具をみんなと力を合わせて音がしないようにそおっと運び、それを素早く組み立てたり、解体したりしなければならなかった。

チャロームタイの劇場でのアルバイトは重いたい道具を運んだりするので、かなりハードな仕事だった。だが僕は楽屋裏から役者たちの健気な人生劇を覗くのが好きだった。

スポットライトに照らし出された主人公役や、脇役が真剣な表情で演じるそれぞれのジェスチャーの仕草や、百面相みたいにうまい具合にコロコロ変わる表情を見ていると、何か心にジーンと来るものがあった。

各々が演じている演技には並々ならぬ努力が秘められていた。役者には貧しい人も多かったが、みんな空腹を満たすために、生きるために必死に演技に生命をかけていた。

舞台裏から覗く人生劇、此処にも厳しい世界があるのを身をもって体験した。だが、此処でのアルバイトは間もなく終止符を打つことになった。理由は、チャロームタイ劇場がシネマスコープ映画館に変わったからである。

■独学への道

誰の言うことも聞かない我がまま勝手な僕は、小野商会に2年いただけで何の変哲もない仕事に飽きてしまった。周りの同僚が「辞めたらあとで苦労するから」と、親切に止めるのも聞かず、後先のこともなにも考えずに「僕は嫌だから辞めるんだ」と我を張り、小野さんの所をあっさりと辞めてしまった。

僕は次の就職口を決めていたわけでもなかったので、次の日から1銭の収入もないルンペンの身となってしまった。しかしごく自然の成り行きで僕は城村さんがやっていた日本との貿易の仕事を手伝うことになった。

給料は５００バーツだったが、食事も城村さんがいればただで食べられたし、洋服まで誂えてくれたので、凄く助かった。

城村さんの事務所は狭いサンペン街のインド人の綿布業を経営していたレックさんのレック・ストアの二階に事務所を構えていた。レックさんはパフラッとサンペン街の2ヶ所に店を構えていた。

海外から綿布や色取り取りの綺麗な細いリボン、それにレース類を輸入していた。卸兼小売業も兼ねて手広くやっていたやり手の綿布商人だった。

僕は自分勝手に複雑な未知の社会に飛び込んだその日から「自分の運命は自分で決めるんだ」と、偉そうなことを言って決心したものの、実際に自分の希望や計画を立てたこともなかった。

将来はどうすべきでなにになりたいのか、といった目的もなく、ただなにも考えたこともなかった。その日その日をフラフラと放浪して歩き回っている能無しロボットにすぎなかった。あーぁ、なんと情けないこと。

バーンブワトーン・キャンプにいた頃は、ただで配給品を貰い、天国のような抑留生活から解放されてホッとしたのも束の間だった。瞬く間に4年の月日が無意味に過ぎ去ってしまった。

過ぎ去った貴重な時間はもう二度と戻ってこない。「ちょっと待ってくれ」と、どんなに大きな声で叫んでも、時は刻々と刻まれ遠慮会釈もなく秒針とともに振り向きもしないでサッサと音もなく去ってゆく。身の回りで起こった様々な出来事を明瞭に刻み込んで去ってゆく。

この４年間の自分の行動を振り返ってみると、自分は子供だ。仕事の経験もないし、無学だからなにもできないのが当たり前さ。これ以上何ができると言うのさ。学校にさえ行かせてくれないのだからなにも知らないのが当然じゃないか。

僕にはひねくれた捨て鉢なところがあった。だが、果たしてこれでいいのであろうか。と、自分自身に問い詰めた。

このままでは駄目だ。生きて行けなくなる。今からでも遅くない。まだ若いのだから手当たり次第に身に教養を付けることだ。兎に角、独学するしかない、と反省し、悟った僕は、直ぐ実行に移った。

僕はまず語学からスタートすることにした。肝心な日本語もタイ語もどちらかと言うと、日常使われている簡単な言葉しか知らなかった。実際に意味の深い単語や、言葉のあやもなんにも知らなかった。

それに読み書きにしてもあやふやで実に酷いものだった。実に恥ずかしい話であるが、次にあげるような文法、名詞、固有名詞、動詞、形容詞、外務省、国防省、大臣、首相、大統領などと、まだ幾らでもあるのだが、このように誰もが常識で知っている簡単な言葉ですら、なんと言う意味なのかさっぱり分からなかったのである。

僕は日本人なのだから、まず、日本語からマスターするしかなかった。しかし読めない漢字や意味のわからない言葉に直面しても、周りには気楽に聞ける人も、親切に教えてくれる人もいなかった。

仮に誰かに「この字はなんと読みますか」とか「これはなんと言う意味ですか」と、聞いたとしても、「なんだ正夫はこんな簡単な言葉も解らないのか」と、馬鹿にされるのが関の山だった。僕は恥ずかしい思いをしながら、唇を噛み締めて我慢するしかなかった。

日本語の辞書はないし、求めるにしても日本語の本などはまだ何処にも売っていなかった。困り果てた僕はペンフレンドを通じて文通することを思いついた。

早速英字新聞の広告欄で、日本にいるペンフレンドのリストを調べた。自分の日本名をタイ名に変名し、日本の未知のペンフレンド仲間と文通を始めた。

僕は最初からもし間違っている字があったら直してください。日本語を教えてください、と、素直に前置きしていろんな人たちと文通を始めた。

だが文通を続けていると、相手から来た手紙に、全然見たこともない漢字があったり、平仮名の書き方が違ったりした箇所に気がついた。

それと同時に相手からも、僕が書いていた漢字は間違っているとか、平仮名の書き方が違っているからと、次のような注意書がしてあったりした。「國は、国」、「思ふは、思う」、「てふてふは、ちょうちょう」、といったようなものだった。

初めの頃は何故字が間違っているのかよく理解できなかった。しかし、戦時中に日本人学校で習った正しいはずだと思っていた日本語が、終戦後の昭和２１年に、日本の文部省の規定により、平仮名は旧仮名づかいから現代仮名づかいに変わったことや、漢字も、漢文の漢字が当用漢字に変わったことなども知る由もなかった。

僕は文通により少しずつではあったが新しい漢字を一字ずつ覚えていった。４年間もフラフラ暮らし、

出遅れた知能の遅れた僕はみんなに置き去りにされてたまるものかと、必死で頭に叩き込んだ。
僕はタイ語も中途半端だったし、英語はゼロに近かった。初めの頃はバスや電車に乗ったりしたときに、商店街の軒先に掛かっている看板を教科書代わりにした。
看板には必ず中国語とタイ語、またはタイ語と英語の活字が並んでいたので、看板を見ながら活字の読み方を頭に中叩き込むようにし、タイ語と英語の新聞を読むように心がけた。
英語は、まずヴォラチャック通りにあったＹＭＣＡへ通い、初心者コースのクラスでアルファベットから習い始めた。それと同時にデーチョーにあったキリスト教の教会へ行ったりして、牧師と英語の会話をしたり、教会の歌を歌ったりした。
ある程度片言の英語ができるようになってからは、バンコクで上映される洋画の日本語と英語で記入されたシナリオを前もって日本から取り寄せるようにし、英語のシナリオを万遍なく声を出して読み返し、会話の部分を暗記し、映画館で映画を観ながら英語のアクセントの上がり下がりや話し方のコツなどを少しずつ覚えるように努力した。しかし、語学と言うものはそう簡単に覚えられるものではなかった。

■写真に魅せられて

僕は小野商会を辞めてからは自分本意でのらりくらりとフラフラした日々を送っていた。
僕の小遣いは小野商会を辞める半年ほど前から貰った給料を全部自分の小遣いに当てていたので、金銭の心配はもうなかった。
その頃の僕はほとんど毎日のように映画（二等席６バーツだった）ばかり観ていた。それに、日本、琉球、アメリカ、イギリス、香港、台湾、マレーシアなどを含めて、海外にペンフレンドが４０人ほどいたので、郵送する郵便代も馬鹿にならなかった。
この他に、出費が一番多かったのが、書籍代だった。日本から辞書や、二十四の瞳、アンネの日記、日本文学全集、世界文学全集、教養全集、日本近代全集、その他様々な書籍を含めて、直接本屋に現金を送金して取り寄せていたので、お金は１銭も残らなかった。
しかし取り寄せた本は全部残らずむさぼり読んだ。お陰で良い人生学を、哲学を学ぶことができた。
僕はフワラムポーン駅の近くに（事務所がサンペンから移転したため）あった城村さんの事務所で、貿易に関する細々した仕事を手伝っていた。
この他に、バンコクポスト紙からタイの政治、経済、社会問題に関する主だった記事を自分で選択し、新聞を読みながら、タイプライターで機関銃のようにパタパタ、ダダダーッとタイプして、それを時事通信社の津田さんや、ジェトロ（総合貿易機関）宛てに送っていた。お礼は一月１５０ドルだったが、それは城村さんの懐に納められていた。
初めの頃は何がなんだかよくわからなかったけれど、毎日新聞を見ながら、コピータイピスト役をやっていた。だが知らぬ間に世界の情勢や、タイの事情などが、自然と明瞭にわかるようになった。
城村さんの所では、別に体を縛られたり、時間を束縛されることもなかった。いつも好き勝手に自由

に事務所に出入りしていた。そんなわけで僕は実に気楽な気持ちで暢気に遊び歩いていた。僕は城村さんとは地方へもよく出掛けるようになった。

サムップラカーン県のパークナーム（河口）、パークラッ、マハーチャイ、ナコーンナーック、バーンセーン、バーンパイン、アユッタヤー、ナコーンパトム、ペッブリー、フワヒンなど、その他の地域へバスや汽車または、友人の乗用車を利用して、旅行に出掛けるようになった。それは二人だけで行ったり、バスを借り切り日本人の仲良しグループだけでワイワイ騒ぎながらツアーを組んで行ったりした。

城村さんは手先が器用で絵を描いたり、人形を作ったり、写真を撮ったり、歌を歌ったりする才能にも長けていた。初めの頃だったが、城村さんはスケッチブックを持ち歩き、木陰に座って風景をスケッチしたりしていた。

僕は絵は苦手だったし、あんまり関心がなかった。しかし、城村さんがカメラで風景写真を撮るようになってからは、僕はカメラの虜になってしまった。

何故だか知らないが、僕も無性に写真を撮りたくなった。現場でカメラの使い方を聞き、風景写真の撮り方を教えて貰った。初めの頃は足を棒にして歩き回り、白黒フイルムで風景写真ばかり撮っていた。

出来上がった写真を城村さんに見せて批判して貰い、前景に枝を入れたり、雲の生かし方や、逆光でうまく光線を利用して撮る撮り方や、フィルターの使い方などを指摘して貰った。

お陰で風景写真に関しては徐々に良い写真が撮れるようになった。だがそのうちに、肌の柔らかい綺麗な女性に興味を持ち、女ばかり撮るようになった。

風景を撮っているときは、Ｙ２（黄色２号）フィルターを掛けて、なんでもうんと絞り込んで撮り、それで満足していた。

しかし女性を撮り始めてみると、背景に見える不要な被写体や邪魔物が何でもはっきり写り過ぎるので、汚くて物足りなかった。だが、どうすれば背景がボケるのかぼかし方を知らなかった僕は、僕なりに努力した。

僕は標準レンズや広角レンズの性能も、レンズの絞りとシャッタースピードに関する知識もなかったので、自分が望んでいた背景をぼかした気に入った写真はなかなか撮れなかった。

人物、特にポートレートを撮ったりする場合は、瞳や表情を生かさなければならなかったし、光線の扱い方や構図や奥行きを出すのも難しかった。まだレンズや撮り方に関するテキストもなかったし、親切に教えてくれる人もいなかった。

仕方がないので、僕は僕なりに映画館で勉強することにした。映画館で英語の発音を勉強すると同時に、写真の撮り方の勉強も兼ねた。

室内のシーンの場合は、花瓶に生けてある花の色合いや、テーブルや電気スタンドの配置の仕方、それにライティングの当て方や、シルエットの出し方などを見習った。

野外で撮影している場合も、人物や建物の位置の配置の仕方や、木陰や背景の景色を如何にうまく取り扱っているかにつき、注意を払い、頭の中に叩き込んだ。だが肝心な撮影に適している使うべきレンズの種類に関する知識はテキストに頼るしかなかった。

僕の先生である映画は画面に対して質問はできないが、いろんな面で非常によい勉強になった。僕は映像から色彩や色の深みを学び、構図の奥行きの出し方、スポットライトのアレンジの仕方や、映画のシーンから切々と胸に染みる人生の悲哀や喜びなどもついでに学び取ることができた。僕の先生、映画は僕にとって、なんでも素直に指導してくれるよき先生であった。

僕が気違いみたいに写真を撮り出したのが１７歳の頃からだった。初めの頃は箱型になった上から被写体を覗くリフレックス式のボックスカメラや、ジャバラ式のカメラを借りて撮っていた。だが、自分のカメラが欲しくなり、アルバイトをして当時一番安かったジャバラ式のオリンパス・シックスを手に入れた。

まるで馬鹿みたいな話しだが、初めの頃はレンズは円いのに写真は何故矩形または、四角に写るのであろうかと疑問に思い、写真屋に聞きただすと、「レンズは円くてもフレームが矩形だから当然じゃないか」と、笑われてしまった。だが、それでもまだ納得できなかったほどだった。

僕はそのうちに写真を撮るだけでは物足りなくなってしまった。フイルムの現像や写真の焼付けや引き伸ばしも自分でやってみたくなった。だが、まだ現像液の調合の仕方も知らなかったし、暗室がなければ写真の処理ができないことすらも知らなかった。

僕は写真の現像処理をやっている数人の人たちに「現像の仕方を教えて」と、頼んでみたが、みんなは自分の職業を奪われると思って、ただ首を横に振るだけだった。

僕はやっとの思いでＹＭＣＡの同じクラスにいた友人のパニッさんが現像の仕方を少し知っていることを察知し、彼の家でフイルムの現像の手解きを施して貰った。

それからは、僕はトイレに暗室を作り、自分で現像液を作り、現像に挑戦してみた。しかし、大事なフイルムがペタッとくっついてしまったり、攪はんしなかったためにフイルム面にブツブツができたり、現像タンクに現像液と定着液を間違えて入れたり、現像タンクに現像液を三分の二しか入れてなかったりして、フイルムに未現像の部分ができたりで、失敗に失敗を重ねた。

写真の引き伸ばしもそうだったが、まず、大事なフイルムに指紋や傷をつけたりした。写真も焼けども焼けども白すぎたり黒くなりすぎたり、或いは印画紙が変な色に変色したりした。

初めの頃は残念ながら首を捻るだけだった。兎に角何故そうなるのか原因不明の儘だった。お陰で１０００枚ほどの写真を台無しにしてしまった。それでも、僕は負けずに根気よく努力を続けた。

僕は綺麗な素晴らしい写真を撮りたかったし、現像もうまくなりたかった。しかし、写真専門の美術学校へ行くゆとりはなかった。そこで手近にあった月賦販売をしていた書店で、写真技術に関した分厚い２０冊でワンセットになっている英語のテキストを購入し、英語の意味のわからない部分は辞書を引いたりして、努力に努力を重ねた結果、１０年ほど掛かってやっとの思いでなんとかものにしたのである。

■マーディーパイディーの暮らし

僕がお世話になっていた城村宅、マーディーパイディーの家では、ターバンを巻いたオーナーの家族

や、タイ人の出入りが多かった。特に拠り所がなかった邦人同士が集まったりしときは、実によく飲んだり食ったりした。

いつも酒盛りが始まり、ある程度アルコールが体内を駆け巡り、顔がホカホカと火照っていく頃になると、誰からともなく歌が飛び出すのだった。

みんなで浮き浮き浮かれてハーモニやアコーデオンの伴奏にテンポを合わせて声を張り上げて歌い、踊り狂い、ドンチャン騒ぎをし、常日頃溜まっているストレスを思う存分発散し、最後に酔い潰れてしまうのだった。

生き物が好きだった僕は、バンカピにいた村上六郎さんから可愛い子犬を2匹貰ってきた。コロコロした雄にはデブ、痩せたひょうきんな顔をした雄にはチコと名前をつけた。

この他に、白兎を2匹と、サームジェークで鶏などの卵を電気で孵化す専門店で、ピヨピヨ鳴いているひよこを買い、小さな鳥小屋を作り庭で放し飼いにした。

餌を与えたりする世話役は全部僕がやっていた。小さいときから犬も鶏も後から買ってきたがちょうも、一緒に僕の膝の上に乗せて頭を撫でたりして可愛がっていたので、みんな僕に懐き、僕が家に帰ってくると、ワンワン、ガーガー、コッコッコッと門の所まで迎えにくるようになった。

雄鶏は大きくなると、羽をバタバタ羽ばたかせて飛び上がり、僕の肩に止まるようになった。僕が庭で寛いだりしていると、可愛い小さな仲間が我先にと争って、僕の膝を目指して飛び込んでくる。

いつもワンちゃんと鶏が僕の膝を占領するのだが、「俺が先に来たんだ」と、言わんばかりの仕草をして、だだを捏ねるのだった。

だがそれでも他のが空いているスペースに潜りこもうとして頭をぐいぐい突っ込んでくるのだった。膝の上が駄目だ、とわかると、諦めないで両方の肩に飛び上がってきたりするのだった。

僕はいつものように膝の上で鶏の赤い出っ張った柔らかい鶏冠の目の縁を軽く撫でてやるのだが、小さな可愛い目を閉じて、いつまでも気持ち良さそうにじっとしている。すると、後からヨタヨタバタバタと走ってきた6羽のがちょうも、長い首をぐっと突き出して「私たちの頭も撫でてください」と小さな可愛らしい顔を摺り寄せてくるのだった。僕は僕を取り巻く小さな仲間と純心な気持ちで他愛もなくじゃれて遊び、幸せな気分に浸っていた。

そのうちに、鶏もがちょうも卵を産むようになった。がちょうの卵は大きいばかりであまり美味しくなかった。

鶏は規則正しく必ず小屋で卵を産むが、がちょうは呑気なものでガーガー歩きながら何処にでも卵を産み落とすルーズなところがあった。

僕は鶏の卵を孵すことにした。まず夜蝋燭を灯し、卵を灯りに近づけて明かりに透かし、上のほうに黒い目玉になった部分があるのだけ（卵全体が透き通って見えるのは孵らない）を選り分けた。

次に小屋に藁を敷き、藁の下に羽虫が湧かないように煙草の葉をばら撒き、卵を7つ並べて親鶏に抱かせた。親鶏は羽を広げておとなしく卵を大事にして抱いていたが、それから3週間後に7羽の可愛い雛がピヨピヨと産声をあげた。

今いる家の周囲は元々が田圃だった湿地帯で所々に藪が密集し、雑草が生い茂っていた。今まで田圃の穴倉で永住していたコブラなどの毒蛇や野鼠は意地悪な人間様に田圃を埋められてしまったために、強制疎開を強いられるはめとなり、行き場がなかった蛇は止む得ず家の庭先や藪に住み込むようになった。お陰で時々ニョロニョロと餌を漁りに来る蛇に出くわし、大騒ぎをすることがあった。

しかし、がちょうを飼うようになってからは、蛇にとっては大敵である、と、言い伝えられているがちょうの糞が怖いらしく、蛇は自然と姿を消してしまった。がちょうは蛇除けにもなったし、犬と共に番犬の役目まで果たし、泥棒の番までしてくれた。

僕と大の仲良しだった雄鶏は何故かターバンを巻いたオーナーであるシワセンさんが大嫌いだった。いつもそうだったが、敵愾心に燃えていた雄鶏はオーナーが来るたびに、コッコッコッコッと気勢を上げて顔を目掛けてパッと飛び上がり、鋭い尖った爪で一撃を加えようとするのだった。

シワセンさんは怖がって逃げ回っていたので、僕は陰でクスクス笑いながら見ていた。だが最後に堪忍袋の尾が切れたらしく「なんだこんな鶏、生意気だっ、殺して食ってしまえ」と、カンカンになって怒り出した。

僕はこの鶏のことでオーナーと何回も口論したことがあった。だが理由がなんであれ遂に「この家から出て行ってくれ」と宣言され、シワセンさんとは喧嘩別れとなってしまった。

僕はこの思いで深い３年ほど住んだ住み慣れた家から追い出されることになった。僕が一緒に遊んだ意志の通じ合う可愛い無邪気な仲間と別れるのは非常に辛かった。だが、これも僕に与えられた運命の道標であり、致し方ないことだった。

■ジーシヤの家

シワセンの家を追い出された僕たちは、城村さんの知人だった機織工場を経営していたジーシヤの家に住むことになった。

ジーシヤの家はやはり同じマーディーパイディー通りの松並木が覆い茂った通りに面した所にあった。ジーシヤの家は同じ屋敷の中に二階建ての家と、池の上に平屋の家があった。

僕たちは空色に塗り潰された平屋の家をあてがわれた。此処でも城村さん、椿さん、ゲネさん、白垣さん、それと新人のみんなで奔走して助け出したバンクワン刑務所から出獄したばかりの小太りした小川さんたちと一緒に暮らすことになった。

白垣さんはまだシワセンの家にいた頃だったが、或る晩みんなと飲んでいたときに悪酔いしてゲネさんと大喧嘩となった。

白垣さんは裏から刺身包丁をひったくって来るが早いか、ゲネさんを切り付けようとした。しかし、母が咄嗟の間の機転を利かせて仲裁に入ったために、母が手を少し切られただけで済んだ。

白垣さんはその事件があってからは気まずくなり、家から飛び出してしまった。だが暫く経ってから又、みんなの所に舞い戻り、僕たちと共に生活するようになった。

その白垣さんが、日本が講和条約を結んでから、帰国を志望し、日本へ帰ることになった。それは１

９５２（昭和２７）年1月２９日だった。僕たちはジーシヤも含めて全員で彼をタノン・トックのチャウプヤー川の真ん中に停泊していた住吉丸まで見送りに行った。

僕は船の上で最後の名残を惜しみ、彼と別れた。城村さんと椿さんはそのまま船でコ・シーチャン（シーチャン島）まで一緒に同行し、島で別れた。

白垣さんが帰国して間もなくだった。或る日、彼のことが日本の新聞に「タイから帰ってきた鈴木さん」と、報道された。記事の内容は忘れてしまったが、僕はそのとき初めて白垣さんの本名が「鈴木」であることを知った。

彼は、日本が仕掛けたあの悲惨な補給の無い戦争のお陰で、祖国に家族を残し、夢にも思っていなかった激戦地に無理やりに駆りだされたのである。運よく命拾いした彼には彼なりの苦労や悩みがあったと思う。

敗戦と同時に逃亡した彼は、他の仲間と同じように連合軍からオファーされた1万バーツの懸賞金付の身を潜めるために国籍を替え、或いは変名し、逃げ延びなければならない辛い境遇に追い込まれていたのである。

いずれにしても、彼が無事に講和条約まで身の安全を保ち、家族が首を長くして待ち焦がれている自分の祖国、日本に無事に辿り着いたので、ホッとし、彼の健闘を祈った。

僕たちが住んでいたマーディーパイディーの通りは、バスから降りて歩いて行くと、賑やかな曲がり角があった。そこから少し行った左手の敷地に人影もほとんどないひっそりした三階建ての洋館式の家があった。

その家に日本政府から派遣された海外事務所の賑やかな鈴木耕一さん一家が住むようになった。鈴木さんには実に朗らかな3人の娘がいた。友達がいなかった僕は直ぐ洋子さんや、弓ちゃん、緑ちゃんたちと親しくなった。みんなでトランプをしたり、庭でテニスをしたりして遊び、時々鈴木さんの家でご飯を呼ばれるようになった。

鈴木さんが来た頃はまだ日本人学校がなかったので、長女だった洋子さんはソーイ・ランスワーンとチッロム通りの角（現チッロムＢＴＳ駅前）のタイのマーテー女学校に通っていた。鈴木さんはバンコク在外事務所所長の任命を受け、同僚と3人で赴任してきた外交官だったので、結構忙しそうだった。

鈴木さんはいつも大型のブーイック車に乗っていた。その鈴木さんといつも行動を共にしていた運転手は、人のよさそうな大人しいオスマンさんだった。僕は時々簡単な通訳をしてあげたりしていたので、オスマンさんとも親しい仲になっていた。

戦後、中国やソビエト、韓国などの急激な情勢変貌に伴い、日本はアメリカのＧＨＱの方針により１９５０（昭和２５）年から公式に世界の各都市に日本在外事務所を開設することを公認された。

やっとアメリカの占領地から解放の目途がついた日本は、アメリカや他の国々の主要都市に次々と在外事務所の設置を開始した。

タイにも１９５１（昭和２６）年2月9日に、バンコクの都心のソーイ・ピパッに在外事務所が開設された。それは今まで頼る所がなかった敵国人と見なされた心細い在留邦人にとって大船にのった心境

だった。
特に、タイの各地に潜み、連合軍から懸賞金付きで睨まれ、必死に逃げ回っていた僕の友人も含めて脱走兵と言われていた約２００名の可哀想な人たちにとっても、やっとの思いで身の安全を見守ってくれる在外事務所が開設されたのである。
ソーイ・ピパッに海外事務所が開設されてから間もなくだった。「在留邦人は在外事務所にしかるべき書類を持参して出頭するように」との指示があった。
僕もバーンプワトーンキャンプで日本大使館の領事部から発給された母と連名で日本人である、という証明書と、戦時中に大使館から発給された身分証明書（ＩＤカード）を提出した。
しかし担当者から、「戸籍謄本がなければ駄目だから……」と言われ、山口の須佐にいた父に頼み、戸籍謄本を取り寄せた。
だが、父が送ってくれた戸籍謄本には僕の名前が記載されていなかったので「戸籍謄本に名前が記載されていないので日本人として認めらない」と、突っぱねられてしまった。
困り果てた僕は鈴木さんと相談したところ「日本で父がいる区役所で頼み、父の戸籍に入籍して貰えれば手っ取り早くて問題ないから……」と、指示を受けた。鈴木さんの好意で僕の戸籍問題は日本から回答が来るまでペンディングとなった。
僕は父に頼みさえすれば、戸籍は簡単に入籍できるものと思い気楽な気持ちで呑気に構えていた。
しかしアドバイスしてくださった鈴木さんが１９５３（昭和２８）年２月２８日にＢＯＡＣで帰国した時点になっても、僕の国籍問題はまだ埒があかず、解決しないままペンディング中だった。

■同窓生の消息

僕は第１６陸軍病院にいたときに、タイ当局から解放され、残留を許されたが、別に行く当てもなく母の意志に従い父が来るまでと、バンコクに留まっていた。
初めの２、３ヶ月は、まず第一に僕の学校問題から始まり、様々なできごとが矢つぎばやに自分の身の上に降りかかってきた。
何事もただ母に言われるままになにも考える知識もなく、独りで悲しんだり、悩んだりで、気も迷入っていた。
だがやっと落ち着きを取り戻し、自分自身を振り返って見るゆとりができた。その時点で拠りどころがなかった僕は、別れた同窓生のことを思い出した。みんなはどうしているのであろうかと、みんなの安否を気遣い、会いたい一心で探し出すことにした。
早速、手近にいたタイに残っている友人から当ることにした。だが手元には住所もなにもなかったために誰が何処にいるのかさっぱりわからない状態だった。
最初から住所がわかっていたのはバンコクに一緒に残った新野さん兄弟と、ソーイ・デーンウドムにいたグラフィックス・デザイナーの里見時宗君だけだった。
陸軍病院で別れた久松実君はそのまま生まれ故郷のソンクラーへ帰ってしまい音信不通だった。僕と

仲良しだった抑留所に入らないで済んだ波多野家の盛男君は北部のチヤンマイにいたし、同級生だった芙美代さんもプレーにいた。だが、いずれも住所不明だった。

この他に、日本の敗戦と同時にバンコクから田舎へ逃げた友人や、南タイの錫鉱山に逃げ込み、其処で働き、国内の情勢が落ち着くまで身を潜めていた後輩もいた。

それに、抑留所から一足先に解放されて残留した台湾人の仲間もいた。その中には同級生や後輩が大勢いたのだが、これもみんな何処に住んでいるのか、初めの頃は消息不明で捜すのに苦労した。

僕は根気よく炎天下を汗を流しながら細い路地から路地へとコツコツ歩き回り友人の家を捜し歩いた。尋ね歩いた甲斐があってインちゃんや、同級生だった春子さんや、シッちゃん、それに外国人企業に勤めていた江畑恵美子さんなども見つけ出すことができた。僕は一人ずつ見つけ出しては家庭を訪問し、家族ぐるみでの交際を始めた。

タイで同窓生の消息を聞きだすのはわりに楽だった。が、日本へ帰った友人の住所を突き止めるのは骨が折れたが、運よく金井先生からトゥンマハーメークにいた新野家に手紙が舞い込んだのである。

僕はミッキーから懐かしい金井先生の手紙を見せて貰い、何回も繰り返して読んだ。その手紙の日付は１９５０（昭和２５）年１２月２３日と記してあった。

バーンブワトーン・キャンプで別れて以来日本から手紙が届いたのは、この金井先生の手紙が初めてであった。

僕はこれをきっかけに、千葉の船橋にいた金井先生や、鹿児島に帰っていた町田先生、高松にいた宮脇先生、東京にいたウライ先生と文通を開始した。それと同時に友人の住所も手当り次第に聞き出し、およそ１０年間の月日を掛けて探し出した。

僕は懐かしい恩師や、友人と文通を始めたお陰で、ビー（宮脇虹華）ちゃんから毎月「キング」の雑誌を送ってくれるようになった。米美さんのお父さん（戦時中領事だった天田六郎さん）からも「オール読み物」の雑誌や、広島のグラフ誌及びその他のいろんな読み物を送って貰ったりした。

それと後に、僕が独学中だということを知った天田さんは、わざわざ分厚い早稲田大学の文通講座や講義録を取り寄せて一編に１０冊も送ってきたことがあった。

しかもおまけに「正夫君、どんなに辛いことがあっても頑張ってください」と、丁寧な字で添え書きまでしてあった。

僕は、天田さんの思いやりのある気持ちに感動し、有り難く「早稲田の通信教育の通信講座」を頂戴したのである。

僕が米美さんと頻繁に文通を始めたのが１９５２（昭和２７）年９月初旬からだった。丁度その頃、元バンコクで領事をしていた米美さんのお父さんが、東京で日タイ協会と関係があったときだった。

僕が米美さん宛てに書いていた手紙の内容を読んでいた天田さんから、「僕の手紙には在留邦人の消息や、いろんなタイの事情が書いてあって面白いので、協会で発行している月報に載せるから」といった、内容の手紙を受け取った。

それから間もなくだった。天田さんの配慮で、僕の手紙が「ジュニア・バンコクキャン」のペンネー

ムで日タイ協会から毎月発行されていた「日タイ協会の月報誌」に掲載されるようになった。
僕の記事はその後数年間毎月継続して掲載された。かなり厳しい批判的なことも書いていたので、時々「この記事は誰が書いたのだ」といった、問い合わせがあったりした。だが、有り難いことに、誰にもこの能無しの僕が書いていたとは気付かれなかったようである。

■職を替えて転々と

マーディーパイディーのジーシヤの家にいた僕等の仲間は、独立を目指し各々がそれぞれの道を開拓すべく、一人ずつ「お世話になりました、さようなら」と、挨拶を交わして去っていった。
城村さんはプラカノーンの橋の袂で開業した床屋へ引っ越して行った。最後までずうずうしく残っていたのは、行き場のない実力のなかった僕だけとなった。
最終的に僕も母の友人だった安藤婦人の紹介で、僕がタイ語を教えに行っていたソムタヴィン学校内にあるウドムさんの家のガレージにただで住まわせて貰うことになった。
僕がウドムさんの家に引っ越したのは１９５２（昭和２７）年６月２２日だった。この日は有り難いことに、ウドムさんの所にいた造船関係の仕事をしていた竹谷さんと、床屋をしていたサンさんが２人で小型のトラックをアレンジして手伝いに来てくれたので大いに助かった。
僕が入るガレージの横に二階に上がる階段があった。二階には細長いベンダに沿って大きな広い共同部屋があった。
其処にウドムさんの会社関係の仕事をしていた竹谷さん、西岡保雅ささん、岡本龍雄さん、田崎忠次郎さんたちが大部屋で一緒に暮らしていた。
その頃、僕には決まった職もなく、あっちにフラフラ、こっちにフラフラと、職を求めてて歩き回り、何かちょっと手伝っては乞食みたいに小遣い銭を貰って細々暮らしてる程度に過ぎなかった。
城村さんとは別れて別居して暮らしていたが、仕事の面では何かあれば相変わらず手伝っている間柄だった。しかし、その頃は別に給料を貰っていた訳ではなかったので、彼の仕事を手伝う傍ら他にも仕事を物色して歩き回っていた。
僕は城村さんの紹介で、ソーイ・サーラーデーンに会社兼自宅を構えていたＳＫ社の北庄司さんの所で輸出業務の仕事を手伝うようになった。ＳＫで輸出していた主な商品は、ボーンミールや、牛や水牛、鹿などの皮類だった。時々鰐皮なども扱っていたが、鰐皮は数量不足で長続きしなかった。
ＳＫにいたときは僕は通訳も兼ねていたので、北庄司さんと一緒にお得意先回りもして皮の買い付けなども手掛けていた。
プーンプーン悪臭が漂う現場で、腐りかけた骨や、まだ濡れているなめしたての皮や、乾燥したカチカチになった皮の枚数を調べたりした。
それに船積み期間が迫ってくると、現場に赴き、シッパーが現物をパッキングするときに一緒に立ち会ったりした。特に大事なことは、数量と重量をごまかされないように綿密にチェックすることだった。
全体のチェックが終わり、シッパーからケースマークや、ケースナンバーなどを書き込んだケースご

との明細書を受け取ると、現場の仕事はそれで終わりであった。
後は本船が出港するまでに船会社や銀行に提出する船積書類をきちんとタイプするのが僕の役目だった。
北庄司さんから与えられた僕の勤務時間は、僕の性格にピッタリ当てはまるものだった。それはフリーだったので、僕は顔を出したいときに顔を出し、面倒だと思ったら最後、社からどんなに呼び出しがあっても勝手に2日でも3日でも平気で休んでいた。
従って、お礼もそれぞれ相応に応じて月々僅か３００バーツ程度しか貰えなかった。北庄司さんは、実際には僕をもっと思い切り使いたかったらしいのだが、僕が全然言うことを聞かなかったので、陰で「正夫ちゃんは困ったものだ」と、ハウスキーパーをしていたおはなさんのおばさんにブツブツこぼしていた。
僕がまだＳＫの仕事をしていた頃だった。それは１９５３（昭和２８）年5月２９日のことだった。
東洋綿花にいた西野順次郎さんの依頼で「急ぐので今晩中に書類をタイプして貰いたい」と、北庄司さんを通して僕に声が掛かった。
夕方の6時頃だったが、呼び出しを受けた僕は、当時ソーイ・サーラーデーンにあった東洋綿花の事務所へすっ飛んで行った。何をタイプするのかと思っていると、それは船会社に提出する船積み書類だった。
僕は事務員が引揚げたがらんとしたオフィスで午後7時頃から午前3時頃まで徹夜でその船積書類をタイプした。
僕は横で若い社員が筆記で書き上げる走り書きの原稿を待ち受け、それを受け取るが速いか、コピーを7枚取り、一晩中ぶっ通しで機関銃みたいにダダダダーッと、タイプライターのキーを打ちまくった。
仕事が一段落し、簡単な夜食をご馳走になってからだった。西野さんから「疲れたでしょう、ご苦労様でした」と言って、親切に自分で車を運転して、僕が世話になっていたバンカッピ（現スクムヴィッ）のウドムさんの家の車庫まで送って貰った。
バンカッピの田圃が見えるシーンとした静まり返った冷え冷えした夜空に、大きなまん丸い月が昼間のように明るい月光を光々と視界に投げかけていた。
僕は美しい自然に笑顔で迎えられ、疲れも一編にすっ飛んでしまった。アーァ、今夜の月はなんと美しいこと。
僕は今までどんなに頑張って一生懸命に働いたとしても、一ヶ月に精々３００から５００バーツ程度しか稼げない身だった。いつになったらもっといい収入が得られるのであろうかと、思っていた矢先だった。
西野さんから「正夫ちゃん、これはこの間のお礼です」と言って、２００バーツのお礼を頂戴した。
そのときは流石にびっくりしてしまった。それは忘れもしない6月1日の出来事だったが僕としては生まれて初めての経験だった。
何しろ一晩働いて２００バーツの大金を貰ったので、こんなことがあるのであろうかと、飛び上がり

たくなるほど嬉しかった。
西野さんに感謝すると同時に、僕にだってきちんとした仕事ができるんだ、といった、自信に満ちた満足感を抱いた。
僕はいつもの自分の悪い癖で北庄司さんの所の仕事もつまらなくなってきて、それから間もなく勝手にピタッと仕事を辞めてしまった。また、ルンペン同様にのらりくらりと、フラフラしていたが、お世話になっていたウドムさんの所で仕事をして見ることにした。
ウドムさんはタイ・トレーディング社の社長だった。日本と貿易関係の商売をしている傍ら国内の現場工事の仕事も請け負っていた。タイ・トレーディング社はシーパヤー通りから細い路地を曲がりくねって入った所にあった。業務関係の仕事は西岡さんとし中原さんが切り回していた。
僕は８月３日から仕事を始めたが、まず西岡さんから「正夫ちゃんは今まで城村さんの所で自由に楽な仕事をして幸福だったが、此処では城村さんの所にいたときと同じようにはいかないのだから、時間を守って一生懸命仕事をしてください」と、お説教を受けた。
僕は胸をわくわくさせ、張り切って出社したのに初日から西岡さんに懇々とお説教めいたことを言われ、がっかりしてしまった。僕が何をしようと、どうしょうと自分の意志でしていることであり、自由なのだ。だが世間では僕のことをこんなな変な視点で見ていたのか、と思うと、益々嫌になってしまった。
僕は第一歩から出鼻を挫かれたような気がしてもう既に嫌気がさしていた。だが次の日から道路局の敷地内にあった工事現場で建設の仕事を手伝うことになった。
僕が現場に行ったときは丁度基礎工事が終わったところで、まだ屋根もなにもなかった。建物の骨格は全部鉄のフレームでできていてそれを組み合わせて造るようにアレンジされていた。現場には大工やクーリーたちが大勢いたが、仕事の監督を指示していたのは西岡さんと田崎さんだった。西岡さんが設計図に目を通して細々した指図を与え、田崎さんが溶接関係の仕事を切り回していた。
僕に与えられた仕事は命令に従って運べばいい、実に簡単な運搬作業であった。が、それは体力を必要とする力仕事であり、クーリーの仕事、いわゆる下っぱの労働者だった。現場には山積みされた大小様々な鉄のフレームやビームが所狭ましと転がっていた。その鉄類を運ぶのが僕の役目だった。僕は１０人ほどいたクーリーの仲間に入れて貰い連中と一緒にそのずっしりしたメリメリと肩に食い込む鉄の塊を指定された場所まで運ばなければならなかった。
運ぶ距離はさほど遠くなかったが、鉄で固められたフレームは実に重たかった。一番軽いのでも４人掛かりでないと運べないほどの重さだった。鉄のフレームを持ち上げたり、下ろしたりするときはみんなで「１、２、３」と、号令を掛け、呼吸を合わせて、てきぱきとやらないと、事故の元になった。兎に角、一人でもよろけたり、失敗したりすると、待ったなしに全員の身に災難が降り掛かってくる厄介な物体だった。
僕たちのクーリーグループの作業時間は朝８時からだった。午前中のまだ陽射しが柔らかいうちは作業もわりにスムーズに捗った。が、ジリジリ照り付ける太陽が頭上に射しかかる頃になると、地面に点

在している鉄の塊は、徐々に高熱を含んだ物体に変化し、素手では触れなくなるやっかいな代物だった。
僕は手袋なんて気の利いた物は持っていなかったので、その辺に落ちている汚いぼろ布を拾い両手にぐるぐる巻いていた。担ぐときもうかうかすると、火傷するので着ているシャツの肩の所にも布を重ねて置くようにした。
僕がやらされたこのクーリー役は実に凄い重労働だった。体内に蓄えてあるエネルギーは瞬く間に消化し、腹の真田虫がキューキュー泣きだし、まるで綿のようにクタクタになった。それと、何しろ暑かったので、汗もダラダラ流れ、体内の水分も綺麗さっぱりに蒸発してしまい、水ばかりガブガブ飲んでいた。
飲料水は大きなバケツに入れて、炎天下の埃が濛々と立ち込めている僕たちの足元に置いてあった。その水は埃を被ったカルキの匂いがプーンと漂う汚いと言われた水道の水だった。冷たい大きな塊になった氷がプカプカ浮いているときもあったし、ないときもあった。氷がないときはバケツの水はまるでお湯のように生温かくなっていた。だが、柄杓で汲んでゴクンゴクンと喉を潤すと、実に美味しくて生き返ったような心境がした。
現場で汗を流して仕事をしていると、あっちこっちからいろんな物売りの連中が、集まってくる。まるい細長い魔法瓶を肩に引っ掛け、鈴をチリンチリーンと鳴らし、アイスキャンデーやアイスクリームを売りに来る可愛い子供や、天秤棒をギシギシ軋ませて、カノムチーンやカレーライス、それに、お菓子などが入っている籠を担いだ薄汚れたサローン（腰巻）を身に纏ったおばちゃんなどが「お菓子は如何ですか」と、商いにやってくる。
僕たちのクーリー仲間は呑気なもので、物売りが来ると、これ幸いとばかりに仕事中であっても物売りの周りに集まり、それぞれが好きな物を注文して、いつまでもムシャムシャ食べながら時間稼ぎをするのだった。
僕は時々、大きな器で一杯５０サタンするアイスクリームを食べていたが、まるで熱冷まし剤でも流し込んでいるようで、火照っている体が冷えてとても美味しかった。
僕はたった８日間でこのハードな鉄の地獄から逃げ出してしまった。また西岡さんから「正夫ちゃんはまだ若いし、毎日水泳もやっていて丈夫な体をしているのだから頑張ってやりなさい。今辞めたら女みたいじゃないか」と、説得されたが、僕は「女でもなんでもいいです。嫌だから辞めます」と、はっきり言って、ウドムさんにも詫びてあっさりと辞めてしまった。

■ソムタヴィン学校の先生たち

僕がお世話になっていたウドムさんの家の前には大きな鯉がスイスイ泳いでいるかなり大きな池があった。僕はその池でほとんど毎日のようにクロールで３０００メーターほど泳いでいた。
時々クンちゃん、エンちゃん、オップちゃん、ぺちゃんたちに水泳を教えてあげたり、池の中で鬼ごっこをして遊んだりした。だが、チーちゃんとチャーちゃんは水が怖いらしくいつもベランダの所から笑いながら見ているだけだった。

或る日、時々ウドムさんの所に来ていた真っ黒い日焼けしたタイ人から、僕に「海へ行ってダイバーにならないか」と、誘われた。
彼はタイ湾の海底に沈んでいる船や、金になりそうな宝物を捜している一獲千金の夢をみている山師だった。
「一ヶ月５０００バーツ出すから……海底で獲物が見付かった場合は更にコンミッションを３０パーセント出すから……」と言った、飛びつきたくなる好条件だった。
僕はウドムさんの所の仕事を辞めて以来この数ヶ月間なにもすることもなく、まだフラフラしている身だったし、海は大好きだったので、これは面白いと思った。
しかし、山師が言うことを真面目に信じられなかったし、毎日海に入って潜っていたら、いずれは鮫の餌食にされておだぶつするのが関の山さ、と思い、生命を金には替えられないからと、彼が持ち込んだ有り難い話を断ってしまった。
彼は残念そうな顔をしていたが、それでも懲りずに再三に亘り何とかして僕を連れ出そうと誘惑に来た。が、意志が強かった僕に根気負けして最後には遂に諦めたらしく「こんなに水泳がうまい達人が目の前にいるのに惜しい」と、こぼした。
ウドムさんの家の敷地は広く東側に小さな可愛い大勢通っている賑やかなソムタヴィン小学校があった。この学校には何故か女の先生しかいなかった。
暇だった僕は、いつの間にか１５人ほどいた華やかな先生たちと親しくなり、冗談を言って遊ぶようになった。
時々お菓子をご馳走になったりしたが、「正夫ちゃんは面白い人だ」と、学校の評判になってしまった。
先生の中には顔の輪郭が整った彫りの深い良い顔立ちをした先生もいたので、僕はその先生に興味をそそられ、モデルになって貰い、カシャカシャ、カシャーッとシャッターを切り、写真を撮らせて貰った。それがきっかけで、みんなに頼まれて写真を撮るようになった。
その頃の僕にはごくありきたりの普通の写真しか撮れなかったが、それでも「正夫、正夫」と、みんなの引っ張りだことなってしまった。
お陰で学校の休日が続いたりしたときは、カメラマンとして、みんなと一緒にナコーンナーヨックのサーリカーの滝をはじめ、あっちこっちを旅行して歩くようになった。
何しろ僕は美女の仲間に囲まれてチヤホヤされていたのでかなり目立ち、男の仲間から「正夫はいいなあ」と、うらやましがられ「俺にも一人ぐらい分けてくれよ」と、言われるようになった。
僕はみんなとは実に純情な気持ちで付き合っていたのだが、中には僕に熱を上げ、目を潤ませて「好きでたまらない」と、話しかけてくる先生や、顔を赤らめて恥ずかしそうなそぶりをしながら、そおっと手を握ってラブレターをくれたりする先生が現れたので、僕は困惑してしまった。
僕は仕方がないのではっきりと、「僕は恋愛する気持ちはないから、いつまでも美しい友情で交際しましょう」と言ったが、それは却って彼女たちを傷つける結果となってしまった。
僕が知っている限りでは、僕に片思いを寄せていた先生は３人もいたのだった。一人は「私失恋した

わ、さようなら」と言って、学校を退職し、即座に愛情もない他の人と結婚してしまった人もいた。
後の２人のうち、一人は「今トイレに私のお土産を残して置いたから大事にしまっといてね」と、寂しそうにぼそりと言って、足早に立ち去ってしまった。何かと思ってトイレを覗くと、小さな棚の上にきちんと畳んだハンカチがあった。お別れの印のハンカチかと思ったが、中身は何かゴワゴワした物が入っているので、開いてみると、何と、彼女のあそこの柔らかい陰毛が一杯入っていた。
最後の一人は、「これはね、ブロケンハートの花よ、綺麗でしょう。でも、これからも仲良く付き合って頂戴ね」と、しんみりした口調で話し、彼女から一輪の白い花を頂戴した。
僕は自分自身が気付かないうちにいろんな問題を撒き起こし、みんなに迷惑を掛け、ウドムさんの所を先生たちにも笑顔で、「さようなら」と別れを告げ、１９５４（昭和２９）年１０月、ソーイサーリー（今のスクムヴィッ・ソーイ６９）の先輩がいた守屋康子さんの家へ引っ越した。
僕は、ここでは裏の台所の一角を占領して自分のテレトリーを築き、好き勝手なことをして楽しんでいた。
定職がなかった僕はアルバイトをしながら、ベランダでゴロゴロ寝転んだり、池で釣りをしたり、吹き矢でカメレオンやトゥッケー（トッケー）を生け捕りにしたり、して楽しみ、相変わらずのんびりと暮らしていた。
僕がアルバイトを始めたきっかけは、給料だけではやっていけなくなり、ドン底生活に追い詰められたときからだった。
行き当たりばったりではじめたのが、竹とんぼとぼうふら掬いからだった。だが、ぼうふらは時間と手間が掛かるばかりで、売りに行っても大した金額にはならなかった。
そこで思い付いたのが、言葉である語学だった。僕は一応日本語もタイ語もある程度まではできるようになっていたので、まず、日本人にはタイ語を教え、タイ人には日本語を教えることにした。僕が初めてタイ語を教えた人が、ウドムさんの所にいた僕がお世話になった西岡さんだった。日本語もウドムさんの所でスタートした訳だが、教え子は数人しかいなかった。
僕はコツコツと日本語を教える傍ら、結婚式やお葬式、店の開店祝いの写真なども撮り始めると同時に、通訳のアルバイトもするようになった。通訳のアルバイトが一番率のいい収入源になった。但し、誰かが日本から出張して来ない限り、仕事にはありつけなかった。
この他に、ルムピニー公園で世界の見本市があったりしたときに、ヤンマーエンジンの宣伝をしたり、露天で「さあ、いらっしゃい、いらっしゃい」と、行き交う群衆に向かって呼びかけたり、いろんな商品を販売する売り子になったりした。
しかしこの時点では、僕はまだ将来自分自身が進むべき道が何であるのかもわからず、当てもなくただ生き延びるために、その日その日を無意識に過ごしている頼りない僕だった。
僕が水泳を教えていたのはバーンブワトーン・キャンプを出てから間もない１７歳のときからだった。が、本気で教えるようになったのは１９４９（昭和２４）年の1月からだった。それは、たまたまナレー通りのバーンラック警察署の近くに、中途半端な３３メータープールができたときからだった。

初めの頃水泳の弟子は僅か2、3人しかいなかった。しかし僕は「正しい泳法はこうやって泳ぐんだ」と説明し、自分で泳いで見せてから、手取り足取して綺麗なフォームで泳げように丹念に指導した。そもそも後に水泳教室で生計を立てるきっかけへと繋がっていったのだが、その時点では計画を立てていたわけでもなく、まさかそうなるとは思ってもいなかった。

僕はそれ以来あっちこっちを転々と歩き回り、家庭で水泳を教えるようになった。水泳を教えると言っても、当時、各家庭には今のような綺麗なプールがあったわけでもなく、水草が生い茂っている濁った池で教えなければならなかった。

小さな子供を4、5人集めて、底も何も見えない淀んだ細長い池で教えていたが、時々歓迎せぬ客に見舞われた。それは、両側に物凄い吸い口を持っている蛭だった。数匹の蛭に背中や足、太股などを吸われたり、酷いときは丸い柔らかい金玉にまで吸い付かれて出血が止まらなくて酷い目に遭ったこともあった。

兎に角シャワー室があるわけでもなく、小便がしたくなればその辺の木陰でシャーと立ち小便をし、また池に飛び込み、泥まみれになって教えなければならない想像に絶する凄い水泳教室であった。

その頃バンコクにプールがあった所と言えば、イギリスのスポーツ倶楽部にあった公式の立派な綺麗な５０メータープールと、ナレー通りの警察の近くにできた中途半端な３３メーターのプールしかなかった。それと、元僕がいたソーイ・サップの日本人学校にもまだ２５メーターのプールが残ってはいたが、勿体ないことに、使用されずにそのまま放置され、苔むした廃物になっていた。

■日本人に侮辱されて

日本の商社が徐々に海外へ進出を始めたのは、講和条約が開始された１９５０（昭和２５）年の頃からだった。バンコクにも日本の大手企業が小出しに進出を始めたのは、日本の在外事務所ができた頃からだった。

タイにジェームスボンドの鞄を片手にぶら下げた若手の尖兵隊を単身赴任で出張させ、将来への基礎作りを兼ね、有能な現地人や邦人を抜擢し、コツコツと社の出先である出張所を築き上げている時期だった。

この他に、大手企業とは別に、僕が小さいときからお世話になっていた戦前から永年タイに住み着き、日本の敗戦のお陰で汗水たらしてコツコツ貯めた資産を全部敵産監理局に没収されてしまい、最後にバーンブワトーン・キャンプから泣く泣く日本へ送還された人たちも、個人で、一人、又一人と、愛着を持ったタイへ舞い戻ってきた。

その中には、花屋レストランの上松次雄さんや、日高洋行の日高秋雄（ひだかとしお）さんも、裸一貫で再建を目指し、日本の貨物船に乗り込み、荒波に揺られてタイの旧友が大勢待ち構えている懐かしい第二の故郷、タイに戻ってきたのだった。

僕が日本企業に関心を持ち、本気になって就職口を捜す気になったのは、１９５２（昭和２７）年頃からだった。

新聞の広告欄で日本の貿易商社や、船舶会社、銀行などが現地スタッフを募集していることを知り、仕事を捜すのは今が絶好のチャンスだと思った。僕はミミズみたいな曲がりくねった下手くそな字で簡単な履歴書を書き就職に挑んだ。

僕は貿易の仕事に関してはある程度の経験を積んでいたし、日本語もタイ語もかなりできるようになっていたし、それに同じ日本人同士なので、優先的に絶対にいい仕事にありつけると、自信を持っていた。

だが悲しいかな、期待に反し、個人面談で直面した見知らぬ資本家の視線は非常に冷たく、何処へ行っても振り落とされてしまった。理由は僕の学歴や国籍問題などが絡んでいたが、特に、母が日本人社会に流していた僕の噂話もかなり影響していた。

僕はインタビューに行った先々で、「君は二世だそうだが、バンコクの日本人小学校しか行っていないんだな。小卒だけで君に何ができるのだね。何か特技でもあるのかい。日本語は漢字もきちんと書けるのかい」とか、「君は現地生まれか。混血だそうだが、日本は知ってるかい。我が社で採用するスタッフは優秀な大学生だけだから、残念だけど……」云々とか、「今、他人の所に居候しているそうただが、タイ人じゃないのかい。君はハーフだそうだなあ、履歴書に父は日本人と書いてあるが、タイ人じゃないのかい。実際は現地人なんだろう」といった、僕が全然知らないことまでを頭ごなしに人を小馬鹿にした傲慢な態度で応対された。

勿論、中には物静かに親切に対応してくれた所もあったが……。僕は何も間違ったこともしていないのに、まるで裁判官に罪悪の判決でも下されているような感じだった。

しかし、僕は何と言われてもじっと相手の視線を見つめ、冷静に我慢して聞いていた。兎に角酷いときは、「土人の子だろう」、「キャンプにいた難民の子だそうだな」、「親不幸者と聞いているが……」とまで言われた信用ゼロ人間だった。

日本の大会社に入社するにはなんと言っても学歴がものを言う社会。僕のようなバンコク日本国民学校小学部6年卒では、就職はまず無理と考えるしかない。それと、世間に流れている国籍を破棄された問題や母から流されていた僕の噂話も、それが事実であろうとなかろうと、社の面子に関わる大事な条件の一つでもあった。

僕が就職に挑んだ時点では、日本の国籍問題がまだペンディング中だったので、僕は一体何者だろうかと、自分自身の身元を調査中だったし、実の生みの母親を捜していたときだった。従って、自分が誰の子であるのか、果たして日本人なのか、タイ人なのかさえもまだはっきりわからなかったのである。

しかし仮に、僕の両親がタイ人であろうと、インド人であろうと、又は原住民であったとしても、それは血も涙も愛情もある同じ人間である。それなのに、「君は土人の子じゃないか」と言うのは人を馬鹿にした言い方である。土人の子はそんなに程度の低い何の役にも立たない人間であり、木偶の坊であるのであろうか。

第2次世界大戦で戦争に負け、大敗した日本人は、日本の復興を目指し、戦争に変わる商業戦で狭苦しい日本から膨大な資本を投資し、海外に進出を始めたばかりである。だが、戦争に負けた悔しさで、

僕みたいな教育程度の低い土人だか、現地人だか、訳のわからない二世に当り散らしたかったのであろうか。

僕のような罪もない困った一人のアジア人である素直な人間に対し、金がある資本家だかなんだか知らないが、立派に教育を施された日本人は、何故他人を差別し傲慢な態度を示さなければならないのであろうか。何も威張り散らし偉そうな口の聞き方をしなくても良さそうなものである。それは偉ぶる日本人のイメージをドン底に突き落とすだけである。

僕は当時まだ２０歳代の若さであったが、僕に応対した７人の生意気な駐在員の針で胸をチクチク突き刺すような言葉に落胆し、一時、日本人嫌いになってしまった。

■職を探して転々と

当時の日本人社会では、何故か僕は怠け者で親不幸な価値のない人間の部類に属され、冷たい視線で見られていた。これはそもそも母の口から出た火種が原因ではあるが、世間の噂は実に怖いものである。

僕は、実は助け合えるはずである同胞によって嘲笑い鞭打たれた。悔しかったが歯を食いしばり、今に見ていろと、涙を飲み拳を握りしめ我慢した。やり場のない行き詰った僕は知人の所か、外国人商社に就職口を捜し求めるしか道はなかった。

その頃、英語のうまかった僕のクラスにいた恵美ちゃんは、外人企業で手取り２５００バーツの給料を貰っていたので、僕もトライすることにした。

僕はどっちかと言うと、英語はあまり話せず苦手だった。何とか喋れる程度で文章の方は全然駄目だったので、せめて１０００バーツの給料でも貰えればと、夢を抱いていた。僕は英文のタイプだけは抜群に速かったので、まず、タイピストとして、２社に就職の申請書を出してみた。外人商社では、学歴のことはあまり聞かれず、仕事の経験だけを根堀り葉堀り質問されただけで、後はタイプのテストだけだった。

僕は運よく２社とも試験にパスした。社から「初めの２ヶ月間は１２００バーツの給料で採用するから、身分証明書を持って人事課に出頭するように」との、採用通知を受け取った。僕はやっと仕事にありつける、と喜び、社へ赴き、抑留所で発行して貰った残留証明書を提出した。

しかし僕が差し出した証明書は「キャンプにいたレフジー（難民）をタイに滞在させることを証明する抑留所の許可書であるから、これだけでは認められない。貴方は日本人であるから、永住権かパスポートがなければ認められない。これでは残念だけど採用できないから……」と言われ、あっさり断られてしまった。

だが、僕は怯まなかった。ものは試しと、他の社にも当ってみることにした。タイミングよくアメリカ政府の機関であるＵＳＩＳで報道カメラマンの応募があったし、国連機関だったＥＣＡＦＣ（当時）本部でもタイピストの募集があったので、両方に就職願書を提出した。僕は運よく両方ともパスしたが、ＵＳＩＳの方は同じ理由で「ノー」と、オミットされてしまった。

ＥＣＡＦＣの方は給料が手取り２２００バーツ、そして２ヶ月間のトライアルで採用されることにな

った。勤務時間は午前7時から午後3時までで、土、日は休みだった。僕は此処でアメリカ人の秘書の助手として2ヶ月間タイプライターと睨めっこして仕事に勤めた。

仕事は順調に進み、僕は美女の秘書にも気に入られ、2ヶ月目にやっと本採用になった。しかし、国籍のなかった僕は、自分の身元を証明するＩＤカードもターンダーウ（タイの永住権）もパスポートもなにもなかったために残念ながらまた、ルンペンの道を辿るしかなかった。

アーァ、こんなに楽な仕事が目の前に転がっているのに、国籍さえあればと思っても、空しいかな如何ともせん我が身の運命。難民キャンプの証明書しかないのだから、涙を飲んで素直に失業するしかない身なのだ。

僕は日本の国家から嫌われて国籍を破棄された役に立たない屑人間なのだ。日本の国家から「お前にはもう用はない、戦争は終わったのだ、もう利用する価値のない人間なんだ。役に立たない邪魔者は屑篭の中に捨てるんだ」とポイと、屑篭に捨てられた僕は屑人間、無国籍者なのだ。

ソンクラーにいた子供の頃、バンコクの日本人学校から「瀬戸正夫は日本人の子弟であるから日本の義務教育を受けなければいけない」と言われ、日本の軍国主義時代の教育を受け、第2次世界大戦中は軍事教練まで受け、小学6年卒業と同時に14歳で知らぬ間に少年兵にされ、大人の中に混じって本格的なビンタが飛んでくる軍事教練を受けた。銃剣術や、布団爆弾を背負って敵の戦車に体当たりする特攻隊の訓練や、4.2キロもある旧式の38銃で実弾射撃の練習までさせられた僕は、日本の敗戦と同時に日本人としてノンタブリーのバーンブワトーン抑留所に収容された。

僕は大日本帝国の国家の代表である、日本の大使館から「瀬戸正夫は日本人である」と明記した正真正銘の身分証明書と、国籍証明を貰っている。だが、日本の戸籍謄本に僕の名前が記載されてなかったために無効となり、大事な証明書はただの一枚の紙屑と化し、国籍は容赦なく破棄され、僕は日本人として認められなかったのである。

自分が頼りにしていた日本の国家から国籍を破棄されるということは、国家に対して罪悪を犯した悪人となり誰からも信用されない馬鹿にされた廃人となるのだ。

僕は日本の国家に対してなにも悪いことをしたことはない。信用できない日本の国家に国籍を破棄され、見知らぬ他人からは「非国民、無法者」と見られ、馬鹿にされ、警戒された冷たい視線で凝視されなければならない身なのだ。

どんなに涙を流そうと、どんなに必死に生き延びようと努力しても絶対によい職にはありつけないのだ。お腹が空いた、ひもじいよう、助けてと、声を限りに叫んでも誰も振り返ってくれないし、手すら差し延べてくれない。ただ「ざまあみろ」とせせら笑われるだけなのだ。

この状態がいつまで続くのか知らないが、この苦しい気持ちを、僕は苦しいのだと、一言で簡単に説明できるような生易しいものではない。その辛苦の苦しさは身を持って体験して、初めて苦しみのある味がわかるのだ。

■波止場の阿婆擦れ仲間

僕はいい会社に入社し、高給取りになりたい、と思っていたが、その夢は遂に破れてしまった。仕方がないので、アルバイトの収入で細々と命を繋いでいた。が、アルバイトと言っても、ずっと定期的に仕事があった訳ではなかった。

仕事がないときは数ヶ月間まったくなにもすることもなく、ただフラフラしていなければならず、実に斑が多い当てにならない収入源だった。酷いときはバス代は愚か無一文になったときもあった。お腹はキューキュー空くが、お腹を満たすための先立つ金もなく、道端の水道の水をガブガブ飲み我慢するしかなかった。どんなに職を求めようとしても当てもなく呆然と彷徨い歩いてみても無駄な汗をかくばかりで無闇にエネルギーを消費し、ただ疲れるばかりだった。

頼る所も、拠り所もなく最後の土壇場まで追いつめられた僕は、遂に一計を案じ、穴の開いた靴を更に擦り減らし、クローン・トーイの波止場までトコトコ歩いて行った。

僕は此処で小野商会にいたときに知り合ったタイ人のクーリー頭に会い、「暫く波止場で荷揚げの手伝いをさせて欲しい」と、手を合わせて頼み込んだ。逞しい体格をした彼は、「お前、そんな痩せた体で大丈夫か」と、不安な顔でジロジロ僕を見つめるので、僕が「大丈夫だとも」と答えると、「そうか、よしわかった」と、即座にクーリーの仲間に入れてくれた。

僕は次の日から僅かな日当を貰い、何とかその日、その日の飯にありつけるようになった。此処では国籍のこともなにも問い質されることもなかったので、気楽に仕事ができた。ニコヨンの仕事は結構きつかったが、道路局で鉄のフレームを担いでいたときよりはずっと楽だった。

僕はクーリーの仲間から、「お前はなんでこんな所で仕事をしなければならないのだ。日本人はみんな良い職についているのに……」と、質問された。僕が素直に自分の事情を説明すると、「へーェ、そうだったのか、日本人は酷いなぁ、お前は可哀想だなぁ、運が悪いんだと思って諦めるんだなぁ、だが、いつか運が向くときもあるだろうさ、悲観するなよ」と、慰められた。

僕は皆から温かい心で仲間に入れて貰い、親切にして貰ったので、今まで心の中に溜まっていたむしゃくしゃした鬱憤が急にすっ飛び、晴れやかな感謝の気持ちで胸が一杯になり、涙が出るほど嬉しかった。

僕の周りを取り巻いていた汗臭い汚らしい格好をした気の荒い仲間は、暇さえあれば、倉庫に山積みされた荷物の陰に集まり、ガヤガヤと騒ぎ賭け事に高じる悪い癖があった。賭け事のやり方はいろいろあったが、マッチ棒を2本揃え、1本だけ短く折り、どれが長いか、又は、短いかを当てるやり方や、銀貨を上に投げて、地面に落ちたときに表が出るか、裏が出るかを当てたり、紙幣を2枚重ね合わせて、下敷きになっている見えない最後の数字が何かを当てたりする実に簡単な賭け事に熱中するのだった。

賭け事に熱中している人や、酒に漬かり「さあ、女だ若い娘を抱きに行こう」と、わめき、女に夢中になっている連中はまだましな方だった。僕たちの仲間には麻薬や覚醒剤をこっそりと売り歩いている者もいたし、覚醒剤を常用していた者もいた。勿論、ヘロイン患者もまじっていた。時々大騒ぎになったこともあったが、それは薬が切れたりしたときに起こる現象だった。急に目の色が変わり、ガタガタ震えだし気が狂ったように暴れ回ったりするのだった。何かことが起こるたびに、僕たちは外部の者に

知られないように気を配り、みんなで仲間を庇い、介抱し、助け合っている仲だった。
従って、仲間の団結力は非常に強く他のグループといざこざが起こったりした場合は、「なにおーっ、この野郎」と罵り、刃物や、棒切れを振りかざし、華々しく殴り合いの喧嘩をしたものである。僕はどちらかと言うと、喧嘩は大好きだったし、命知らずだったので、いつも「さあ、かかってこい」と気勢を上げて、真っ先に相手に殴り込みを掛ける方だった。
僕は町田先生に指導して貰った剣道や、柔道それにタイ・ボクシングなどの術を旨く生かして相手を投げ飛ばした。仲間の連中は僕の早業に目を見張り、びっくりしていたようだったが、僕のみぎに出る者がいなかったので、皆は僕に「すごーい」と、一目置くようになった。しかしお陰で、顎と左の薬指の所に刃物で切られた傷跡が未だに当時の形見として残っている。
僕の華々しい殴り合いの業績はＹＭＣＡのダンスパーティーがあったときにも野次馬に囲まれて大騒ぎをしたことがある。
その夜、僕は３人の男の仲間と出掛けたが、会場で女の取り合いでいざこざが起こってしまった。航空隊にいた友人が棍棒で頭を殴られ血を流して倒れたので、怒った僕は自分のカメラをパニッに預け、外へ逃げ出した相手を追いかけた。が、ヴォラチャック通りの道の真ん中で１０数人の相手の仲間に包囲されてしまった。相手は剃刀の刃や匕首を振り翳して向かってきたので、「この野郎、やる気か皆殺しにしてやる」と、叫ぶが早いか、瞬く間に凶器を持った４、５人を投げ飛ばし、頭を殴った犯人を逮捕し、腕を逆捩じにし、「掛かってきたらこいつの腕をへし折ってやるからっ」と、カツを入れ、ヴォラチャック警察の豚箱に放り込んでしまったことがある。
僕はこの他にも、バスの中で刃物を持ったスリと格闘して逮捕したり、シーラチャーの山の中で泥棒を2、３キロも追っかけて逮捕したこともある。住友にいたときも会社に現れた泥棒を殴り倒し、プラパーチャイ警察の豚箱に放り込んだこともある。だが、数日後にその泥棒様から2、３回脅迫電話が掛かってきたので、最後に、逆に「貴様本気で殺す気があるなら拳銃を持って出てこい。いつでも指定した場所で相手になってやるから」と、怒鳴り返したところ、それっきり大人しくなってしまった。

■花屋レストラン

僕がシーパヤー通りにあった花屋レストランに勤めるようになったのは、或る日、花屋の主人である上松次雄さんに出会ったのがきっかけだった。ノンタブリー県のバーンブワトーン抑留所にいたときに、毎日碁の手解きを受け、初めて碁を教えて貰った上松さんとは８年ぶりの再会だった。
上松さんのおじさんに「正夫ちゃん、今何をしている」と聞かれ、「僕フラフラしています」と言うと、「それは都合がいい、うちの食堂でカウンターの会計兼見張り役をやってくれないか」と誘われた。
僕にとっては予期していなかったことだったし、ブラブラしているよりはましだからと思い、その日から花屋で仕事をすることになった。
花屋レストランの勤務時間は午前８時頃から午後１０時頃までだった。給料は安かったが、有り難いことに三食の食事付きだった。僕は朝は食べなかったが、それでも毎日美味しい和食をたらふくご馳走

になった。飢えていた僕にとって、こんな夢みたいなこともあるものかと、感謝の気持ちで頭が下がる思いだった。

朝は掃除が終わって一段落すると、給仕の娘たちがテーブルを囲み、ペチャクチャと世間話をしながら四角いナフキンペパーを三角形に折り畳み、綺麗に並べてからコップに差し込んで机に並べる、その日の準備時間となっていた。

僕には関係なかったが、時々一緒に仲間に入れて貰い、手伝ってあげたりした。仕事がだんだん忙しくなる時間が、昼前の１１時半頃からで、午後２時過ぎになると、後片付けも終わり、夕方の６時頃まではなにもすることもない１日で一番暇な時間だった。この時間になると、みんな自由に寛ぎ、体を休めたり、買い物に出掛けたりした。

僕はじっとしているのが嫌いな性分だったので、４、５人いた娘たちが揃っているときにみんなを集めて簡単な日本語の会話を教えるようにした。一応「おはようございます、こんにちは、こんばんは、いらっしゃいませ、どうもありがとうございました」と、挨拶から教え、それから数字や「さしみ、おすし、てんどん、まくのうち、うどん、そうめん、ざるそば、みそ、しょうゆ、こしょう、しちみとうがらし」などの料理や調味料の名前を教え込んだ。僕はいつも冗談を言いながら遊び半分で楽しく日本語を教えていたので、みんなも僕に釣られて陽気になり、発音を間違えたりしてお腹を抱えてゲラゲラ、クスクス笑いながら授業を続けた。みんなに日本語を教えた甲斐があって、彼女たちは短時間のうちに日本語を覚え込み、どうにか簡単な片言の会話ができるようになった。

夜は７時頃から板前さんも、可愛い娘たちも、みんなが急にバタバタと忙しく走り回る時間となるのだった。

当時、日本のレストランは、まだ花屋一軒しかなかったので、故郷の味覚に魅せられた在留邦人の溜まり場となっていた。商社マンの人たちはおかずを突っ突き、冷えたビールや、酒を酌み交わし、可愛い給仕の娘を口説いたり、腰に手を触れたりして疲れた体を癒していた。

毎晩１０時過ぎになると、客はほとんど帰ってしまうが、たまに１１時頃まで客が居座っていることがあった。通いで来ている僕も含めて、みんなもそうであったが、１０時半ともなると、みんながそろそろそわそわし始める時刻だった。誰も刻々と刻まれてゆく時計の秒針を睨み、バスがなくなる時間を気にしながら、一人また一人と、ユニフォームを脱ぎ捨てて帰り支度をするのだった。最終的には当番の者が一人残ることになっていたが、「あのお客まだ帰らないわ、図々しい」と、ブツブツこぼすのだった。しかしいずれにしても、僕はレジで会計役だったので、最後まで残っていなければならなかったし、最後に残った彼女の面倒も見て上げなければならなかった。

僕も白バスで通っていたが、花屋の前のシーパヤーの交差点から出る最終バスが１１時半だった。途中でパトゥムワンでプラカノーン行きのバスに乗り換えなければならなかった。バス代は何処まで行ってもたった１スルン（２５サタン）だったが、この最終バスを逃すと、後はタクシーしかなかった。その頃、僕はまだ守屋泰子さんの家に世話になっていた。場所はプラカノーンの側の手前に当たるソーイ・サーリー（今のスクームヴィッ・ソーイ６９）だった。遠かったので、タクシー代は花屋から１０バー

ツも掛かり、僕にとっては大変な負担が掛かり、そう簡単に乗れる代物ではなかった。だが止むを得ず、時々メーターのないおんぼろのオスチンのタクシーを拾って乗っていた。

給料を貰った月初めの頃ならまだいいが、月末が近付くに従って不思議に懐の重みも軽くなるもので、その都度、今晩は最終バスに間に合うであろうかと、いらぬ心配をするようになり、心細くなってくるものである。

僕は花屋にはおよそ7ヶ月間勤めていたが、花屋から我が家のソーイ・サーリーまで2、3時間かけて、人通りの途絶えた夜道をトコトコ歩いて帰ったことも何回かあった。が、別に辛いと思ったことはなかった。先立つお金がないのだから、歩くしかないのだ。

僕に課せられた仕事は、会計の他に、日本船が入港するたびに船に赴き、日本の食糧を取りに行く役目もあった。輸送船がクローン・トーイの岸壁に停泊しているときはわりに楽だったが、チャウプラヤー川の真ん中あたりに停泊しているときは命がけだった。食料品を取りに行く時間は、脱税品だったので、いつも暗くなってからだった。

まず小型トラックをアレンジし、川岸の路地の所に待機させ、サンパン（手漕ぎ舟）を雇って川の真ん中に碇を下ろして漂流している日本船に乗り込み、輸送船を監視しているイミグレ兼監視人のおっさんを買収し、それから初めて箱や袋に入っている荷物をサンパンに一杯積み込み、素早く本船から離れるのだが、途中で水上警察の監視艇に見付かると、探照灯を照らして追跡してくるので、いつでも川に飛び込んで逃げられる用意をしておかなければならなかった。

僕は一度だけ遠くにいた監視艇に追っかけられたことがあったが、僕は冷静になり、船頭さんと一緒に舟を漕ぎ、大きな輸送船と輸送船の間を縫い、旨い具合に逃げ切り、難を逃れたことがあった。

物事はすべてが度胸と経験であり、スリルがあって面白いものである。だが、当時まだ国籍もなかった僕は、仮にこの密輸ルートで当局に逮捕されたりしたらヤバイと思い、お世話になった花屋を辞めたのである。

■富士機械貿易公司

敗戦後、バンコクで見かける外国人は、日本人も含めて、ほとんどか片手にジェームスボンドの鞄をぶら下げて、セカセカと忙しそうに歩き回っている貿易関係のセールスマンばかりだった。しかし、１９５５（昭和３０）年頃から体の大きい背の高い外国人がポツリポツリと個人で観光目当てに遊びに来るようになった。そのお陰で、今まで静かだったニューロードの中央郵便局周辺にあった少数の土産店が繁盛しだした。戦時中空爆でやられたヨーロッパホテルの入り口で、ＤＰ（写真現像）も兼ね、絵葉書やスライドを売っていたティナコーン店もこの観光ブームに乗り、通りがかりの外国人観光客で賑わい、絵葉書が飛ぶように売れるようになった。

ティナコーンの店の主は台湾人の福本さんという人だった。僕もよくフイルムの現像や、写真の引き伸ばしなどを頼み、お世話になっていたので、気心がしれた仲だった。このティナコーン店の二階は空いていたので、城村さんが二階を借りて、南旅行社を経営していた。

僕も時々顔を出して手伝っていたが、ルムピニー公園で世界の見本市があったときに出合った田中さんが尋ねて来た。今度バンコクで富士機械貿易公司の会社を開設して製材機の売込みをするので、僕にも手伝って欲しい、との用件だった。田中さんのオファーは、給料は５００バーツ、この他に機械の売り上げに対してリベートを出すからとのことだった。僕はいつもの調子でブラブラ、フラフラしていたときだったし、このコンミッションのオファーに引かれたので、ものは試しと、田中さんと仕事をして見ることにした。

田中さんのパートナーは木村さんや、チャローンさん、それにカンチッさんだった。会社の設立に当り、僕は最初から商業省に登録しなければならない会社の登録手続きも手伝った。　約２ヶ月掛かりやっとラーチャダムヌーンの目抜き通りに面した憲法記念塔の近くの二階に富士機械貿易公司を設立した。

田中さんは、日本へ行き来していたために、毎日社に顔を出していたのは僕だけだった。木村さんは来たりこなかったりで、当てにならなかった。僕は秘書兼セールスマンマンも兼ね、製材関係の様々な機械類が掲載されたカタログを袋に突っ込み、バイヤーを捜して歩いた。しかし大きな機械は小型のエンジンと違って値が張り、そう簡単に売れる代物ではなかった。僕は田中さんと数回に亘り、飛行機でチヤンマイへも赴き、製材所のマネージャーを訪問し、製材機の売り込みに勤めた。チヤンマイでは運よくワンセットのオーダーを取り付けたのでホッとした。

富士機械で扱っていた商品は機械類だけではなく、お得意先の要望に応じて一応何でも本社へ引き合いを出していた。大津タイヤもその中の一例ではあったが、取引先からタイヤの取引があったので、すぐ見本を取り寄せ、再三に亘り先方と交渉した結果、やっとの思いで代理店契約を取り交わす段階まで漕ぎ付けた。が、最後の土壇場になって、僕は邪魔だからと、首にされてしまったのである。

人間とは実に身勝手なもので、僕を利用するだけ利用し、最後に切り捨て御免でいとも簡単にバサッと首をちょん切られてしまった。僕は反抗することも、苦情すらも言えない卑しい現地雇いのサラリーマンの身だった。だが、こんな浅はかな血も涙もない人と付き合っていたのか、と思うと、誰彼の区別なくすぐ他人を信じてしまう純真すぎる自分が情けなかった。

僕がいきなり首にされたとき、社のボスは僕に３ヶ月分の給料の借金があった。僕は田中さんと、木村さん２人が住んでいたバンカッピの自宅に乗り込み、自分が貰う権利がある３ヶ月分の給料、金額にして僅か１５００バーツを、遠慮会釈もなく堂々と催促した。しかし、「金がないから払えない」との理由で素っ気無く突っぱねられてしまった。すったもんだした結果本気で怒り出した僕の剣幕に恐れをなしたのか、しぶしぶと１０００バーツだして「これで我慢してくれ」と、うまい具合に逃げられてしまった。僕としては５００バーツ損することになるが、全然貰えないよりはましだ、と思い、我慢することにした。

僕は、この２人の立派な紳士、日本男児とは綺麗さっぱりあっさりと、手を切り、およそ４ヶ月間も正直に騙され、こき使われた富士機械貿易公司から追い出されたのである。ハッハッハー、これが僕が身をもって体験した人生の教訓と言うものさ、と、愉快に笑うしかない。

■ＳＲタピオカ工場

或る日のことだった。サートーンでオリヴィアさんに日本語を教えて帰宅してみると、ウドムさんの所に田崎忠次郎さんからの伝言で、「今、自分はシーラチャーのＳＲタピオカ工場の現場にいる。此処で日本語とタイ語の通訳を捜しているが、やる意志はないか」との、連絡が入っていた。僕にとって予期していなかったことだった。およそ８ヶ月間も職にあぶれてノラリクラリとしていたので、これは面白いかもしれないと思い、取りあえず行ってみることにした。

次の日、早速小さなトランクに衣類を詰め込み、シーラチャー行きのバスに飛び乗った。僕はシーラチャーの終点でバスを降り、まずＳＲタピオカ工場の出張所へ立ち寄り、其処にトランクを預けて工場へ行くトラックを待った。しかし、トラックがなかなか来ないので、市場へ行き、腹ごしらえをし、小さな町をブラブラ歩き回り、それからＳＲタピオカ工場の出張所に戻った。

だが、戻ってみると、預けたはずのトランクが紛失していた。別に大事な物があるわけではないので、なくなっても構わないが、腹が立ったので、「誰が盗ったのだっ」と、事務所の者に問い質してみたが、２、３人いた事務所の者は顔を伏せ、まるで九官鳥のように「ただ知らぬ、存ぜぬ」と首を横に振るばかりで全然埒があかなかった。この野郎と思ったが、仕方がないので「よしわかった、警察署に届けて来るから、トラックが来たら暫く待たせておいてくれ」と、啖呵を切り、その足で警察へすっ飛んだ。

僕がトランクの盗難届けを済ませて警察から戻ってみると、あら不思議、僕に恐れをなしたのか、トランクはちゃんと元の位置に置いてあるではないか。僕は何も言わずに黙ってトランクを開けて中身を調べてみた。僕の想像通り、長袖のワイシャツと、長ズボンが紛失していただけで、下着類は無事だった。僕は無言で相手の顔をじろりと一瞥しただけで、表に待っていた工場行きのトラックに飛び乗った。

工場で汗をたらたら流していた田崎さんに会ったが、まさか僕がこんなに早く現れるとは想像もしていなかったらしく、戸惑った顔をしていた。「正夫ちゃん、来るのが早すぎたよ。まだ朝鮮人の通訳がいるので、月末まであと２週間待って頂戴」と言われた。僕が「はい、わかりました」と言って、帰ろうとすると、「正夫ちゃん、せっかく来たんだから紹介しておくね」と言って、日本から来ていた技術者の三浦俊次さんと、中橋博さんを紹介してくれた。ついでに背の高い工場長にも会い、僕の給料や待遇の話も取り決め、来月の１日から仕事をすることにして、僕は一旦バンコクに引き揚げた。

人間の運命は道標もなくいつ何処でどうなるのか解らないものである。目標もなくただ無意識に彷徨い歩いていた僕の前途に、多少ではあるが、やっと生命への淡い光が輝きが出てくる兆しが現れた。

此処では田崎さんの紹介で、身分証明書を調べられなかったので助かったが、世間には悪人も多いが、善良な人も多かった。よき友人を得るためには自分の判断で選ぶしかなかった。但し判断を厳かにすると、気付かぬうちに酷い目に遭い、あとで後悔を招く結果になるのだった。

僕は田崎さんのお陰で、ＳＲタピオカ工場で通訳として、タピオカの澱粉を乾燥する乾燥機の据え付け作業の手伝いをすることになった。僕が正式に工場で仕事を始めたのは、１９５５（昭和３１）年２月１日からだった。

ＳＲ工場の所在地は、チョンブリー県のシーラチャーへ行く手前の温泉が湧き出ている貯水池に近い

周囲に大きな大木が聳えている森に囲まれたバーンプラの山の麓にあった。
僕は工場の真ん前にある寮の二階で田崎さん、三浦さん、中橋さんたちと一緒に同じ部屋で生活することになった。僕たちの飯や、身の回りの面倒を見てくれたのが、太った愛嬌のある気さくなおばちゃんと、そのおばちゃんの連れ子に当る年の頃１８、９歳ぐらいのすらっとしたわりに綺麗な娘だった。僕は二人の名前を忘れてしまったが、実によく気が利くし、毎日上げ膳据え膳で、美味しい物をたらふく食べさせて貰った。
拡大な工場の敷地内はまだ植えたばかりの青々したタピオカの苗木が所狭しと密集していた。敷地の端の方に、細長い古いタピオカ澱粉工場があった。其処では工員が蒸し風呂のような乾燥室で全身真っ白い澱粉を浴び、１日に３交代で、黙々とタピオカの乾燥作業に従事していた。工場には工員グループの他に、外部からトラックで運び込まれたタピオカを工場内まで運ぶクーリーグループ、機械関係の担当をしているタイ人のエンジニアグループ、それと木工関係の仕事をしている華僑系の大工グループと、大きく４グループに分けられていた。しかし、各グループには、それぞれ羽振りを利かせた一癖も二癖もありそうな偉そうな顔をしたボスがデンと腰を据え、一同に睨みを利かせていた。
僕がこのＳＲタピオカ工場に来た当初、工場に関係していた連中は、工場のマネージャーも含めてそうであったが、日本人に対する態度が非常に悪く、日本人を小馬鹿にした点が多かった。何故そうなったのか、理由はすぐ解けたが、それは、元いた朝鮮人の通訳が、双方が言っていることをきちんと訳さないで、出鱈目に通訳していたからだった。簡単な実例をあげると、縦、横、幅、深さの寸法を間違えたり、大石、小石、砂利の名称や、肝心なサイズを間違えていたのである。従って、工事は最初から躓いていたわけで、基礎工事を始める段階だけでも、何回もやり直しをしたりして手間取ったケースが生じていたのである。
このような事情で、田崎さんたちにしてみれば、「何だ、タイの連中は頭が悪い、全然使い物にならない」と、腹を立て、一方、タイ人はタイ人で「何だ、日本人はミスばかりしてなにもできないじゃないか」と、お互いに不満を打ちまけていた真っ最中だった。
僕の担当は、双方が言っていることをそのまま正しく直訳すればいいわけだが、この数日間は何を言っても、ただブツブツこぼすばかりで、仕事はあまり捗らなかった。このままでは双方の誤解を解かない限りこの仕事は絶対に旨く捗らないとみた。
僕は取りあえず、今後も工事現場で一緒に仕事をしなければならない反抗的なボスと掛け合った。エンジニアと工員のボスはたいした問題もなく理解しても貰えた。が、華僑系の大工とクーリーのボスは流石に凄かった。「貴様も日本人だろう、この犬やろうめ、」と、最初から食ってかかってきたので、僕も負けずに、凄い剣幕で「おい、なんだと、俺が犬なら貴様は糞の役にも立たない瘡犬だっ。貴様こそ何を威張っているんだ、俺は喧嘩を売りにきたんでもないし、買いにきたんでもない。話があるから話に来たんだ。貴様こそそれでもボスか。ボスなら話し合いをした上で、生命をかけて堂々と喧嘩をぶっぱじめるもんだ」と、怒鳴り返した。
早朝の現場は僕一人のためにシーンとしてしまった。お互いに固唾を呑み暫く睨み合いが続いた。僕

はここまできたからにはとことんまでやるんだ、と腹を決めていた。
相手は僕の剣幕に圧倒された気配をみせ、急におとなしくなった。やっと話し合いがつき、みんなのもやもやしていた心のしこりが解けた。
僕がボスと単刀直入に体当たりを決行してからは、今までつっけんどんな態度を示していた連中が優しい笑顔を投げかけてくるようになり、全てがスムーズに捗るようになった。それ以来現場の工事はまるで嘘みたいにスムーズに進み、基礎工事も無事に終わり、大きな回転式の据付が始まった。
いつもその日に何をするのかをボスたちに指示するだけで僕は蛭みたいに三浦さんたちの後ろにくっついて何かあったときに通訳するだけだったので、仕事は楽ちんだった。
僕たちの勤務時間は午前８時から午後５時までで、日曜日と祭日は休みだった。僕は毎朝早朝に起きて、周囲を朝霧に覆われた工場の人気のないタピオカ畑に囲まれた赤土の小道を口笛を吹きながら散歩していた。夕方も温泉が沸き出ている森に囲まれていた貯水池付近を歩き回った。貯水池はまだ出来たてのホヤホヤで水嵩はまだ少なかった。休みの日はいつも一人で周囲にある小高い山に登り、頂上から遙か彼方に見えるタイ湾の綺麗な海の景色を眺めて楽しんだ。
工場には誰が飼っていたのか知らないが、７、８匹のタイ犬がゴロゴロしていた。僕が毎日、朝夕口笛を吹きながら工場の周辺を歩き回っていたからなのか、どうか知らないが、僕が口笛を吹くと、寝転んでいるワンちゃんたちが尻尾を振って僕についてくるようになった。犬の仲間は僕が行く所へは何処までも嬉しそうにしてついてきた。山の麓などを歩いていると、時々可愛い綺麗な兎に出くわしたりした。すると、犬たちは、ワンワン吼えながら一斉に兎を追いかけるので、僕も一緒になって鬼ごっこをして楽しんだ。いつもお決まりのコースなのだが、兎は後ろ足でピョンピョンと身軽に飛び跳ねてさっさと穴倉に潜り込み、忍者みたいに姿を消してしまうのだった。
三浦さんと、中橋さんは写真が好きだった。僕も写真が好きだったが、僕が持っていたおんぼろなオリンパス・シックスはジャバラのところに穴が開き光線が入り使い物にならない廃物品になっていた。写真を撮りたいと思ってもカメラがなかった僕は、時々２人のカメラを借りて写真を撮らせて貰った。３人とも写真愛好家だったので、話題も共通点があり、そのうちに素晴らしい写真を撮って新聞や、グラフに載せよう、と、話し合った。暇なときはお互いに誘い合い、シーラチャーや、バーンセーンの海辺をブラブラ歩き、被写体を見つけながらバシャ、バシャとシャッターを切り、楽しい幸せなひと時を過ごした。
ＳＲ工場の近くに村長さんが商っている雑貨や、食べ物を売っている小さな店があった。その店には年頃の村長さんの可愛い娘が２人いた。２人とも美人だったので、工場の連中の評判になり、みんな彼女たちに熱をあげていた。僕たちも時々その店に寄り、うどんを食べたり、果物を買ったりしたが、確かに顔立ちの整った綺麗な可愛い娘だった。僕は女にはあまり興味がなかったが、工場では、さて、誰が彼女を陥れるであろうかと、話題の種になっていた。
女と言えば、工場にいた野郎どもは女が大好きだった。暇さえあれば女の話をし、昼夜を問わず「オーイ、遊びに行こう」と、掛け声も勇ましく、工場にタピオカを満載してくる帰りの空になったトラッ

クに飛び乗り、シーラチャーや、チョンブリーの赤線地帯へと、繰り出していた。
僕も時々連中と一緒に怪しげな赤ランプや、ネオンが灯る軒並みにずらりと並んでいる夜の女街道をほっつき歩いたが、一度も女を買ったことがなかったので、みんなから「オイ、お前チンチンはあるのか、今のうちに磨いておかないと、腐ってしまうぜ、後で後悔したって始まらないぞ」と、ゲラゲラ笑いながらからかわれたりした。
工場の寮で、母娘で僕たちの面倒を見ていた気立ての優しい娘の方が僕に気があるらしく時々部屋に誰もいないときなどを見計らってスゥーッと現れ、何か意味ありげな瞳で体をくねらせて変な素振りをしたり、「お兄さん、お兄さんと言って、親しげに話しかけてくるようになった。母親も盛んに娘にけしかけているようで、僕には凄く愛想が良かった。女から好かれるのは非常に有り難いことではあるが、僕はごく普通にしか付き合っていないのに、此処でもまた、女から追い回されるのか、と思うと、うんざりしてしまった。
夜ともなると、何もない工場の周りは真っ暗闇に包まれてしまう。行くあてもなく何もすることもなく各々が思い思いに部屋でゴロッと横になったり、本を読んだり、ベランダで夜空にキラキラ輝いている手の届きそうな綺麗な星を眺めたりして寛ぐ自分たちの自由時間だった。寮の壁や天井には、お腹を空かした無数のチンチュック（やもり）がへばりついていた。そのチンチョックは明りを求めて殺到してくるいろんな虫を、小さな目で獲物を狙い、ペロッ、ペロッと、口の中に放り込んでいた。実に旨い具合に口の中に吸い込まれるので、感心して見つめていたが、その満腹したチンチョックを、さらに中橋さんが寝巻き姿で尖った小さな銛を付けた細長い棒でチンチョックを突っ突き、一匹ずつ退治していた。中橋さんがチンチョックを狙うときの格好も面白かったが、兎に角、一突きでチンチョックを仕留めていた技も大したものだった。
この楽しかった工場生活も、試運転が間近に迫り、そろそろお別れしなければならない時期がきていた。田崎さんは溶接の仕事が終わり、とっくの昔にバンコクに引き揚げていた。試運転の日に備え、僕は、三浦さんと、中橋さんがひとつ、ひとつ丹念に説明する機械の操作の仕方を、実際に機械を動かしながら、ターッさんや主だった機械担当のエンジニアに解り易く通訳してあげた。
いよいよ待ちに待った最後の試運転の日だった。２４時間フル回転で試運転が開始された。だが、ターッさんたちのエンジニアグループの連中がまだ細々した点で完全に理解できていない部分がかなりあった。そこで僕が勝手に「此処はこうするんだ」と、説明しながら、どんどんドライヤーの使い方について説明しだしたので、其処にいた連中は、みんなびっくりした顔をしていた。僕にしてみれば、毎日自分に与えられた義務として通訳していただけにすぎないのだが、全てが自然に自分の頭の中に詰め込まれていたために、全部一人で操作できる自信を持っていただけの話である。
徹夜でやった試運転も無事に終わり、それから一週間後に僕たちは工場を去ることになった最後の日に、僕が荷造りをしていると、ターッさんが「工場長が僕を呼んでいる」と言って、僕を呼びに来た。僕は何かな、と思って、工場長の部屋へ顔をだした。すると、彼は微笑みながら、僕に「仕事がスムーズに出来たのは正夫のお陰だ。どうもありがとう」と、言ったかと思うと、続け様に「正夫、此処に残

って機械の管理及び工場のマネジメンとをやってくれないか、給料は今の二倍出すから……」と、誘われた。僕はマネージャーの瞳をじっと見つめ「有り難い話だが、僕はまだ自分がやりたいと思うことが沢山あるので、バンコクに帰ります」と、あっさりと辞退した。

僕はＳＲ工場を去るに当り、まず、仲良く遊んでくれた無邪気なワンちゃんたちに、最後のお別れに行った。大衆食堂で牛肉をごっそり手に入れ、細かく切って貰い、いつものように散歩に出掛けた。僕は美しい自然を眺め、ヒューヒュー口笛を吹きながら、小高い丘に向かって歩き出した。ワンちゃんたちもいつものように目を輝かせ、長い尻尾を振りながら飛んだり跳ねたりしながら僕の周りに集まってきた。

僕は一本の大木の木陰に腰を下ろし、「お前たちと会えるのも今日が最後なんだよ、元気でいてね」と呟き、一匹ずつ頭を撫でてやった。何も知らない犬はキョトンとした可愛い瞳で僕を見つめていたが、僕は何故だか知らないが、この野良犬同然の大好きな愛犬と別れるのがとても辛かった。肉を分けてあげながら、切ない気持ちに駆られ、代わる代わる可愛い、可愛いと、頭を撫でていたが、僕はとうとう我慢できなくなった。むしょうに悲しくなり、その場でシクシク泣き出してしまった。

犬と悲しみに浸った僕は、さらに、お世話になった工場の人たちにも最後の挨拶回りを交わした。僕は、兄弟みたいに親切にしてくれた仲間のボスや、僕が時々手伝っていた親しいボイラー炊きの青年や、親身になって僕たちの面倒を見てくれた親娘や、食堂の連中にも、手を合わせ、別れを告げた。

誰もが悲しそうな表情をしていたが、お互いに別れを惜しんだ。僕はおよそ８ヶ月余りいたＳＲタピオカ工場を、様々な思い出を残し、後ろ髪を引かれる思いで涙をのみ「さらば」と、発ち去った。

■日本語の家庭教師

僕がＳＲタピオカ工場に出稼ぎに行っていた間にバンコクの母の元には２、３回しか戻っていない。最初数ヶ月ぶりにバンコクに戻ってみて、初めてわかったことは、母はソーイ・サーラーデーンにいた亀井さんの所で、家政婦をしていたことだった。このことについて、母からは何も聞いていなかったので、全然知らなかったわけだが、僕はこの家の軒下にあった車庫で一泊しただけだった。

最後に僕がＳＲタピオカ工場を引き揚げてきたときは、母は亀井さんと一緒に、両側に小さなクローン（運河）が流れている、ちょっと奥へ入ったソーイ・ランスワーンの庭付きの家に引っ越していた。此処でも母は離れにあった車庫住まいをしていた。大きな扉があるこの車庫には窓もなく、しかも屋根がトタン屋根だったので、太陽の照り返しで蒸し風呂のように暑かった。僕は此処で初めて亀井さんに紹介され、暫くお世話になった。

僕がＳＲタピオカ工場で通訳をしていたときの給料は、月々手取りで１５００バーツだったので、僕にとっては今までにない最高の収入額だった。僕が工場で使っていた自分の小遣いは、１日にたった２５サタン（銭）と、びっくりするほど最小限に少なかった。僕は毎朝工場の大衆食堂で一杯２５サタンする自分の大好きなオージュワ（砂糖入りブラック・ホットコーヒー）を一杯飲むだけだった。僕はたまにみんなと町へ遊びに行って、飲み食いする程度だったので、貰った給料はほとんどそのままそっく

り残っていた。従って、バンコクに戻ってきたときには約1万バーツの大金を持っていた。
お金の心配はなかったので、直ぐにでも家を見つけて引っ越したい、と思い、貸家を物色して歩いた。それに前途不安だったので、仕事が見付かるまで、と思い、また、資金の掛からない簡単にできる日本語の家庭教師をすることにした。僕は毎日自分でこれなら大丈夫、と思われる、会話のテキストを工夫してでっちあげ、弟子の家をテクテク歩き回った。
授業中に日本語の発音の仕方や意味を説明するにあたり、僕はできるだけわかりやすいように、タイ語の発音を捩ったりし、冗談を言ったりしながら、いろんなジェスチャーを交え、弟子とゲラゲラ笑いながら日本語を教えるように心がけた。
家庭で日本語を習う人たちは素晴らしい豪華な家庭に住んでいる金持ちが多かった。僕は、バンコク市内は勿論、川向こうにあるトンブリーのチャウプラヤー川沿いの果樹園に囲まれた遠方まで足を向けていた。あっちこっちで家庭教師をしていたお陰で、日本語のアルバイトだけで曲がりなりにも何とか食っていけるようになった。それと同時に、普通だとなかなか会えない高官の人とも知り合えるよいチャンスにも恵まれた。それは後にも先にも、僕にとっては実に大きなメリットとなった。
僕は日本語を教える傍ら時々暇な時に、当時タイに乗り込んできたばかりのぺんてる社の宣伝の仕事も手伝っていた。本社から森山さんが短期間の出張で来ていたが、彼は台湾人が経営していた富士ホテルをベースにし、東南アジア諸国を飛び歩いていた。森山さんは、バンコクでは短期間であったが、タイの事情に精通した絵の上手な城村さんと仕事をしていた。森山さんは城村さんが相棒にしていた床屋のサンさんと一緒にぺんてるの宣伝カーでお得意先回りをする傍ら、タイの学校などを巡回し、蠟けつ染の仕方や、絵のデモンストレーションを披露し、ぺんてるの宣伝を兼ね、販売に力を注いでいた。しかし、2人の仲は旨くいかず、最終的には会社の利害関係で喧嘩別れとなってしまった。

■やっと聴けたＬＰ盤

僕が本腰を入れて日本語を教えるようになってからは、タイ人から尊敬され、何処へ行っても「アチャーン（先生）と、呼ばれるようになった。弟子もかなり増え、一応どうにか自力で生きていける自信をつけたので、思い切って家を借りることにした。最初はソーイ・トンロー（今のスクムヴィッ・ソーイ５５）のトンローの市場に近い、オーナーと同じ屋敷内にある庭付の平屋の家を借りて母と2人で暮らすことになった。
やっと自分で家を持てるようになったのは良かったが、家財道具はまだ何もなかった。ある物と言えば、抑留所から出たときに母が買ったガラスのショーケースと、ベッドしかない実にみすぼらしいものだった。僕は同級生だった恵美ちゃんの好意で色が剥げ掛かった粗末な応接セットと、一番小さな一級ぐらいの四角い冷蔵庫を、特別に安い値段で払い下げて貰い、それをワックスで磨き直し、粗があまり目立たないようし、更に薄っぺらな座布団を敷き、我が家の応接間に並べた。
僕の収入はこの8年間あったりなかったりで、斑が酷くて当てにならないものだった。しかし僕はその間にアルバイトなどして貯めたお金で、自分の好きなＬＰ盤のレコードを数ヶ月に一枚の割で買い集

めていた。

当時、１２インチのＬＰ盤は一枚１００バーツだったが、僕にとってはとても手が届かない代物だった。だが、大好きな曲があると、無理をしてでも一枚ずつ買い溜めていた。いずれ金ができたら、ステレオのプレイヤーを買って音楽の虜になろうと、夢見ていたが、いつになったら実現するのかは、自分でもわからないままだった。取って置きのお金で買ったレコードはまるで宝みたいにして盤が熱で反らないように気を配り、大事にして保管してあった。

家には洋服箪笥や机、食器類など、まだいろいろと揃えなければならない必要品が一杯あった。だが、一遍に買えるわけでもなかったので、月日を費やし、小物から徐々に揃え、どうにかラジオを購入するまでに漕ぎ付けた。性能のよいラジオは高くて手が出なかったので、当時シーロムとパッポンの角にあった三洋電機のショールームに勤めていた林さんに頼み、彼の好意で短波付のラジオを１台７５０バーツの特別価格で分けて貰った。お陰で我が家も隣近所と同じ様にスイッチを捻ると、ラジオが唸るようになった。僕はそれから３ヶ月後に、１０枚一遍に聴ける電蓄のオートプレイヤーを１４００バーツで手に入れた。待ちに待った待望のグーグー眠っていたＬＰレコードはこうして足掛け９年ぶりにやっと聴くことができるようになった。

僕は３枚でセットになった白鳥の湖や、マダムバタフライのオペラ曲などを、みんなが寝静まった深夜に部屋のライトを消し、ベッドに寝転び、窓から夜空にきらきら輝いている美しい星を眺め、じっくりと聴き入った。曲の流れとともに、過去の思い出が走馬灯のように流れ、温かい大粒の涙が後から後から止めどなく頬を伝わって滴り落ちた。

■新興産業

僕は相変わらず日本語を教え歩いていたが、あるきっかけで日本から来ていた新興産業の服部さんと知りあった。タイミング的に新興産業でタイ語のできる人を捜していたときだった。

僕はスリウォン通りにある彼の事務所でインタビューを受けたが、話はとんとん拍子に進み、僅か数分の口頭面接のみで、給料１５００バーツで即座に採用されてしまった。僕としては今まで散々な目に遭わされ嫌な思いをしていただけに、こんなに簡単に職が決まるものかと、まるで狐に騙されたような心境だった。

僕は新興産業の小さな事務所で服部さんとたった２人で、仕事をすることになった。僕の担当は華僑の貿易商を訪問し、話術によって売り込むセールスマン役だった。売り込むと言っても、手元に現物があるわけではなく、お得意先にカタログや見本を見せるだけだった。後は細々したカラーの配色や、品質やサイズ及び価格の交渉をし、契約書を取り交わし、バイヤーに明細を記載したインボイスを渡し、そのインボイスによって銀行から日本へ信用状（ＬＣ）を開設して貰い、日本のメーカーに発注し、商品を直接バイヤーの手元に輸出する形式を取っていた。従って、クレームが出ない限り楽な仕事だった。

新興産業で扱っていた主な商品は、小型のエンジン、モーター、旋盤機、工具類や雑貨類などだった。僕は毎日笑顔を振りまき、お得意先回りをしていたので、瞬く間にバイヤーの連中とも親しくなった。

お陰で、陸上用のヤンマーエンジン（船舶用は他社が代理店契約を結んでいた）を皮切りに、雑貨類の注文なども、どんどん取るようになった。

僕がこの新興産業に勤めて1年余り経過した或る日、僕の友人の山本健治さんから「住友商事でタイ語のできる人を捜しているが、興味はないか」と、話が舞い込んできた。僕は住友商事がどんな会社だか全然知らなかったが、山本さんの紹介状を持ってシーロム通りのソーイ・ピパッに事務所を構えていた西田所長に会いに行った。住友には、本社から西田さんと、森田さん2人が駐在員として派遣されていた。僕は2人から同時にインタビューを受けたが、主に仕事の経験と、タイ語の能力について聞かれただけで、ここでも嘘みたいに簡単に就職が決まってしまった。

想像もしていなかった就職先が住友商事に決まったとき、僕はまだ新興産業に勤めていたので、お世話になった服部さんに事情を説明し、「新興産業のお得意先には絶対に手を出さないから」と、彼の仕事に迷惑が掛からないように約束し、仁義を切って礼儀正しく辞職した。

■住友商事時代

僕が三大財閥のひとつと言われた住友商事で、現地スタッフとして正式に仕事を始めたのは、１９５８（昭和３３）年7月１６日だった。僕は日本企業の間で合い言葉に「あいつは現地雇いさ」と言われている、ほとんど何の保証もない一介の貧しいサラリーマンとして、およそ4年半住友商事のために忠実を尽くした。

現地雇いであるからには仮にどんなに抜群に仕事ができたとしても、日本の正社員並みの給料から比べると、お涙頂戴だった。兎に角、最初の2ヶ月間の初給料が１５００バーツ、3ヶ月目から１７００バーツ、プラス車代というごくありきたりの条件だった。学校に進学できなかった悲しい思いをした僕は、此処で給料を貰いながら、最後の人生社会学を習得することになった。

西田さんは鉄鋼関係やガラスなどを担当し、森田さんが電気関係及び、その他の担当をしていた。その配下に老練のガラスや肥料などを担当していた飲んべいのソムポップさんと、オペレーター兼、タイピスト兼、郵便物を発送したりする雑務担当のソムシーさんと、お人よしの社の車を運転していた背の高い痩せたプワンさんがいた。

僕には初めからこれといった決まった「日本語とタイ語ができるし、何でもこなすから便利だ」と、いうことで、何でもやらされた。僕が最初にやらされたことは、「これを読みなさい」と言われて、数日間だったが、まず、住友商事の分厚い社史を読まされた。それから西田さんと、森田さんのお尻にくっついて通訳も兼ね、顔繋ぎのために政府関係の取引先や、華僑のお得意先を一軒ずつ訪問し、挨拶回りをして歩いた。

僕が住友に入社した頃は紙、ガラス、変圧器や電線関係の仕事が主体になっていた。それと、電話局や、発電所、灌漑局、専売局及び、国鉄関係の入札の仕事が多かった。何故か、入札札関係の仕事は未経験だった僕にお鉢が回ってきた。僕は、タイ当局の購買部の担当者にお百度を踏み、細々した企画の問い合わせをしたりして、「できれば我が社の規格表通りに入札所を発行してください。袖の下は何とか

工面しますから」と、内密に頼んだりした。

入札札に当り、購買部から事前に入手する入札書の規格表にはまだ英語に訳されていないタイ語だけの場合があった。それには難しい専門用語で記載されている場合もあった。しかしそれを日本語に訳したりするのも僕だった。入札書をきちんとでっち上げるのも僕だったが、僕は各種目毎の単価を計算し、入札書類にもミスがなにいようにきちんとタイプし、入札時に提出する銀行の保証書も手落ちがないようにきちんと揃えなければならなかった。開札日には何処の社が何番札であったか、メーカーや、シッパー、納期、金額なども含め、明細をきちんと調べて報告しなければならなかった。入札に関し、僕は入札関係に関しては一回で入札の要領を覚えてしまった。

僕はバイヤーのお得意先回りもし、依頼があった用件に関して商業文の手紙も書いていた。しかし、住友では米や、メイズなどの土産物の輸出や、鉱山関係の仕事にも手を出していたので、僕は輸出に関した手伝いもしなければならなかった。従って、土産物の買い付けが始まる時期になると、チャウプラヤー川沿いや、ソンワート周辺にある中国人の問屋街へ出向き、品質や湿度、納期や価格の交渉もしなければならなかった。

この他に、日本人商工会議所で行われるミーティングにも出席し、様々な諸問題に関した話題や、将来の見通しなどについて意見を交換したりした。住友は流石に大きな企業だけあって、社と関連を持っているメーカーなどを含め、市場調査を兼ねて遊びに来る来客の往来も多かった。社は人事不足だったし、現地のスタッフで日本語ができるのは僕しかいなかったので、当然、僕がお偉方の接待役も兼ねていた。

僕は時々上司から「瀬戸君済まんが今日は世話役を頼む」と言われて、駆りだされていた。通訳は勿論、夜ともなれば、夕食後、二次会、三次会と、バーや、ナイトクラブ巡りをし、若いホステスに囲まれて、旨くもない苦い酒を飲み、最後には女の世話までし、夜遅くまで大事な来客の接待をしなければならなかった。

それに、移民局で手続きしなければならない面倒なパスポートのビザ延期や、永住権の手続きなども僕が一人で引き受けていた。僕は外務省ヘリエンタリービザの申請に行ったり、移民局や警視庁内にある、外国人管理課などを駈けずり歩いた。ビザの手続きをする場合などには、パスポートの間にそおっと１００バーツ紙幣を忍ばせておくと、物事は実にスムーズにパッパと捗った。

僕はこうして各部署にいた係官とも親しくなり、時々飯を奢り、一緒に女を買いに（タイ語でリヤーン・プースアーと言う）行ったりして友好を深めた。飯を奢り、好きな女を抱かせたとしても、別に社から接待費が出るわけでもなく全部自腹を切っていた。これは社のためにと思い、自分でいろいろと対策を考えてやっていたことではあったが、僕に自分に国籍問題が生じたときに、思いがけない大きなメリットとなった。

僕は住友へは我が家から白バスに乗り、ラートプラソン（当時そごうデパートがあった）で降りてプラトゥーナームからシーロム間をクローン沿いに走っていた電車に乗り換え、社の真ん前で電車を降りて出社していた。

僕は夜どんなに遅くても毎朝一番乗りで出社していた優等生であったが、給料は一向に上がらず、１年余り勤めてやっと１８００バーツになったところだった。

住友は規模を拡大するために、やがてシーロムからチャローンクルン通りの繁華街にある、ムアンタイ保険会社のビルに引っ越すことになった。社がキャピトル映画館と、海天楼の近くに移転したので、僕は家から白バスで真っ直ぐ通えるようになった。しかしそれから暫く経ってから、僕は夢にまで見た子供の頃から欲しいと思っていた自転車を購入し、バンコク中をスイスイ走りまわるようになった。

社が移転する時点で、人事異動が行われ、西田さんと森田さんが任期を終え、順次帰国した。入れ代わりに電気担当の酒井益輝さんと、若い松井理一郎さんが駐在し、新事務所に移転してから間もなく温和な判断力の鋭い井上支店長が赴任し、バンコク支店の総支配を握ることになった。

この他にも、住友金属の鉱山関係の人たちが短期間の駐在で滞在するようになり、北部のターク県のメーソートの山奥で本格的に鉱石のボーリングをやりだした。僕もメーソートのボーリング現場へ数万バーツの給料や経費を懐に隠し、自転車で石ころだらけの凸凹した山道を走ったことがあるが、この現場にいる連中を別にし、現地スタッフの人事も急速に膨れ上がった。新人のセールス担当のカンピンさんをはじめ、サーさん、センさん、タイピスト兼会計のリーエンさん、秘書役のサゴップさん、及びドライバーのフンさんとユンさんが増員され、社内は急に大所帯となり、賑やかな雰囲気になった。スタッフが増えたので仕事の分担が割り当てられた。僕自身は、酒井さんの右腕となり、仕事の面ではだいぶ楽になった。

しかし僕の給料は後から入社した同僚たちと比較すると、最低の部類にぞくしていたので、僕は当って砕けろ式に、酒井さんに「日本の正社員並みの給料にして欲しい」と、頼んでことがあった。だが、それはどんなに逆立ちしても無理な願いだった。

僕は住友に勤めていても、新興産業に勤めていた頃から続けていた日本語の家庭教師は、まだ辞めずに続けていたので、金銭面の心配はなかった。お金に多少の余裕ができると、不思議なことに、僕の周囲を取り巻いていた人から借金の申し込みが次々に舞い込んでくるようになった。僕はお金を貸したら最後なかなか戻ってこないか、ゼロになるのを百も承知でみんなに快く貸していた。実際に困り果てていた人には、本人に与える気持ちで渡し、一度も催促したこともなかった。しかしその反面自分の実力で買えそうな物は、何でも手に入れるようにしていた。

僕が自分の将来を考え、まずは自分が住む住居を確保しておかなければと思い、土地を買うことにした。たまたまサンさんの友達だったパーンおじさんがプラカノーンの橋の先にまだ田圃になっていた土地を売っていたので、その土地を分けて貰うことにした。僕は先輩に当たるサンさんと、城村さんと３人で、一人当たり１００タランワー（約１２１坪）の土地を２万９２５０バーツを、月々５００バーツの月賦で買うことにし、１９５８（昭和３３）年１月３１日、土地の契約書に署名し、一応仮地主となった。まず、自分が泳ぐために、細長い池だけを掘り、後はお金を貯めて小さな家を建てる計画を立てていた。しかし、やっと自分のものにした僕の土地は、城村さんの仕業によって、夢とともに消え去ってしまったのである。これも自分の純真すぎる無知さがもたらした人生学だと思い、別に気にもしな

かった。

僕は無学だった自分の教養を高めるために新興産業にいた頃から『アンネの日記』、『二十四の瞳』などの単行本を日本からどんどん取り寄せて読んでいた。しかし住友に入社してからは、今まで手が出なかった当時発刊されていた旧漢字体の教養全集、日本文学全集、世界文学全集を全巻、セットで全部取り寄せた。僕は一時、分厚い本に行儀よく並んでいる活字の虜になり、物語の主人公になった気持ちで本を貪り読んだ。時間の経つのも知らずに本を読んでいると、自然と胸にジワジワと染み込んでくる人生の悲喜劇に涙を誘われ、感動した。

僕が社交ダンスを習いだしたのも土地を買った頃からだった。毎週、日曜日の午後から夕方頃まで、ラーチャダムヌーン通りの憲法記念塔の近くにあったビルの三階で社交ダンスの練習を受けていた。練習所には美人の先生も含め、男女４人の先生が交代で指導に当っていた。僕は何故か美人の先生から気に入られ、特別に手取り足取りで、胸まで体にぴったりくっつけられ、ふくよかな乳房にぐいぐい押されて特訓して貰ったので、瞬く間に上達し、２ヶ月で大体のステップを覚えてしまった。

一人で踊れるようになった僕は、それ以来ダンス教室の先生や、住友の同僚と、あっちこっちのナイトクラブへ遠征し、ダンスホールで踊るようになった。僕は一人で行くこともあったが、僕は知らぬ間に踊りの虜になっていた。モイラ・シャラーが演じた「赤い靴」のバレー映画ではないが、僕は何故だか知らないが、踊りだすと、足が止らなくなり、音楽のリズムに乗ってタッタッタッタッとステップを踏み、一晩中踊り狂っていた。僕と踊るしなやかな優しいか弱いホステスはいつもフラフラになってしまうので、友人のパートナーまで借りて、午前１時、２時頃まで踊り明かしていた。

僕の好きなメロディーは、フワリ、フワリと蝶々みたいに大きく揺れ動くワルツや、テンポの速いクイックワルツやタンゴ、それに弾力に富んだルンバ、サンバ、そして、優美に踊るアラビア調のボレロなどだった。

踊りを覚え、遊びを覚えた僕は、いつの間にか夜のプレイボーイに変貌していた。暗闇が訪れ、明りが灯る頃になると、心が浮き浮きしだし、じっとしていられなくなるのだった。いつも悪友を誘い、その辺の屋台でおかずをつっつきながら、ビールやウイスキーをガフガフ飲み、胃袋にアルコールを注ぎ込み、体がポカポカと火照った頃合を見計り、夜の害虫みたいに羽ばたき、小さな色とりどりの豆電球が点滅している明りを求め、おんぼろタクシーでダンスホール目指して駆けつけていた。僕が主に行っていた場所は、シャンペン（居酒屋のまり子さんがいた）、ムーランルージュ、チェンマイ、トロピカナ、シャニーシャトー、キングなどだった。勿論、他のバーやナイトクラブにも足を伸ばしていた。

僕は何処のバーへ行っても、自分の好きなホステスを決めていた。従って、その娘に先客があったりした場合は、ただチビリ、チビリとブランデーやウイキーを舐め、バンドから流れてくるメディーに耳を傾け、同僚が女を抱き締めてスローでチークダンスをやっている姿を眺めているだけだった。

一般にバーが終わるのは午前１時頃だったが、場所によっては、特別のコネで午前４時頃までやっている所もあった。いつもバーが引けてからプラトゥナーム周辺のお粥屋に飛び込み、熱いお粥をお腹に流し込んでいた。

但し、性的に女が欲しくなったりしたときは、バーから出るときに気のあった相棒のホステスを一緒に連れ出し、その辺の連れ込み宿か、彼女の宿泊先にしけこみ、彼女の柔らかい肌をギュウッと抱き締め、ヘッドをギシギシ軋ませてセックスに熱中し、堕落した生活に浸っていた。

僕はバーへ行かない日でも、よく同僚や同窓生の盛男君やミッギーとも飲み歩いていた。その頃の僕は一人でビールを１０本ぐらい平気で空けていたし、ウイスキーもストレートで飲んでいた。だが、一度も酔ったことはなかった。時々飲んべえの同僚が４、５人で何とかして僕を酔わせようとしてコップを傾けて挑戦してくることもあった。だが、いつも酔いつぶれ、意識不明になりってしまうのは、僕に挑戦を試みた同僚だった。中でもソムポップさんが一番強かったが、それでも彼もグデングデンに酔って仕舞うことがあった。僕はそのたびに彼をタクシーでセンルイ・ソーイ１の家まで送ってゆき、寝静まっている家族を叩き起こして、二階の彼の部屋まで背負い、ベッドにドスーンと放り込み、「おい、ソムポップゆっくり休みなよ」と、声を掛けて引き揚げていた。

人間の友情は何処どう強く結ばれるかわからないのだが、それは、或る日のことだった。したたかに酔ったソムポップさんが、酒の勢いで社の不満をぶちまけ、洋服箪笥の中から署名入りの正式のバイヤーとの契約書や、インボイスがぎっしり詰まっている３冊の社のファイルを引き出してきた。その中にはアンダーバリュウで信用状を開いた書類も入っていた。彼は「この書類を税務局に提出すれば、住友は脱税違反で引っかかるんだ」と、息巻いていた。彼は住友に入社した頃から大事な書類を内密に引き抜いてしまってあったわけだが、これは確かに大事な証拠物件になる代物だった。

僕は曲がりなりにも住友の一社員だったので、これは大変なことになる、と思い、彼を宥めすかし、説得し、大事に至らずに済みホッとしたことがある。僕はソムポップさんとの約束を守り、この件については社内の上司を含め、誰にも知らせなかった。日本の企業には、各社とも社外秘と記した書類などがあるが気をつけなければならないことである。

住友に雇われていた現地スタッフは全員給料制度で月給以外には年に一度一ヶ月分のボーナスが出るだけで、オーバータイムもコンミッションも支給されなかった。従って、勤務時間以外に何かアルバイトでもしない限り、特別収入はありえなかった。しかし、同僚は住友の社名を旨く利用して取引先からリベートを貰っていた。住友で扱っていた商品には紙、セロハン紙、肥料などコーター製の商品や、日本のメーカーと代理店契約を結んだ電気製品などもあったので、現地のバイヤーは他社から注文できない商品が結構あった。そこに目を付けたお得意先回りをしていた同僚は、各々がバイヤーから適当にコンミッションを取り、オーダーを貰っていたので、みんなは見る見るうちに自分の家や、会社を別個に築き上げ、新車を乗り回し、商売をやりだした。

僕はＮＥＣのトランジスターラジオやテレビ、及び部品、それに扇風機や鋼管関係の製品も売り込んでいた。同僚は「いいチャンスだから、俺たちみたいに相手からリベートを貰うようにすればいいのに」と、説得されたが、僕としては正規な給料を貰っている限り、良心が咎めてそんなことはできなかった。僕は同僚から『お前は阿呆だなあ』と一笑されたが、僕はうだつが上がらない万年貧乏な平社員で満足していた。

社では１９６３（昭和３８）年度の夏頃からローカルスタッフを入社順に一週間の予定で、本社へ研修に出すことになった。まず、古参のソムポップさんが一番乗りで出掛けた。次が僕の番だったが、僕はまだ無国籍者だったために、悲しいかな日本行きは残念ながら涙を飲んで観念するしかなかった。最終的に僕はオミットされ、カンピンさん、サーさん、センさんの順になってしまった。僕は肝心な国籍がないために、遂に屑篭に捨てられた屑人間にされ、哀れな思いで、日本から戻ってきた同僚の嬉しそうな表情を、寂しい気持ちで見つめるしかなかった。

夢にまで見た待望の日本、僕にとっては第二の故郷である日本、その日本へ、社の好意で、ただで行かせて貰えるのに、行かれない辛い身。皮肉にも自分の悪戯な運命線に遮られた僕の運命は、タイミング的に、丁度その頃からだったが、僕の家庭内の問題や日本帝国に国籍を破棄された国籍問題がガタガタと地響きを立てて揺れ動き、最悪の事態に直面していた。

今まで酒に浸り、ただ目茶目茶に踊り狂い、好きな女を抱き締め、夜明けまでセッセとセックスに熱中し、アルバイトもそっちのけで遊び歩いていた僕は、もうそれどころの騒ぎではなかった。自分に秘められた複雑な人生に悩み、悲観に明け暮れする日々を送り、生きる希望すらもなく、自殺まで考える心境に追い詰められていた。

■実母を探し求めて

僕は何者なんだ、僕はペンディングになっている自分の国籍問題で苦しめられ、悩むと同時に自分の両親のことも小さいときから頭痛の種となっていた。両親と国籍問題で板挟みにされていた僕の苦しみは、将来の自分の生死に関わる問題だった。眼に見えない鋭利な鞭でビシッビシッと打ちひしがれ、その言いしれぬ苦痛に身悶え耐えなければならなかった。

僕が僕自身に、僕は一体何者であろうか、僕のお父さんは誰なのか、そして、お母さんは誰なのか、と疑い、考えるようになったのは、僕がソンクラーの美しい避暑地で無邪気に遊び暮らしていた5歳の頃だった。何故、そのような考えが脳裏に浮かび上がったのか、それは僕にもわからない。自分でも不思議でならないのだが、僕の体内には何か異常なものを感じ取る特殊な予知間があったのかもしれない。

僕は小さいときから歌が好きだった。ただし、まともに歌える歌はひとつもなかった。ただ思い出すままに自分勝手に単語を並べて口から出任せに節を付け、声を震わせて歌っていた。だが、歌っているうちに心の底に潜んでいる悲哀に満ちた感情が胸に込み上げ、あーあ、自分は独りぼっちなのだ、可哀想な孤児なのだ、と空想し、感傷的になり、最後に悲しくなってシクシク泣きじゃくり、幕となるのが常だった。

これがソンクラーにいた頃の僕だった。僕が両親に対して持っていた不信感が益々酷くなったのは、日本人として義務教育を受けるためにメナムホテルに預けられ、バンコク日本人学校に入学してからだった。

バンコク在住の日本人社会は非常に狭く、大人の世間話は大体が他人をけなす噂話に絞られていた。当然のことながら、僕の両親の話や僕自身の「正夫は貰い子らしい」といった話題も偶然だったが、僕

の耳にも入った。そのさも楽しそうにペラペラ喋っていた「貰い子らしい」と言った言葉が、僕の胸にグサリと突き刺さった。それは僕が8歳のときだったが、何も知らなかった僕にとっては大きなショックだった。

僕としては自分自身が何者であるのかわからなかっただけに、実に辛い立場に立たされた。初めの頃は、自分の真相を知りたくて「僕は誰の子なのか、本当のことを教えて」と、親に問い質してみたが、真実については何一つ教えてくれなかった。父も母もそうであったが、「正夫は自分たちの子である」と、言い張っていた。しかし世間では、「正夫はタイ人の巡査の子である」と言う説と、「親父の隠し子だ」と言った噂が流れていた。そのような噂はつんぼでない限り当然僕の耳にも入ってきた。全ては母の口から流されていたことではあったが、噂が噂を呼び、最後には「正夫は親の面倒も見ない親不孝者だ」と言ったことまでが、実しやかに言いふられ、僕の悪評は日増しに酷くなるばかりだった。

それは日本人社会だけではなく、タイ人の仲間にまで輪が広がり、大きな波乱を呼んだ。一般に大人の社会では、年寄りや親の言うことは真実として罷り通る世の中であり、それを誰もが信じるものである。世間から冷たい視線で軽視されていた僕は悲しいかな自分の信頼すべき親すらも信頼できない情けない身に落ちてしまった。

社会からは嫌われ、信用できない人間にされ、独りぼっちにされた僕は無言のまま沈黙を守り、自然を求め、静かなお寺に身を隠し、可哀想な立場に追い詰められた自分自身を慰めた。自分のことは自分で解決するしかない。そのためにどんなに苦しくても徹底的に真実を追究し、自分自身の証を立てるしかない。これが僕の判断だった。

現にはっきりしていることは、まず、今いる母はどう間違っても自分の本当の母ではない。義理の母、いわゆる育ての母である。それなら、僕を産んだ本当の母は何処にいるのであろうか。まだ生きているのであろうか。それとも、もうこの世にはいないのであろうか。一体どんな顔をしているのであろうか。今いる日本人の父は、どうも本当の父だと思うが、これも徹底的に調べてみない限り何とも言えないし確信もない。しかし暗い気持ちに落ち込みながらもどうしたらその真相の糸口を手繰り寄せられるであろうかと、頭の中で様々な考えを巡らせていた。

僕が本気になって自分の本当の親であるお父さん、お母さんを探し出そうと、決心したのは、僕が収容所から釈放され、自由の身となりバンコクに移住して暫く経ってからだった。それは、丁度醤油の商売を始めた頃からだった。

或る日、牧優君のお父さんが醤油を2本、付けで持って行ったので、それから二週間後ぐらいに牧さんの家へ足を運び、数回に亘ってお金の催促に行った。だが行くたびに「もうちょっと待ってくれ」と言われ、なかなかお金を払ってくれなかったので、むかとした僕が「おじさん、いつになったら醤油代を払ってくれるんだっ」と、怒鳴ってしまった。それがきっかけで、牧さんのおじさんと怒鳴り合いの口論になってしまった。

だが最後に「なんだ、正夫は貰い子の癖に何を威張ってるんだっ、生意気だ」と怒鳴り返された。その「貰い子」の一言は、凶器のように僕の頭にガーンと打ち下ろされた。

今まで張り詰めていた僕の気持ちはガタガタと崩れ、無意識のまま牧さんの家を飛び出し、泣きながら我が家に駆け込んだ。

僕は家に着くなり、即座に母に真剣な顔付きで、母の顔を睨んだまま「お母さん、僕は一体誰の貰い子なの、本当のことを教えて」と、語気荒く問い質した。しかし母から跳ね返ってくる返事はいつも決まった文句「正夫は私の子だよ」だった。僕がどんなに息巻いて「嘘だっ、お母さんは僕のことを巡査の子だ、と言ってるではないか」と、反発しても母は冷静を装い、それ以上のことは何一つ教えてくれなかった。僕に真実を教えてくれたって良いはずなのに何故僕をこんなに苦しめなければならないんだ、と反発したがどうにもならなかった。

その日は自分でもどうしたらいいのかわからず、家を飛び出し、心痛したやるせない気持ちでトボトボ夢遊病者のように歩き回り、いつの間にかシーロム通りのワッ・ケーク（インド寺）の門を潜っていた。侘しい孤独感に見舞われ、人生に嫌気がさした僕は線香の香りが立ち込めていた狭い境内の柱にぐったりと凭れ掛かった。僕はもう何も考える余力もなかった。ただ涙を溜めた虚ろな瞳で可愛い雛鳥と戯れ、幸せそうに囁き合っている親子鳩の愛の営みを羨ましい気持ちでいつまでもじっと見つめていた。

■実母の面影を探し求めて

僕は母を探すにあたり、まず自分の顔の輪郭やキラキラ輝いている大きな澄んだ瞳、黒い太い眉毛、長い睫、小さな鼻と唇、それに頬などをじっくり穴のあくほど見つめ、自分の実母の面影を描き、母を探すことにした。

しかし、探すとしても何の伝もなかった。果たしてプーケッにいるものなのか、あるいは案外身近なバンコクにいるのかもしれないなどと、勝手に想像し、バスに乗ったりしたときや、映画を観に行ったりしたときなどに、万が一母が掴まればと淡い望みを抱き、４０歳前後の女性に最大の関心を寄せた。

母らしき人物が現れたりしたときは胸をドキドキさせ、見知らぬ女性に単刀直入に「失礼ですが、プーケッにいた瀬戸ドクターを知っていますか」と、聞いたりした。だが、いくら努力しても疲労に終わり、何の伝も得られなかった。

僕は何はともあれ、と、醤油事件で口論した小柄な牧重信さんの自宅へ赴き、醤油の件について頭を下げて謝り「僕の身について知っていることを是非教えて欲しい」と頼んだ。が、彼は僕を気の毒そうな表情で見つめ、「正夫ちゃん、これは悪いけど一身上で大事なことだから自分の両親に聞いてください」と、断られてしまった。

僕はそれ以来両親と関係があった人たちには手当たり次第に当ってみた。だが何故だか、みんなの口は何かのショックで膠着したかのように堅く閉ざされたままだった。僕は自分自身が真実を知りたいがために、必死で母の消息を尋ね歩いていた矢先だった。

運よく、僕が世話になっていた城村さんが１３年ぶりに一時帰国することになった。それは１９５０（昭和２５）年、僕が１９歳のときだった。城村さんは山口県の須佐にいた僕の父にも会いに行ってくれることになった。

僕は城村さんに「僕の身の上話しも聞いてくれるように」と頼み、彼が帰ってくるのを、首を長くして待ち侘びた。城村さんは、父とスズおばさん（父の本妻）にも会い、２人の写真まで撮って戻ってきた。しかし、僕の期待に反し、僕のことについては「もう過去のことだから」と言って、何も教えてくれなかった。僕がいくらお願いだからと、哀願しても、それは無理な注文だった。

僕は自分が信頼していた城村さんからすらも何一つ教えて貰えなかったので、がっかりすると同時に死にたいほど悲しかった。大人の社会とは、他人のことは目茶目茶にけなすくせに知っていることがあっても固い殻に嵌っていてほとんど何も明かしてくれない社会だ。嘘つきで何とずるい勝手な社会なのであろうか。と、腹も立ったが、いかんともせん、どうにもならないことだった。

大人の嫌らしい暗黒の社会からシャットアウトされた僕は、実母の消息に関してはまだ何一つ吉報が掴めず全然埒があかないまま大きな壁にぶつかってしまった。僕は行き交う群衆の中の何処かに幻の母の姿があるのではないかと、侘しい気持ちにかられ「お母さん、お母さん、お母さんは一体何処にいるの、僕寂しいんだ、お母さんに逢いたいんだー、お母さんきっと生きていてね」と、心の中で叫び、いつ見付かるとも知れぬ母の面影を探し求め、悲惨な気持ちでトボトボと彷徨い歩いた。

僕は母が未だ生きているものなのか、あるいは、もう死んでしまったのか、何もわからないまま、ずっと母を尋ね歩いていた。父には再三に亘り、母のことについて問い質していたが、何故か僕にはなかなか真実を教えてくれなかった。その父から何を思ったのか、或る日、ペラペラの半紙に認めた僕の秘密を明かした手紙が舞い込んだ。

その１９５９(昭和３４)年９月５日付けの文面を要約すると、「正夫には誰にも言えない秘密がある。正夫の母はプーケッにいた華僑系のタイ人で、陳メーセンと言う女で、２５歳のときに正夫を生んだ。正夫が生まれたのは昭和６年５月２３日午後１時半であった。しかし、メーセンは正夫を生み暫く経ってから死んだ……」後は、僕の国籍のことについて天田さんと云々、と、認めてあった。

アーァ、母は本当に死んだのであろうか。僕がこんなに切ない思いで探しているのに……、バーンブワトーン・キャンプを出てから、かれこれ１５年の間の歳月を掛けて必死になって探しているのに、未だに一度も顔を見たこともない僕が捜し求めている母は、父の文面によると、もう既にあの世の人となっている。

母が生きているとすれば、未だ５３歳ぐらいなのに、そんなに早く早死んだのであろうか。とても考えられない、死ぬはずがない。もしかしたら父は嘘ついているかもしれない。母は健在で何処かにいるに違いないと、稲妻のように脳裏を掠めたものがあった。

■涙の対面

父は「僕の母はもう死んだ」と言ってきた。だが僕の脳裏に閃いた予知感が「父は嘘ついているのだ。母は未だ生きている」と、呼びかけた。

僕はようし、徹底的に探し出してやる。きっとプーケッにいるに違いない、と決心し、母を探し続けることにした。

母の探索と同時に未だペンディングになっている自分の国籍問題でも深刻な問題を抱えていた。僕の運命に授けられた全ての悪運が、このときとばかりにと、怒涛の如く押し寄せ、この数年間は精神的にも滅入り経済的にも苦しい立場に追い詰められていた時期でもあった。

僕は母恋しさ、母に逢いたさ、母の顔見たさに、母の面影を描き、恥じも外聞もなく昔父と友人関係があったタイ人や、華僑の人たちにも「僕の母を知っていますか」と、まるで神社へお参りでもするように、お百度を踏んで聞いて回った。が、実際の真相を知っている人は誰もいなかった。むしろ意外な表情で「へーえ、正夫は隠し子だったんですか」と、びっくりしていた人たちの方が多かった。

僕が実母を探すようになってからは、真実を教えてくれない義理の母に対する不満が重なり、気が荒れがちになっていた。僕はいつも荒っぽい口調で「お母さんは何でも知っているくせに、何故僕のお母さんのことを教えてくれないんだっ。他の人には何でもいらんこと言う癖に」と、不満を打ち撒き、身近にある物は何でも手当たり次第に投げ飛ばし、ガチャーン、ガチャーン、ガチャガチャバッシーンと、ぶち壊していた。お陰で親子2人しかいない平和である筈の家庭内は蜂の巣を突っ突き回した様に喧嘩の旋風が吹きまくり、いざこざが絶えなかった。

母は僕が母を捨てて逃げ出す、と思っていたらしく、僕がどんなに「僕はそんなことは絶対にしないから、僕は真実を追究しているだけなのだから、例え本当の自分の母が見付かったとしても、お母さんを捨てるようなことはしないから」と、口を酸っぱくして言い聞かせても、僕の気持ちを理解してくれるどころか、返って悪影響を与え、泣き叫びヒステリックになるばかりだった。挙げ句の果てには、母は日本人会や僕の友人に泣きつき、僕の悪行を披露し、「僕を何とか説得して欲しい」と、訴え出す始末で、僕は親不孝者とされた。

僕の親しい友人、藤島健君の弟に当る山本健治君もその中の一人だった。或る日、それは確か土曜日の夕方だったと記憶しているが、彼に誘われて、彼が運転する中古車に乗せて貰った。彼は困った表情で「実はお母さんに、君のことを話してくれと、頼まれたのだけど、何処へ行きたい」と、口を濁した。僕は気軽に「パークナームへ行こう」と言い、二人で自転車で行ったことがある「パークナームの県庁の前の川岸に車を停めた。僕は河口に向かって洋々と流れゆくチャウプラヤー川の濁流を眺め、涼しい風に打たれながら、静かに僕の心境を語った。

日本人会にいた、僕がメナムホテルにいた頃から知っていた親しかった小谷亀太郎さんもそうだった。小谷さんは心配してわざわざ我が家まで訪れ、「僕は小さいときからの正夫君を知っているが、絶対にそんな子ではないと思うし、今まで世話になったお母さんを捨てたりはしないと思うけれども……」と前置きし、「お母さんのことも大事にしなければならないのだから」と結び、約1時間に亘り説教して帰って行った。

この他にも、今まで世話になっていた城村照雄さんや、椿賢志さんにも迷惑を掛けてしまった。みんなには済まぬことをしたと思うが、僕は純真な気持ちで母を探していただけで、何か野心があったわけではない。これは家庭内の問題であり、僕個人に課せられた問題であって外部の人には関係ない話なのだ。が、義理の母のお陰で狭いバンコクの邦人社会では僕の悪評で、てんやわんやの大騒ぎになってい

た。

僕が親不幸者にされていた矢先、僕は１９６０（昭和３５）年１２月３日と４日付けのサーンセーリー紙の広告欄に「プーケッにいた瀬戸ドクターの家族のことを知っている人がいたらバンコクの中央郵便局のボックス４９０番に連絡してください。ドクター瀬戸の息子」といった、内容の広告を掲載した。

さて、果たして何か伝が掴めるか、と、最後の期待を掛け、首を長くして待っていた僕の元に、南の孤島プーケッから吉報を包んだペンシー・プラノーンさんから一通の手紙が舞い込んだ。

彼女の手紙の内容は、「当時プーケッにいた瀬戸ドクターのことを知っている瀬戸家と親しかった人がいる。本人はもう６５歳ぐらいになるが、この１２月２６日にバンコクに上京する予定である。何でも快く教えてくれると思いますので、いつでも連絡してください」と、記してあった。手紙にはバンコクに訪れる人の名前も性別も何も明記していなかったが、僕はこれでやっと母の糸口が掴める、真実が掴める、と確信を持った。

僕が日焼けしたずっしりした体格の持ち主、メーキーおばさんと初めて対面したのは暮れも押し迫った１２月末だった。メーキーおばさんは僕の顔を見るなり「正夫大きくなったね」と、涙を流して喜んでいた。

僕がメーキーおばさんに逢った場所は、彼女の友人の家だと称するラーチャダムヌーン通りのラッタナコーシン・ホテル（現Royal Hotel）の裏に面した長屋だった。僕はクローン（運河）が流れている縁先の長椅子に座り、僕の家族のことを、ポツリ、ポツリと語るメーキーおばさんの話を、一言も逃すまいと聴き入った。

メーキーおばさんの話によると、僕を育てた母のことを「メーサン」という愛称で呼び、僕の家族とは賭博仲間で毎日のように博打ばかりしていた。僕を産んだ母は「シヤンと言い、病身ではあるが今もプーケッで元気で暮らしている」と、今まで誰も教えてくれなかった闇に包まれていた僕の身辺のことを明かしてくれた。

僕は直ぐにでもプーケッにすっ飛びたい気持ちに駆られた。が、僕には大きな見えない鎖で繋がれた月給取り、会社からちゃんと休暇の許可を取ってからでないと、身動きできない辛い哀れな身だった。

僕は取りあえず真相を知るためにメーキーおばさんを我が家に案内し、母と合わせた。二人にとって２７年ぶりの再会だった。お互いに手を取り合って喜び、昔話に花を咲かせていた。が、母自身も僕の実母であるシヤンのことが気に掛かっていたらしく、シヤンの安否を聞いていた。母は複雑な気持ちで逢ったのではないかと思うが、僕は黙って２人の会話を聞いていた。

僕はメーキーおばさんを送り出し、母と２人きりになってから、おもむろに「僕の本当のお母さんはシヤンでしょう。僕はそのうちにプーケッに会いに行くからね。でも必ず帰ってくるから心配しないで」と、はっきりと宣言した。流石に母はもう何も言わなかった。観念したらしくただ無言で頷いただけだった。僕は母を苛める気も何もない。ただ母は可哀想だと、思った。

僕は早く実母に逢いたい、と思っていたが、仕事に追われていてなかなかプーケッに行けるチャンスが掴めなかった。

だが、坂井さんの好意で「井上支店長がバンコクに赴任する前に行った方がいいから」と、一週間の休暇を貰い、フワラムポーン駅から南タイ行きの夜行列車に乗ったのは、年も明けた2月17日だった。

母の面影を描き、「一晩中まんじりともせず列車に揺られ、翌朝トゥンソン駅で下車し、駅前に停まっていたプーケッ行きのおんぼろバスに乗り換えた。バスは遠くに山の峰が幾重にも重なって見える石ころだらけの悪路を、トコトコと走り出した。しかし、バスのタイヤが古かったせいなのか、途中でタイヤが3回もパンクし、プーケッの小さな田舎町に辿り着いたのは夕方の4時頃だった。

町のホテルに落ち着き、まず、手紙で僕の家族のことを知らせてくれたペンシーさんに会いに行った。初めて会ったペンシーさんは市内で町医者を開業している女医だった。バンコクで会ったメーキーおばさんとも其処で会い、明日の朝母に会いに行くことになった。

次の朝、早朝に目覚めた僕はホテルの近くのコーヒー屋でのんびりした町並みを眺め、プーケッ独特のブラックコーヒーを飲み干した。

僕はホテルに迎えに来てくれたメーキーおばさんと一緒に母に逢いに行った。プーケッ通りに面した消防署の真ん前のみすぼらしい木造建ての長屋が母の家だった。家の前には母の親戚関係や友人が20人ほど集まっていた。

その大勢の顔の中に、一度も見たこともない母の顔が、其処にあった。じっと僕を見つめていた母の顔が。あーぁ、この人こそ本当に僕のお母さんなのだ。

ずっと探し求めていた母の面影が、今は現実として僕の目の前で目を見張り、僕を凝視している。あーぁ、お母さん、僕はとうとう待望のお母さんを見つけ出したのだ。お母さんに会えたのだ。生まれてこのかた恋い焦がれていたお母さんにやっと会えたのだ。30年ぶりに会えたのだ。

僕は母の顔を見た途端にただ一言「メー（お母さん）」と言ったきり、後は言葉にならなかった。ただ涙が止めどなくポロポロと溢れるばかりだった。母もただ一言「正夫」と呟いたまま、涙を一杯ためて啜り泣きだした。周囲に集まっていた人たちも目頭を押さえシクシク泣き出した。

■複雑な運命線

人間はどのような境遇に生まれたとしても、この世に生れ落ちた時点から自分の手相に刻み込まれた運命線に沿って辿らなければならない逆らえぬ果かない運命を背負わされている。その定められた運命線は前途にどのような障害物があるのかは自分で喘ぎながら辿ってみて初めてわかるものである。

齢とともに様々な体験を積み重ね、人生の悲喜劇を心の隅々まで味わい、最後に死へと向かって進み、一生を終えるものである。

僕の場合は妾の間にできた隠し子だったために、生まれたその日から平穏無事だった3家族の家庭内に悪運を告げる旋風を巻き起こす火種となった。何も知らない罪もない僕が、母親である陳のお腹を痛め、歓迎されぬこの世に飛び出したばっかりに親兄弟親戚一同が大騒ぎとなったのである。

僕は、今日は瀬戸家、明日は李家（幼少の頃の育ての父親）明後日は陳家（僕の実母宅）と盥回しにされ、最後に瀬戸家に引き取られ、華僑の排日運動のお陰でプーケッから逃げ出し、行方不明不明とな

ったのである。
家庭の柱である父親が自分の好きな女を囲い、隠れ家でいちゃつき、勝手に愛し合って楽しんだ挙げ句の果てに皮肉にも予期しなかった邪魔者の僕が温かい母の母体に宿ってしまったのだ。それがそもそも家庭を破壊する悲劇を生む原因となったのだが、たった僕一人のために温かかった筈の家庭は台無しにされ、みんなの心に暗い陰りを植えつけたのだつた。
僕は自分の真相を追究するために必死になって母を探し歩いた。やっと念願が叶い運よく３０年ぶりに母に巡り合うチャンスに恵まれた。母を探し回っていた間は、いつも母は一体どんな顔をしているのであろうか、と思っていた。
しかし、家の前で大勢の女性の中に混じって僕を迎えてくれた母が、母だ、と一目でわかった。一度も見たことがない母がまるで電波探知機のように一瞬直感で母だとわかったのが、何故なのか実に不思議でならない。生まれて初めて見る痩せた病身の母は気性が激しそうな性格で、どう見てもマレー系の華僑であり、やはり僕に似た顔をしていた。
母はこの３０年間様々な辛苦に耐えてきたらしく苦労した皺の跡が痛々そうに過去を物語っていた。
玄関の入り口の土間の隅に埃を被った疲れた蚊帳を垂れ掛けた小さなベッドがあった。母はそこで寝起きをし、居間兼寝床にし、日々の日常生活はほとんどそのベッドの上で過ごしていたようである。
母の事情も何も知らなかった僕が、母がこの地球上の何処かにいるような気がして、母を探し出そう、と、思いついたのが、１５歳ぐらいの頃からだった。しかし、母は僕がプーケッからいなくなった３歳の頃から僕の安否を気遣い、僕を探していたのだった。
そんなことは露知らず、ソンクラーの自然と暢気に戯れ、バンコクで育った僕は母のことを思えば、まだ幸せな方だったのだ。
僕が瀬戸家に引き取られ、プーケッで日本人が中国人からボイコットされ、困っていたときでも、母は裏口からこっそりとコンデンスミルクや食べ物の差し入れをし、僕の顔を一目見ては帰っていたのだった。
その僕が或る日突然プーケッから消えてしまったのだ。その日から、母はどんな思いで僕を探していたのであろうか、と思うと、母がいじらしく可哀想でならなかった。
母はあの日本の凄まじい戦争で僕はもうとっくの昔に死んでしまったのではないかと思い、もう僕とは二度と会えないかもしれない、と、諦めていたのだった。が、神の悪戯で僕と再会できた喜びを潤んだ眼差しで表していた。
母は、僕と出会う前に、家の前に通り掛かった占い師から、何も頼まないのに、いきなり「貴方には近々に奇跡が起こります。それは長年別れていた人と出合うでしょう」と言われたが、まさか僕に会えるとは夢にも思っていなかったのだった。
母は僕を出産して以来大病に冒され、自分の体調を崩し、医者と薬の世話になり、今日まで生き延びてきたのだった。
母は僕と生き別れになって以来寂しさの余り、僕の代わりに養子を２人も貰い、育てた。が、僕のこ

とは常に脳裏にこびりついていたのだった。
母はタン・テントゥンさんという瘤付の大きな息子が一人いる華僑のおじさんと同棲していた。が、母がひ弱だったために、子供は恵まれなかった。二人の関係がどうであったのかは計り知れないが、僕が母の家に世話になっていた二週間の期間、義理の父に当るタン・テントゥンさんには一度も会ったことがなかった。何か事情があるらしく、母も義理の父、タンさんのことについた話は一言もなかった。
母の家はプーケッにある一般の長屋の間取りと同じ形式に造られた細長い奥行きのある家だった。地面は玄関から裏まで粘土質で固められたままだった。一番奥まった裏には雑草が生い茂り、水が溜まりじめじめしていた。町の真ん前の目抜き通りにこれだけの土地を持っている母はどうやって稼いだのか知らないが、大したものである。
母の家には、裏に若造のあんちゃん風に装った髪ポマードを一杯擦り付け、櫛で髪ばかり捌いていたおしゃれな養子と、豚の商売をしている若夫婦が一緒に住んでいた。これが現在母と一緒に暮らしている家族だった。３人とも僕に気兼ねして、上げ膳据え膳で僕の面倒を見てくれた。
母は何故か僕の父のことについて余り話したがらなかった。痺れを切らした僕が単刀直入に「僕のお父さんは誰なの」と聞くと、意外な返事が返ってきた。「正夫のお父さんは「季瑞清」という、ペナンにいた中国人よ。もう死んじゃったけど、生きていた頃はプーケッのチャータッド銀行の頭取をしていたんだよ。ピーナン（ペナン）にも家があったんだけど……、ペナンにも女がいたの、プーケッでは郵便局に勤めていたラオーと言う女性と結婚していたけど、その人が本妻なのよ。正夫には、その本妻との間にできた腹違いの姉妹や弟がいるのよ。今でもプーケッで商売しているけど、あとで連れて行ってあげるわね」と言われ、僕は唖然としてしまった。
日本の山口の須佐にいる父の手紙によると、僕の父は日本人で確か「瀬戸久雄」という名前である。しかし、今聞いた母の話だと、僕の父は中国人で「季瑞清」という名前である。はて、これだと、僕は一体誰の言うことを信じればいいのであろうか。僕には日本の血を引いた瀬戸と、中国人の血を引いた季という２人の父がいることになる。僕の体内にはどんな血が流れているのか知らないが、こんな嘘のような出鱈目な話が、人生が、何処の世界にあるのであろうか。やっとの思いで母の謎が解けたと思ったら、また難題が転がり込んできた。これでは何がなんだかさっぱりわからなくなってしまう。
僕は再三に亘り、僕の父は「ドクター瀬戸でしょう」と、念を押したが、母は首を横に振り、「違う、父は季瑞清だ」と言い張った。生みの母である男性の精子を受け入れた女性の言うことを聞くほうが正しいと思うが、果たしてそれでいいのであろうか。と、自問自答してみたが、まだはっきりした回答は得られなかった。
やっと本当の生みのお母さんを見つけたと思った途端に、また、本当の父を探し当てなければならないはめになった。今、目の前にいる一人は日本人であり、もう一人は中国人なのだ。この２人は大の仲良しで、生死を共にした親友同士だった。何処へ行くにも２人で歩き回っていた間柄だった。
中国人の父、季は、１９３８年（昭和１３）年１２月２７日、僕がソンクラーにいた７歳のときに、もうあの世へ逝ってしまったが、２人で自分の好きな女性を囲い、セックスの快楽に溺れ、精子を放出

し、その女の母体に宿ったのがこの邪魔者の僕だったのだ。

ここではっきり言えることは、女性の子宮に放出された精子は、普通はひとつの卵にしか宿らないのである。となると、僕は一体誰の子に当るのであろうか。一難去ってまた一難と、更に大きな難題が僕の身に降りかかってきた。あーぁ、何故こんなに複雑な運命を背負わされなければならないのであろうか。

プーケッのバーン・ニヤンで生まれた母は、僕を瀬戸ドクターの医療室で生んだわけだが、その時点から、僕の父は季だと言っていた。ドクターだった瀬戸も、季が父だと話を合わせていた。それに、本人に当る季も、はっきりと自分が僕の父であると、宣言していた。そのために季家（タイ語ではシータラクーン家）では大騒ぎとなり、妾の子である僕を産んだ母、陳は勘当され、李家への立ち入り禁止の惨めな目に遭う結果となった。

しかし、ここでひとつ不思議なことは、僕が生まれて直ぐ、ドクター役を務めていた瀬戸が父に当るとされる季に相談もしないで勝手に僕に「瀬戸正夫」と、命名したのである。瀬戸ドクターと同棲していた義理の母であるテルは、僕はドクターの隠し子ではないかと、不審を抱いていた。が、真相がはっきり解明しないまま何も言わずに見守っていたのだった。

父に当る季は、退院と同時に僕を自分の家へ連れて行ったのだが、瀬戸ドクターに「正夫は自分の養子にする」と言って、瀬戸家に連れ戻されている。それを産んだ母である陳が「嫌だ、正夫はあげない。私が育てる」と言って、取り返している。結果的には病身だった母、陳は僕を瀬戸家に預ける形で手放したのだった。生まれたばかりで何の罪も、事情も知らない僕は、この大人の複雑な家族制度による3軒の家を、今日は陳家、明日は季家と、まるで猿回しみたいに引きずり回され、最後に瀬戸家に引き取られていたのである。

中国人の僕の父に当る季は、ペナン島のチャイナ通りで生まれ、ペナンで育った。ペナンで結婚し、アンネと、ペンチューと言う2人の子供がいた。プーケッに来てからは、僕の義理の母に当るラオー・シータラクーンと結婚し、ペック・ルイ（死亡）、ペック・イヤム（ペナンにいる）ペック・イン、ブンホック（交通事故で死亡）ブンサム（死亡）と、5人の子宝に恵まれた。

それに、僕の実母に当る陳との間に僕が誕生したので、僕を含めて6人になるが、この他にも腹違いの兄弟、姉妹と称する人が後2人いたので、総勢8人もいたのである。

実際に僕が会ったのは、でっぷりした義理の母ラオー（メーヤイ）、義理の姉ペック・イン（ニックネーム・エウ）、それと、生ゴム工場に勤めていた義理の弟に当るブンホックだった。しかし、ブンホックは数年後に自動車事故で短い生命を閉じたのだった。

エウはタラーン通りで、プーケッ・シンという店を経営し、文部省の教科書や文房具、その他の雑貨類の商売をする傍ら、美容院を開業し、ゴム園なども経営し、手広くやっているやり手の姉だった。

僕が生まれたのは、義理の姉、エウが5歳のときだった。エウは時々ラオーや季に手を引かれて瀬戸が経営していたプーケッ薬局に訪れ、僕と遊んでいたことがあったのだった。

此処でもひとつ不思議なことがあったのだが、数年前に義理の母メーヤイが或る日お寺へお参りに行

っていると、其処のお寺の住職が「そのうちに行方不明になっている息子に再会するでしょう。そのときは「ヴィワッ・シータラクーン」と、名前を付けてあげてください」と言って、「ヴィワッ・シータラクーン」と、僕のタイ名の名前を書いた紙を、メーヤイに渡してあったのだった。

人間の運命は何処で何に巡り合い、何処でどんな奇跡に出会うか解らない。現に僕が歩まされている、いつ果てるとも知れない無限に続いている自分に定められた運命線は、ガタガタしたなんと複雑なものであろうかと思う。

■涙に泣き濡れた母

複雑な関係に置かれている陳家と季家で過去の家族のことや、自分の身の上話を聴いたりで、親戚関係の家へ挨拶回りに行ったりしているうちに、１日が瞬く間に過ぎ去ってしまった。

確かに３０年前の過去のことに過ぎないが、それでも父と旧友関係にあった人たちはもうほとんどがこの世からあの世へと去っていた。

その日の夕方は、まず今日からお世話になる陳家、母の家でご馳走して貰った。満腹し一休みしていると、季家の義理の母、メーヤイからも呼び出しが掛かり、また季家の家族一同とガヤガヤ、ワイワイ言いながらご馳走にあやかった。夕食を2回も続けてムシャムシャとたらふく食べたので、流石の僕もお腹が一杯になってしまった。

僕は季家で井戸から水を汲み上げ、冷たい水を頭からザーザー被り、アープナーム（水浴）し、さっぱりした気持ちになった。それから更にブラックコーヒーやら、プーケッ独特のお菓子をご馳走になり、みんなと雑談し、陳家の母の家へ戻ったのはもう１０時過ぎだった。

母は僕の帰りを待っていたらしく、木の扉を開けてベッドの所に横になっていた。母と暫く雑談し、「今日は疲れたでしょう、早く休みなさい」と言われた。

母は自分で僕を二階の部屋へ案内し、「今日から此処に寝てね」と、優しい声を残してトコトコと階段を降りていった。

僕は、今日一日で起こった様々な出来事を頭の中で整理したが、父のことだけがどうしても腑に落ちなかった。僕の人生は何故こんなに複雑なのであろうか、と思っているうちに、いつの間にかぐっすりと眠ってしまった。

僕が深い眠りから夢うつつに、ふと、誰かにギュッと抱き締められている、と感じ、目が覚めた。真っ暗な闇の中に僕を抱き締め、顔を摺り寄せ、顔を擦り、擦り寄せ、母がシクシク泣いていた。

母の目から滴り落ちる大粒の温かい涙が、僕の顔や胸を濡らし、ジーンと僕の胸に染み込んだ。アーァ、やっぱり母なのだ。きっと辛かったに違いない。僕を手放ししたくなかった可哀想なお母さん。

３０年間も耐え忍んでいた悲しい涙なのだ。僕も無言で母のか細い体を抱き締めた。年老いた痩せこけた哀れな母に頬ずりをし、心の底から溢れる涙とともに３０年間も探し続けた恋焦がれていた母の愛を、身体を、しっかり抱き締めた。

母は別れ際に、僕に女性用の小さな真珠の指輪を渡し、「大事にしまっておいてね」と、呟き、僕の手

を握り締めた。

■僕の故郷プーケッの孤島

一週間の休暇を貰って母に会いに来た僕は、序でにプーケッの市役所や、区役所、それに裁判所にも赴き、僕の出生届けの件で書類を提出し、奔走して歩いた。直ぐに回答が得られないのはわかっていたが、僕は自分でできる範囲内で手を打っておいた。

ついでに県知事にも会い、当時の知事に３０年前の事情を説明し、現に僕を産んだ母もいることだし、何とかしてプーケッで生まれたことを、証明した書類を発給して貰いたい旨を依頼した。

何処の役所へ行っても、「これは難しい問題だ」と、難色を示されたが、そんなことは初めから百もし承知だったので、僕はたじろがなかった。

僕はどうしても日本国籍が欲しい、日本人であると認められたいのだ。出生証明書がないと、僕は大変なことになるのだ。やるべきことをやって駄目なら諦めるしかない。

全てが一段落してからだった。僕は季家の親戚から自転車を借りて一人でプーケッ中を端から端まで走り回った。何の目的もなくただペダルを踏み、今日はラワイビーチ、明日はカタビーチといった具合に写真を撮りながら1日走り回っていた。

自転車で走り回っていると、あっちこっちから「まさおー」と、呼び止められた。「瀬戸ドクターに世話になった。さあ、どうぞ、一休みしてから行きなさい」と言われたり、「陳の息子か、元気だったか」と、懐かしがられたりした。僕の噂は、僕がプーケッに到着したその日から電波のように、既にプーケッ中のみんなに電波のような速さで伝わっていたのだった。

３９個の小島に取り囲まれた南北に４８・７キロメーターに細長く伸びたプーケッ島はアンダマン海の荒波に清められた美しい自然に恵まれた素晴らしい島だった。生まれて初めて見る我が故郷、プーケッ島は実に美しい、僕はこんなに綺麗な所で生まれたのだ。しかも、鳥や野生の動物も多く、山の幸、海の幸などの資源にも恵まれた豊かな島である。島全体がゴム園に覆われ、海底や山間の至る所に錫が密生していた。この金になる錫を目当てに４００年もの昔に、インド商人が錫の商いを営んでいた所でもあり、海賊のアジトでもあったと言われている。

その後、僕の祖先に当る中国系のババなんきん（バーバー）が荒波を乗り越え、プーケッ島目指して出稼ぎに来だしたのが、今からおよそ１７０年前からであった。昔からこの島に一獲千金の夢を抱いて集まって来た人たちは、それはタイ人、中国人、マレー人、インド人、漁師のジプシーのパターン族などだった。

ビルマ軍とも闘い一時占領されたこともある様々な出来事や、謎を秘めた歴史をすっぽりと包み隠した島でもある。過去において人々の悲喜劇を垣間見た美しい自然は、無言のまま何も語ろうとはしない。

プーケッ島は、昔はタラーン島と呼ばれていたが、ラーマ三世王時代にプーケッ島と改名された。が、更に、僕が生まれる4年前、即ち１９２７（昭和２）年にプーケッ県となったが、住民はプーケッ州と呼んでいた。海の真ん中の孤島でありながら、珍しく県の仲間入りしたのである。

僕はこの自然のパラダイスに恵まれたプーケッで生まれた。中国系タイ人及び、マレー系のミックスした血液を分けて貰い、温かい母の母体から生まれたのである。しかし、この時点では、自分の体内に、果たして日本人の血が混じっているのかどうかはまだ謎に包まれたままだった。

アーァ、苦労してやっとの思いで母を見つけたと思ったら、今度は、本当の父のルーツ探しをしなければならないのである。僕はやっとの思いで会えた母とはまだ別れたくなかった。それと、自然にも心を惹かれていたので、住友には更に一週間の休暇を追加し、プーケッで自然と戯れることにした。

僕は相変わらず自転車を乗り回し、孤独を楽しんだ。あるときは錫鉱山がある山へ登り、ビルマ人の労務者などが炎天下にもめげず真剣な顔付で強烈なホースで岩石に水を掛けてボーリングをやっている姿を見つめたりした。

そうかと思えば、潮風がビュービュー吹き付けるスリンビーチの松林の木陰に腰を下ろし、海辺で、まるで絵に描いたような美しい自然をバックにした漁師が夕陽を浴びて、甲斐甲斐しく地引網を引っ張っている姿を、溜め息を付き、涙を流して見つめたりした。あーぁ、なんと美しいプーケッ、実に素晴らしい我が故郷。

■日本国籍を破棄されて

人間と称する動物はどんなに辺鄙な所で生まれたとしても、その国の村役所か、区役所または市役所に出生届けを提出しなければならない。そのように国家の法律で決められた義務があるのが一般社会の掟である。出生届けと同時に戸籍謄本に姓名および国籍云々が記載され、役所から交付される一枚のペラペラの紙に認められた書類によって本人の一生が左右される形式になっているのである。

この他に、海外で出産した場合は、親は自国の出先である国家の代表先である領事館、または大使館へも届け出なければならない責任があるのである。

僕の場合は複雑な家庭の事情で親がやるべきことをきちんとしていなかったために、この世に生み捨てられた野生動物と同様、およそ３０年間野生人間と化した環境に追い詰められていたのである。

まだ小さかった頃、誰が自分の親だか何も知らずにすくすくと育った僕は、日本人として６年間の義務教育を受けなければならない年齢に達していたのも露知らず、日本人学校の催促の通知により、２年遅れの８歳でバンコクの日本人学校に入学した。バンコク日本人学校に入学した後に、第二次世界大戦が勃発し、マラッカにいた父の恋人のことで両親の複雑な家庭問題が生じ、幼い我が身に苦痛の火種として降り掛かり、どうしたらよいのかわからない僕にとって大きなショックだった。小さな胸は疼き、心身に受けた苦痛に悩まされた。

しかし、僕に降りかかった災難はただそれだけではなかった。日本の敗戦と同時に、日本人だった僕は、バーンブワトーン・キャンプに放り込まれた。英軍の将校から「お前はスパイの子だ」と言われ、タイ残留を拒否され、日本への強制送還の命令まで下された。懐かしいタイとはもうこれでおさらばかと、諦めかけていたが、最後の土壇場で、辛うじてタイに残ることができた。

僕はバーンブワトーン・キャンプで日本大使館から、義理の母と連名で「瀬戸正夫は日本人である」

と認められた紙切れに、紛れもなく「日本人である」と記載された証明書を貰い、日本人としてタイに残った。しかし、日本大使館から交付されたその証明書は束の間の気休めに過ぎないただの紙切れに過ぎなかった。

社会の冷たい風圧に打たれ、これから自分の人生を築かなければと、自分なりに努力し、精一杯頑張った。ドン底生活で苦しいのは歯を食いしばって我慢できるとしても、情けないことに、或る日、１０年間もペンディングになっていた日本大使館から、僕の日本国籍を破棄した死の宣言を受け取るはめとなったのである。

日本の国家から「お前にはもう用はない。お前は日本人じゃない」と、ポイと屑篭に捨てられてしまった。僕はその日から屑人間となった。当然人間として堂々と生きる道をなくした一匹の野生野生動物と化したのである。

何故そうなったのか、理由はともあれ、僕はこの国籍問題でペンディングとなり、キャンプを出てからおよそ１５年間も苛め続けられたのである。

僕が実際に自分の国籍問題に気付き、悩みだしたのは、敗戦と同時にアメリカに占領されていた日本が、１９５２（昭和２６）年９月８日、サンフランシスコで日本を含む４８ヶ国が平和条約に調印（１９５２年４月２８日から有効）し、日本がアメリカから解放された時点からだった。兎に角、バンコクに日本の政府の出先だった海外事務所が開設された頃からだった。実情は、僕がプーケッの孤島で生まれた時点から起きていたのであるが……。僕は常に自分は日本人だ、と思い、何も気付かずに日々の苦しい生活に追われていた。

日本人同士の会社に勤めても、僕には学歴もなく、頭ごなしに馬鹿にされ、侮辱され、現地雇いで僅かな給料しか貰えなかった。何かアルバイトでもしない限りとてもじゃないが生きてゆけない事態に直面し、自分で生きる道を開拓しなければならなかった。

たまに欧米企業に勤め口がみつかったとしても、僕が日本人である証明書を貰うために日本の出先である在外事務所に赴き、バーンブワトーン抑留所で貰った大使館の証明書を見せても「この抑留所の証明書だけでは日本の旅券は発券できません。日本から戸籍謄本を取り寄せてください」と指示を受けた。僕は日本人なのに何たることぞ、と思ったが、別に気にもとめず、早速父から取り寄せた戸籍謄本と、大使館が発行した、知らぬ間に少年兵にされたときの身分証明書と、キャンプで発行して貰った日本人である、と証明された証明書を揃えて再度提出した。だが、また大使館から否定されてしまったのである。

何故駄目なのか、理由はごく簡単だった。実は、僕の父から送ってきた戸籍謄本には肝心な僕の名前が記載されていなかったために「戸籍謄本に名前が記載されていない場合は日本人として認められません。日本の法律で決められていますので……」との一言で、あっさりと拒否されてしまった。

これは一大事、大変なことになってしまった。自分の人生を左右する重大なことだ、と気付き、僕は当時在外事務所長の鈴木さんに、自分の一身上の国籍問題の件で「是非何とかしてください、よろしくお願いします」と頼んだ。

在外事務所はやがて自動的に大使館となった。月日の流れは音もなく過ぎ去り、足掛け９年の歳月が経過した。しかしその間僕の国籍問題に関しては、何の回答も得られぬままだった。

痺れを切らした僕は、当時日本大使館の領事部にいた上東輝夫さんに自分の苦しい立場を説明し、「何とかしてください」と、頭を下げて頼み込んだ。ありがたいことに、上東さんは話のわかる人で、僕の気持ちを察し、快く僕の願いを聞き入れてくれた。

まず、大使館からプーケッの県庁および市役所に僕の出生届けがしてあるかどうかについて問い合わせて貰った。県庁には１９６０（昭和３５）年７月４日付けで、市役所には同年の８月７日付けの公文書で書簡を発信して貰った。しかしプーケッから返信された回答は、いずれも「瀬戸正夫の出生届けは出されていない」という、暗いものだった。上東さんは僕の顔を見つめ、気の毒そうな表情で、「瀬戸さん残念ですけど、これでは日本の国籍は取れません。不可能です」と、言葉を濁した。それは可哀想だけど近々に僕の日本国籍が破壊される。と言う、前奏曲でもあった。

タイに出生届けがしてあれば、それを証拠にと思ったが、この淡い夢も果かなく掻き消えてしまった。

最後の頼みは日本にいる父に頼むしかなかった。父によると、嘘か本当か信じがたい話だが、「僕の出生届けはちゃんとタイの区役所と日本の領事館にしてあるので、あるはずだ、無いのがおかしい」と言い張った。だけども、どんなに努力し、逆立ちしてもても、所詮無い物はないのである。

日本にいた父は、父なりに戦時中バンコクで領事をしていた父の友人で、当時東京に住んでいた天田六郎さんに僕の国籍の件に関して相談し、助けを求めていた。天田さんは非常に心配して彼の好意で友人の弁護士を紹介して貰い、日本で家庭裁判所にかけて貰うことになった。裁判に当った弁護士の名前は不明だが、父は父として保証人に立って僕の日本国籍取得に努力し、最善を尽くしてくれた。

だが結果は、残念なるかな裁判した甲斐もなく最終的にやはり「戸籍謄本に僕の名前が記載されていない」と言う理由だけで、日本の国民を保護する最後の関所である裁判所からも完全に拒否されてしまったのである。

僕が大使館の上東さんから「済まぬがちょっと来てくださいませんか」と、呼び出しを受けたのはタイミング的に、丁度その頃だった。僕は彼から、国家の出先である日本大使館の「死の宣告状」を受け取った。非常に短い簡単な文面ではあったが、１９６１（昭和３６）年６月１５日付けの、タイ語で綺麗にタイプされた公文書には「瀬戸正夫は日本人として認められぬ」と、はっきりと明記してあった。

初めからどうせ駄目だろうと想像はしていたものの、実際に拒否されてみると遂に来るべきものが来たのだ。僕はとうとう無国籍者にされてしまった。これから先どうしたらいのかお先真っ暗だ。何処へ行っても日陰者として暮らさなければならず、何もできない身となってしまった。それに時期的にその頃のタイでは、国籍の無い者は無法者とされ、共産主義者と見なされ、敵視され、万一掴まれば投獄され、酷い目に遭わされていた現状だった。

前後左右どちらを振り向いても八方塞がりで行き場をなくした僕の立場は、実に苦しい最悪の事態に直面したのである。

■自殺への心境

瀬戸正夫は、昨日までは大手を振ってかっ歩していた一人の日本人だった。だが、今日からは日本人から邪魔者扱いにされ、価値のない信用ゼロの風来坊にされたのである。

僕は何故日本からこんなに酷い仕打ちを受け、侮辱されなければならないのか全然理解できなかった。だが、それが現実である。僕は自分自身が日本人である証しを立てる日本語で認められた歴然とした日本人の証明書を持っている。肌身離さず持っているその証明書には、当時、大日本帝国大使館の領事部にいた石川実総領事が自らの実印を押して署名した正真正銘の公式の書類であり、日本国家の証明書である。しかし、その大事にしていた証明書は、何の役にも立たないただの一枚の紙切れに等しいものだった。

僕が大使館から貰った証明書は、日本が第二次大戦で負けたドサクサでその場凌ぎで発給したのであるのかもしれない。しかるに、海外の出先である大使館から交付された証明書は、国家が責任を持って交付した証明書であり、威厳のあるものである。だが何故、役に立たない価値のない証明書を無責任に交付したのか考えられない。

僕をこんなに酷い目に遭わせた日本。僕は日本の国家に対してどんな悪事をしでかしたのであろうか。僕は何も悪いことをした覚えもないし、罪もないはずである。それなのに、「お前はニッポン人ではない」と、後は野となれ山となれ式に「勝手にしやがれ」と、人を傷つける血も涙もない非人道な日本の国家から強引に日本国籍を剥ぎ取られ、泥沼の暗黒の闇に無理やりに突き落とされたのである。

国籍を破棄されるということは、僕は日本の国家に対して悪意を抱いた「罪悪人」か、戦時中に言われていた「国賊」または「非国民」だったことになる。しかし、僕は日本人学校にいた頃から軍事教練を強いられ、小学６年を卒業してから高等科に進学し、１４歳で知らぬうちに少年兵にされ、大人の中に混じって実弾射撃の練習までさせられ、日本の国家のために尽くしたつもりである。日本はただ戦争で僕を利用したかっただけだったのかもしれないが、いずれにしても、僕をこんなに酷い目に遭わせた日本は酷い国であり、信用できない国家である。

その時点で僕自身は、僕は果たして日本人の血が混ざっているのか、あるいはどんなに酷い血が体内に流れていたのかは、はっきり言ってまだよくわからなかった。しかし仮に、日本人の血が混ざっていないから日本人と認めない。タイ人の嫌らしい血が混ざっている混血だから認められない、と言われればそれまでである。が、バーンブワトーン抑留所から引き揚げた僕等の仲間には、日本人の血を一滴も引いていない歴然としたタイ人や、華僑の貰い子もいたのである。その人たちは勿論僕と全く同じ様に日本大使館から「日本国籍者である」と、証明された証明書を持参し、帰国し、帰国後もちゃんと日本の国籍を取得し、立派な日本人としてのうのうと暮らしているのである。それなのに何故僕だけが邪魔者扱いにされ、嫌われて捨てられなければならないのであろうか。実に不公平であり、許せないことである。

このように侮辱され、苛められた僕は当然のことながらもう二度とみんなの前で正々堂々と「僕は日本人です」と、名乗ることもできなくなった。かといって「僕はタイ人です」とも言えなかった。なぜ

ならば、その時点で、僕はまだタイ人からも「タイ人である」と、認められていなかったし、タイ当局から「お前は日本人だ」と、拒否されていたからである。

このままの状態では僕はコミュニスト（中共の共産党）と名乗るしかない。しかし、その「コミュニスト」と簡単に言える名称は、口が腐っても当時のタイの現状では迂闊にも言えない言葉だった。むしろ「僕はプーウコーカーンラーイ（ゲリラ）です」と宣言し、自動小銃を持ってジャングルに潜り込んだ方が適切だったかもしれない。

僕は地獄のドン底の底まで叩き付けられた心境だった。心身ともに疲労し、もう悲しみを洗い流す涙すらもなかった。人生最悪の年に直面した僕はフラフラしながらもまだ何とかして生き伸びようと、仄かな希望を持っていた。難しいと思ったが、僕に残された最後の道はタイの国籍を取得することだった。

僕は海外事務所が開設され、戸籍謄本の明細に関した注意事項に直面した時点から、万一日本の国籍が取得できない場合は、タイの国籍をと思い、初めは、自分でも何処から手を付けたらいいのか良くわからなかったが、自分の生死に関わる重大な問題だったので、法律に関して今まで無頓着だった僕は、まずタイの法律から調べてみることにした。

タイにはタイ式の憲法で規定された厳しい掟があった。当時のタイの法律に従えば、タイで生まれた者は当然タイ人となれる資格を持っていた。但し、タイで生まれたことを実証できるタイ当局から証明された出生届けが必要だった。この条件だと、僕には資格がなかった。帰化する方法も考えてみたが、外国人がタイ人に帰化する場合は自国のパスポートおよび大使館の自己の国籍を証名する委任状が必要とされていた。が、これも無理な要求だった。しかしもう駄目だと、じめじめした気持ちで悲観するよりかは一かばちかで当ってみるしかなかった。

社には悪いが、僕は住友の仕事はそっちのけで、毎日系警視庁のトップクラスにいた友人や、移民局にいた仲間、それに警察署や外務省にいた弟子の家を訪問し、鎮痛した気持ちを押し静め助けを求めたが、何処へ行っても何の埒も明かない憂鬱な暗い話ばかりだった。前途は益々暗くなるばかりで生きる望みは次第と消えていった。あーぁ、何たることぞ、と溜め息を付いても、どうにもならなかった。

悲観に明け暮れし、悩み悩んでいた矢先、ペンディング中だった頼みの綱となる日本大使館から期待に反し、最後の死の宣告を受けた時点で、僕は、こんなに辛い思いをするするなら死んだ方がましだ、と、死への連想が閃き始めた。　僕はもう死にたい、死んだらどんなに楽になるかわからない。こんなに身を切られるような切ない思いをしなくても済むんだ。頼りになる両親には捨てられ、義の母には継子扱いにされ、日本の国家からも見捨てられ、日陰者の屑人間にされてしまったのだ。これから先どうやって生きていったらいいのかわからない。僕は苦しいんだ、とても苦しいんだ。こんなに辛い思いをするぐらいなら、死んだ方がましだ。と、思いを巡らし、凄い孤独感に襲われた。僕はもう誰とも会う気もしなかったし、口も聞きたくなかった。もう何もする気力もなかった。ただ一人で居たかった。

行く宛てもなくまるで夢遊病者のようにフラフラと歩き、いつも寂しくなったりしたときにゆくワッ・ポー（ねはん寺）に潜り込んだ。境内の一番奥に当る誰も通らない本堂の壁に凭れ掛かり、実に静かに死神と対面した。僕はただ死ぬことだけを考え、まんじりともせず眼を瞑っていると、時々、寺院

の軒先にぶら下げている大きな風鈴が風にゆられて、チリーン、チリーンと寂しげな音色を発し、死への道案内でもしているように響いてくる。日が翳り本堂の大きな扉がギーと開き、夕方のお勤めをする黄色い衣を身に纏った僧侶が無言のまま一人また一人と数十人の僧が本堂の中に吸い込まれた。やがて、ナンモータサー、と唱える、厳かな美しい合唱の声が境内に響き渡った。ウォーンウォーンと耳の鼓膜にこだまする祈りはまるで僕の冥福を祈っているかのように胸に染み、沈痛な気持ちを静めてくれた。陽はもうとっぷりと暮れていた。僕は生温かい風に打たれ、一世王の銅像があるプッ橋（正式にはソムデッ・プラプッタヨーファー・チュラーロック橋）の欄干に持たれ、背をまるめて立っていた。緩やかに流れているチャウプラヤーの川の流れをじっと見つめていると、あれやこれやと、過去の経緯が思い出され、目頭が熱くなってきた。ヒューヒユー吹き付ける風は頬を伝わって流れる涙をそおっと拭き去り、「正夫泣かないで」と、慰めてくれた。僕は橋の欄干から川に飛び込み自殺しようと、考えていたが、飛び込んでも僕は泳げるから駄目だ、紐か綱で大きな石を足に結び付けて飛び込まない限り、死なないであろう、と思った。しかし石で重しを付けても恐らく助かるであろうと思い、その夜は自殺を思い止まった。

次の日、死に場所を選択した僕は、朝からバンコク市内が一望に展望できるワッ・サケート内にあるプーカウトーン（黄金の山寺院）の石段の上に何も考えず、ただあ然として立っていた。陽射しは徐々に強くなり、青々した晴れ渡った大空に遙か彼方から綿をちりばめたような真っ白い雲がフンワリ、フンワリ、フワフワーッと戯れ、踊りながら風とともにやってきた。涙を一杯溜め、頭を垂れ、放心した僕の悲しい涙を、「正夫泣くなよ、生きるんだよ」と、優しく涙を拭き、微笑みながら去っていた。下の方に見えるプーカウトーンの周囲をこんもりと包んだ樹々の隙間からは、ピーピー、チーチー囀る小鳥のリズミカルな歌声が、生死の分岐点をさ迷っていた僕の心に生への灯火を照らしだした。青空にこんなに綺麗な雲が流れている。小鳥も綺麗な声で「正夫死なないで、死なないで、死んじゃ駄目だよ」と囀っている。プーケッにはまだ可哀想なお母さんが居るのだ。僕が死んだらお母さんはきっと悲しむにちがいない。死ぬのは簡単だけど、大事な生命だ。ようし、どんなに苦しくても生き抜こう、と決心した。僕は美しい女性を醸し出す無言で語る自然の美しさに慰められ、自然と共に生きる力を授かった。

■人生の再スタート

自然に助けられ、自殺寸前に思いとどまった僕は、その時点から待ったなしに次の行動へと飛躍した。僕はどうしても国籍が欲しかった。日本から捨てられた今となっては何処の国の国民であれ、人種であれ、何でもいいから自分を証明できるＩＤカード（身分証明書）が欲しかった。手っ取り早くできそうなのがタイ人になることだった。周囲で他の人がやっているように金をばら撒き闇でタイ人になる方法もあったが、僕はそのような非合法的な法律に違反したやり方は嫌いだった。やるからには正々堂々とやり、駄目なら地下へ潜るしかない、と、頭の中で作戦を練り、準備をはじめた。

何はともあれ、先立つものは金である。僕は資金を調達するために、今まで中止していたアルバイトを再開すると同時に、他のバイトでできそうなものは法に違反しない限り何でもいいから手当たり次第

にやることにしたった。

僕はまず自分の上司に当る酒井さんに、はっきりと自分の事情を説明し、勤務時間後はアルバイトをしなければならないので、これからは社のパーティーや、お客の接待は出られないからと、自分の気持ちを打ち明けた。ありがたいことに、酒井さんは僕の苦痛を理解し、快く了承してくれた。

それからというものは、会社勤めも土曜日の半ドンを除き、夕方の５時になると、僕はさっさととオフィスを飛び出し、自転車に跨り、ヤワラーの中国人街や、スリヴォン、シーロム、スクムウッ近辺へ日本語とタイ語を教えに出掛けた。土、日曜日は午前中から水泳を教えたり、タイ人の歌手に日本語の正しい発音の仕方について歌の歌い方の指導をしたりした。この他にも、住友にいたリーエンさんの紹介で中央郵便局の近くの前にあったスターライト・ナイトクラブでボーイの仕事もするようになった。

僕はそれ以来心を引き締めて仕事に精をだした。兎に角、早朝に起きて一番乗りで社へ出社し、午後５時には社を飛び出し、家庭教師に早がわりし、午後８時半にはスターライトに飛び込み、素敵なチョッキを着用し、ライターを懐に偲ばせ、片手に小さな豆懐中電灯を持ったボーイに変装していた。

ナイトクラブの仕事が終わるのは、平日は午前１時頃だった。その頃僕は土、日曜日も休みなく働いていたので、戦時中の軍隊式に、月月火水木金金と一週間休みなく働いていた。僕はかなりハードなぎりぎりの線まで自分の体を苛めていたが、元気が取り柄で病気ひとつせず、一度も休んだことがない優等生だった。

僕がまだスターライト・ナイトクラブに勤めていた頃だった。それは或る日の土曜日のことだった。僕がビールを運んだりして忙殺していたときだった。時々一緒に麻雀をやったりして懇意にしていた他社の友人にバッタリ出会ってしまった。相手はびっくりしたらしく、「瀬戸さんどうしたんだ」と、声を弾ませて「一緒に飲もうや」と、僕の手を引っ張り、椅子に座らせようとした。僕はゲラゲラ笑いながら、「今、勤務中だから駄目だよ」と断り「良い娘を紹介としてあげるから」と言って、飲み物の注文をとり、気立ての優しい娘をあてがいサービスしてあげた。

僕はそれから数日後に、酒井さんに呼ばれ「瀬戸君は今どんなアルバイトをしているのか」と、聞かれたので、「日本語とタイ語の家庭教師、それに水泳教室、ナイトクラブのボーイ、それと日本語の歌の指導です」と答えた。すると、「問題はそのナイトにクラブのボーイの仕事だけど、社の汚名にかかわるからそれだけは辞めて貰いたい」と、宣言された。僕としては別に悪いことをしているわけでもないし、ナイトクラブの仕事は面白かったので、辞める気はなかった。が、優しい上司の酒井さんに言われたので、仕方がなかった。

僕はあっさりとスターライトを辞めることにした。だが、日本語のできるボーイは僕しかいなかったし、無欠勤だったのでマネージャーは残念がっていた。僕が此処で貰っていた給料は僅か３００バーツだけだった。しかし、チップで入る棚銭の配当が毎晩一人当たり２０から３０バーツほどあったし、ウイスキーや、ビールの空き瓶を一週間に一度の割で溜めて屑屋に売っていた配当金が６０から８０バーツもあったのだが、月々の収入が一遍に１３００バーツほど減ってしまったのである。

僕にとっては痛かった。この減った分を社がベースアップしてくれるわけでもなかった。僕はこの分

を補うために今度はタイ人しか来ないナイトクラブで日本の歌を歌う歌手に化けた。おたまじゃくしの頭である楽譜も何も知らない潜りの歌手だったが、そら覚えの「支那の夜」、「蘇州夜曲」、「何日君再来」、「ここに幸あり」、「すきやき」などの歌を薄暗いステージに立って歌いだした。歌っていると、ファンも次第と増え、ホステスたちの人気の的となり、引っ張りだこになった。

■地下潜行工作

僕は、今自分が抱えている国籍問題を解決するために、道順として自分が生まれた故郷、プーケッ島から手を打つことにした。しかしタイ国籍確保が万一失敗したときのことも考え、地下へ逃げる逃げ道を作っておかなければならなかった。

僕はゲリラ活動をやっていた中国大陸から国境伝いに潜り込んでいた友人を訪ねた。タイの国境で役所の役人を金で賠収し、タイ人に成りすましていた彼は中国から派遣された命知らずのチャキチャキの共産党委員であった。彼はヤワラーのメイン通りの裏側に当るトカーン通りの横にある細い路地に入った３階建てのビルに、大家族で住んでいた。

彼は見かけは非常に大人しい気さくなおっさんだった。表向きはラジオの販売兼修理屋さんをやっていたが、実際には当時タイ政府の頭痛の種となっていた。南タイや、東北タイのジャングルでゲリラ活動をやっていたタイ国共産党分子を動かしていた幹部の一人だったのである。

僕が彼と知り合ったのがまだ新興産業に勤めていた頃からだった。初めは何か商売ができればと思い、彼が経営していた００公司を訪れたときからだった。２人は気が合いとんとん拍子で仲良くなり、お互いの身の上話までするようになった。

或る日、彼から、これは内密な話だけど、と耳打ちされ、「共産党に興味はないか。実は俺は中共のコミュニストのメンバーなんだ。もし差し支えなかったらお前も仲間に入らないか」と誘われ、身元を明かされたのがきっかけだった。

そのときは、その場逃れで「一応考えてみるから」と、生返事をしたが、いざというときは助けて貰う約束を交わした。

この他にも僕は別なルートで、父の伝を通し、南部タイのヤラー、パッタニー、ナラティワート県などで活躍していたマラヤゲリラと関係を持っていたゲリラグループともコネを付けたていた。

それは、当時、南タイで漁師兼山賊兼海賊だった人で（その頃南タイには少人数で組織した山賊団体が８８グループも横行していた）、父に生命を助けられたことがある山賊のボスの一人だった。

モーゼル拳銃を腰に突っ込んだ日焼けしたがっちりした体格の持ち主である鋭い目付きをしたボスは、目を光らせて僕の手をギュッと握り締めた。「モーカイセイには助けてもらい世話になった」と、僕の顔を凝視した。

彼はタイ湾に面したマレー国境に近いソンクラー県の海岸沿いにある、とある小さな漁村にアジトを構えていた。一見したところ貧しそうな一般の漁村と変わらない何の変哲も無い村だった。彼自身も普段は仲間と一緒に漁に出ているごくあたり前の漁師の一人にに過ぎなかった。しかし、貧しいが故に、

そのときのチャンスに応じて、あるときは海賊となり、あるときは山賊に変身し、善良な者から金目な物を奪い取り、か弱い女までを好き勝手に強姦していた悪人だった。

彼の話では、各グループの山賊仲間とは横の繋がりがあり、各々の縄張りは避けているし、タイ共産党グループおよびマラヤゲリラグループともお互いにコネを持っているとのことであった。

僕は彼に髭面の彫りのあるいい顔をしたイスラム人、マレー系タイ人のゲリラ分子を紹介して貰った。僕は此処でもタイとマレー国境地帯の密林を、いざというときはいつでも潜行できる逃げ道を開拓しておいたのである。

■国籍調査依頼

僕はプーケッの本家で世間に顔の広い義理の母、メーヤイに頼み、僕の実母と一緒にプーケッの警察署と区役所に出頭した。

まず母である陳に、自分が僕の母親であり、僕がプーケッで生まれたことを証明して貰った。それと、出生届けをしてなかった理由を調書にとって貰い、その写しと、日本大使館の僕が日本国籍を破棄された書類を持って裁判所へ赴いた。メーヤイが知っている弁護士に頼み「瀬戸正夫または、ヴィワッ・シータラクーンの国籍調査依頼状」をプーケッの裁判所に提出した。しかし、裁判所からは「現在僕が住んでいる現住所はバンコクになっているのであるから、この件に関してはバンコクの内務省管轄である警視庁の外人管理下で申請するように」との指示を仰いだ。

僕は已む無くバンコクに戻り、裁判所の指示通りに警視庁にいた友人に書類を申請した。僕は更に警視庁の友人の指示に従い、僕を育ててくれた義理の母テルと一緒にヤンナワー警察署へ出頭した。警察では、義理の母テルはプーケッで僕を貰い、僕を小さいときから育てた義理の母である、と言った、一筆を取った。更に僕に対して、タイ語の読み書きができるかどうかにつき、タイ字の新聞を読まされ、簡単な文章を書く実地テストが行われた。

次に、僕が在学していた日本人学校（盤谷日本国民学校）が実際に実在していたかどうかに関する証明書が必要とされた。僕は文部省に赴き、１９６１（昭和３６）年１１月２２日付けの文部省の書類によって、当時、実際に日本人学校があったことを証明して貰った。書類の内容は、次のようなものだった。日本人学校は二階建ての家屋で、バーンラック郡スリウォン区ソーイ・サップ２２７８番地に所在し、学校のオーナーおよび、マネージャーは、金井純雄氏で校長先生はＨ・ 植松氏である。この学校は１９３７（昭和１２）年１月１９日に登録され、小学１年から中学２年まであった。しかし、前回の戦争中に廃校となった。

僕はこの書類を持って警視庁へ出頭した。が、今度は、僕が日本人学校を卒業したときの卒業証明書および、僕が在学していたことを証明する２人の保証人が必要となり、僕は、卒業証明書を持参し、仲良しだった同級生の泉芙美代さんと江畑恵美子さんを伴い、警視庁で調書を取って貰い、２人に保証して貰った。

しかし、僕にふりかかった難題は、それだけでは終わらなかった。次に実母および、腹違いの姉など

の血液検査が必要となった。当局の担当者から「この血液検査で血液型が違っていたら問題になる」と脅かされ、いよいよジャングルに潜り込まなければならないのかな、と、ビクビクしながら、ヤワラーの友人の所に駆け込めるように手を打っておいた。

僕は警視庁の要求通りに、実母陳、ラオーメー・ヤイ、義理の姉エウ、義理の弟ブンホック及び、僕と５人の血液検査表を警視庁の担当者に提出した。プーケッの病院と、バンコクのワチラヴッ病院で点検して貰った血液型の内容は、封筒が密封されていたので僕には誰が何型の血液であったかは不明であった。ただひとつだけ解っていることは、僕の血液は「Ａ型」である、ということだった。

血液検査表を提出してからは、僕の国籍問題が何処まで進展しているのか、何の音沙汰もなかった。だが、暫く経過してから当局の担当者から呼び出しがあり、各部署で書類にサインして貰うたびに金が掛かることばかりで、僕は遂に金欠病にかかってしまった。

僕は仕方がないので、上司の坂井さんに頭を下げて、１５０、００バーツの大金を住友から借りることにした。月々１０００バーツずつ返済する借用書を取り交わしたが、１年経ってもやっと７０００バーツしか返済できない有様だった。それと時期的に、何故なのか僕が坂井さんから借金をしてから間もなくだったが、坂井さんの鍵が掛かっている机の引き出しに仕舞ってあった束になった１００バーツ紙幣から毎日１、２枚ずつ１００バーツ札が引き抜かれるようになった。そのうちに社の軍資金用に三井銀行に預金してあった６５万バーツの預金通帳が紛失した事件が発生した。社の現地スタッフのボスは老練のソムポップさんだったが、彼から「坂井さんの引き出しから預金通帳を盗った者は、その預金通帳を坂井さんの机の上に返して置いてください」との、伝達があった。しかし、問題の預金通帳は遂に出てこなかった。

そのうちに僕の上司であった坂井さんは任期が終わって帰国し、東京本社で電気部長に栄転した。優しかった上司をなくした僕は、寂しかったが、後任の松井さんの下で電気関係の仕事をすることになった。

入札関係の仕事は相変わらず続き、丁度タイ国鉄（ＳＲＴ）でディゼルカーの入札があった。住友は、帝国車両のディゼルカーにカミングエンジンを取り付けた機関車で入札に挑戦し、三番札だった。一応、国鉄のスペックに合ったエンジン付の機関車だったので、国鉄の担当者とリベート問題も含め、交渉し、他社と落札争いをしていた真っ最中だったが、僕の国籍問題に関してやっと手応えがあったのは、丁度その頃だった。

最後のＯＫのサインをして貰うために５０００バーツ払い、待ちに待ったタイ国籍を取得することができた。それも最終的には、日本人からタイ人に帰化する方法が講じられていた。

僕が内務省から僕の日本人学校の卒業証書を同封した１９６３（昭和３８）年１１月１４日付けの書留便を受け取ったのはそれから数日後だった。

タイの官庁を走り回り、苦労してやっと「タイ人である」と認められた。が、喜ぶのはまだ早かった。まだ身分証明書（ＩＤカード）を作る手続きと、タイ国民として２年間の兵役を受けなければならない義務があった。

従って、後はこの2件の手続きを踏まえなければならないややこしい問題が残されていた。大人しく素直にやっていたのでは時間のロスになるばかりだったし、兵役にしても、僕はもう既に３２歳になっていたので、袖の下を通し、速やかに処理した。

僕はヤンナワーの区役所へ赴き、でっぷりした係りの役員に、内務省の手紙を添え、まず、白紙の状態だったタイの戸籍謄本に「ヴィワッ・シータラクーンまたは、瀬戸正夫、国籍　タイ、血統　中国、父　季瑞清、父の国籍　中国、母　陳シヤン、母の国籍　タイ」といった明細を記載して貰い、それから身分証明書を作って貰った。

後は兵役だけとなった。これも２０００バーツで係りの軍医に頼み「胸が悪い」という、診断書を出して貰い、旨い具合に兵役を逃れることができた。

僕はたった一枚の紙切れが原因で、１５歳の頃から国籍問題で悩まされ、悪夢に侵された難題、国籍問題はこれでやっと解決し、大手をふって堂々と歩ける人間になった。

日本の軍国主義国家に適当に利用され、最後に軽視され、バカ扱いにされ、捨てられた僕。生きる活路をなくし、迷路にさ迷い自殺まで図った僕。だが、ありがたいことに見捨てる神あらば、救いの神ありで、この温かい仏教国、タイに拾われ、救われた僕。あーぁ、短いようで長かったこの１５年間、実際には出生届けもなされてない生まれたときから無国籍だった僕は、やっとの思いで、自由の身となれた。何処へ行っても世界の人類に認められた人間、タイ国民として正々堂々と闊歩して歩ける身になったのである。

■住友商事を辞職して

タイ国籍を確保し、自由の身となった僕は翌年の春、周囲の人たちが止めるのも聞かず、およそ４年半勤めた住友商事を辞職することにした。僕は住友から僅かな退職金を貰い、社から借りていた残りの借金さを全部返済し、みんなに惜しまれて退社した。

特に、下にいたビルを番していたでっぷり太ったアバン（インド人の　門番）は、僕と別れるのが辛い、と言って、僕の手をギュッと握り締めて、男泣きに泣いていた。僕と彼との関係は、僕は毎朝早朝に自転車で社に通っていた。が、いつも、自転車を彼の部屋の前に置き、「ジャヘンジー」とインド語で、挨拶し、彼に１０分ほど日本語を教えていた。僕はいつも冗談を交えて、彼に少しずつ日本語を教えていたのだが、これがきっかけで２人の友情は強く結ばれていたのだった。

余談になるが、一度タック県のメーソート鉱山でボーリングしていた住友金属から、１トンの鉱石のサンプルがトラックで運ばれてきたことがあった。ドングロスの袋に５０キロの鉱石が入っていた袋が２０個あった。それを運ぶ労務者が居なかったために、住友金属に所属していた運ちゃんのプワンさんが一人でブツブツこぼしながら、一袋ずつ手でぶら下げながら運んでいた。

そのとき、社には全員が揃っていたが、みんな知らん顔をして仕事をしていた。僕は見ていてプワンさんが可哀想になり、やっと２袋ほど運んだ頃に僕は黙って下に降りてゆき、長袖のワイシャツを着たまま、赤土の埃だらけになった袋を背中から担ぎ、汗ダクダクになって手伝ったことがある。そのとき

も、アバンは僕の汚れたグシャグシャになった姿を見て「私は悲しい」と嘆いた。しかし、僕は「いいんだよ。お互いに助け合って仕事をすれば、それだけ早く終わるんだからから」と笑顔で答えた。

僕が住友を辞めてからだったが、時々、社内で何か不明な点があったりすると、僕に呼び出しが掛かった。僕はそのたびに住友に赴き、その用件に関して解りやすく細かく説明してあげた。取引関係で、お得意先と問題になり、裁判沙汰になっていたケースもあった。丁度井上さんが任期を終えて交代する時期が迫っていたときだった。最後の裁判で井上さんが法廷に出頭し、僕が通訳でかりだされた。そのときも井上さんは「最後まで瀬戸君に世話になるとは思っていなかった、ありがとう」と言って、頭を下げた。僕は元の上司のために役に立てばと思い、好意でしたことだったので、恐縮してしまった。

僕が住友を退社してからふた月ほど経っていた或る日、住友の松井さんから呼び出しがあったので行ってみると、「今ＪＥＴＲＯで日本語とタイ語のできる人を捜しているんだが……、給料は１万バーツ出す、と言っているが、仕事をする気はないですか。今、直ぐにでも紹介しますけど……」と、実にいい好条件の就職口の話だった。僕が住友を辞めたときの給料は、手取りで僅か２０００バーツだった。僕にとっては願ってもない吉報だった。が、松井さんの好意にありがたく感謝して辞退した。

僕はもう何処へも勤める気はなかった。これからは暇に任せて後ひとつ課題として残っている父のルーツ探しをし、もう誰にも遠慮することもなく自由に羽を伸ばし、フラフラしながら、自分がしたいと思うお先真っ暗な未知の世界で、好き勝手なことをして、のんびりと楽しい人生行路を辿るのだ。僕は誰にも迷惑をかけないで、自分の好きな自然ととも自由に生きるのだ。

■貿易業

僕は今までやっていたアルバイトをやる傍ら、住友を辞めた翌日から元住友のお得意先でＮＥＣラジオの代理店をしたことがあるヤワラーに店を構えていた泰蜜で奉仕で仕事の手伝いをすることにした。

此処に日本電気のＮＥＣトランジスターラジオを売り込んだのは僕だった。当時、タイの市場ではまだＮＥＣブランドが全然知られていない頃から手を付け、宣伝に力を入れるようにと、プッシュしたのも僕だった。が、やっと機動に乗り出し、これからと言うときに、他社に代理店を横取りされてしまった苦い経験があった店である。

僕は此処の店主、温明根さんを筆頭に、彼の家族とは兄弟のように親しい間柄になっていた。僕は此処で一番親しかった僕と同年輩の次男のムクリンさんと２人で、貿易業を営むことにした。

僕は自分のタイ名字を取り、「シータラクーン有限公司」という、会社名で、１９６４（昭和３８）年６月から、日本とコンミッションベースで雑貨類の商売を始めた。僕は今まで積んだ経験を生かし、お得意先回りをして注文を取り、大阪や、神戸にある中小企業を相手に取引を始めた。日本からサンダルや、懐中電灯類、ラジオの部品、などを直接輸入して販売したこともあった。が、回転資金が続かなかった。

コンミッションベースでやっていた取引き先の方も、定期的にリベートを送金して来た社は一社しかなかった。後は梨のつぶてで、大阪商人に旨いぐあいにまんまと騙されて仕舞い、社の運営は暗礁に乗

り上げてしまった。僕はすっからかんになってしまったが、別に悔いはなかった。

■我が道

僕は自分勝手に決めた前途に何があるのかわからない我が道を、大らかな気持ちで歩み、自分で独立して生きてゆくからには、あれやこれやと贅沢なことは言っていられない。兎に角、何処からも給料が出るわけでもないし、ちょっとでもめんどくさいやと、怠ければ、次の月にがくんと響いてくるからだ。

前途は無限に続いているわけで、よいときもあれば、苦しい立場に追い詰められることもあるわけである。自分が選んだ自由な道であるからには何事にも恐れず、躓きながらでも、まっしぐらに突進するしかない。

僕がやりだした会社のメインの仕事はあんまり芳しくなかった。が、余暇にやっていたアルバイトの収入で細々ながら何とか生計を立てていた。

僕は家庭教師の他に、タイの専門学校や、語学を専門に教えている夜学でも日本語を教えるようになった。今までやっていた日本語教師の他にも、タイのラジオ放送局で流していた日本大使館広報部の手伝いもしていた。それは、秋谷さんが担当していた日本の文化をタイの国民に紹介するために、日本の民謡や、流行歌をカセットテープに録音して、タイ語の解説をテープに吹き込み、それを４ヶ所のラジオ放送局へ届けるアルバイトも請け負っていた。僕は音楽が好きだったので、この仕事は非常に楽しかった。一杯あるレコードの中から好きな曲を選び出し、一曲ずつテープに録音し、３０分番組に編集したものを、一本のテープに一週間分に纏め、それを放送局の担当者に渡していた。

僕がやっていた放送関係の仕事はそれだけではなかった。タイのテレビ局で放映していた日本の映画の翻訳もしていた。日本から送ってきた映画のシナリオを読みながら、タイ語のタイプライターで、キーをバタバタ叩きながらタイ語に訳していた。その頃は、テレビ映画の翻訳が一番いい収入源となっていた。長編のストーリーを１本一週間ほどで訳し、１万バーツ前後稼いでいた。

僕はこの他にも、個人の恋文や、華僑の貿易商の商業文の代筆、それに、書類やカタログなどの翻訳もやっていた。恋文では、実に面白いエピソードがあった。

友人の紹介で引き受けた恋文の主は、日本語が全然できない青年だった。彼は日本の女性に憧れていて、日本に留学していた彼の友人からの紹介で、全然会ったこともなかった女性の住所を持っていた。彼は、英語はできるのだが、何故だか、日本語で文通した方が意志が通じやすいから、という意見だった。初めの頃は彼に言われるままに「私は日本語が少しできます。貴方と文通したいです……云々」と偽った、ありきたりの手紙を書いていた。だがそのうちに、彼から「何でもいいから適当に書いてくれ」と頼まれた。他人の恋文なんか書いたって始まらないや、と思ったが、それが仕事なのだから仕方がない。そこで、僕は自分勝手に適当に考えた恋文を平仮名で書き、彼にその通りに書かせて手紙を送っていた。だが、不思議なことに、その恋文が彼女のハートをチクリと刺激したらしく、約一年後に遂にハッピーエンディングとなった。

初めてバンコクに来た彼女は、ドーンムアン空港に迎えに来た彼氏が日本語ができないことを知り、

びっくりしたようだった。だが後で、溶けるような恋文を書いた張本人が僕だったとわかり、なおさらびっくり仰天し、赤面していた。僕は両人の恋を結んだめでたい結婚式にも、通訳を兼ねて出席し、写真も撮ってあげた。が、その後どうなったかは消息不明である。

僕はこの他にもやりたいと思っていた門番（守衛）の仕事も、華僑の友人に頼み、短期間ではあったが、ひと月ほどやったことがある。僕が友人に「君の会社の倉庫の門番をやらせてくれないか」と頼むと「先生何言ってるんですか、冗談でしょう」と、相手にしてくれなかった。しかし、僕が本気で言っていることがわかり、ＯＫしてくれた。

此処の守衛勤務時間は、午前７時からが午後７時までと、午後７時から午前７時までの２部交代で、１日１２時間勤務だった。昼の部は暑いだけで大したことは無かった。しかし、夜の部は別世界だったし、かなり酷かった。夜は、まず遠慮会釈もなくチクリ、チクリと柔らかい小さな針で皮下注射をしてくれる蚊の攻撃に悩まされた。それと、餌を漁り歩く尻尾の剥げた大きな溝鼠や、無数のごきぶりがゴソゴソ這い出してくるし、時々鼠や蛙を飲み込んだ毒蛇が足元にニョロニョロと現れたりした。

一番辛い時間は午前３時頃からだった。この時間になると、お腹も空くし、急に凄い眠気に襲われ、うかうかしていると、本当に眠ってしまいそうだった。僕は眼がトロンとして眠くなったりしたときは、手の平で自分の体をバシバシ叩いたり、冷たい水を頭から被ったりして、片手に懐中電灯を持ち、広い敷地の周囲を歌を歌いながら歩き回った。

僕はこの守衛をしていたときに、一度、招かざる無言の客、蛇の訪問を受けたことがある。それはまだ宵の口だった。軒下の椅子に座って休んでいると、一匹の長さ６０センチぐらいの細長い蛇が、ヌルヌルした体をくねらせながら肩の所まで這い上がってきた、肩の所から首に巻き付き、暫くじっとしてたが、また下へヌルヌルと下り始めた。周囲は薄暗かったし何種の蛇だかも見分けも付かなかった。身動きすると、咬まれる恐れがあったので、僕は蛇がバイバイと去ってしまうまで、冷静にし、じっと息を殺して蛇様の行動を見守っていた。僕はその蛇を殺そうと思えば、直ぐにでも殺せたのだが、わざわざお見舞いに来てくれた珍客なのだから、と思い、「サワッディー」と、見逃してやった。

■バンコクカレッジ

僕が日本語の弟子だったヴィチャン君に紹介されて、クルワイ・ナムタイにあったバンコクカレッジ（現在は大学）で日本語の教鞭をとるようになったのは、１９６７（昭和４２）年の６月頃からだった。オープンしたばかりのバンコクカレッジには、まだ社会科、秘書科、ホテル科、会計科と４科目しかない頃だった。校舎も２棟しかなく、東側に大きな食堂があるのみだった。僕が教えていたのは第一期生と二期生までだったが、僕は此処で足掛け５年間日本語の特別講師として生徒と共に一心一体となって、実に楽しく日本語を教えていた。

僕はこれから未知の社会へ飛び込もうとしている５００名ほどの弟子を抱えていた。いつもガヤガヤワイワイ騒いだり、はしゃいだりしていたが、それぞれに違った個性があって、僕にとってはみんな素直な可愛い弟子だった。

僕はおよそ一ヶ月教えただけで、全校生と親しくなり、みんなの信頼の的となった。何がそうさせたのかはわからないが、僕の言うことは何でも素直に聞くようになり、身の上相談も受けるようになった。

初めの頃、僕は教員室に用意してあった机に座っていた。だが、休み時間になると、いつも数人の弟子が僕の机の前に集まって来るようになった。弟子は教員室の中に入って来た途端に、「瀬戸先生」と呼び掛け、まるで友人みたいな口調で気軽にペラペラ喋っていた。すると、他の先生が「うるさい。先生と話すときはもっと静かに丁寧な言葉で話しなさい」と、注意されていた。僕自身はどちらかと言うと、弟子が話しかけてくる言葉遣いに対して、気にしたこともなかった。が、他の先生にとっては、耳障りになったのかも知れない。

僕はみんなともっともっと親しくなりたいと、思っていたので、教員室で僕用に用意してくれた机を、校長に「もういりませんから」と言って、返し、何処に座っても誰からも文句を言われない食堂の長テーブルを陣取った。僕が食堂のテーブルに座るようになってからは、いつも１０人ぐらいの弟子に取り囲まれるようになった。そして、誰が先生で、誰が弟子だかわからないくらいに溶け込み、お互いに大きな声でワイワイ喋りながら楽しいひと時を過ごすようになった。

そのうちに家族の誕生日パーティーや結婚式、クリスマスやお正月などのパーティーにも呼ばれるようになった。僕はそのたびに、そのときの様子をカメラに収め、お礼に、思い出として残る写真を渡していたので、弟子から感謝されていた。

長い夏休みが訪れる時期になると、弟子は、各科毎にバスを借り切り、パッタヤー、ラヨーン、チャンタブリーの海や、ローイ県のプーカドゥンや、チヤンマイの山岳地帯へ出掛ける旅行シーズンでもあった。僕はそのたびに、各科から招待状を貰い、バスの中で長太鼓をポンポコポンポコポンポンとリズミカルに叩きながら、みんなと一緒にドラ声を張り上げて歌いながら旅行して歩いた。弟子の故郷である田舎の小さな村で年一度のお祭りに出会ったりしたときは、数人の弟子と舞台に上がり、夜明けの３時頃までハーモニカでラムヴォンや他の曲を吹き、みんなで歌いまくり、村人と一緒に踊ったりして大喝采を浴びたものである。

僕の弟子には、地方から勉強に来ていた連中も多かった。みんなが実家へ帰るときに、弟子に「先生、私の家に遊びに行きませんか」と誘われて一緒に訪れたこともあった。僕はいつも誘われるまま、誰の家へでも泊り込みで気軽な気持で家庭訪問をしていた。僕は弟子の実家へ行くたびに、親兄弟親戚関係の人たちと知り合い、友好を交わすいいチャンスに恵まれた。

それと同時に、弟子と家族の親密関係や、経済力まで嗅ぎ付けてしまった。勿論、弟子によっては、いい所の出もあったし、かなり貧しい家庭から勉強にきていた弟子もいた。僕は貧しそうな家庭の両親には単刀直入に、経済面の話などを聴きだし、何とかしないと、大変なんだなあ、と、頭に入れておいた。新学期が始まったり、月末が近付いたりした頃によく起こるケースだったが、金欠病になってくると、「先生、お金を貸して」と言って、飛んでくる弟子も結構いた。僕はそのたびに「はい、はい」と、気軽にお金を与えていた。それと、旅行へ行くときも、行きたくても金のない弟子には旅費を出してあげたりした。

僕はプレーボーイグループの弟子に誘われて、当時、赤線地帯だったパークナームの先にあったバーン・プリーへ女を買いに行ったこともある。一回遊ぶのに一人３０から５０バーツぐらいだったが、遊びたくても金がなくてムズムズしている弟子もいたので「お前遊びたいだろう、先生がスポンサーになってやるから、遊んでこい」と言うと、大喜びで、自分の気に入った娘を選び、部屋へすうっと消えた弟子が数人いたが、みんな性には飢えていた。

僕の可愛い弟子は、みんな思春期に達していたので、お互いに恋愛関係に落ち、肉体関係まで結んでしまった弟子もいた。お互いに結婚したくても、宗教の違いなどで、両家の親がＯＫしない場合もあった。そのようなときに、悩みあぐねて弟子が相談にきたりした。僕は「頭の古いしょうがない親だなあ」と言いながらも、両家の親元へ説得に行き成功させたこともあった。

しかし、一人子の場合などに溺愛した自分の子可愛さで、わが子を手放したくない親もいた。その場合は仕方がないので、弟子には「駆け落ちしろ、早く子供を作って、子供の顔を親に見せればいいから」と、アドバイスした。このために、後で親から「瀬戸先生は酷い先生だっ」と怒鳴られ、目茶目茶に苦情を言われこともあった。そんなときは、「どうも済みませんでした」と、手を合わせて拝み倒すだけだった。

僕が学校でやるべきことは、黙って大人しく日本語だけを教えていればいいわけだった。が、僕の性格として、それだけではつまらなかったので、授業中には日本の歌を教えたり、タイ語で人間社会の冷酷さなどについて、道徳に関して人生講義をしたりした。この他にも、他校とのスポーツ交流のときに歌う応援歌も、木曽節や、ソーラン節などの歌詞を適当に応援歌に編曲し、はっきり歌えるように指導し、サッカーの試合に行ったときなどには、全校生に合唱させていた。

僕は弟子と日本語クラブや、写真クラブのクラブ活動にも手を出していた。日本に関心のある弟子を募集し、昼休みの休み時間を利用して、日本の歌謡曲を教えたり、舞踊の先生にお願いして、日本の舞踊などの文化を取り入れた。それに、写真も暗室を設け、写真の撮り方から現像焼付けの仕方までを、手取り足取りで指導した。お陰で、校内で一時凄い日本ブームに巻き込まれ、僕の名前は一躍有名になった。

学校の年中行事で一番面白かったのは、学校内で行われる新入生歓迎会だった。これから何をされるか知らない新入生は緊張した顔で、早朝からビシッとした制服の学生服に身を包み、正面玄関の空き地に集合し、先輩の顔を仰いでいた。新入生は、先輩の命令に恥らいながらも、実に素直に大人しく動き回り、演技をしなければならなかった。一列に並ばされた新入生は、まず、先輩から顔にペタペタと色を塗られ、四つんばいになって泥んこの藪の中を這わされたり歌ったり、踊らされたりした。

男子はこの他に、メーコーン・ウイスキーにコカコラやレモンなどを混ぜたカクテルを飲まされた。初めて飲んでグデングデンになってしまう新入生もいたが、あっちこっちの隅で、ドラや太鼓をドンチャン、ドンチャン叩き、はしゃぎにはしゃいだ楽しかった1日が終わるのだった。

この校内の歓迎会が終わると、数日後に、更に各科毎に分散して歓迎会が行われる仕組みになっていた。それは、バスで地方へ遠征し、バンガローを借りて、キャンプファイヤーを囲みみんなで歌ったり、

合唱したりして先輩が新入生を持て成し、見ていて温かい友情が漂い、和気藹々とした雰囲気に包まれてた。

学校で一度「食堂で売っている料理が高すぎる」と言って、学生がストを起したことがあった。そのときも、各クラスのリーダーが「食堂の料理は量が少なすぎて高すぎるからストを起こしたい」と、僕に相談に来たので「そうか、それじゃやっちゃえ」と、ＯＫした途端にその日から「食堂の物は一切買って食べるな」といった、ストが始まった。他の先生は相変わらず食堂でご飯を食べていたが、僕は大勢の弟子と一緒に外へ出掛けて食べていた。ストは３日間も続いたがまだ止める形跡はなかった。流石に音を上げた食堂のオーナーが校長先生に「これからは量を増やすからストを止めるように交渉してください」と泣きついた。ところが面白いことに、校長に呼び出されて「ストを止めろ」と命令されたリーダーはただせせら笑っているだけで、校長の言うことを聞かなかった。ストは相変わらず続行されていたために、学校側では校長先生の言うことも聞かないとなると、問題だった。

そこで、校長は遂に僕に、「アチャーン瀬戸、済まないが、今生徒がやっているストをストップさせてくれないか」と、困惑した表情で頼みに来た。僕は「よしわかった」と、自信満々で簡単に引き受けてしまった。僕はいつも陣取っていた食堂のテーブルに座り、日頃懇意にしていた弟子を呼び集めた。そして「食堂に対するストはこれで終わりにしろ」と、命令を下した。みんなは笑いながら「はい、わかりました」と言って、３日間続いたストはその時点から解放されたのだった。

側で僕が何を言い出すかと思って、黙って固唾を呑んで訊いていた食堂のオーナーはストが解放された途端に「アチャーン瀬戸、どうもありがとうございました。どうぞお飲みください」と、笑顔で手を合わせ、僕がいつも飲んでいるホット・ブラックコーヒーを奢ってくれた。

弟子の中には真面目な者もいれば、酒ばかり飲んで遊び歩いているズボラな奴もいた。卒業式が近付いてくる頃になると、点数の採点の差によって当然落第生も出てくるわけである。バンコクカレッジの場合、卒業してからアメリカへ留学する弟子が多かった。当時、アメリカへ行くには警視庁内にあった海外管理課に１０万バーツの保証金を積むか、または、銀行の保証書を提出しなければならなかった。家庭が裕福な弟子は問題なかったが、そうでない弟子は保証人になってもらえる人を探すのに苦労していた。そんなわけで、保証人が見付からない弟子が、一人またひとりと、僕に保証人となって欲しいと、頼みに来るのだった。僕はたまたま警視庁の管理課の係りに懇意にしていた友人がいたので彼に頼み、僕の顔で１０名ほどの弟子の保証人になってあげた。この他にも、航空券を月賦で買った弟子の保証人にもなってあげたので。校長先生に「アチャー瀬戸、気を付けた方がいいよ」と、注意されたほどだった。だが、僕は弟子のために保証人になってあげたのである。

この、僕が保証した弟子の中には、卒業できなかったぐうたらな弟子が一人いた。彼の名前はカチェーンと言うが、ピチッ県の片田舎の貧しい家庭から来ていた弟子だった。彼も同級生がアメリカへ行くのを羨ましそうな瞳で見つめていたが、心は既にアメリカへ飛んでいたのだった。

或る日、思い余った彼が「先生、僕もアメリカへ行きたい。だがお金がない。先生僕をアメリカへ行かせてくれないか」と、話を持ちかけてきた。

僕は「アメリカ行きの航空券は僕が負担してあげる。但し、向こうへ行ってからアルバイトをしながら真剣に勉強をする意志があればいいけど、どうだ頑張ってやる気はあるか」と訊くと、「やる」と、元気よく答えた。

アメリカに留学し、皿洗いのアルバイトからスタートしたそのズボラな弟子は、嬉しいことに現在もまだアメリカのシアトルにいるが、アメリカ人の女性と結婚し、３人の子宝に恵まれ、大きなタイレストランの料理屋のオーナーとなり、立派なプール付きの家庭の主となっている。

■夢の旅行社

僕はプーケッにいた親戚の要望に応じてバンコクのパホーンヨーティン通りにある第５チャンネル陸軍テレビ局の近くに正式に「ドゥリームランドツアー社」を設立したのは、１９６９（昭和４４）年１月７日だった。

僕は旅行社を始めるにあたり、旧友であり、先輩にあたる床屋をやっていたサンさんも誘い、プーケッの親戚たちと一緒に投資し、「夢の旅行社」の事業を引き受けることにした。僕が社のマネージャー役をやらされ、全体のマネジメントを切り回すことになった。

オフィスにする場所とガイドは親戚のヴィロート兄弟が決めたのだが、事務員を捜すのは僕の役目だった。僕は元バンコクカレッジにいた教え子に頼み、観光業務の仕事を手伝って貰うことにした。

当時旅行会社で幅を利かせていた所は、ワールド・トラベル社や、ディッヘム社や、米軍のジーアイを目当てにやっていたトミー・ツアー社だった。後は我が社みたいに小さな無名の旅行社が筍式に林立していた頃だった。従って競争率は厳しく、海外に代理店がない限り、バンコク内で観光客を捜し出すのは容易なことではなかった。何処のホテルにも小さなカウンターを出した旅行社の出先があったし、其処で個人で来ている観光客の足を食い止めていた。

僕は弟子や友人が勤めていたホテルに足を運び、この流れの観光客を横取りするために、レセプションにリベートを払い、観光客を斡旋して貰うことにした。旅行社の営業を始めて一ヶ月目ありから、少人数ではあったが、やっと外国人のツアー客が入ってくるようになった。どうにか軌道に乗り出した頃を見計らい、１２名乗りのトヨタのワゴン車を月賦で購入し、更に若い運ちゃんを一人増やし、その運ちゃんと我が家で寝起きを共にするようになった。親戚がアレンジしてくれたパホーンヨーティンのオフィスは市内から遠すぎて不便な点が多かったので、ラーチャダムリ通りのシャニーシャトーの真ん前にある３階建てのビルの一室を借りて、其処で新たに営業を開始した。

しかし、社は僅か３ヶ月余りで予想外の営業費が掛かり、運転資金が底を突いてしまった。要は、現金を投資したのは、僕と相棒のサンさんだけだった。共同投資をするはずになっていた５人の親戚は、ただ机を揃えてくれただけで、「まだお金がないから」と言って、人の褌で相撲を取っていたようなものだった。

金がなければ身動きできないので、先付小切手を切り、サンさんの友人から軍資金を借りて切り回すことにした。が、毎月４０００バーツ余り支払わなければならない車の月賦の代金を捻り出すのにもひ

と苦労しなければならない事態に追い詰められてしまった。

僕は一度、溺れる者は藁をも掴む気持ちで、同級生だった池田實君から、彼が大林から貰ってきたばかりのホヤホヤの給料袋を、そのまま無理やりに全部横取りして車の代金に回したことがあった。後で、優しい池田静子さんから「正夫さん、酷いわ、困るわ」と、苦情を言われたことがあった。二人の若夫婦には悪いことをしてしまった、と後悔しても、もう取り返しが付かなかった。

借金を抱えて苦しかったが、社の株を弟子に売ったりして、なんとかやり繰りしていた。が、このままの状態ではおこぼれの外国人客を頂戴するだけで赤字続きで細々と賄うしかなかった。これでは破産するのが眼に見えていたので、日本から直接グループのパックツアーを送って貰うしかないと、判断を下した。

僕は無理をしてでも日本で代理店になってくれそうな旅行社を探索に行くしかないと見た。そこでバンコクの経営を一時親戚に任せ、二週間の予定で日本へ行くことにした。僕は現在住んでいる家の家賃も数ヶ月間払えぬままで苦しかった。だが、とことんまで努力してみるしかなかった。僕はたった一台しかなかった命の次に大事にしていたニコンのカメラを質屋に入れ、日本行きの旅費代を工面した。タイ航空に勤めていた同窓生から1年月賦の航空券を手に入れ、懐に僅か2万円の現金を忍ばせて日本へ旅発った。

僕が初めて自分の第二の故郷日本を訪問したのは、１９６９年６月末だった。短期間で東京の旅行社関係を歩きまわり、やっとエージェントを引き受けてくれる窓口を見付けた。僕はこれで何とかなると、胸を膨らませてバンコクに戻った。

だが何たることぞ、社に出社して唖然としてしまった。社には僕の弟子が残っていただけで、僕の顔を見た途端に泣き出してしまった。兎に角社内の体制は目茶目茶に荒らされていた。事務所で使っていた新品のタイプライターはガイドをやっていた親戚の仲間に給料代わりだと称して持ち去られていたし、土産店や食堂、バー、トルコ風呂や、その他から貰えるリベートまで全部ひったくられていた。従って、社の運転資金は1銭も残っていなかったし、もうどうにもならない事態に追い詰められていた。親身になって働いてくれた弟子だった社員に払う給料もなく、みんなに手を合わせて謝り、ひと月分の給料を借りたまま涙を飲んで解散することにした。

あーぁ、何たることぞと思ったが、僕自身も、もうすっからかんだった。残念だったが、みんなの給料も、事務所の家賃も払えなかった。オーナーには家賃替わりに事務用品一切を差し押さえられてしまい「夢の旅行社」は、僅か8ヶ月間の幻の夢を見ただけで、夢と共に消え去ってしまったのである。

僕は旅行社が破産したその日から無一文になってしまった。月賦で買った車は、まだ床屋を経営していたサンさんの所有権にし、残額の支払いは彼に引き継いで貰うことにした。僕は事業に失敗し、すっからかんになってしまったが、挫けなかった。躓いてもまた、「なにくそー」と、立ち上がった。

僕は一時的ではあったが、サンさんと2人でパホーンヨーティン通りにあったベトナム戦争に派遣されたジーアイを専門に扱っていたトミー・ツアー社とコネを付け、ベトナムから休暇で帰ってくるタイ兵士の輸送兼サービスを始めた。

ベトナム戦線へ駆り出されていたタイの将兵はほとんどが貧しいイサーン（東北タイ）の農村から駆り出された者が多かった。僕はサラブリーや、コーラート方面へ里帰りする5、6人の将兵を車に乗せ、サンさんと2人で交替で運転しながら、車中でベトナムの悲惨な戦場の話を聴き、農村の辺鄙な所まで送り届けていた。戦場で苦労した兵士は誰もがそうだったが、実家に着いた途端に家族や親戚と手を取り抱き合い、子供を抱っこして、涙を流して喜んでいた。

僕はいつもみんなの仕草や表情を黙って見つめ、美しい自然に包まれた農村風景を侘しい気持ちで後にするのだった。

■記者の卵

人間の関わりとは不思議なもので自分が気に入れば愛着を感じ、いつまでも其処に住みついてしまうものである。僕がフリーの身として朝日新聞社に足を踏み込んだきっかけとしては、まだバンコクカレッジで大勢の教え子に取り囲まれてゲラゲラ笑いながら愉快に日本語を教えていたときだった。

朝日新聞社との縁は、当時朝日の女助をしていた僕の同級生だったヴィライ（泉芙美代）さんから「暇なときに朝日の仕事を手伝って貰えないか」と、依頼があった時点から始まっていた。

僕が記者らしからぬタイのメーコーン・ウイスキーが好きな一風変わったお人よしの石川巌さんの手伝いをするようになったのは１９６７（昭和４２）年の中頃からだった。僕はそれ以来、川村哲夫支局長、猪狩彰支局長、沼尻勉支局長、チャリー（村上吉男）支局長、横堀克己支局長、花野支局長、大和修支局長と続き、１９８２（昭和６２）年１０月１日からバンコクは総局となり、総局となってからは、為田英一総局長１９８７…８９、増子義孝総局長１９８９…９１、大和修総局長１９９９…９４、加藤千洋総局長１９９４…９６、島田教之総局長１９９６…９８、津田邦宏総局長１９９８…００、宇佐波雄策総局長２０００…０４、真田正明総局長２００４…０５、柴田直治総局長２００５…０９、藤谷健総局長２００９…１３、大野良祫総局長２０１３…現在と、現在に至る今年の４月までに亘り１９名の支局長並びに総局長の情報関係の仕事に携わってきた。

情報に関する取材の仕方も何も知らなかった僕は、真っ白い純白の白紙のままの状態でマスコミに関するマスメディアの世界に飛び込んだ。僕は特派員の記者や、写真部員のお尻にくっついて記者ポッポーと走り出した。そのお陰で、東西南北と、タイの隅々を駆け巡り様々な階層の人々に巡り合い、いろんな話を聴きだし、知恵を授けて貰えるいいチャンスを掴むことができた。それに、あるときはゲリラと解放区に潜り込み、地雷を踏み損なって命拾いしたりしながら、スリルに満ちた面白い体験を積ませて貰った。

僕が初代の石川特派員の手伝いを始めた頃はインドシナ半島（ベトナム、ラオス。カンボジア３国）で解放勢力による人民解放戦線が起きていた真っ最中だった。時期的に、丁度アメリカがベトナムに侵攻し、戦火を交え、深入りしすぎた米軍が苦戦していたときだった。

アメリカは東南アジアに米軍基地を築くために、インドシナ半島を傀儡国にしようと企んでいた。１９６４（昭和３９）年８月２日、アメリカの陰謀で、アメリカの駆逐艦隊がトンキン湾でベトナムの魚

雷艇に攻撃されたと騒ぎ、これを口実に8月4日報復手段として北ベトナムの海軍基地を爆撃し、ベトナムへ介入する糸口を切り開いた。１９６５（昭和４０）年1月7日、アメリカは北ベトナムのドンホイを空爆し、この日を皮切りに北ベトナムに対し本格的な猛爆が開始された。アメリカはこれに引き続き、３月７日、南ベトナムのダナンに海兵隊を上陸させ、国際警察官役を演じ、インドシナ半島を自国の植民地にしようと試みた。

初めの頃、アメリカのＢ５２爆撃機がベトナムを空爆していた経路は、アメリカの基地となっていたグアム島や、沖縄から飛来していた。だが、距離的に遠かったために、タイのタノーム首相と友好関係にあったアメリカは、ベトナム、ラオス、カンボジアと、インドシナ半島に隣接した一番近い便利なタイ国内に空軍基地を構築することになった。

僕が石川特派員と一緒にスリウォン通りにあったトヨタ社からジープを借り、日の丸の旗を立ててバンコクから６００キロ余りある東北タイのウボンの町外れにあった米空軍基地を取材したのは１９６８（昭和４２）年だった。僕にとっては初めての取材であった。基地からは引っ切り無しにＦ１５戦闘機が飛び立っていた。基地の周囲には鉄条網が張り巡らされ、厳重に警戒されていたのでとてもじゃないが歩きながら写真を撮ることは不可能だった。

僕はこのとき走っている車の中から外部の者に気付かれないように素早くシャッターを切る方法を覚え、初歩的な取材の仕方を体験した。

当時、東北地方のハイウェーは赤土を被った凸凹した石ころだらけの最悪の道だった。バンコクからコーラート（ナコーン・ラーチャシーマー県）まで僅か２５０キロの道程を埃を被りながら1日がかりで走らなければならなかった。それに暗くなると、共産ゲリラが出没し、襲われたりするので、夜は危なくて走れなかった。

僕はそれ以来、１９７６（昭和５１）年米軍が完全にタイから撤退する日までおよそ8年間に亘りタイ国内にあった米軍基地の取材に飛び回った。取材に行くたびに頭の天辺から足先まで真っ赤な土埃を被って通っていた。カメラも裸で出しておくと、埃だらけになってしまうので、ビニール袋で二重に包み、振動しないように膝の上に載せておかなければならなかった。

上下左右に揺れる悪路、ガタガタ道だった東北タイのハイウェーは、この8年の間に資源豊かな米軍の手によって急ピッチで道路工事が進められ、いざというときには、戦闘機が離着出来る立派な軍用道路に変貌してしまった。

米軍の空軍基地は、最大基地のウータパウ、タークリー、ナームポン、ナコーン・ラーチャシーマー、ウボン・ラーチャターニー、ウドーン・ターニー、ナコーンパノム、バンコクと、８ヶ所に点在していた。が、この中でも東海岸のサタヒープの海軍基地の側にあったウータパウ基地は、Ｂ５２大型爆撃機が離着陸する最大の基地だった。

この他に、北部のラムパーンにも膨大な堅固な基盤で固められた米軍通信隊のレーダー基地があった。

世界の列強である大国アメリカはこのベトナム戦争に、１４５０万ドルの戦費を投資し、南ベトナム政府軍を含め、２７０万人にのぼる陸海空軍の将兵をベトナムに投入し、７８５万トンに及ぶ猛爆を加

えた。

それに、道徳上違反に当る1グラムで、1万人も殺せると言われているダイオキシンが含まれた枯葉剤作戦まで行った。このアメリカがばら撒いた枯れ葉剤は森林を枯らすだけではなく、人体にも何十年も後遺症を残す代物である。アメリカは南ベトナムの緑に包まれた青々した密林に、１９６１年から１０年間に枯葉剤を７万２０００リットルばら撒き、五分の一に当る緑を禿山に変貌させたのである。

このベトナム戦争で約４００万人のベトナム人が殺傷されたが、５０００万人の愛国精神に燃えたベトナム民族の根強い独立解放軍戦線を食い止めることはできなかった。ベトナムの民族を甘く舐めてかかったアメリカは５万６５５５人の戦死者及び、３０万３６５４人の負傷者を出し、ベトナムの解放勢力に敗北したのである。

当時、タイの空軍基地から昼夜を問わず、グワーン、ゴーゴー、キーンと爆音を轟かせ、悪魔の殺人鬼Ｂ５２重爆撃機や、Ｆ１５、Ｆ４５の戦闘機が北ベトナムやラオス、カンボジア上空を目指して飛び発っていた。

ニクソン大統領の命令に忠実に従い、殺人行為に走っていたバンコクに駐屯していた米軍の兵力は、４万３０００人にも上っていた。

タイにあった米軍基地は、タイ国学生センター（ＮＳＣＴ）の大々的な反米運動が付け火となったため、タイ政府（当時セーニー・プラモート内閣）は止むを得ずアメリカ政府に対し、米軍の軍事顧問団を除き、米軍基地の即時撤退を申し入れた。米軍はタイ政府の要望に応じ、基地を無傷で残したまま１９７６（昭和５１）年３月２１日から７月２０日まで４ヶ月の日数を費やし、基地の撤退を完了成した。

米軍がタイの基地からインドシナ半島へ空爆に行った回数は、ラオスが６７２２回、ベトナムが５５９２回で、投下した爆弾の量は、グアム島と沖縄の米軍基地を含めて、７８５万トン（第二次大戦時に落とされた量は２００万トンだけだった）におよぶ膨大なものだった。カンボジアの空爆回数は不明だが、１９７３（昭和４８）年２月から８月までの僅か半年の間に２５万トンに及ぶ爆弾が投下されている。この爆弾の量は、第二次大戦中に日本に落とされた１・５倍に当る凄まじい量である。

米兵がタイから引き揚げた後にタイのオンリーとの間に快楽を求め、この世に生まれた混血児が約６０００名、ベトナムにも約２万名に上る罪の無い混血児が生まれている。アメリカの父の元に引き取られた混血児もいるが、置き去りにされた者も大勢いる。

タイに残された混血児は、外国人の血が混ざっているが、父親がいないために、或いは、誰が親だかわからずに孤児となっている者もいる。一部の混血児は未だに国籍が取れず、僕が体験したように国籍問題で悩んでいる。米軍が置き土産に残していった髪の毛が茶色っぽい赤味を帯びた肌をした孤児はまだいいが、罪も無い黒人みたいに肌の黒い孤児は肩身の狭い惨めな思いで暮らしている者もいるのである。

■混乱するインドシナ半島

１９６９（昭和４４）年３月、米軍は密かにカンボジア領内の解放区に空爆を開始した。１９７０（昭

和４５）年３月１８日、ロン・ノル将軍がクーデターを起こし、ロン・ノル政権樹立。シアヌーク殿下は北京へ亡命し、ポル・ポト（本名はサロト・サル）と結託し、亡命政権「カンプチア民族連合政権」を樹立。同年５月１日、アメリカはカンボジアに侵攻作戦を開始した。

１９７３（昭和４８）年１月２７日、アメリカはベトナムと平和協定を調印し、米兵の撤兵を開始し、ベトナム戦争に終止符を打った。但し、独立解放軍による解放戦線は、南ベトナム政府が降伏する１９７５（昭和５０）年まで継続された。

同年２月、米空軍によるカンボジア解放区への空襲が再開され、猛爆により地上にあるあらゆるものが破壊され、殺傷された。尚、同年２月２１日、ラオスではパテートラオ軍（愛国戦線党）がラオスのビエンチャン政府と和平協定を調印し、ラオスの内戦は一応終結を迎えた。

１９７５（昭和５０）年４月１７日、ベトナムのバックアップによるカンボジア民族統一戦線軍によるカンボジアの首都プノンペンは陥落し、アメリカの反共支援を得たロン・ノル政権は打倒され、ロン・ノル大統領はアメリカの手引きでハワイへ逃走した。

カンボジア国内は、１９７５（昭和５０）年４月１７日、プノンペンが陥落したその日から、１９７９（昭和５４）年１月まで血も涙もない獰猛なクメール・ルージュ（ポル・ポト派）により同胞であるおよそ７００万人のクメール民族に対し、徹底した生き地獄政権が実地されたのである。

これに引き続き、同年４月３０日、ベトナム共産党軍により、南ベトナムの首都サイゴン（現ホーチミン市）も陥落。これでベトナム、ラオス、カンボジア３国は解放勢力主義体制化に帰したために、インドシナ半島は、最悪の事態に見舞われた。

戦火に巻き込まれ祖国を追われて逃げ出した百十数万人の難民が、タイの国境や、ボート・ピープルとして海外に流出したのである。ラオスからは、およそ１４万人に上るラオス難民がメコン川を渡り、或いは山越えし、越境してタイ側に逃げてきた。タイに逃走した難民はノーンカーイ、ナコーンパノムや、ナームポン及び、バーンヴィナイ、チェンカーンなどに収容された。バーンヴィナイ・キャンプにいた難民はほとんどがＣＩＡ（アメリカの中央情報局）の反共特殊部隊に所属していたメオ族のメンバーや家族が収容されていた。キャンプにいてもゲリラ活動を続けていた分子がいたが、連中は密林の山間を縫い密かに国境を渡り、ラオスの解放区に出入りしていた。それを、タイは見て見ぬふりをしていた。

ラオスの場合はまだましな方だった。が、ベトナムの場合は、ハノイ政府（北ベトナム）の制圧により、もともと北と仲が悪かった南ベトナムは、南北を統一され、北部の政権下に侵される結果となった。

ベトナムは国家再建、経済改革を目指し、経済力に力を注いだ。しかし、世界に網を張っている商魂逞しいベテランな華僑、或いはベトナム系華僑には太刀打ちできなかった。このため、もともと中国人を嫌っていたハノイ政権は、ソ連の後押しもあったが、旧ゴ・ジンジェム政権時代にベトナム籍を取得していた華僑に対し、身の安全を保つとの保障付きで再度中国籍に切り替える方針を切り出した。このハノイ政策に騙され、中国籍に切り替えた華僑は在庫商品及び資産を差し押さえられるなどして圧力をかけられ、国外に追放される身となった。

ベトナムからボート・ピープルとして海外へ逃走したのは１９６９年４月３０日、サイゴンが陥落し、大混乱に陥った日からだった。

ベトナムのボート難民は大きく分けて三つの流れが（飛行機族を入れれば四つになるが……）あった。

この第一陣のボート難民と称する人たちはアメリカと関わりを持っていた連中が多く、米軍の輸送機、またはボート、ボートはボートでも、不沈艦と言われた米第７艦隊の護衛付き艦船でアメリカへ輸送された人たちである。

次に、自力で小型漁船を買収し、ベトナムを棄てたボート難民がタイ湾を漂流し、タイ、シンガポール、フィリピンなどに漂着し始めた。しかし、この荒波を乗り越えたボート難民の中には運の悪いグループもあった。航海中にエンジントラブルが生じ、海流に流され、飲料水も食糧も欠乏したり、或いは沈没し、海の藻屑と消えたりした。漂流中に外国船に救助された運のいいグループもあった。が、南部タイのソンクラー沖周辺まで辿り着き一安心した途端に、タイの海賊船に襲われ、悲惨な目に遭遇したグループもあった。海賊に抵抗する男は殺され、海に放り込まれ、魚の餌にされた。女性は有無を言わせず、荒れくれた野獣のような海賊に着ている洋服を無理やりに引き剥がされ、素っ裸にされ、みんなが見ている目の前で入れ代わり立ち代り、数日間にわたり強姦されたのである。特に顔立ちの良い綺麗な娘は、海賊のアジトまで引っ張って行かれ、海賊の仲間に盥回しにレイプされ、辱められ、なされるままに涙を飲んで耐えた不幸な哀れな可哀想な娘もいたのである。

世界で一躍有名になった海賊船。タイ湾でボート難民を追跡し、荒し回っていた海賊船の乗組員は、普通は大人しいイスラム系の漁師であった。が、貧しいが故に海賊と化し、仲間と2、３隻の漁船で船団を組み、海上で疲れ果てた哀れなボート難民を狙い、人間狩りをし、したいほうだい悪事を働き、挙げ句の果てには船内にある金目な物は板まで（金の延べ棒が板の間に隠してあったため）引っ剥がし、船のエンジンに至るまで全部略奪していたのである。

ソンクラー近辺に漂流したベトナム難民は、大波小波がザザーっと押し寄せる綺麗な海岸沿いのカウセン・キャンプに収容されていた。が、一部の海賊船に襲われた悲惨な運命を辿った哀れな難民は何処へも訴えることもできず、潮風に打たれ、怒りと悲しみを抱き、無念の思いで悪事と化した海を眺めていた。

この哀れな生死をさ迷った難民とは正反対に、最後のボート・ピープルと称するグループは金を持っている人たちである。この人たちは世話役のエージェントに出国料金も含めて数千ドルの手数料を払い、外国の大型輸送船で何の心配もなく香港辺りまで両手を振って渡った商船ピープル族である。

ハノイ政権はこの他にも外国の航空機で第三国へ飛び発った飛行機族にも正式な出国手続きを取り、第三国への流出を大目に認めていたのである。

ベトナム難民がボート・ピープルとして海外に流出した数はおよそ２００万人であると言われている。が、小舟で荒波に揺られ、海上で遭難し、悲運な運命を辿り死亡した人数は未だに判明していない。

ポル・ポト派の赤いクメールにより集団で殺害され、或いは栄養失調でミイラのような溺死の状態になった見るも哀れなカンボジア難民が、ベトナム軍とポル・ポト軍双方の戦火に追われ、ヨロヨロしな

がらタイの国境、チャンタブリーや、アランヤプラテートにポツリ、ポツリと流出しだしたのは１９７９（昭和５４）年頃からだった。

僕がタイの国境で初めてカンボジア難民を見たときは、唖然としてしまった。兎に角、あんなに平和な豊か米の国だったカンボジア国内で一体何が起こったのであろうかと、思わざるを得ないほど酷いものだった。

初めはベトナム軍にこんなに酷い目に遭わされたのであろうかと、腹も立ったが、事実はそうではなかった。真相は後で判明したのだが、それは、悪名高い赤いクメール・ルージュ（ポル・ポト派）の権力者の命令によって実施された死の宣告で、罪もない善良なら同胞に振り下ろされたリンチであり、殺人行為であった。

その真相とは、１９７５（昭和５０）年４月１７日、プノムペンの首都を手に入れたカメーン・デーン（赤いクメール）はその日から実際の全権を一手に握り、カンボジア全土に強制殺人政策を設置したのがきっかけだった。

それと同時に中国の支援を得た赤いクメールは、ベトナム軍に寝返りを打ち、同年の春頃からベトナム南部を越境し、ベトナム軍に攻撃を開始した。ベトナムと拗れた赤いクメールルージュは１９７７（昭和５２）年１２月末遂に国交断絶するに至った。

それ以来双方の国境紛争は１９７８（昭和５３）年末まで継続された。が、チャンス到来を狙っていたベトナムは１９７９（昭和５４）年末に、赤いクメールを制服するためにヘン・サムリンをカンボジアの新政権に仕立て、カンボジア救国民族統一戦線軍を結成した。

体勢を整えたベトナム軍は破竹の勢いでカンボジアに雪崩れ込み、悪魔の赤いクメールをタイ国境沿いのジャグルに追い込んだ。ベトナム軍は同年1月7日、プノムペンを占領し、カンボジア人民共和国、ヘン・サムリン政権を樹立した。ヘン・サムリン政権は、まず、赤いクメールに強制されていたサハコー制度を解放し、地獄のドン底で生死の境をさ迷い生き残っていた溺死の状態にあったクメール民族を救出した。

赤いクメールの支配下にあったクメール民族は、サハコー組織を敷かれ、住居から家族全員が追い出され、各村ごとに一ヶ所に収容され、集団生活を強いられた。それがサハコー形態の組織であったが、人民は、その村から勝手に他の村へ行くことは禁止されていた。

赤いクメールが取った方針は、学者や、インテリ、芸能人、教師などのエリートから老若男女子供に至るまで集団で村外れまで連行し、有無を言わせずに殺害したのである。その殺害の仕方も、実にえげつない様々な方法が用いられた。拷問したり、撲殺したり、刺し殺したり、木に縛り付けて喉仏を切ったり、銃殺したりした。体の軽い何も知らない無邪気な可愛い子供たちは、両足を持って振り回し、頭部を地面や木の幹に叩き付けて殺したり、逆さづりにして上半身を水に漬けたりして息の根を止めたりした惨い殺し仕方をしたのである。

この獰猛な生き地獄の処刑を免れた人々には、想像も付かない耐え難い重労働が待ち構えていた。従順なクメールの民に課せられた任務は、早朝から夜更けまで野良仕事や強制労働をさせられたが、食べ

る物はほとんど何もなかった。支給される食事は、1日に二食だけだった。それも一人に付きたった二杯のお粥しか与えられない酷いものだった。それに医者も、病院も、薬品も皆無に等しく、病気になれば、ただ死を待つのみだった。重労働で疲労しきった身体は衰弱し、栄養失調となり、マラリアや、赤痢、などの病に悩まされ、疲れ果てた哀れなクメールの民は、病死や、餓死でバタバタと倒れ、大勢の屍と一緒に土に埋もれ、白骨と化した。

悪魔の赤いクメール（ポル・ポト派）は何故、何の罪もない大人しい善良なクメール民族を容赦なく殺したのであろうか。一体何が憎かったのであろうか。他国の民族を殺す、と言うのであればまだ理解できるが、同族である同胞を何故いびり殺し、殺人行為へと走ったのであろうか。か弱い女や、可愛い子供までをも殺した殺人鬼赤いクメールは人間ではない。地獄の悪魔であり、許せないことである。この世の中に神があり、人道上の道徳があるのなら、カンボジアの領土を屠殺場がわりにし、同胞である人間を意のままになぶり殺しにし、罪の意識も何も感じないポル・ポト派の兵士や幹部は世界の裁判にかけ、全員死刑に処すべきである。僕がこんなことを息巻いて叫んだとしても、過去の世界の歴史を捲って見てもわかるが、国家の自我の欲に満ちた権力者たる者は、大なり小なりこれと似通ったことをしているのであるので無理な願いではあるかも知れないが……。

カンボジア国内でポル・ポト派に殺害されたクメール人はいろんな説があるが、１５０万から２００万人余りに上るとも言われている。実際の確かな数字は不明であるが、１９８２（昭和５７）年のカンボジア人口は５７５万人となっている。１９７９（昭和５４）年1月の時点で、もし、ベトナム軍のカンボジア侵攻がもっと遅れていたとしたら、もっと大勢の善良な人が殺され、多大な犠牲者が出ていたはずである。

政治がらみで、ソ連のバックアップを得たベトナム軍がカンボジアに侵攻し、戦火を交えたのは確かに悪いかもしれない。それに、ベトナムはカンボジアの救国主ではないかもしれない。しかし、ベトナム軍のお陰で大勢のカンボジアの人々の生命が掬われたのである。

■難民キャンプ

社会主義化したインドシナ半島から難民が流出し、タイにもあっちこっちに急増の難民キャンプができた。

ベトナムからタイに逃げ出してくるボート・ピープルは南タイのナコーンシータマラート、ソンクラー、パッタニーや、東部の東海岸に沿ったタラート、チャンタブリー周辺に流れ着いていた。

カンボジアから陸続きに越境し、タイの領内に怒涛の如く溢れ出たラーンド・ピープルはほとんどが東海岸に沿ったチャンタブリーからタラート一体を占めていた。が、一部はシーサケートや、スリン、ウボン付近にも現れた。

タイに難民キャンプができた当初、僕はほとんど一人で車を飛ばし、東西南北と駆け巡り、キャンプの取材に忙殺した。何処のキャンプへ行っても、外国人のボランティアが入り込み、汗水垂らして力尽きた難民の救援活動に精を出していた。それに、アメリカ、イギリス、フランス、オーストラリアや、

その他の西側諸国の大使館員が掘建て小屋に小さな机を置き、難民たちに第三国への定住者の受付をやっていた。

その頃はキャンプへ行くたびに、いつも難民から「日本人でこのキャンプに訪れたのは貴方が初めてです。日本の大使館の人も誰も来ませんが、ニッポンの人はどうしたのですか。キャンプに応援に来るように伝えてください」と、耳が痛くなるほど言われ、穴に潜りたい気持ちにかられた。僕が見る限り確かに何処のキャンプにも日本人の姿は見当たらなかった。日本は何故こんなに出足が鈍いのであろうか。何故、もっとてきぱきと速やかに行動できないのであろうか、と思うと、歯がゆかった。

日本がやっと腰を上げたのはタイの国境地帯におよそ５０万人に上る瀕死状態の悲惨な難民が溢れ出た１９８０（昭和５５）年の初旬頃だった。それも、日本政府が難民に救援資金を出しただけだった。

そのとき現場では猫の手も借りたいほど人手不足だったが、日本からはまだ誰も応援に来ていなかった。このために「日本は金さえ出せばよいと思って、人は出さない」と、現場から喧々囂々とした避難の声を浴びる結果となった。

日本の若者が個人でキャンプに応援に来るようになったのは、それから間もなくだった。やがてバンコクに朝日新聞の横堀支局長の後援により、１９８０（昭和５５）年2月２７日、サートーン通りにあった日本人会の一室に、ラオス及びタイに１５年間在住した星野昌子さんを事務所長に迎え「日本奉仕センター」とし、後に「日本国際ボランティアセンターと改称」が発足した。これに前後して日本からは「曹洞宗ボランティア会」や、「幼い難民を助ける会」、「幼い難民を考える会」などのボランティアグループが本腰を入れて難民救援活動に従事した。一足も、ふた足も出遅れた日本はこのボランティアグループの活躍によって日本の汚名を解消することができた。

日本の国家は海外で発生するこのような緊急を要する事態に関し、もっとてきぱきと判断を下し、アメリカを始め西洋諸国に引けを取らぬよう援助資金を捻出する前に、人動力を派遣するよう先手を打ち、世界から「流石はニッポンだ」と言われる国家になって欲しいと思う。

当時、僕は暇さえあれば、愛車を運転してキャンプ巡りをした。北部のラオス難民が収容されているチェンコーンや、チェンカムなどのキャンプにいる難民の表情は、ほとんどが明るい顔をしていた。しかし、戦火に追われ、アランヤプラテート周辺に辿り着いたカンボジア難民はほとんどが栄養失調で、骨と皮だらけのまるでミイラのような姿をしていた。死んだような虚ろな目をした難民は、何かに怯え死の恐怖と戦っているかのようだった。

時期的に、丁度サケーウ・キャンプが開設されたばかりで、周囲にはまだ垣根も何もなかった頃だった。戦火に追われ生命からがらやっとの思いでタイの国境に辿り着いた難民は、外国人ボランティアグループによって救出され、タイの軍用トラックで運ばれていた。しかし、キャンプに到着し、トラックから降りてくる難民は疲れ果てた衰弱しきった自分の体を支える気力もなく、地べたにヘタヘタとしゃがみこんでしまうのだった。ある者は我が子を胸に抱き締めたまま息絶えた哀れな母親もいた。

キャンプには急増のフィールド病院ができたが、医者や看護婦なども不足していた。狭い病棟の中には板敷きのベッドも足りず、土間でウンウン唸っている者もいて、足の踏み場もないほどごったがえし

ていた。

大人も子供もマラリアに罹った者が多かったが、みんな栄養失調だった。誰もがうなだれたまま、フラフラになった体を持て余していた。難民の体臭から発散する匂いを嗅ぎ付けた蠅が鼻や口元に一杯群がっていた。が、本人はその邪魔になる蠅を手で追い払う余力もなかった。

医者は一人でも多くの人命を救おうとして、みんなの脈拍を取り、休む暇もなく診察を続けていた。だが、患者に点滴をするにも皮膚の表面から消えかかった乾涸びた血管に針を差し込むにも一苦労する有様だった。

視力の衰えたトロンとした瞳は、生死の谷間をさ迷い、見ている目の前で一人また一人と、息絶えて逝った。仏になった亡骸は筵に包まれ、炎天下の空き地に放置され、キャンプの周辺にゴロゴロ転がっていた。死んだからといって死体の処置をする者もいなかったし、線香を立てて拝むゆとりも余力もなかった。これが戦争がもたらした悲運を背負わされた人間の果かない運命なのである。

僕は今までにこんなに大勢の人たちが見ている目の前でバタバタと倒れ、死んで逝ったのを見たことがない。みんなやっとタイの安全な地まで逃げてきたのにと、思うと、悲しかった。

せめて線香の一本でも立ててと思っても、何もして上げられない僕、足元に並んでいる不幸にして命を落とした哀れな難民に、手を合わせ、「どうか安らかに眠ってください」と、冥福を祈るのみである。そもそもこのような悲劇が発生するのは戦争が原因ではあるが、僕は何故か、このような哀れな人たちの姿を見つめていると、悲しくなってくる。

キャンプ内の其処此処に大勢の難民がしょんぼりとした表情で寝転がったり、座ったりして疲労した体を休めていた。僕はその中の一人に瞳を向けた。頬はくぼみ眼だけが異常に大きく見える赤ちゃんを抱いた母親と眼があった。赤ちゃんは母親の乳房をまさぐっていたが、小さな可愛い口で力なくチューチュー乳を吸っていた。が、皺くちゃに干からびた母親の乳房からは乳は余り出なかったようだった。子供は泣き叫ぶ元気もないのか、死んだようにぐったりしていた。キャンプには未だ子供に飲ませるミルクもお菓子も何もなかった。

僕は余りにも可哀想に思い、サケーウの町まで車を飛ばし、その子にミルクを買ってきてあげた。言葉は通じなかったが、「どうか生き伸びてくれ」と、心の中で叫び、母親に手渡した。母親はじっと僕の瞳を見つめていたが、無言のまま涙をポロポロ流し、手を合わせた。僕は自分の大きな手で母親の手をそおっと握り締めてあげた。

僕がタイ・カンボジア国境周辺に流出したラオス、カンボジア、ベトナムの可哀想な難民を取材していた１９７９年１２月１５日当時の難民キャンプの資料が手元にあるので、参考までに記しておく。

チャンラーイ県チャンコーン郡	５、１７４人
パヤウ県チャンカーン郡	２、３１４
ナーン県バーン・ナムヤウ	１２、２３０
ナーン県ソプトゥアン	９、５６１
ウタラディッ県フアックター	１、３２０

ローイ県バーン・ウィナイ　３２、５５３
ノーンカーイ県ノーンカイ郡　３１、７２４
ブリーラム県　８５９
シーサケート県シーキュウ　１、６５４
ウドーン・ラーチャタニー県　２８、５５２
スリン県ラムプック　３、２４２
プラチーンプリー県アランヤプラテート　４、３６５
チャンタブリー県レームシン　１、８１１
タラート県マイルート　６、４１３
ソンクラー県ソンクラ郡　３、９５５
ラオスから　１２３、９８０
カンボジアから　１５、３０８
ベトナムから　７、２７９
合計ベトナムのボート難民５、７９９人を含めて　１４６、５６７人

１９７９年１２月１５日の記録に残っているカンボジア国内の戦火に終われて命からがらタイに逃走した哀れなカンボジア難民が避難していた難民キャンプの所在地及び人口を参考までに記しておく。（資料は何れも現場で国連の報告による）

ブリーラム県のキャンプ　１、０００人
カウイダーン・キャンプ　８０、０００
サケーウ・キャンプ　３１、０００
アランヤープラテート・キャンプ　５、０００
カンプッ・キャンプ　２、０００
カウラーン・キャンプ　２、０００
マイルート・キャンプ　７、０００
合　計　１２８、０００人

■切ない野辺の恋

恋とはいつ何処でどう巡り合うか解らないものである。男と女が普通に付き合っている分には何の変化も起こらない。が、一旦恋が芽生えると、恋とは盲目なりと、諺にも言われているように、相手の声を聞いたり、側にくっついていて顔を見ていないと、居ても立ってもいられなくなり、ハートがズキンズキーンと疼くものである。

ふさふさした長い綺麗な髪を肩まで垂らした彼女と知り合ったのは、僕がまだ住友に勤めていたときだった。

それは確か１９５９（昭和３４）年の春頃だった。まだタイ語も余り話せない日本から来たばかりの彼女は、初めのうちはただの友人として付き合っていた。

僕が彼女と出会った頃、僕自身は自分の国籍問題で悩んでいたときだったし、彼女も結婚した相手と旨くいかず離婚問題が生じ、家庭的にも悩んでいたときでもあった。時期的に寂しさと孤独感に見舞われていた二人の境遇が一致したこともあったが、お互いの身の上話を聞いてからは、頻繁に会うようになり、遂に恋の虜になってしまった。

僕は仕事やアルバイトで忙しかったが、彼女とデートする日は、仕事も余り手に付かず、彼女のことばかり考えていた。彼女とシーロム通りの電車の停留所で会ったり、プラトゥーナームの映画館の近くで会ったりして、映画を観たり、静かなサートーン通りのクローン（運河）に沿った並木道を手を繋ぎ寄り添って歩いたりした。

映画を観ていてもぴったりとくっつき、手を握り合い接吻したりした。あるときは人っ子一人通らない星明りに照らし出されたバンカッピ（今のスクムヴィッ）の田圃の畦道を恋を囁きながら歩いた。美しい夜空の星を眺め、群れを成して飛び交うパッパッとお尻からネオンサインのような光を投げかける蛍に見守られ、抱擁し、口付けし、木陰で彼女を抱き締めて甘い恋の営みを交わした。

僕は市内で彼女と映画を観たりしたときは、よくサームロー（三輪車）を利用した。それはくっついて座れるからでもあったが、雨が降ったりすると、サームローは乗客が濡れないように幌をすっぽり下ろすので、外から座席が全然見えなくなる仕組みになっていた。従って、雨の日にサームローに乗ったときは、目的地に着くまで彼女と抱き合いキッスの雨を降らせていられる楽しいひとときでもあった。

僕は彼女とワッ・ポー（ポー寺）や、ワッ・スタッでもデートして逢っていた。誰も通らない静かな境内で将来のことについて話し合ったりした。僕の希望は、日本で大きなアパートを手に入れて、アパートのオーナーになろうかと、大きな夢を描いていた。そこで、僕は彼女の名義で日本の銀行に毎月１万円ずつ預金するようにしていた。僕は自分の国籍がきちんと決まったら、彼女と一緒に日本で暮らすつもりでいた。しかし、物事は全てがうまくスムーズにいかないものである。

僕の大好きな彼女は僕の義理の母から何かよけいなことを言われたらしく、或る日のこと、突然、「僕とは結婚できない、私のことは諦めて」と、顔を曇らせて難題を言い出した。先夫とはもう既に離婚していたし、何も問題なかったはずである。が、理由は何も教えてくれなかった。

やっと実りかけた恋だったが、遂に愛しい彼女を説得することはできなかった。失恋した僕は死ぬほど辛かった。しかし、これも僕に与えられた運命なのだから仕方がないことだった。

彼女は僕を置き去りにして日本へ帰国することになった。僕は金銭面では苦しかったが、彼女のためにアルバイトで旅費代を工面し、切ない気持ちで彼女と最後の別れを告げた。

■女難の相ありや

僕は素敵な日本の女性と知り合い、短期間ではあったが、彼女と蜜蜂のような甘いロマンスを経験した。

恋愛とは愛すれば愛するほど性の虜になり、相手の肉体に素っ裸で触れたくなる衝動にかられ、身に纏っている洋服が邪魔になるものである。

僕は初恋の彼女と別れた後は、自分の国籍問題がガタガタした関係もあって、仕事やアルバイトに忙殺した日々を送っていた。別れた彼女とは2、3回手紙のやり取りをしただけで、2人の縁は綺麗さっぱりにプッツリと切れてしまった。

それ以来、僕には恋人と称する愛人は結婚する相手が現れる日まで一人も居なかった。ただ不思議なくらい何処へ行っても女には持てもてにもてた。このために、男からは羨ましがられ、女からは妬み合いで嫉妬されたりしたが、僕は誰にも手をつけなかった。

ただひとつ困ったことは、プーケッの親戚関係や、友人が早く結婚しろ、と言って、いろんな可愛い娘を連れてきて無理やりに見合いをさせられたのには閉口してしまった。バンコクに居た友人の手口は、率直に「僕にお見合いをしないか」と言えば、断られるのを百も承知していた。そこで、手を変え品を変えて「一緒に飯を食べよう」と誘ったり、「地方へ遊びに行こう」とか「パーティーがあるから踊りに行こう」とごまかして、僕を連れ出し、若い綺麗な娘を紹介し、ごく自然に見合いのような形を取っていた。だが、僕にしてみれば、綺麗な可愛い娘を次から次へと紹介してくれるのは有り難かったが、実際には騙されたようなもので、全然興味なかった。

プーケッの親戚の場合は、もっと酷かった。お年寄りの連中が自分勝手に気に入った好きな娘を決めてしまう悪い癖があった。兎に角押し売りみたいなもので、「この娘は気立てが優しくて良い娘だから」とか、「大学出で、鉱山を持っている金持ちの娘だから結婚しなさい」と言ったように、強制的に結婚話を持ち込んで来るのだった。このような難題が2、3回降り掛かってきたが、僕はそのたびに「そんなに良い娘で好きならば自分たちで勝手に結婚してください」と、きっぱり跳ね返していた。

それに、これも住友に勤めていた頃だったが、2、3の取引先の社長の娘に見初められて、社長や本人から結婚話を持ちかけられたこともあった。

僕には女難の相があるのかもしれないし、体内に女の心を引き付ける変な磁石のような電波があるのかもしれない。

地方へ旅行しているときもそうだった。辺鄙な農村の農家や、高地に住んでいる山岳民族の部落を訪れ、其処でホームステイし、1、2泊したりしたが、何故か、村長さんから結婚話を持ち掛けられたりして、そのたびに断るのに一苦労した。

僕はチヤンマイへ行くたびに波多野さんの家にも時々泊まったりしてお世話になっていた。一度、波多野家でみんなと一緒にお正月を迎えたことがあった。みんなでワイワイ言いながら記念写真を撮ったりしてからだった。波多野秀さんから「正夫ちゃん、家には年頃の女の子が大勢いるから、好きな娘がいたら誰でもあげるから遠慮なく言ってね」と、言われたことがあった。が、僕にはそのようなもやもやした気持ちは全然なかったので、話はお流れとなってしまった。

これも同じチヤンマイで起こったときの話であるが、僕は麻薬の密売をやっていた中国から逃走して来た国民党のあるボスと知り合った。彼に「日本と麻薬の商売をやらないか。ニッポンとコネさえ付け

てくれればいいのだから、送り届けるのは全部こちらで手配するから、捕まるようなことはしないから、絶対に保障するから、お礼はうんとはずむから……」と、しつこく言われたが、僕は「人を殺したりするような蛇の道には足を踏み込みたくないから……」と、きっぱりと、断ってしまった。

僕はその後も彼とはずっと交際を続けていた。その彼が居た家には５、６０人のカラワン部隊と、その家族がごった返しになって住んでいた。広い敷地内にはピカピカに磨いたりっぱなベンツや、大型のトラックやジープが並んでいた。それに、離れの木陰には可愛い目をした背の低い足の丈夫なロバが２０頭ほど繋がれていた。其処にも未婚の女性が数人いたが、彼女たちの皮膚はきめ細かく、色白で綺麗だった。

ボスには３人の娘がいたが、その中の末の妹が僕を好きだ、と言いだした。両頬が赤くて愛嬌のある顔をした彼女は実に可愛い娘だった。或る日彼女から「僕が好きだ、僕とだったら何処へでもついて行くから」と、恋を打ち明けられた。突然のことで、寝耳に水だった僕はびっくりしてしまった。僕は結婚相手を探しに来ていたわけでもなかったし、ましてや将来麻薬の王様になろうなどと、大それた欲望もなかったので、悪いけども、アバヨーと、其処からさらばしてしまった。

チヤンマイでは、まだ他にもエピソードがある。

僕は一度、１月の初めに一週間ほどの予定を組み、数人の友人と護衛付きで、チヤンマイのフワァン郡の山奥からビルマの国境沿いに芥子の花の取材に行ったことがある。そのとき、ムーソー族の酋長や、荷物を運ぶポーターの連中が食糧の入った荷物をロバの背中に乗っけて、道案内役に立ってくれた。そのとき、僕は酋長と一緒に先頭にたって歩きだした。酋長は坂になった山道を登って行く僕の歩き方を見ていたが、歩く速度が速いのでびっくりした顔をしていた。途中で彼が背負っていた竹筒に入った水を貰って飲んだり、バナナの葉っぱに包んだお粗末な弁当を横取りして食べたりしているうちに、彼と仲良くなってしまった。

早朝に山の麓にあったＢＰＰ（国境警察警備隊）が警備している村をスタートし、山の天辺にある小さな彼の部落に辿り着いたのは、午後３時頃だった。僕たちが一番乗りだったが、酋長は分厚い手で僕の太股を触り、撫で回して（お前の足は馬みたいだ。馬みたいなバネのある足をしている）と、感心したように言うので、「とんでもない、僕は馬じゃないよ、猿だからねぇ」と、冗談を言って、２人でゲラゲラ笑った。

僕は酋長の家に通され、其処で大勢の家族から歓迎されたが、肝心な言葉は余り通じなかった。そのうちに黒っぽい民族衣装を着た酋長の娘が現れた。小柄な彼女は笑顔を投げかけ愛嬌を振り撒きながら大きな葉っぱが入った熱いさお茶をだしてくれた。山の気温は冷えていたが、そのお茶をお腹の中に流し込むと、自然と体が温まった。

その夜は薄暗い酋長の家の広い土間に３０人余りの連中が集まった。囲炉の上に乗っけた大きな鍋でグスズグズ煮ているおかずをみんなで突っ突き、ワイワイ、ガヤガヤ言いながら酒盛りが始まった。

連中が「米で作った」と言う、地酒がだされたが、ちょっと飲んだだけでも頭がクラクラしそうなほど強い酒だった。が、その酒をみんなで酌み交わして飲み、いい気分になってしまった。

外の気温は1度ぐらいで深々と冷えていた。室内には寝床も毛布もなかった。こんなに寒いのにどうやって寝るのであろうかと、心配したが、それは取り越し苦労だった。僕たちは地元の人に習えで、みんなの後にくっついて窓のない物置小屋になっている納屋の中に入った。中には藁が一杯積み重ねてあったが、そのゴワゴワした藁の中に潜り込んだ。藁の中は昼間に暖められた気温が保たれていたので暖かかった。僕はこの自然現象をいかした藁の暖房室でスヤスヤ寝ることができた。

タイとビルマ国境周辺の取材も終わり、いよいよ帰ることになった。すると、人のいい酋長がいきなり僕に「バンコクに帰らないでくれ。此処にいて山の道案内役になってくれないか。俺の娘をあげるから将来は俺の跡取りにするから……」と、哀願され、参ってしまった僕は「いずれにしても僕は帰らなければならないから、また来るから……」と、言い残して別れることにした。

酋長は残念そうな顔をしていたが、諦めたらしく「何もないけども、これ、お土産」と言って、別れ際に僕の手を握り、肩を叩いて2キロもする黒っぽいアヘンが入っている袋を頂戴した。山では最高のお土産であるかも知れないが、こんなヤバイ物を持って歩いていたのでは山を降りた途端に、いつ何処で逮捕されるかわからない恐れがった。僕は酋長の親切な善意に心から受け止め、感謝すると共に彼のせっかくの行為を無視したくはなかった。しかし悪いけど、僕は良心的に許せない気持ちが強かった。僕は人々を傷付ける彼から貰った意味合いのある大事なアヘンの塊を、途中でサラサラ流れている透き通った綺麗な小川に流してしまった。麻薬の悪魔から一人でも多くの人たちが助かってくれればと、祈りを込めて……。

僕はこうして行く先々で初対面の女から追い回され、年寄りからは娘の婿になってくれと、迫られ、願ってもない嬉しいような困った話が次々と舞い込んできた。これも僕にとっては善意な人々から受けたひとつの経験であるが、面白いものである。

僕の体内には女難の相があるのかないのかはわからない。だが、いずれにしても、みんなから好意を持たれ、好かれることはいいことだと思っている。僕は未だに何処へ行っても気立ての優しい美女に取り囲まれ、チャホヤされている運のいい男でもある。

■結婚にゴールイン

僕には水泳を教えたり、日本語を教えたりしたタイの弟子が５０００人余りいる。この他に、日本人の弟子もいるが、日本人の場合はほとんどが水泳教室の教え子たちである。

僕が日本人に水泳を教える前までは、ずっとタイ人や外国人にしか教えていなかった。国立運動場の５０メータープールでは、タイの水泳選手までも養成し、４年ほど潜りのコーチをしていたことがある。

日本人の子弟に水泳を教えだしたのは、１９７０（昭和４５）年の春頃からだったが、目が悪くなる２０１３年になる頃まで約４２年間教えていた。その頃の僕は親戚と経営していた「夢の旅行社」が潰れたために、まだ借金を抱えてピーピーしていた。

左右に首が回らなかった僕は、切羽詰ってくると、最後の財産である愛用のカメラをぶら下げて、いつも行くクローン・トーイの市場の側にあった行きつけの質屋を利用していた。

かれこれ4、5年も経っていたが、店員とは顔馴染みになっていた。僕はもうこの質屋の常連になっていたので、質札に右親指の指紋を押すだけで済んだ。利息も安かったし、誰にも気兼ねをすることもなかったので便利だった。

１９７０年代になった時点で僕がやっていたアルバイトは、日本語教室、水泳教室、バーの歌手、および、ＮＨＫや朝日新聞関係の仕事だった。日本語教室は家庭でも教えていたし、潜りで（文部省に正式に登録してなかった）日本語学校を開き、早朝の部と、夜の部に分けて日本語を教えていた。

僕が潜りで日本語教室を始めるまでは、シーパラヤー通りのワッ・ケウファー（ケーウファー寺）にあった夜学の日本語学校で、佐藤先生のアシスタントとして日本語を教えていた。だが、佐藤先生がやっていたこの日本語学校はある事情で、解散してしまった。このために行き場をなくした僕の弟子の要望によって我が家で引き続き日本語を教えることになった。

その頃僕は交通の便がいいルムピニー公園に近い庭の広いソーイ・サーラーデーンの平屋に住んでいた。窓も扉も門もきちんと閉まらない無用心な古ぼけた家だった。隣近所では時々泥棒騒ぎがあっが、がらんとした我が家には何もないのを知っていたのか泥棒には一度も入られることはなかった。

僕はこの家で午前7時から8時までの午前の部のクラスと、午後6時から8時までの午後の部と3クラスに分けて日本語教室を開いていた。家庭で日本語教室をやっていたときは下駄履きで、ラジオのニュースを聞きながら教えていた。始めの頃弟子は３０人ほどしかいなかったが、３ヶ月後には５０人余りの人数に膨れ上がり、我が家では教えきれなくなってしまった。

そこで、チュラー赤十字病院の真ん前に空いていた3階建てのビルを借りて、日本語学校を開校することにした。教室も3部屋に増やし、新聞やラジオでも宣伝し、生徒を募集し、３人の先生で教えるようになった。僕が始めた日本語教室はヒットし、夜学に通って来る生徒が１００人を超える盛況振りを示した。

大勢の弟子の中に、当時ドゥシッタニーホテルのシンシア宝石店に勤めていた華僑系のユピンがいた。彼女の中国名は「謝玉平」だった。ユピンは身を飾らないごくありきたりな普通の人間の顔をした女だった。僕は彼女の瞳を見た途端に何かのショックで感電したかのように、この人だ、と、彼女が好きになってしまった。人間には何かに結ばれた縁というものかあって、切っても切れないものがあるのかもしれない。何故か、僕には彼女となら人生の辛苦を舐めながら歩調を合わせて旨くゆけそうな気がした。

僕はそこで、早速「ドゥシッタニーのコーヒーショップで会おう」と、彼女にデートを申し込んだ。しかし初めてのデートは棒に振られ、がっかりしてしまった。

ユピンは僕がサーラーデーンの家で教えていた頃から義理の母の世話をしてくれたり、僕の手伝いをしてくれたりしてくれた気立ての優しいいい女であった。チュラー赤十字病院の前で教えていたときも、近くの屋台からご飯を買ってきたりして、親身になって僕の面倒を見たくれるので、僕は日毎に彼女が好きになり、早くこの人と一緒になりたい、と、思うようになった。

僕は或る日、彼女に「僕はユピンが好きだ。僕と結婚して」と、担当直入に愛の告白を打ち明けた。不意を打たれた彼女は、流石にびっくりしたらしく、ドキマギしながら、「駄目だね、私は結婚できない」

と、即座に拒否されてしまった。
だが、意志が強かった僕はひるまなかった。どんなことがあっても自分のものにするのだ、と決めていたので、事情を聴きだすことにした。
ユピンは過去に置いて一度結婚し、失敗した苦い経験があった。それも、女の子を生んだ、と言う理由だけで、棄てられ、彼の家庭から顧みられなかった苦しい思い出があった。相手の男は華僑で、ヴィチャイ・タラクーンチャイさんと言う弁護士をしていた人だった。ユピンが病院で女の子を出産した時点から、見舞いにも来なかった。ただ「何故女の子を産んだのか」と、毛嫌いされ、一方的に離婚されたのだった。男女の性の営みで、男が生まれるのか、女が生まれるのか、そんなことは誰が知ろう。性行為の結果、体内でお互いの精子と卵の接着によって男女の性が決まるものである。それなのに、女だからと言って母親一人の責任にし、1銭の金も与えないで親子とも見捨てるなんて、実に酷い話である。
不運に見舞われ、貧乏のドン底に落ち込んだ彼女は、初めの頃は親戚のお茶屋で売り子の手伝いをして、飯にありついていた。が、1銭の収入もなかったために、ラーパソンの大丸で勤めたり、宝石商の店先で宝石のセールスをしながら娘、チャニダーを育てていたのだった。
何も知らなかった僕は、彼女の苦しい身の上話を聴き、彼女が可哀想でたまらなくなり、抱き締めて慰めてあげたい気持ちにかられた。
彼女は「男はもう懲り懲りだ、信用できない。それに私には娘がいて瘤付さだから無理だわ」と言って、俯いてしまった。が、僕は「僕は違うんだ、瘤付きであろうと、何であろうと、そんなことは僕には関係ないいんだ。僕が好きだと言ったら、好きなんだ。困らせたりなんかしない、心配もかけない、きっと幸福にしてあげるから、僕を信じてくれ、僕と結婚してね。いいでしょう」と、強引だった。
彼女は嬉しそうな複雑な表情をしていたが、「今答えられないから、1日だけ考えさせて頂戴」と言い残して、別れを告げた。次の日、瞳を潤ませた彼女から「いいわ、私、貴方と結婚する」と、ＯＫのサインを頂戴した。
話が決まれば物事の段取りは早かった。僕は早速大先輩に当たる懇意にしていた泰密ラジオ販売店の主の温明根さんに頼み、彼に彼女の両親との交渉を託した。
彼女の両親はタノン・トックに近い細い路地に入った薄汚れたバーンマイの長屋に住んでいた。「僕はユピンと結婚したいので、彼女をください」と、担当直入に突っ込んだ。すると、じろりと一瞥した痩せこけた彼女の母は、僕の宗教や、黒い洋服を着ているけど、僕が一体何をしているかについて質問の雨を降らせてきた。僕は「別に宗教は何もないし、フリー業で月々決まった収入もない。家もなければ財産もお金もない。あるとすれば、このニコンのカメラが一台あるだけです」と、ざっくばらんに僕の有りのままの姿を打ち明けた。母親は「それでどうやって自分の娘を養っていくのだのだ」と、ヒステリックな口調で反発した。が、温明根さんの温和な話術で縁談は無事にゴールインとなった。
ただし、結婚式の日取りについてはタイ式に2人の運勢を占い師に占って貰ってから決めることになった。僕にしてみれば、そんなことはどうでもよかったのだが、両親の手前があったので、その足で近くの占い師の所へ赴いた。

僕は「早急に結婚したいので、近々に結婚できる日にちを取り決めてほしい」と依頼し、２人の生年月日を紙に書いて差し出した。何を言われるか、と思っていると、じろりと僕の顔を覗き込んだ占い師は、勿体ぶった口調で「僕には魔物が取り付いている。それを追い払う魔よけの仏像を買って、スワンプルー寺のお寺の仏壇に供え、タムブン（お布施）して毎日お坊さんにお経を唱えて貰えば大丈夫だ」と言われた。

僕は騙されたと思い、占い師のおっさんが指示したスワンプルー寺のお坊さんに高さ２０センチほどある小さな仏像を託し、お布施を施した。まず、目の前でお坊さんに呪い避けのお経を唱えて貰い、それから一週間後に結婚することになった。

トントン拍子に進んだ僕の縁談は１９７３（昭和４８年６月１０日、僕が子供の頃から知っているシーロム・レストランの２階で結婚披露宴パーティーをすることになった。金も余りなかった僕は本当に親しい友人や、親戚関係だけの少人数に絞って招待することにした。

僕は招待状も何も出さなかった。ただ簡単に電話一本で「おい、６月１０日は僕の結婚式だから、シーロム・レストランに来てね」と言った調子で、電話を掛けまくった。僕の親しい仲間は、また、僕が何か冗談を言っている、と思っていたらしく、「正夫、一体何があるんだよ」と、問い返すので、「結婚式だよ」と言うと、「相手は誰だよ」と、問い返すので、「女だよ」と言ったが、ただゲラゲラ笑うだけで、信じてくれない友人もいた。

当日、ミッキー（新野充男）や、盛男（波多野盛男）君みたいにアロハ姿で来て、みんなで大笑いしたくらいだった。僕は親しい少数の同窓生や友人、親戚に囲まれて結婚式を挙げることができた。

結婚式の日は、当時、朝日の支局長をしていたチャリー（村上吉男）さんにスピーチをして貰った。僕はみんなの写真をパチリ、バチリと撮ったり、ハーモニカを吹いたり、歌をうたったりして、騒ぐだけ騒ぎ、披露宴はめでたし、めでたしと終幕と相成った。

■新婚旅行

結婚した僕は着の身着のままの状態でセンルイ・ソーイ３の２階建ての長屋にいた彼女の家に転がり込んだ。歩けなかった義理の母には暫くの間別居して貰い、僕は２人だけの愛に満ちた結婚生活に踏み切った。

僕は直ぐにでも新婚旅行にでも行こうと思ったが、それは不可能だった。何故かと言うと、日本語学校や、水泳教室があったので、ほったらかして行くわけにはいかず、暫く伸ばすことにした。

僕はまず、チュラー赤十字病院前でやっていた日本語教室を解散し、水泳教室も一時中止にして、遅まきの新婚旅行をする計画を立てた。先立つ物がそんなになかったので、シンガポール行きの国際列車でペナンまで行き、後は乗り合いタクシーでシンガポールまで行くことにした。

ユピンと２人で、蒸し暑いフワラムポーン中央駅で国際列車に乗ったのは、７月初旬だった。僕が乗った車両には外国人が多かったが、車内はひっそりしていて穏かな空気が流れていたので新婚旅行中の僕たちにとっては有り難かった。

昼間座っていた座席は暗くなると、ガタガタ振動するベッドに変わった。下の寝床はユピン、上段の箱みたいなつり下がったベッドは僕となっていた。だが、せっかくの新婚旅行なのに、２人が離ればなれでバラバラに寝るのも馬鹿らしいと思い、僕は彼女の狭い布団の中に潜り込んだ。ガッタン、ゴットン、シュッシュポッポーと揺れる長い幕が垂れた最高のベッドで朝まで彼女を抱き締め、甘い夢を見ていた。

バタワースの渡しでフェーリーに乗り換え、ペナン島へ渡り、一番安いホテルに落ち着いた。ペナンでは２人で静かなジョージタウンを歩き回り、バスで蛇寺や、タイ寺を観光したり、ケーブルカーでペナンヒルに上ったりして写真を撮り歩いた。

ペナンからは５人乗りの乗り合いタクシーでクアラルムプールへ向かった。後ろの座席に座った３人の乗客は、大きな瞳をした人の良さそうなマレー人ばかりだった。タクシーが走り出して暫くすると、誰からともなく歌が飛び出し、走ってゆく道すがらみんなで手を叩きながら陽気に歌を歌いだした。タクシーは歌の流れと共に、心地よいハンドルの捌きでクアラルンプールへと向かった。小太りした運ちゃんがこれまたお人よしで、途中でわざわざ車を停めて「皆さん、喉が渇いたでしょう」と言って、みんなに冷たい飲み物を奢ってくれたりした。マレー半島にはまだこんなに親切な優しい人が居るのかと思うと、涙が出るほど嬉しかった。

その日、大都市クアラルンプールに着いたのは夜だった。その晩は、繁華街の横丁にあった怪しげなネオンが灯っている華僑系の夜の蝶がうろうろしている連れ込み宿で宿泊することになった。

クアラルンプールは僕が子供の頃にマラッカにいる父に会いに行くときに泊まったことがある懐かしい地だった。３１年ぶりで訪れたクアラルンプールは昔の面影はほとんどなく、見違えるほど立派な都市に変貌していた。僕の記憶にあるものと言えば、それは綺麗になったクアラルンプールの駅と、イスラムのモスクぐらいだった。

クアラルンプールから初めて訪れる小さな貿易港、シンガポールへ向かった。シンガポールは島の中にある整頓された箱庭のような綺麗な街だった。第二次大戦中に日本軍と大激戦を交えて陥落し、昭南島と変名され、後に大勢の中国人が虐殺された曰く付きの悲惨な地でもある。

僕は静かに眠っている日本人墓地や、殺されたシンガポールの人たちの記念碑に躓き、無念の気持ちで散って逝った人たちの霊に手を合わせて冥福を祈った。それと、最後のお別れに戦犯容疑者とみなされ、父が投獄されていたかの有名な死の刑務所、チャンギー刑務所を遠方から眺め、乗り合いタクシーでシンガポールを後にした。

帰りは、シンガポールからマレーシアを北上し、サダオの国境でタイのタクシーに乗り換え、まっしぐらにソンクラーへ向かった。僕は思い出深いソンクラーで彼女と２人で数日間のんびりすることにした。肝心な旅費となる金はまだ多少残っていたので、最高のサミラーホテルに泊まり、松林が風に揺れてザワザワ騒いでいる懐かしいサミラービーチを散歩し、遠くに浮かんでいるいつまで経ってもかわらない猫島と鼠島を眺め、昔の面影を偲んだ。

僕は裸電球が左右に揺れ動いている浜辺の屋台で潮風に打たれ、ザブーン、ザブーンと打ち寄せる波

の音を聴き、新鮮で美味しいシーフードを口にほうばり、たらふく食べた。
子供の頃、寂しさに耐えかねて涙を流して見つめた美しいサミラービーチ。僕は今もこうして同じビーチに立っている。最愛の彼女と手を繋いで立っている。あーぁ、今は何と幸せな身であろうか。

■幻の夢

新婚旅行を終え、ソンクラーからバンコクに戻ってきた２人の懐には、僅か２００バーツのお金しか残っていなかった。これが僕たちの全財産だった。僕は別に慌てもしなかったし、これから捜せばいいやと、呑気に構えていた。
だが、ユピンは流石に女だった。「先生、お金はこれだけしか残っていないのに、今月からどうやって暮らしていくの」と、心配した顔色で僕を見つめた。僕は「心配するなよ、僕がちゃんと探してくるから、お前は家でヌイ（娘のニックネーム）の面倒を見ていればいいのだから……」と言い聞かせた。
僕は彼女と結婚してからは、今まで歌っていた潜りの歌手業も、潜りの日本語教室も、完全に辞めてしまった。これからは余り金にならない自分が好きな情報関係の仕事と、水泳教室だけで生活の道を切り開こうと、考えていた。僕は水泳教室をメインの収入源とし、情報関係の仕事をサイドワークにすることに決め、次の日から、気違いみたいにバリバリ働きだした。僕は自分の手足になる車や、終身安心して住める自分の家を手に入れ、欲しいと思うカメラの機材や他の物等を、手に入れるまで働く決心をした。
今、僕が希望している夢が実現した暁には、僕がいつ死んでも家族が路頭に迷わないように配慮し、幸せに暮らしていけるようにお膳立てをしておかなければならない。これが、小さな家庭の柱である戸主として僕が責任を持ってやるべき仕事である。
この自分が描いている幻の夢を実現させるのは難しいと思う。後何年掛かるかわからないし、また失敗に終わるかもしれない。だが、万が一運よく成功したら、その後は、自分勝手に好きなことをしてフラフラと人生をエンジョイしながら、のんびりと暮らす。これが、僕が自分勝手に描いた夢だった。
僕は日本人会のちらしに、水泳教室の募集広告を出して貰った。初めの半年はスクムウッ・ソーイ１のプールや、エラワン・ホテルの横にあったテープシリンのプールを借りて教えていた。しかし、他人様のプールを借りていると、いろんな細々したトラブルが起きるので嫌になってしまった。仕方がないので、プールを借りて教える方針を中止し、みんなが住んでいるアパートへ出張して教えるようにした。僕がアパートで水泳教室をやりだしてからは、弟子もぐっと増えた。兎に角、一週間に１８０人の弟子を、朝の１０時頃から夜の８時頃まで休む暇もなくぶっ通しで教え続けた。午前中と、夜の部は大人（主に主婦）のクラス、午後１時から７時頃までが子供のクラスだった。
僕は日曜日も休まなかった。昼食抜きでプールに漬かり、子供たちと楽しくワイワイ騒ぎながら、真っ黒になって水泳の指導に当った。僕の水泳の教え方は、僕が日本人学校で町田先生に習った通りにスピードよりも形に重点を置いて指導した。従って、腰がくにゃくにゃにならないようにし、手足がバネみたいに真っ直ぐ伸びるように、大きなフォームで正しく泳ぐ泳法を教え込んだ。僕の水泳教室は厳し

すぎると、批判する人もいたが、子供たちは僕に懐き、一応好評だった。
僕が汗水垂らして一生懸命に教えていた水泳教室の収入の方は、少ないながらも自分が欲しいと思う物が何とか買えるようになった。
僕はまず、ヌイのために、ヤマハの電気オルガンを、続いて、エレクトローン、そして、ピアノを、といった順に月賦制度で購入し、物をひとつずつ揃えていった。僕は更に親しい弟子に頼み、１９７５（昭和５０）年の夏に、日本から輸入されたばかりの、７５年型の三菱ランサーを、２年のローンで分けて貰い、それ以来ランサーのハンドルを握り締めてタイ国中を猛スピードで走り回るようになった。
次の年には、ナコーンサワンに３ライ半（１ライは１６００平米）の安い土地を購入し、一応地主の仲間入りをさせて貰った。そして、１９７９（昭和５４）年の春には友人の紹介でランシッの田圃だった土地を、２年月賦で９ライ購入し、４ライを埋め立ててマンゴーの果樹園にした。
１９８１（昭和５１）年６月、僕は運よくサートゥプラディッのソーイ・プラドゥー１に、まだ基礎工事が始まったばかりの影も形もない「後２年後に完成する」と、言われた各階にベランダが付いている土地付き４階建てのタウンハウスを手に入れることができた。
僕が描いていた幻の夢は、ピシャピシャはねる水飛沫と共に、結婚後１０年振りにやっと正夢となった。
僕は収容所を出てタイに残ってからは、そのままバンコクに住み着き、貸家住まいが始まった。しかし、家を借りていると、オーナーといろいろなトラブルが生じるものである。家賃が払えなかったり、家の契約切れ、或いは、家主に家を売り飛ばされて追い出されたりしたのを含めると、移転した回数は１３回にも及ぶ。移転するたびに、トラックを雇い自分のガラクタ荷物を絡げ、侘しい思いをして運びださなければならなかった。僕はそのたびに、アーァ、自分の家がありさえすれば、と、思っていた。
今までは自分の家がなかったために、なけなしの金を叩き、苦しい思いをして家賃を払ってきた。だが、これからはもう誰にも追い出されないで済むのだ。無知の社会に飛び出し、怖い物知らずで突き進んだ暗黒の道。あーぁ、やっと３５年ぶりに手にした我が家。安楽に暮らせる愛の住み家が、自分の家が、家族が安心して住める家が、人生で一番必要とされている永住の地、我が家を手に入れたのだ。

■義理の母テルの死

僕が結婚したとき、ユピンは２６歳で、可愛い連れ子のヌイが６歳だった。ヌイは小さいときからおばあちゃんに可愛がられて育てられていたので、余り言うことを聞かない行儀が悪い我侭な子になっていた。６歳になっても親指を口の中に突っ込んだまま寝ていたので、このままではいけないと思い、カツを入れることにした。
僕はまず、ヌイの躾から気合を掛けて直していった。言うことを聞かないときはお尻をぶっ叩いて厳しく叱ったりした。ユピンは僕の教訓が余りにも厳しいので、「継子虐めみたいで大丈夫かしら」と、心配していたようだった。が、お陰で指をくわえる癖は、２ヶ月で完全に直すことができたし、薬も素直に飲むようになった。後は物の食べ方や、礼儀作法、それに、自分のことは自分で責任を持ってやるこ

となどを教え込み、拭き掃除から洗濯、料理の真似事までもやらせるようにした。
僕はこのようにしてヌイが今まで持っていた悪い素質を体内から叩きだし、人間として成すべき根性や、素直さを、そして、女としての優しさを身に付けるように導いた。僕はヌイを何とかして一人前の人間として育てあげたい気持ちがあったので、ヌイと根気比べをし、２年ほど掛かってやっとの思いでヌイの根性を叩き直すことができたのである。
僕の義理の母テルは、僕が結婚した時点で、２ヶ月間だけ別居して貰った。新婚旅行が終わり、家庭が落ち着き、一段落してから、また、センルイの狭い家で一緒に暮らすようになった。母は、僕が結婚したら棄てられるのではないか、と、心配していたようだったが、一緒に住むようになってからは、安心したようだった。母は足を骨折していて歩けなかったので、母には下のトイレに近い部屋で余生を送って貰っていた。母が一人で外へ出歩けなくなってからは、今まで流れていた僕の世間の悪評は次第と消えていった。
母が足を骨折したのは、僕がまだ「夢の旅行社」を始める前だった。その頃、僕は親戚の紹介で人通りのほとんどない静かなバンカッピの選手村に移転していた。庭付のパパイヤが植わっていた二階建てのこじんまりしたバンガロー式の家に住んでいた。或る日、母が二階から降りてくるときに下で飼っていた犬が母の顔を見て喜び、足元にじゃれついたために、階段から転げ落ちて脛の骨を骨折してしまったのだった。その日、僕は朝から外出していたのだが、虫の知らせとでも言おうか家で何事かが起こった予感がしたので、白バスに飛び乗り急いで我が家に帰ってきた。家に帰ってみると、案の定母が「足を怪我した。痛くて歩けない」と、ウンウン唸っていた。僕は直ぐ友人の車で、チュラー赤十字病院へ連れて行ったが、医者は「右の脛の骨が折れているので、切開して骨を繋がなければならない。そうしないと、今後歩けなくなるから……」と、宣言された。僕は母が歩けなくなったら困ると思い、「直ぐ手術をしてください」と頼んだ。しかし母は、「死んでもいい、歩けなくてもいいから手術をするのは絶対に嫌だ」と拒んだ。　本人が嫌だと言うのを、強いてするわけにもゆかず、病院で鎮痛剤の薬を貰っただけで終わってしまったが、母はそれ以来死ぬまで遂に歩けない身となってしまった。
何の症状もなかった母は、１９７４（昭和４９）年１２月１日の朝、僕が起きて見ると、痩せた体を布団に横たえたまま冷たくなっていた。死に際にせめて側にいてあげればよかったのに、と思っても、もう手遅れだった。全然気が付かなかった僕が悪いのだが、母には済まないことをしてしまったと思う。
母は貧しい家庭に生まれたために、小さいときから親元を離れていた。住み慣れた家を後にし、チラチラ雪が降りしきる中を、シクシク泣きながら他家へ養子に行かされた辛い悲しい経験を持っている母だった。プーケッで一緒に同棲していた父、瀬戸とは上手くいかず、最後にはソンクラーで見棄てられた可哀想な女でもある。それに、僕とも常にいざこざ絶えず、僕からも余り省みられなかった母はきっと寂しかったに違いない。遺言書も何も残さずに息を引き取った母は７９歳だった。
僕自身の人生も複雑ではあるが、世間で実際に演じられている人生の悲喜劇は、ほとんどが貧しいが故に悲哀に満ちたケースが多い。僕が身近に見守ってきた母の人生もそうであった。生家を後した母は、別れた両親とは二度と会えることもなく、生き別れとなっている。しかも、懐かしい自分の故郷へも一

度も帰っていない。

嫉妬深い母に育てられた僕は、僕の気持ちを理解して貰えなかったために、いつも口論ばかりしていた。僕は何もしてあげられなかった悪い息子であったかもしれない。しかし、恩になった母に対しては物足りなかったではあろうが、最後まで善意を尽くしてあげたつもりである。母の一生を見つめていると、人生とは何と果かないものなのであろうかと、切なく思う。

母には母なりに、過去において様々な思い出があったであろうに。可哀想な母は、一人ぼっちでこの世を去って逝った。故郷へは二度と帰り着くこともなく、異国の地、タイの大地に過去の思い出を胸に秘めたまま静かに眠ったのである。

母の名前は、戸籍上では「田島テイ」となっている。しかし、僕は「瀬戸テル」と命名して、ワッ・リヤプの日本人納骨堂に祀ってある。それがせめてもの僕の気持ちである。お世話になった母よ、どうか安らかに眠ってください。

■子宝に恵まれて

センルイの愛しい愛のアジトで、ユピンと楽しんだ甘い快楽が芽を結び、やがておめでたとなった。ユピンは僕の子がお腹に宿った、と言って、喜んでいた。しかし、子供がお腹に入って二月ほど経った頃だった。

僕が忙しくて手が回らなかったので、ユピンに頼み、中央郵便局の４階にあったテレクス・セキションへ朝日新聞社外報宛のテレックスを届けに行って貰ったことがある。そのときユピンは急いで階段を４階まで駆け上ったために、お腹に宿った大事な子は血の塊となって流産してしまった。

可哀想にユピンは嘆いていたが、「また作ればいいから」と慰め、体調を整え、気長に待つことにした。毎晩２人でベッドを軋ませ、愛の営みを続けて努力した甲斐があって、旨い具合に子供を身籠もった。今回は前回の失敗作があったので、万事大事を取り、何をするにも気を付けるように配慮した。

ユピンのお腹は日毎に風船みたいにプーッと膨れあがった。パンパンに張ったお腹に手を当てていると、お腹の中で元気よく手足を動かして体操している我が子の動作が手に取るように響いてきた。出産の日が間近に迫るに従って、僕も、もう直ぐ一人前のパパになるのだ、といった喜びが胸に込み上げてきた。

息子、ヴィロートが生まれたのは、１９７４（昭和４９）年８月２８日だった。ユピンが「お腹が痛い」と、陣痛の兆しを受けたのは午前９時頃だった。僕は大急ぎでユピンをタクシーに載せて行きつけのシーパラヤーのセントジョセフ病院に駆け込んだ。僕はパソート・ドクターに「ユピンをよろしくお願いします」と言い残して、今日も教えなければならないプール教室へとすっ飛んだ。

僕はその日も１日中子供たちに水泳を教えていたが、ユピンのことが気にかかり、心は既に病院へ飛んでいた。

水泳教室が終わってから病院に来てみると、子供は未だ生まれていなかった。どうしたのかと、ドクターに問い質してみると、「ユピンは難産で苦しんでいる。このままでは助からないかもしれない。早く

切開して子供を出したほうがいい」と、お先真っ暗な指示を受けた。
僕は病院から提出された書類に、手術ＯＫのサインをし、「万が一のときは子供は死んでもいいから、ユピンだけは何とかして助けてください」と頼んだ。
ユピンは手術室で麻薬をかけられ、帝王切開の手術を受けて、無事に元気な男の子を生んだ。親子とも無事だったのでホッとしたが、蒼白になったぐったりしたユピンが病室に運ばれてきたときは、苦しい思いをした彼女が可哀想でならなかった。僕は彼女の瞳を覗き込み、そおっと柔らかい手を握り締め、頭を軽く撫でてあげた。
ヴィロートは病気ひとつせず、元気よくすくすくと育った。ヴィロートが生まれてからは、ずっと避妊を続けていた。が、ユピンは「もう一人僕の子が欲しい」と言いだした。だが、僕としては、彼女にあんなに辛い死ぬ思いをさせて子供を生ませたくなかったので、もう子供を作る気はなかった。それに、ヌイもいることだし、子供が２人もいるのだからもういい、と思っていた。しかし、ユピンは「私どんなに苦しい思いをしてもいいから、子供が欲しいわ」と、ねだられたので、彼女の意志に従うことにした。
後は運次第さと、ユピンとふたりで戒厳令を敷いていた避妊解除をし、アイラブユーと抱き合い、フーハーフーハーと呼吸を合わせ、子供作りに精をだした。すると、何と効果百パーセント、僅か一ヶ月で彼女のメンスがストップしてしまった。
但し、今回はユピンの悪阻はそんなに酷くなく、むしろ僕のほうが食欲が減食してしまった。男が悪阻負けすることもあるのかと、不思議に思ったが、現にその現象が起こっていた。
ふたたりの結晶である待望の次女、タリカがか弱い産声を上げて出産したのは、１９７８（昭和５５）年１月２１日だった。手足が細長い体系をしたタリカの顔はどちらかと言うと、僕に似ていた。
そのタリカは生まれた日から元気がないのか、余り泣かない静かなおとしい子だった。普通なら子供はもっと大きな声でギャーギャー泣くはずなのに、と思っていたが原因不明だった。

■タリカの死

タリカは生まれた日からスヤスヤ眠っていることが多く、お腹が空いているときにか弱い声でオギャー、オギャーと泣くぐらいだった。何処か体の調子が悪いのではないか、と、案じていた矢先だった。
タリカが生まれて丁度一週間目だったが、僕は、パソート・ドクターから「ちょっと話しにくいことですが」と前置きして「実は貴方の娘は心臓弁膜症に罹っています。恐らく一年の生命しかないと思います。ですから、大事に育ててください」と、タリカの死の宣言を予言されたのだった。
人の命を預かっている医者としてはさぞ言い辛かったではあろうが、それが医者としての責任である。だが、僕は今までにこのように気が遠くなりそうな死の予言を聞いたことがない。しかも、後１年で死ぬかもしれない、と、言われている本人が、何と目の前でスヤスヤ眠っている可愛い我が娘なのだ。
娘が生まれたと喜んだのも束の間、僕は真っ暗な地獄の底に突き落とされたような心境だった。僕は最愛の妻ユピンと手を握り締め「タリカは１年しかない命、ふたりでタリカを大事に育てようね」と誓

った。
タリカは確かにひ弱な発育の遅い低脳児だった。体力も余りなく抵抗力が少なかったので、外へ連れて行くと直ぐ風邪を引いたりした。
生後ひと月目あたりから毎日欠かさずに心臓病の薬を飲ませなければならなかった。薬が切れてそのままほったらかしておくと、唇が真っ青になり、呼吸が荒くなるので、気を付けなければならなかった。
僕はタリカが生まれてからは、用事がない限り余り外出しないように心がけた。外出しても、取材や水泳教室が終わると、もう何処へも行かずに真っしぐらに我が家へ帰っていた。僕は直ぐタリカの顔を覗き込み、「タリカちゃん」と声を掛け、抱っこしたり、膝に乗っけたりしてふたりで遊んでいた。
タリカは発育も非常に遅れていたので、半年経っても、一般の子供の半分ぐらいの大きさしかなかった。それに言葉も未だほとんど話せにない有様だった。だが、不思議にお互いの意志は通じた。僕が帰ってきてもわざと知らん顔をしていると、手を差し伸べて「パパ抱っこして頂戴」と、瞳を輝かせて微笑む可愛い娘だった。
僕が冷たい美味しいオレンジジュースを飲んだりしていると、じっと僕を見つめて、指先でコップを指して「自分にも頂戴」と催促するので、ストローに入れて口の中に流し込んでやると、美味しそうに飲み込んでいた。そして「もっと頂戴」と、また催促をするのだった。僕が沢山飲ませ過ぎると、ユピンが「お腹を壊すと困るから、あまりあげないで」と、注意するのだった。しかし、僕は「タリカは余り長くもない命なのだから好きな物をあげたっていいんじゃない」と言うと「それはそうだけど」と、言葉を濁すのだった。
僕はいつもタリカを膝の上に乗せて片手でピアノを弾いたりした。すると、タリカが弾かせて、と、僕の手を掴むので、柔らかいタリカの細い指を持って、指先でピアノのキーをドーレーミーファーと、軽く叩いてやると、とっても嬉しそうな仕草をするのだった。途中でやめてたりしてタリカの小さな手を離すと、タリカはまた僕の指を掴まえて、指先でピアノのキーを叩く真似をするので「はい、わかったよ」と言って、また指を持って「ゆうやけこやけ」の曲や、「カラスなぜなくの」の曲などを、ポッリンコン、ポッリンコンと、弾くと、とっても嬉しそうな顔をしていた。
その可愛いタリカは毎日薬を飲んでいても、数ヶ月に一回の割で急に発作を起すので、急いで病院に駆け込まなければならないことがあった。症状が軽い場合は直ぐ帰宅できたが、呼吸が困難になったりしたときは暫く病院に入院し、酸素をあてがい、点滴をしなければならなかなかった。
痩せ細ったタリカは血管がほとんどなく、いつも額や頭の所から点滴をされていた。それも、血管が薄くて細いので、針を何回も刺し直さなければならなかった。タリカはそのたびに「痛い痛い」と悲鳴を上げ、身をくねらせてギャーギャー泣き叫んでいた。医者が点滴をするお陰で、タリカの額にはいつも数ヶ所に血が滲んだ後が残っていた。僕はそのタリカの顔を見るたびに、タリカが痛々しそうで耐え切れない気持ちだった。
僕はできることなら、何とかしてタリカを完全に治してあげたいと思い、心臓病の専門医がいる、と訊いた病院へは、何処へでもタリカを伴い診断に連れて行った。そのたびに医者が判断する「心臓が悪

い、漏っている」と指摘された患部がまちまちなので、タイの医者はこんなに曖昧なものかと、がっかりした。

タリカが生まれた当初の朝日支局長は沼尻勉さんだった。沼尻さんはタリカのことを心配してくれて「瀬戸さん、朝日で面倒を見るから娘を日本へ連れて行って心臓手術をして貰った方がいいから……」と親切に言ってくれた。僕としては、沼尻さんの好意には涙が出るほど嬉しかった。しかし、肝心なタリカ自身に体力がなかったので、残念ながら日本行きは断念せざるを得なかった。

沼尻さんがいたときは、時期的にタイ・カンボジア国境周辺が荒れだし、一方バンコクではアジア大会が始まろうとしていた頃だった。だが、後に沼尻さんが肝炎を患い入院したために、僕が一時支局長代理を任せられた。僕はアジア大会の準備の手配や、東京本社からカンボジアの国境地帯の取材に駆けつけてくる特派員のタイ軍部への許可申請などの手配に忙殺されていた。丁度忙しい最中にタリカがまたチュラー病院に入院する羽目となった。が、僕は忙しくて我が子を見舞いに行く暇もないくらいにきりきり舞いをしていた。

アジア大会も無事に終わり、タリカも無事に退院したのでホッとしたが、カンボジア国境の荒れ方は日増しに益々酷くなるばかりだった。沼尻さんは未だ体力が回復しないうちにアジア大会や、国境取材で無理をしたために、体を拗らせ、体調を崩してしまったので、沼尻さんはやがて横堀克巳特派員と交代することになった。

タリカは相変わらず体力がなく痩せていたが、一年経っても未だ元気に生き延びていた。僕はこれならば望みがあるのではないかと、多少の淡い希望が湧いていた。

念のためにパソート・ドクターに「タリカは未だ元気ですけど、後何年ぐらい生きていられるでしょうか」と、素直に聞いてみた。ドクターはちょっと困惑した顔をしていたが、「旨くいっても恐らく15歳まででしょう」と言葉を濁した。

僕は明けても暮れてもタリカのことばかり考えていた。早くタリカが今よりももっと丈夫になってくれればと、はかない願いを掛けていた。僕は丁度家を買おうかと思い、安い家を物色していたときだった。が、タリカがいつ急な発作を起しても直ぐ病院に駆け込める場所を第一条件とした。しかし、そのような安い手頃な家はなかなか希望通りに捜せるものではなかった。

僕は一度テレビ朝日の「山田長政」のテレビ番組のコーディネーターを引き受けていたことがあった。だが、丁度山田長政の取材班がきたときに、生憎、またタリカが危篤状態に陥ってしまった。僕は止むを得ずテレ朝の仕事を辞退し、チュラー病院でタリカを見守っていた。が。テレ朝としてはどうしても僕が欲しかったらしく、わざわざ病院まで訪れ「何とかして手伝って貰えないか」と、難題を投げかけてきた。しかし、僕は少しでも長くタリカと一緒にいたかったので「悪いけど」と言って、仕事をきっぱりと断ってしまった。そのときタリカは運よく一命を取り止めたが、それ以来タリカの体力は前にも増して衰弱していった。

人間の運命とは皮肉なもので、僕には何故か可愛いタリカの生命がもうそんなに長く持たないことを予知感で感じ取っていた。次に何が起こるのかも知っていただけに、自分の身を切られるような辛い思

いで毎日タリカを胸に抱き締めていた。
タリカが麻疹を患ったのは、丁度横堀支局長が北京へ取材に出掛けて数日経ってからだった。タイミング的に、カンボジア国内の戦火が前にも増して激化し、砲火に追われた約６０万人におよぶクメール難民がタイのボーダーラインを越境し、タイ領内に溢れ出していたときだった。
僕自身も取材でプラチーンブリー、アランヤーブラテート、チャンタブリー、タラート、シーサケートや、スリンのカンボジア国境周辺を、日帰りで目まぐるしく駆け巡っていた。それに横堀さんの代理も兼ねていたので、本社との連絡や、フリージャーナリストや、フォートグラファーの人たちや、日本から駆けつけてきたボランティア関係の人々の世話やらで、様々なアレンジを一人で切り回していたときでもあった。
子供であれば、一度は誰もが罹る、と言われている麻疹。僕も子供の頃ソンクラーにいたときに麻疹に罹ったことがあるが、その麻疹にタリカも罹ってしまった。４０度の高熱を出し、熱にうなされて喘いていたタリカは苦しそうに顔をしかめていた。そのうちに、いつも起こる心臓発作が起き、唇が真っ青になった。呼吸の仕方もハーハーと荒く、胸が波のように揺れ始めた。この症状は直ぐ入院しなければならない、という、危険信号だった。ユピンはいつものようにかいがいしく身支度し、タリカを伴いチュラー病院へとすっ飛んで行った。
タリカが最後の入院をしたのが、時期的にこれから寒くなろうとしていたときだった。僕が病院へ見舞いに行くと、タリカは透明な酸素箱の中でスヤスヤ眠っていた。ユピンは僕を見ると、嬉しそうな表情で「タリカは疲れたのでしょうね、よく眠っているわ。熱も下がったし、もう峠を越したみたいよ」と言って、微笑み、タリカに着せるためのセーターを、せっせと編んでいた。僕はただ「そう」と頷き、タリカが眠っている寝顔をじっと見つめた。僕にはタリカの死が間近に迫っているのがはっきりとわかっていた。可愛い最愛の我が娘タリカが生死の谷間をさ迷っている。後数日で死んでいこうとしている。そのタリカの死期が電波のようにジーンと胸に伝わってくる。
覚悟はしていたものの、アーァ、何と辛いこの身。しかし、何も知らないユピンは「寒くなったらタリカに着せるの」と言って、無心にセーターを編んでいた。僕は愛しいユピンに「タリカはもう直ぐ死ぬのだから……」とも言えず、身を切る辛い思いで涙を堪えていた。
僕はタリカがもう直ぐあの世へ逝くのを感知したていただけに、どんなに忙しくても毎日欠かさずにタリカを見舞いに行った。ユピンは毎朝病院の敷地にある神棚に、香りのいいジャスミンの花を供え、線香を立てて「タリカが早く治ります様に」と、両手を合わせて拝んでいた。それは人間が気休めに神に頼る祈ではあるが、タリカの運命を左右することは不可能なことだった。
僕はいつものようにタリカを見舞いに行ったが、その日はタリカに死相が漂っていた。アーァ、いよいよ今日でタリカと最後のお別れになるのだ、と、感じ取った。タリカはまだ鼻に酸素をあてられ、点滴を受けていたが、いつもより元気だった。ガリガリに痩せ細ったタリカの瞳をじっと見つめていると、タリカも最後の気力を振り絞って、可愛い小さな瞳で僕をじっと見つめていた。
僕はタリカと別れるのが辛くていつまでも、いつまでもタリカのベッドの横に立っていた。最後にタ

リカの冷たい小さな手を握り締めて「タリカちゃん、いよいよ今日が最後のお別れね。もう二度と会えないけれど、安らかに眠ってね」と、心の中で呟き、僕は後ろ髪を惹かれる思いで病院を後にした。

その日のことだったが、僕は帰宅するなり、山積みにされていたフイルムの中からタリカが一人で写っているネガカラーのフイルムを捜し出し、行き付けの現像所へ駆けつけ、引き伸ばしにだした。現像所のおっさんに「明日お寺で使うから、急いで頼む」と、写真のアレンジをしておいた。

その夜はまんじりともせず、タリカの死の知らせを待っていたが、いつの間にか寝込んでしまった。ユピンの弟のクーが「タリカが死んだ」と知らせに来たのは、真夜中だった。

シーンとした病室で僕を待ち受けていたユピンは、可哀想に放心したようにしょんぼりしていた。僕の顔を見るなり、タリカがとうとう死んでしまったわ。私信じられないわ」と呟いた。僕はユピンの肩を軽く撫でて「実は今度タリカが死ぬことを初めから知っていたの。だけど黙っていたほうがいいと思って、お前には何も言わなかったんだよ」と伝えた。ユピンはエッと、唖然とした顔をしていたが、何も言わなかった。

ベッドに横たわっていたタリカの身体はまだ暖かかった。タリカは目を開けたまま僕が来るのを待っていた。僕はそおっと柔らか体温の温もりが残っているタリカの身体を愛撫し、目を閉じてやり、タリカちゃん、もうこれからは痛い思いをしないでも済むんだよ。いままで痛い思いをさせて本当にごめんね。パパは何もしてあげられなかったけども、とっても辛かったんだよ。パパはね、ただ一言だけ、タリカちゃんにパパと、呼んで欲しかったの。だけどね、タリカちゃんは本当によい娘だったのよ。パパも後から逝くからあの世の綺麗な花園で待っていてね。可愛いタリカちゃん、良い娘だから安らかに眠るんだよ。永遠にぐっすり眠ってね。と、心の中で呟き、丁寧に体を綺麗に拭き、一番綺麗な洋服を着せてあげた。

タリカはやがて病院の牽引車に寝かされ、白い布を胸の所まで被せられ、顔を出したまま死体置き場まで運ばれて行ったが、その夜は大自然も僕の気持ちを察してか、珍しく冷たい涙雨がシトシトと降っていた。

冷凍室の狭い死体置き場には既に１０体以上の可愛い子供たちの遺体が安置されていた。僕は雨の雫で濡れたタリカの顔をハンカチで拭いてやり、安らかに眠っているタリカの死に顔をまじまじと見つめ、もう二度と見ることも、逢うこともできないタリカに最後の別れを告げた。

死体置き場から外へ出ようとすると、葬儀屋のおっさんたちが「棺桶は如何でしょうか、直ぐ造りますけど、トラックも出しますから……」と商いに来る。午前1時半だと言うこの時間に、こちらは悲しんでいるのに、人の死を待ち受けている商人も居るのか、と思うと、僕も人間であることが情けなくなってしまった。

その足でセンルイの我が家に帰ったが、家族が一人減ってしまった僕の部屋には、主を亡くしたベビーベッドがしょんぼりと佇んでいた。アーァ、愛しいタリカよ、と思った途端に、僕の体内に潜伏していた、今まで我慢に我慢を重ねてきた悲しみが怒涛のように湧きあがった。

もういたたまれなくなってしまい、僕は立ったままユピンを抱き締めてウォンウォン泣き出して

しまった。ユピンもシクシク泣いていたが、僕がいつまで経っても泣き止まないので、「今晩はもう遅いから休みましょう」と言って、僕を慰めてくれた。

悲しみに浸っていた僕は、次の朝、早朝からお寺巡りをした。が、これはと思うお寺は何処も死亡者で満員だった。毎日こんなに多くの人が死んでいるのか。死んでもあの世へ逝くには順番を待たなければならないのかと、思うと、人間は死ぬときもちゃんとタイミングを見計らって死ななければならないのかと思い知らされた。

タリカのお通夜と告別式は、チャンヤーワート寺ですることになった。タリカが眠っている棺桶が安置され、周りに花を飾り、式の準備が整ったので、僕は線香を立ててタリカの冥福を祈ろうとした。だが、傍にいたお坊さんから「拝んではいけない」と、制止されてしまった。僕は腑に落ちなかったが、事情を聞きただすと、「タイの仏教の教えでは、小さな子供が死んだときは、線香を立てるだけで、絶対に拝んではいけない。拝むと、親や兄弟を誘いに来て、また家庭に不幸が起こるから……」と、お寺のお坊さんに注意されてた。仏教にはこのような信じがたいややこしい迷信があるのか、と思ったが、素直にタイの仏教に従うしかなかった。

僕はタリカが死んだことは親戚関係と、ごく少数の親しい友人にしか知らせなかった。それでも告別式の日には有り難いことに、北京から駆けつけた朝日支局長の横堀夫妻や宇佐波雄策さん、毎日新聞の柴田夫人や、テレ朝の人たちが参列し、沈みがちな僕を慰めてくれたた。

タリカが息を引き取ったのは、１９７９（昭和５４）年１１月１３日だった。僕が可愛がっていたタリカは僅か１年と１０ヶ月の生命を閉じた。

僕の妻ユピンは暫くの間何処へ行くにもずっと僕にすがり付き、共に行動していた。ユピンは可哀想にタリカを亡くしてからは何も手に付かず放心状態に駆られていたのだった。僕自身はタリカの命がどうなるかは既に僕の体内に潜んでいる予知感で前もってわかっていた。それにタリカの病状がどうなるのかも手に取るようにわかっていただけに、実に辛い思いをした日々を送っていた。僕にはそれだけの覚悟はできていた。しかし、来るべきものが訪れ、現実に直面してみると、やはり最愛のタリカの死は身を切られるように悲しかった。

だがどんなに悲しくても、どんなに泣きたくても我慢した。誰にも迷惑も掛けず、１日も休まず仕事に励んだ。この忙しい最中に僕がくよくよして仕事を休んだら、情報関係の機能は全部ストップしてしまい、他の新聞社に抜かれてしまう。だから、どんなに辛くても責任を持ってやり通さなければならない義務があった。従って、僕は水泳教室も休まなかったし、支局長代理をやっていた朝日の仕事もきちんと切り回した。タリカが死んだ日もそうだったが、僕の心境も何も知らない東京本社の写真部の石黒重光さんから「来週社会部の田村正人さんと一緒にそちらへ行くからよろしく頼む」と、電話連絡があったときも、僕はごく普通に明るい元気な声で応対し、自分の娘が死んだことなどは一言も漏らさなかった。水泳教室の方もそうだったが、アパートのプールへ行っても、僕は誰にも何も言わなかった。だが、娘が死んだ噂が徐々に広がり、みんなから「何故知らせてくれなかったんですか」と言われ、「お気の毒に、娘の冥福を祈ります」と慰められて、タリカのために香典を頂戴した。その、みんなの温かい

志が込められた香典が、何と2ヶ月にわたって続き、僕は返す言葉もなくただ感謝の気持ちで頭が下がる思いだった。

それに、水泳を教えるにしても、特に小さな可愛い女の子を教えていると、水飛沫と共に温かい体温の温もりが手元にジーンと伝わり、涙が止めどなく溢れてくるのだった。

■ピーィとの出会い

ピーィとは、タイ語で、お化けとか、幽霊と言う意味で、いわゆる人間の亡霊である。タイの社会では一般にお化けを怖がり、お化けが化けて出た、と言った話が話題になることがしばしばある。タイの映画にも幽霊物語が多い、実際に幽霊を見たことがある人でない限り、この世に幽霊が出るなどとは、とても信じられないことである。だが僕自身は今までに何回も有り得ないはずの幽霊と出会っている。

僕自身の体内には何が潜んでいるのか自分でもよくわからない。兎に角、現在の科学でもまだ究明できない有り得ない不思議な現象が時々起こるのである。現に、僕は小さいときから自分で感じたことがよく当る予知感を持っているし、朝方見た夢が不思議に正夢になることもしばしばあった。それと、霊感もあるのかもしれない。僕と幽霊との出会いは、これも不思議なのだが、僕がバンコクの木原病院で一旦死に損ない、あの世の花園をさ迷い歩き、無事に生き返ってからだった。

僕が一番初めに幽霊を見たのは、僕がマラッカにいる父に会いに行くために、ソンクラーの我が家を後にし、日本軍の軍用車で真っ暗な道をサダオを目指して疾走していたときだった。ヘッドライトに照らし出された道路の右側に、腰の所まで真っ白い髪を垂らしたおばあさんがフワフワ浮いている姿が目に写った。僕は途端に「あそこに髪の毛の長いお化けが立っている」と叫んだ。が、母も車を運転していた兵隊さんも「僕の目の錯覚ではないか」と言われて、一笑されてしまった。しかし、僕には確かに間違いなく女の幽霊を見たのである。僕が初めて幽霊を見たのが１１歳のときだった。そのときは別に怖いとも思わなかった。ただごく自然に幽霊だ、一体何をしているのだろう、と、思っただけだった。

子供の頃僕が幽霊と出会ったのはそれっきりだった。だが後に幽霊に出合うようになったのは、僕が社会人になってからだった。

僕は一度バンコクカレッジの弟子と、フワヒンの手前のチャアム避暑地へ遊びに行ったことがある。その晩８時頃だったが、僕はチャアムの浜辺を潮風に打たれて一人で口笛を吹きながら散歩していた。月もない暗い夜だったのに、海面すれすれに薄黒い長い影が僕が歩いていく方向について来るので、変だなあ、影が出るはずがないのにと思い立ち止まってよく見ると、それは１５メーターほどもあるピーィ・ナーンマーイ（木の霊）だった。僕は動いている薄黒い木の霊をじっと見上げていたが、相手も僕が見ているのを感じたのかスーッと消えてしまった。

僕はこの木の霊をサムイ島へ行ったときも見ているし、山で野宿していたときも出会っている。僕はある晩、チヤンラーイの山奥で焚き火をして、大木の木の下で休んでいたときだった。何にかがいる気配がするので、後ろの方を振り返って見た。すると、鬱蒼とした暗がりに女の姿をした背の高い霊が僕を凝視していた。不思議なことに普通なら暗くて見えない筈なのに、その木の霊がいる所だけがぼやー

っと明るく夜光虫のように照らし出されていた。ピーナーンマーィは女の木の霊である。僕は木の霊と何とかして話しかけてみたい、と思い、自分の意志を振り絞って語りかけてみた。が、どんなに頑張っても、どうしても駄目だった。

あるとき僕の弟子のお父さんが亡くなったので、ポー寺でお通夜に行ったことがある。僕が父を亡くした弟子と話していると、父の亡霊が棺桶の蓋の所からスーッと浮かび上がってきた。そして、棺桶の上にちょこんと座り、僕と話している弟子を見つめていた。僕は弟子に「お父さんの霊が棺桶の上に座ってこちらを見ているよ」と、教えてあげた。みんなが「エッ、本当」と、びっくりして騒ぎ出した。しかし肝心なお父さんの霊は誰にも見えなかった。そのときは電灯も光々と灯り、人も大勢いたのだが、何故か亡霊は僕だけにしか姿を見せなかったのである。

バンカッピのマーディーパイディーに城村照雄さんと一緒に住んでいた僕も親しくしていたインド人の日本語の上手なゲネさんが死んだときもそうだった。ドーン寺の火葬場でみんなで薪を運び、薪を高く積みあげて、白ずくめの衣装を身に纏ったゲネさんの亡骸を薪の上に安置し、火葬する前に、みんなで拝み、椰子の実を割り、椰子の水を身体に振り掛けて、それから火付けた。メラメラと勢いよく燃える火と共に、ゲネさんは灰と化し、あの世へと去って逝った。ゲネさんが亡くなったとき、僕はスクムヴィッ・ソーイ５５のトンローの市場の側の平屋に住んでいた。

ゲネさんが僕に会いに来たのは彼が亡くなってから丁度一週間目の夜中だった。ゲネさんは死んだときの白い衣装を着たままの姿でスーッと現れた。玄関の扉を素通りし、僕の寝室の金網の戸をスーッと突き抜けて、僕が寝ている枕元でピタッと止った。僕はゲネさんの顔や、瞳をはっきり見極めることができた。彫りのある深い顔をしたゲネさんは寂しそうな表情でじっと僕を見つめていた。ゲネさんは何かを語っているようだったが、残念ながら僕には何を言わんとしているのかわからなかった。僕は手を伸ばしてゲネさんの霊に触れてみたが、空気を掴んでいるようで何の手応えもなかった。ゲネさんはやがて「さようなら」と言って、フワフワーッと金網の窓から抜け出し、スーッと姿を消してしまったのである。

僕がお化けを見た話はまだある。同級生だった池田實君がまだラオスのアメリカ大使館に勤めていた頃だった。池田婦人の静子さんがお産のためにバンコクに出て来たときのことだった。そのとき、静子さんは實ちゃんの友人の家を留守番がてらに二階建ての大きな一軒屋で暫く暮らすことになった。初めの頃は気がつかなかったが、その家は幽霊屋敷みたいになっていた。家の裏に雑草が生い茂ったク小さなクローンがあるプローンチッ通りの路地の中に入った鉄道沿いにあった敷地の広い一軒屋だった。

僕は實君に頼まれて、静子さんのボディガードを兼ねて毎晩その家へ泊まりに行った。僕に宛がわれた部屋は二階の窓際の風通しのいい部屋だった。窓から外に木が生い茂っているのがよく見える部屋だった。僕は初めの頃は気が付かなかったが、その木に異常なものを感じた。それは時々、木陰の所に髪をビショビショに濡らした女の幽霊が現れるのがわかるようになった。

その幽霊は現れるたびに木陰にいたり、窓際の所まで近寄ってきて僕を凝視したりしていた。幽霊が毎晩現れる時刻は１１時頃からだった。が、僕は余り気にもしない方だったし、毎晩のことだったので、

そのままグーグー眠ってしまうこともあった。すると、床にペチャペチャッと、水が滴り落ちる音がして、その悲しそうな顔をした女の亡霊が部屋の中に入ってきて、僕が寝ているベッドを、ゴトゴトガターンと揺り動かし、僕に起きろと、意地悪をするのだった。僕が目を覚まして「うるさいなー、なーんだよー」と、心の中で話しかけると、ずぶ濡れになった可哀想な幽霊は、恨めしそうな顔で僕を見つめて、そのままスーッと消えてしまうのだった。そして、その晩はそれっきり二度と起こしに来なかった。水死したと思われるその女の亡霊が現れるたびに幽霊が歩いている足音と、床に水が滴り落ちる音がするのだが、床は全然濡れていなかったのである。

幽霊の話はまだ沢山あるが、これから語るのはホテルで起きた面白い幽霊の話である。僕は一度、長島正幸さんとふたりでナコーンシータマラートに取材に行き、タックシン・ホテルに泊まったことがある。ふたりとも3階のエアコン付きの部屋を別々に取った。その晩は夕食を済ませてから商店街をぶらつきホテルに戻った。僕は久し振りにお湯に浸かろうと思い、バスタブの上にくっついている二つの蛇口を捻った。が、水が出る方の蛇口はは堅くて回らなかった。お湯が出る方の蛇口はお湯は出るが、湯気がほとんど立たない生温いお湯しか出なかった。期待はずれした僕はがっかりしたが、それでも体に溜まっていた垢を落とし、その晩は大人しく休むことにした。

ぐっすり眠っていた僕は、キーキーギーギーギーガリガリガンガーンと響く凄い物音に夢を破られた。何事が起こったのかと、パッと跳ね起き、真っ暗の中で目が慣れるまで暫くじっとしていた。すると、その耳をつんざくような音はバスルームから響いてきた。蛇口を凄い速さで回している音だとわかった。僕は寝る前に戸締りをきちんとしておいた筈なのに一体誰がいるのであろうか、ようし、とっちめてやろう、と思い、そおっと立ち上がり、バスルームの明りをパッとつけた。明りがついた途端に蛇口を捻る音はピタッと止まったが、其処には誰もいなかった。僕は念のために蛇口を捻ってみた。すると、あら不思議、水が出ない方の蛇口がキーキーギーギーと音を立てて軽く回ったのである。僕は咄嗟にこれは幽霊の仕業だとわかった。僕は念のために枕元に置いてあった腕時計の時刻を確かめた。午前2時過ぎだった。僕は部屋の明かりを消して寝ようと思って横になった。

すると、またバスタブの蛇口がキーキーガリガリと鳴り出した。うるさくて眠れないので、今度こそ幽霊の正体を見届けてやろう、と思い、明りを消したままそおっと起きてバスルームの扉まで忍び寄り中を覗きこんだ。が、耳をつんざく轟音はいきなりピタッと止まってしまった。その晩は諦めてゴロッとベッドに横になったが、蛇口を捻る音は午前5時頃まで続き、とてもじゃないが、うるさくて眠れなかった。

朝起きてから、長島さんに幽霊が出てうるさくて眠れなかったことを話した。それからホテルのメイドやルームボーイを掴まえて僕の部屋で誰か死んだ人がいるだろうと、問い質してみた。だが、みんなはお互いに顔を見合わせて否定し、僕の目の前からそそくさと立ち去ってしまった。

次の晩、僕は寝る前にカメラのフイルムの感度を１６００にセットし、カメラを枕元に置き、直ぐ写真が撮れるように用意し、早めに寝込んだ。その夜も案の定午前2時頃になると、得体の知れない幽霊が現れ、昨夜と同じ要領でギーギー蛇口を回した。

僕は待ってましたとばかりに、カメラをひったくり、飛び起きた。ところが、幽霊も僕の意志を感知しているらしく、僕が起き上がった途端に蛇口の音がピタッと止まってしまうのだった。バスルームとベッドの間はセメントの壁があって遮られていた。従って、どう間違ってもベッドは見えないはずだった。だが、それが不思議に僕が寝たふりをすると、蛇口がまた唸りだし、カメラを持って起き上がると、またピタリと止まってしまうので、僕は遂に吹き出してしまった。

僕は寝たり、起きたりする動作を、幽霊と鬼ごっこをしているような感じで、午前5時頃まで根気欲続けた。だが、残念ながら幽霊の姿を見ることも、写真を撮ることもできなかった。ただひとつだけ、収穫があったのは、僕と根気比べをした幽霊は男の幽霊だ、と感じ取ったことだった。

僕はもうひと晩泊まり幽霊の正体を見届けたい、と思ったが、その日の飛行機でバンコクに帰らなければならなかった。朝ホテルをチェックアウトする前に、念のために、例の曰くつきのバスタブの蛇口を捻ってみた。しかし不思議なことに、その蛇口はどんなに力を入れても、何かで固定されたかのように堅くて回らなかったのである。

■僕の予知感

僕には生まれたときから授かった、わりに良く当る予知感が体内に潜んでいる。そのお陰で今までに何回か命拾いをしたこともある。僕の予知感が威力を発揮しだしたのは、僕が5歳ぐらいの頃からだった。予知感だといっても、ただごく自然に何だか変だなあ、と、不審を持ったり、感じたりすると、それが不思議にてき面に当るのだった。従って、僕の両親のことについてもそうだっが、僕が感じたことがピタリとあたっていたために、のちに苦労したわけである。

僕がまだバンコクカレッジで日本語を教えていた頃だった。もうすぐ夏休み（タイの夏休みは4月から）に入るので、弟子たちと一週間の予定で、バンコクから貨物船でサムイ島へ遊びに行くことになっていた。そのとき、僕には不吉危険信号が出ていた。それが何なのかは自分でもわからなかった。が、自分の命に関わることだけは察知していた。

サムイ島へ遊びに行く一ヶ月ほど前だった。僕は授業中に弟子に「今度サムイ島へ行ったら、僕は大怪我をするか、或いは死ぬかも知れない」と話した。が、弟子たちは「そんなことがどうしてわかるのですか」と言って、誰も信じてくれなかった。

僕は今までにいろんな所へ旅行したが、何処へ行っても一度も薬らしき物を持ち歩いたこともなかった。だがこのときは、何故か出発する前に、無意識に薬屋に寄り、ヨードチンキや、包帯、絆創膏、脱脂綿、アルコール、それに小さな鋏などを用意して、ボストンバッグに放り込んだ。

そして次の朝、弟子とトンブリーのクローン・サーン桟橋から南タイ行きの貨物船に乗り込んだ。みんなで甲板を占領し、歌を歌い、夜もはしゃぎながらサムイ島へ向かった。

翌朝、イルカの大群に迎えられ、貨物船がサムイ島の沖に停泊したのは午前10時頃だった。貨物船から小舟の尾長ボートに乗り換え、島全体が椰子に覆われたサムイ島へ向かったが、透き通ったキラキラ輝いた海水に魅せられて、僕は居ても立ってもいられなくなり、洋服を脱ぎ捨て荷物を弟子に預けて、

船から青々した海へドボーンと、飛び込んでしまった。綺麗な白浜が見える海岸線まで後２キロほどあったが、小波にユーラユラ揺られて、クロールでゆっくり泳いだ。僕は久し振りに夢を見ているような快適な気分で泳いだ。

自然に恵まれた美しいサムイ島には、船から長い桟橋を上がった所に古ぼけた木造立ての宿屋が一軒、長屋の並びにポツンと建っていた。当時の島内の道はガタガタした石ころだらけの酷い道だった。それに、きちんとしたホテルもバンガローも何もなかった。僕たちおよそ３０人のグループは島の小学校の教室で合宿することになった。その晩は、弟子の親戚に当る郡長の招待で、新鮮な美味しいシーフードをご馳走になった。

サムイ島では弟子に水泳を教えたり、漁船で島巡りをしたりして毎日のんびりと楽しい日々を過ごした。いよいよバンコクに帰らなければならない最後の日となっても僕には未だ何の変化も起こらなかった。

帰りはスラータニー経由で汽車でバンコクへ戻る予定になっていた。僕たちは漁船を改造した渡し船でスラータニーに渡ったが、バンコク行きの列車が出る時刻は午後１１時頃だった。汽車が出るまでに時間が有り余っていたので、駅の近くのホテルで休憩し、出発時間がくるまで待機することになった。

みんなで夕食を済ませてから暗くなった町をぶらつき、ホテルへ戻った。僕が部屋で休んでいると、弟子が「近くに小高い山がありますが、先生も一緒に登りませんか」と誘いにきた。僕は男ばかりの５、６人の弟子と一緒に山に登った。

真っ暗な山の上から市内を見下ろしていたときだった。左手から何か風を切ってヒューシュルシュルと飛んでくる音が僕の耳にこだました。僕は咄嗟のうちに「あっ、危ない」と思い、顔を右にそむけたが、もう間に合わなかった。右の目に銃弾がグワーンと当り、無数の星のような火花がパッと飛び散った。僕はそのままバッタリと地べたに倒れたが、直ぐにすくっと立ち上がり、「ここは危険だから速く下に降りろ」と、弟子に命令をくだした。

僕は弟子に見守られて山からサッサーッと駆けおりた。が、右目から血が滴り落ちていたので、直ぐに小さな看板を掲げていた町医者の診療室に駆け込んだ。医者は目に出血止めの薬をつけ、湿布してから薬を塗り、ガーゼで右目をカバーしてくれた。右目に絆創膏でカーテンを張られ、バンコクに戻った僕は、友人に、トンブリーのシリラード病院にいる眼科の専門医を紹介して貰い、目を診て貰った。

真っ赤に充血した目を丹念に診察していた４０歳ぐらいの年配の女医から、気の毒そうな表情で「貴方の右目はもう永久に治りません」と、片輪の宣言をされ、医者に見離されてしまった。僕はその足で別の友人だったドクターにも診て貰ったが、「目は潰れていないけど、黒目の所に弾の掠り傷があるから治らない」と、同じ様なことを言われ、やはり何の手当てもされずに見放されてしまった。

いずれにしても、これも僕に定められた運命なのだから仕方がないわい、と、諦めるしかなかった。僕は弾が当る瞬間に、ほんのちょっと避けたので助かったが、あのとき、そのままじっとしていたとしたら、弾は右目を貫通し、脳を貫いて即死していたかもしれない。目が潰れなかっただけでも運がいい方だし、まだ左目があるのだから、と、僕は案外呑気にケロッとしていた。

僕の右の目はまだ充血していたが、それから2、3日後に、僕はまた別のグループの弟子たちとパタヤビーチへ遊びに行った。僕は毎日海で泳いでいたが、弟子たちは浅瀬で遊んでいるだけで誰も付いて来なかった。

或る日、僕はいつものように一人で泳いでいた。すると、海底に何か黒い物が密集しているのが見えた。一体何だろうと思って、潜って見ると、それは長い棘を動かしている海胆の大群だった。僕はパタヤーで何回も泳いでいるが、海胆がこんなに一杯いるのを見たのは初めてだった。タイミング的に丁度海胆を見とれていたときだった。僕は海底の波に押されてその黒い海胆と、アイラブユーと、キスをしてしまった。顔だけは辛うじて助かったが、掌とお腹に長い棘を１０本ほどチクリと刺されて、アッと言う間に体全体が痺れてしまった。僕は気が遠くなりそうになったが、気力を振り絞り、岸まで泳ぎ、弟子に体内に刺さっていた棘を折れないように1本ずつ引き抜いて貰った。

パタヤーから戻った僕は、今度はタイ航空の仲間とカウヤイへ2泊の予定で遊びに行った。みんなで山の中を歩き、動物の足跡を追ったりしてスリル満点で楽しんでいた。だが、そのうちに僕の右目が急に痛くなり、涙が止めどなくボロボロ溢れ出るようになった。これは目に異常をきしている証拠であるが、原因不明だった。僕は楽しかったカウヤイの旅を終え、バンコクの我が家に戻ったが、自分の目については別に気にも止めなかった。

だが、或る日の朝方だった。誰かの手が僕の右目に軽く触れたその途端に、右目の部分が急に冷たくなった夢を見た。

パッと飛び起きた僕は、そのまま階下に駆けおり、大きな鏡を覗き込んだ。僕は視力がある良く見える左目で、じっと右目を凝視した。すると、右目の右縁の所に黒い塊があるのが見えた。僕はてっきり血の塊りだと思い、右手の人差し指でそこを軽く押してみた。すると、その黒い塊は目の縁の皮膚の内側にポロンと落ちた。その塊をまた指先で押してみると、今度は目の縁の中で左右にコロコロ動くので、両方の１０本の指先で上へ押しあげてみた。だが、何回か試みてもなかなか出てこなかった。やっとの思いでその黒い塊を取り出したが、それは何と、小指の先ほどもある鉄砲の弾だった。

僕はその弾を持って、またシリラード病院へ行き、例の女医先生に「こんなに大きな弾が目の中に入っていました」と言って、骨の所に当ってすこし凹んだ銃弾を見せた。流石にびっくりしたらしい先生は、「何処の病院で手術して貰いましたか」と聞かれたので、「自分でだしました」と答えると、「へェー」と、信じられない顔をしていた。

僕はそこで初めてレントゲンを撮ってもらったが、僕の目の中には実弾が錆びつかずに、１５日間も入っていたわけである。その間、薬も何もつけていなかったし、化膿もしなかったのが不思議なくらいである。

その右目は初めの頃は、目玉の真ん中から右側がかすかにボーッと見える程度で近くにある物を見たりすると、映像が二つ重なって見えるので、時々へまをしでかすこともあった。しかし、月日の流れと共に数年の間に、疲れ果てた右目はもう何も見えなくなってしまったのである。

僕の右目は小さいときから曰くつきの目だった。1回あることは2回あり、2回あることは3回ある、

と言われているが、それは僕の目には当てはまらなかった。
僕はメナムホテルに世話になっていたときに、一度、ホテルに宿泊していた客に「ゴルフの球を拾ってくれ」と頼まれて、ホテルの芝生でゴルフの球拾いをしたことがある。そのときゴルフの球が右目にゴツーンと当り、引っくり返り、眉毛を縫ったことがある。
それが1回目だったが、2回目はスリヴォンの家にいたときだった。朝、目が覚めてみると、右目の白目の所に2ミリぐらいの黒っぽい棘が刺さっていた。眠っている間に目の中に棘が刺さるはずがないのに、何故棘が刺さっていたのか理解できなかった。そのときはスリウォン通りにいたドイツの眼科医に、ピンセットで棘を抜いて貰い、治療しても貰ったので目は無事だった。
3度目は、バーンブワトーン・キャンプでみんなと野球をしていたときだった。僕が珍しくキャッチャーをやったのだが、ピッチャーが投げた直球を、右目で受け止めてしまったために、目の縁が一週間ほどどす黒く黒ずんでいたことがある。
僕はそのときに、ただ何気なく、右目はもう一度何かが起こるのではないかな、と思っていた。がそのまま忘れ去られていたのである。
僕は目を瞑っているだけでも、時々いろんなものが見えたりするときもあるし、数ヶ月間何も見えないこともある。但し見えたとしても、目を瞑った瞼に映っている黒っぽい映像が一体誰で何処なのだかさっぱりわからない場合がほとんどである。しかし、実に鮮明にはっきり見える場合もあるので、不思議でならない。
僕は数年前に、朝日新聞の井川一久さんから、当時、大学生だった瓜田理子さんを紹介されたことがある。僕は彼女とは数回会っているが、彼女の身なりはいつもさほど長くないスカートに半袖姿だった。彼女は旅行が好きで、タイ、インド、中国などを歩き回っていた。あるとき、その彼女がカトマンズの帰りにバンコクで僕と会うことになっていた。彼女がまだカトマンズをうろついていた頃だった。僕が目を瞑っていると、彼女が長袖にローングスカートの洋服を着て坂道の所を歩いている姿が瞼に浮かんだ。僕は内心、彼女はこんな洋服を着るのかな、と、疑問に思っていた。
しかし、彼女とデートした当日、僕がインペリアル・ホテルのコーヒーショップで彼女を待っていると、何と、彼女は例の長袖にローングスカートといった出で立ちで現れたのである。僕は彼女の顔を見るなり、思わず「エッ」と、叫んでしまった。彼女も僕がびっくりした顔をしていたので、「どうしたの」と、聞き返したが、実に不思議なことが起こるものである。
僕は日本へ行っても、やはり不思議なことが身の周りで起こっている。これも数年前に、僕が日本へ行っていたときに起こった話であるが……僕が広島、博多、神戸、大阪と関西方面を飛び回り、最後に大阪から新幹線に乗り、東京へ向かっていたときだった。電車に乗って暫く経ってからだった。何気なく目を瞑っていると、真っ赤なドロドロした血が、黒っぽい墓石の上から流れているのが見えた。僕は咄嗟に、誰か知らないが親しい友人が死んだのだ、と判断した。僕は一体誰が死んだのであろうか、と思って、思いを巡らせているうちに、新幹線は東京駅のプラットホームへ滑り込んだ。
すると、僕を迎えに来ていたアジア・プレスの野中章弘さんが「バンコクからファックスが入ってい

ます」と言って、黙ってファックスを差し出した。僕も黙ってそのファックスを受け取ったが、それは春木忠雄君からの連絡で、ミッキー（新野充男）が死んだと言う悲しい知らせだった。そのとき、僕は悲観にくれてしまい、他の用事を全てキャンセルして、直ぐバンコクに舞い戻ったのである。

僕はいつも一人でそう思うのだが、僕が感じた予感がまともに良く当るので、得をしている場合もある。但し、このように親しい友人が死ぬことまでがてき面に当るので実に辛い思いをなければならないときもある。

これも日本にいたときに、僕の身に起きたことであるが、そのとき僕は東南アジア通信の五十嵐勉編集長の事務所に世話になっていた。バンコクに帰る日に、誰か知らないが、ニヤニヤ笑っている痩せた男の人の夢を見た。翌朝、僕は五十嵐さんと別れてから京成のスカイライナーに乗り、成田空港へ向かった。しかしその日はどうしたことか、熱もなく、悲しくもなかったのに、電車が成田空港に到着するまで涙がポロポロと止めどなく溢れ、まるで涙が涌き出るかのようで、ハンカチがビショビショになってしまった。だが不思議なことに、電車が終着駅である成田空港に停まった途端に、涙もピタリと止まってしまったのである。

僕は成田空港から予定通りにユナイテッド航空に搭乗し、無事にドーンムアン空港に到着した。空港でタイ航空のリムジンに乗ったのだが、運ちゃんの顔を見た途端に、はてな、何処かで見たことがある顔だがと、思いを巡らせていると、ハッとした。

それは、紛れもなく五十嵐さんの事務所にいたときに夢で見た、夢の中に現れた人物だったのだ。

■僕の霊魂

この世には様々な宗教があり、その宗教の教訓を信じている信者の数も非常に多い。或る宗教の教えに従うと、人間は死んでも、それぞれに不滅の霊がある、と言われている。仮にそれが事実だとすれば、この地球上には亡霊の霊だけになる筈である。霊魂と人間の姿をして現れる幽霊、即ち亡霊とは異なったものであると思うが、僕の霊魂を見た、と言う人が現れた。

これから語ることは事実であるのか、どうなのかは僕自身には全然身に覚えがないことなので、よくわからない。僕のように心臓がドキドキ鼓動し、呼吸をしている現に生きている人間の霊魂が自分の体内から抜け出し、他人に姿を見せるなんてとても信じられないことである。果たしてそのようなことが起こり得るのであろうかと、不審を抱かずにはいられない。「この話は出鱈目な話だ」と思って聞いていただければ有り難いのだが……

実は、僕がまだ「ドゥリームランド旅行社」をやっていた頃の話である。我が家にはエーッと言う名の大人しい若いハンサムな運転手が同居していた。彼には下の女中部屋を与え、自由に出入りさせていた。

その彼が、或る日の朝「仕事を辞めさせて欲しい」と、体を震わせ、怯えた表情で言い出した。今までそのような素振りはなかったので、「一体どうしたのだ。何か気に入らないことでもあるのか」と、事情を聞くと、「実は昨夜、先生の霊が僕の部屋に現れたのです。僕は先生が空中に浮いている姿を見まし

た。部屋の窓も入り口の扉も閉めておいたのに、先生は壁の所からは入ってきたのです。そして、部屋の明りをつけ、窓を開けて窓からフワフワ飛び出していきました。先生は二階の部屋へ戻っていきました。先生はお化けです。僕はとても怖くてたまりません。ですから今直ぐ辞めさせて貰います」と、理由を述べた。

僕は「そんなことは有り得ない。僕はお化けでもなんでもない、普通の人間だ」と言って、彼を引き止めた。が、彼は「どうしても嫌です、怖いからいやです」と言って、その日の朝辞めてしまったのである。

エーッ君の話を纏めると、これが僕の身の上に起こったことになるのだが、僕にはそのような記憶が全然ない。僕にこのような心霊じみたものが起こり得るものであろうかと、未だに不審に思っている。

■不思議な冷凍病

僕は１１歳のときに大病して以来この７４年間病気らしい病気をしたことがない。８０代になって、白内障と緑内障に見舞われただけで体調は異常なしである。僕が病気をするとすれば精々風邪を引くか、下痢をするぐらいで医者とはほとんど縁がない。僕は風邪を引いて４０度の熱があっても薬もほとんど飲まないでプールに入って平気で水泳を教えている。僕は自分の身体は自分でコントロールしている。

僕が訳のわからぬ変な冷凍病に罹ったのは１９９４年の７月の或る日のことだった。朝起きてみると、右の親指の指先の内部が氷か何かで冷やしたように冷たくなっていた。外部の皮膚はどうもなかったが、この状態が３日ほど続いた後、その冷却を帯びた冷凍病は親指から腕に移動し、右腕の内部全体が冷凍されたように冷たくなった。しかし外部の皮膚は何の異常もなく体の体温も普通だった。血液にも何の異常もきたさなかったが、この冷凍病はまるで蛆虫のように体内をジワジワ這い出した。兎に角右腕から両方の肺に移動し、肺から脳に潜入し、脳から心臓に染みこんだ。そして、心臓から更にお腹の大腸に下がり、お腹から右脚（左脚はどうもなかった）の太股を通り、最後に右足の親指が冷たくなり、訳のわからぬ冷凍病は右足の指先から抜け出していった。

この変な冷凍病は僕の体内に潜入し、２週間ほど這い回っていたが、肺の場合は、肺全体が冷たくなるだけで、呼吸も普通にできたし、体内の他の部分にはなんの影響も与えなかった。心臓が冷たくなったときも、心臓の部分だけが凄く冷たく感じただけで、血液には何の影響もきたさなかった。僕はこの冷凍病に悩まされていた期間でも、毎朝やっていたジョギングを続け、平常通りに仕事をしていた。

しかし体調がガタ落ちに落ちて走れない日もあった。朝走っていてもいつもの調子で走れなかったときもあった。その頃、僕は毎朝１０キロから１６キロほど走っていたが、そのときはスピードを落としてうんとゆっくり走っても息切れがして８キロぐらいしか走れなかった。それも、途中で一回休まなければならなかった。それと、食欲も余りなかった。

この変な病気と闘っていたとき、僕は敢えて病院へは行かなかった。別に、現在の最先端を進んでいる医学を信じない訳ではないが、病院へ行って医者に診て貰っても、どうせ実験台にされるだけだと思い、自分の精神力で治すことにした。

この僕の考え方はおかしいかもしれないが、常に何らかの形で亡霊と出会っている僕にしてみれば、恐らく何かの亡霊病ではないかと見ている。

この変な病気に襲われたとき、僕は誰にも心配を掛けてはいけないと思い、家族の者にも誰にも知らせなかった。

この体内の異変に付き、万一の場合を考えた僕は、僕の言語の先生でもある元日本人学校の言語ボランティアをしていた僕の友人、柏優子さんにしか知らせなかった。彼女は一人で心配してくれたが、僕の気持ちはわかってくれたと思う。

■タイ国内５０万キロ疾走

タイ国内の道路を、バンコクの都市心の中央に聳えている戦勝記念塔を基準として、東西南北の最端距離を測ってみると、北部の１号線は、ビルマ（ミャンマー）国境地帯のメーホーンソーン県までが９２４キロ、チヤンマイ県のメーナーム・コック（コック川）が流れているタートーンまでが８４６キロ、チヤンラーイ県のメーサーイまでが８６５キロある。

東北部の２号線は、陸続きのラオス国境に面したウボン・ラーチャターニー県チョンメックまでが７０９キロ、メコン川を挟んだラオス国境に沿ったノーンカーイ県までが６１５キロ、ムックダハーンまでが６２４キロ、米軍の基地があったメコン川沿いのカンボジア国境と隣接してるナコーンパノム県までが７４０キロある。

東部の３号線は、東海岸のカンボジア国境線沿いのタラーッ県のハーッレックの海岸線までが４０５キロあり、西北のビルマ（ミャンマー）と国境を接しているカーンチャナブリー県サンカブリー郡のチェーディーサームオン（三塔峠）までが３８３キロある。

南部の４号線は、マレーシアの国境に接したナラティワート県のスンガイクロックまでが１２１９キロ、ヤラー県のベートーンまでが同じく１２１９キロと、この２本がもっとも長くソンクラー県のサダオの国境までが１０４０キロ、アンダマン海に囲まれた故郷のプーケッ県の観光地までが９０３キロ、サトゥーン県までが９８１キロある。

タイはこのようにビルマ、ラオス、カンボジア、マレーシアなどの４ヶ国と国境を接しているが、南部タイのタイ湾に面した約１２１０キロの東海岸を除き四方を国境に囲まれている。その国境線の長さはおよそではあるが、ビルマの国境線が２３８７キロと一番長く、次にラオスが１８１０キロで、カンボジアが７９８キロと、それにマレーシア国境が６４７キロある。従って全長でおよそ５６４２キロに及ぶ長い国境線が連なっている。

今、僕が愛用している愛車、新品の三菱のランサーを手に入れたのが１９７５（昭和５０）年の夏だった。今年で４１年になるが、僕は暇さえあればこの愛車のハンドルを握り締め、国境線に沿って、７７県あるタイ国中を隅から隅まで縦横無尽に走り回っている。朝日の記者やカメラマン、それに友人などを乗せて走ったこともあるが、ほとんど一人で道なき道を走っている。僕は誰かと一緒に乗って運転しているときは、そんなにスピードを出さないで走っている。だが、一人で運転しているときは、１３

０から１７０キロの猛スピードでハイウェーを失踪しているので、僕の車を抜かせる運ちゃんはまずいない。

僕は一度、スコータイに行ったときに、前方を１３０キロのスピードで走っていたパトカーを抜いたことがある。パトカーを抜いた途端に、パトカーがグングンスピードをあげ、ウーウーウーウーサイレンを鳴らしながら１５０キロの速さで追いかけてきた。僕は、これは面白い、鬼ごっこだ。捕まえられるのなら捕まえてみろと思い、暫くパトカーと同じ速さで走り、それから一段とスピードをあげて、ビューンと姿を消してしまった。途中で何処かのチェックポイントで引っかかるのではないかと思ったが、パトカーからの無線連絡がなかったらしく無事に難を逃れたことがある。

ハイウェーを走っていると、一番質が悪いのか長距離バスである。特に綺麗な二階建ての観光バスは馬力があるので、一般に１２０から１３０キロのスピードで走っている。この道の王者が曲者で、対向車が走ってくるのが見えていても、平気で追い抜いてくる。すると、僕が乗っているような小型車は死ぬのが怖いので、ほとんどがスピードを落とし、道路脇に避けて、我が物顔で走ってくる道路の無法車を通している。実にけしからん話である。

僕は一度、余りにも腹が立ったので、前方から追い越してきたバスに、逆にスピードを出してビューンと、バス目掛けてまっしぐらに突っ込んでいったことがある。バスの運ちゃんは流石にびっくりしたらしく、盛んにヘッドライトをピカピカッと照らして道を空けてくれと合図をするので、こちらも、これは俺の優先道路だ、お前こそ左へ寄れっと、強力なスポットライトでピカピカッと照らし、相手のバスに突進して行った。双方の距離があと１００メートルぐらいに接近し、いよいよぶつかるかな、と思った途端にスピードを落としていたバスが急ブレーキを掛けて停まった。僕も直ぐギアチェンジをし、わざとバスの真ん前にピタッと停めた。僕はドアを開けて飛び出し、バスの運ちゃんに「この野郎、交通規則を知らないのか。出てこい」と怒鳴った。若いバスの運ちゃんは僕の剣幕に押されて平謝りに謝ったので「これからは気をつけろ。お前一人の命じゃないんだぞっ、乗客が大勢いるんだぞっ」と、怒鳴り散らし、許してやった。

バンコクからチヤンマイまでおよそ７００キロの道程があるが、この間のハイウェーは走っている車の数も割りに少ないし、道路も広いので非常に走りやすい。それにパトカーの鼠捕りも余りないので、スピード違反で掴まることはまずほとんどない。

僕は猪狩章支局長がいた頃（１９７９年）だったが、一人でチヤンマイへ取材に行ったことがある。そのとき僕は朝日支局（その頃支局はアマリンホテル内にあった）からチヤンマイへ向かった。エンジンの調子も快調だったので、猛スピードでビュン、ビビュンすっ飛ばした。途中で一回ガソリンを補給しただけで、５時間半でチヤンマイに着いてしまった。チヤンマイ市内のスリウォン・ホテルから支局に「猪狩さん、今チヤンマイに着きました」と、連絡事項を入れると、猪狩さんは「へーえ、もう着いたのか」と、びっくりしていた。

僕は過去において静岡の公害問題で先頭に立って闘争した甲田寿彦さんと２人でタイの北部を取材し、チヤンマイへ足を向けたこともある。

僕たちはチヤンマイに別行動で到着していた猪狩さんと助手のポーンアノンさんと合流し、チヤンマイ周辺で取材をしていたことがある。ところが、「バンコクに日本の赤軍派が現れた」といった、ニュースが飛び込んできた。「さあ、大変だ」と、僕たちは急遽バンコクに戻ることになった。が、バンコクに帰る最終便の飛行機は、もう飛び去ったあとだった。仕方がないので、僕の車でバンコクへ戻ることになった。夕暮れ迫るチヤンマイを後にし、雨が降りしきる山道を時速１５０キロのスピードで突っ走った。

だが、タック県を過ぎた頃から豪雨となった。黄色いスポットライトを点けても、２、３０メーター先までしか見えなかった。しかし、僕はそれでもスピードを落とさなかった。あとは野生動物の、野生感覚で運転するしかなかった。車体をバシッバシッと叩きつける豪雨の音をよそに、全神経を前方に集中していると、何にも見えないはずの真っ暗な闇の中に何かがあるなと感じ、ハンドルをきって避けると、確かに目前にライトを消したトラックが停まっていたり、大木が倒れていたりした。

ナコーンサワンのチェックポイントで車を停められ、警官から「スピードが速すぎる」と、注意され、詰問されたが、そこは僕の話術で旨く切り抜けてしまった。みんなは僕に振り回されて疲れていたらしく、其処で大休止をし、遅い晩餐を済ませた。甲田さんと猪狩さんはビールを煽り、いい気持ちになっていたが、僕はまたハンドルを握りしめた。途中で事故も起さず無事にバンコクに到着したが、日本の赤軍派はデマだとわかり、がっかりしてしまった。

僕はドライブが好きなので、タイの国内を隅から隅まで走り回っている。何処かへ行くたんびにいろんなものに出くわし、スリルがあって実に面白い。僕は地方へ取材に行くときは、いつも飲料水、マッチ、スコップ、鍬、ナイフ、大きな鉈、それと２０リッター入りの予備タンクにガソリンを満タンしたのを後ろに積み込み、万全をきして出かけている。

僕はハイウェーの舗装されたいい道を走っているだけではなく、各県の農村や、少数民族がいる山岳地帯の細い凸凹した赤土の道を道が切れて車が通れなくなる所まで走っている。酷いときは牛車しか通れな畦道を走ったり、田圃の中を走ったりしている。畦道があって通れないときは、スコップか鍬で土を掘り起こして通り、橋が架かってない狭い小川があったりしたときは、川の深さを測り、その辺から草や小枝を切ってきて積み重ねて川を渡ったりしている。

東北地方には（北部にもある）まだ地図にも載ってない道がある。僕は或る時、ナコーンパノム地域の車が辛うじて通れる解放区を時速２０キロ程度の速度でしか走れない所をノロノロ走っていた。すると、Ｍ１６自動小銃を持った１４、５人のゲリラに取り囲まれてしまった。銃を突きつけられ、ホールドアップされて車の外に連れ出された。が、運がいいことに、その中に僕の教え子が一人いたので釈放され、運よく助かったことがある。

このような危険な目にはアランヤプラテートのカンボジア国境線に沿ったガタガタな道を走っていたときにも起こった。

そのときは遠くの潅木の茂みの中からバリバリッと撃たれたので急ブレーキを掛けて、ドアから飛び出し、道路脇きに伏せた。暫くすると、その付近を警備していたタイの兵士が駆けつけてきて僕の身を

庇ってくれた。僕が兵士に撃ってきた方向を示すと、兵士は身を屈め、潅木の方へ進んで行った。僕も直ぐカメラを持って後に従ったが、相手はもう既に姿を消した後だった。

僕は横堀克己さんが支局にいた頃に、僕の車でカーンチャナブリーのサンカブリーへ３日間の予定で、日本軍が連合軍の捕虜やアジア人労務者を酷使して完成させた泰緬鉄道(死の鉄道)の取材に出掛けた。

その頃のサンカブリーへ行く道は大小様々な石ころだらけのゴロゴロした道と、一部が砂地に覆われた埃っぽい運転しにくい道だった。対面の車と擦れ違うたびに埃がもうもうと立ち込めて何も見えなくなってしまうので、暫く車を停めてから走らなければならない最悪の道だった。場所によっては川には橋が架かっている所もあり、あるかと思えば、２本のタイヤが乗る幅に片方に大きな丸太を２、３本並べてあるだけの手摺も何もない危なっかしい橋があったりした。そうかと思うと、橋がない２０メーターほどある浅い川もあった。が、躊躇していられなかった。橋のない川に直面したときは、素足で川底の地面の堅さを計り、突き進むしかなかった。僕の車は必要に応じて水陸両用を兼ね、どんな坂道でもジープ代わりに走った。１日掛かりでやっとサンカブリーに到着したが、ホテルも何もない酷い所だった。

その晩は見張りを兼ねた情報活動をやっているらしいタイ人の役人の家に泊めて貰った。次の朝連中のオートバイで旧日本軍の機関車や、宝物が隠してあるらしいと、噂されている洞窟を探検した。

ジャングルの中をオートバイで駆け回ったが、見付かったのは、戦時中に日本軍の機関車が隠してあった、と言われる洞窟だけだった。線路も何も残っていなかったが、薄暗い洞窟の中に、日本兵が書き残した名前だけが寂しそうに残っていた。

取材も終わりバンコクに帰ることになった。行きはまだましだったが、帰りは最悪の事態に見舞われてしまった。兎に角、途中でタイヤが一遍に２本もパンクしてしまったが、この辺の辺鄙な所にあるガソリンスタンドでは、チューブレスのタイヤは道具がなくて修理できなかった。予備タイヤは１本しかなかったし、どうしようかと、途方に暮れてしまった。しかし、どうしてもその日のうちにバンコクに帰らなければならなかった。

どうしようかと、思っていると、運よく５００メートルほど離れた所に道路工事をやっていた仮事務所があったので、其処までタイヤをゴロゴロ転がしてゆき、タイヤに刺さっていた小さな釘を抜き取り、その同じ穴にうんと大きい五寸釘を打ち込み、タイヤがパンパンになるまで空気を入れて貰い、暗い山道をバンコクへ向かった。途中で何回もガソリンスタンドに寄り、凹みかかったタイヤに空気を入れ、タイヤを膨らませてはゆっくりと走った。夜の１１時頃車も人間も溝鼠みたいによれよれになり、やっとの思いでアマリン・ホテルの朝日支局に辿り着いた。

この「死の鉄道」の跡を追求した取材は一歩踏み違えば確かに死神が待ち構えているハードな取材だった。僕は相変わらず元気だったが、横堀さんは帰ってから血を吐き、病気になってしまった。

タイのハイウェーは実に素晴らしい立派な道路が縦横無尽に貫通している。しかし、このハイウェーを走っている大型トラックや、バスの運ちゃんは眠くなると、常に覚醒剤を服用しているので、交通事故が頻繁に生じる原因となっている。

タイ全土に正式に登録されている車の台数は、１９９９年度の統計によると、１９３３万４０００台（オートバイ１３２４万５０００台を含む）である。だが運転免許を簡単に入手できるために、２０００年度の１年間に起こった全国の車の交通事故件数は、７万３７３７回に及び、このうち、バンコクが４万３４８５回となっている。なお、死亡者は全国で１万１９８８人、負傷者が５万３１１１人にのぼり、信じられないほど実に酷いものである。

交通事故は幾らこちらが気をつけていても、事故が起きるときは起きるもので、僕自身も一度崖から落ちて命拾いしたことがある。

それは、タイ・ビルマ国境のスリーパゴダでモーンの族独立４０周年記念式典があるので、その取材に行く途中で起こった出来事だった。

僕が事故を起したのは、１９８８（昭和６３）年１１月１３日の金曜日のことだった。そのとき、僕はウィールス社の佐伯憲一郎さんとカーンチャナブリーのビルマ国境に接した、白い余り高くない三塔の峠が聳えているモーン解放区で１４日に会う約束をしていた。僕は約束の１日前に、我侭な失敗ばかり重ねている弟子、松村みかちゃんを助手席に乗せ、早朝にインペリアル・ホテルを出発した。

途中で宝石を掘っているボーライ地域の現場に寄り、泥まみれになって宝石を捜している人々の姿をカメラに収めた。僕が取材をしている間に、みかちゃんはここでもへまをやり、両足を泥の中に突っ込み靴を汚してしまった。僕が「新しい靴を買ってあげようか」と言ったが「いらない」と言うので、カーンチャナブリーの町には寄らず、そのまま三塔の峠を目指した。

カーブの多いトーンパープームの町を目指していたときだった。何故か僕の体内の毛が急に総毛立ち、体の血が引いたようにひやっとなった。僕は不吉な予感を感じ、これは何か災難が降り掛かってくるな、と感じた。

それからものの５分も立たなかった。曲がりくねった蛇のような狭い山道を走っていたときだった。最後の左へ曲がるカーブのところで、ハンドルを左に切ったが、タイヤがパンクしていたために、ハンドルが言うことを利かず、車はそのまま右の崖を目指して突進してしまった。万事休すである。車は５、６メーターの高さの崖から頭を下に向け、ヒューと勢いよくすっ飛んだ。僕は４つのタイヤが空中に浮いた途端に前輪のタイヤを真っ直ぐにし、両手でハンドルを握り締めたまま下に降下していった。

僕は下に落っこちていく数秒間の間に、目の前に何があるかを見ていた。下には大きな石も大木もない、これなら危険な障害物は何もないから助かるなと、冷静に考えていた。

車はまだ眠っているみかちゃんが乗っていた助手席の方から左に傾き、崖から２０メーター先にすっ飛び、地面にドスンとぶつかり、その反動で２回転半し、４っつのタイヤを横に向けて静止した。

僕は車が回転しているあいだ、両手でハンドルをしっかり握り締めたまま車と一緒にぐるぐる回っていた。僕は車がピタッと停まった途端に、後ろの座席に置いてあったカメラを鷲摑みにし、パッと外へ飛び出した。

外に出てみると、車からガソリンが漏り、流出していた。これは危いと思い「みかちゃん、大丈夫」と声を掛けた。

すると「大丈夫」と、まだ寝ぼけた顔で返事が返ってきた。僕はみかちゃんの声を聞き、ホッとし、直ぐ車の底になっていたみかちゃんを助け出した。

僕は横になった車を一人で押してみたが、無理だったので、みかちゃんの力を借りて２人でヨイショ、ヨイショと掛け声をかけて押し、車を元の位置に戻した。

みかちゃんは左耳をガラスか何かで切ったらしく、耳の内側から真っ赤な血が滲み出ていた。直ぐ手当てをしなければと思っても、血止め薬も何もなかった。僕はみかちゃんを安全な処に寝かせ、救援を求めるために、急斜になっていた崖を駆け上がったり降りたりした。暑くて汗ぐっしょりになったが、僕はその間に、白黒とカラーで事故現場の写真をバシャバシャ撮っていた。ただ困ったことに、この事故で眼鏡を無くしていたので、被写体はボーッとしか見えなかった。やっとの思いで通りかかったお坊さんの車が助けてくれたので、みかちゃんを労わり、崖をよじ登った。

車の中は空いていたので、僕はみかちゃんを膝の上に寝かせ、事故現場から５０キロほど離れた町の小さな木造建ての診療所に駆け込んだ。ドクターは雲隠れしていなかったが、２、３人の看護婦がいたので、直ぐ手当てをして貰った。みかちゃんは耳に麻酔の注射を打たれ、耳を１０針ほど縫われていた。だが彼女が「痛い、痛い」と悲鳴を上げてシクシク泣き出したので、僕は自分の身を切られる思いで、耳に響いてくる泣き声を聞いていた。僕自身は安全ベルトも何もしていなかったが、左の脛にほんのちょっとした掠り傷があるだけだった。それなのにどうして彼女にこんなに切ない思いをさせなければならないのであろうかと、思えば思うほど悲しかった。

僕は彼女の母とバンコクで会ったことがある。そのとき「みかをよろしくお願いします」と、頼まれていた手前、僕には責任があった。僕は母親から預かった大事な娘を、こんなに酷い目に遭わせてしまった。と、自分を責めた。僕はみかちゃんに「バンコクに戻ったら、直ぐお母さんに謝罪の手紙を出すから」と言ったが、みかちゃんは「直ぐ帰れって呼び戻されちゃうから、やめて」と言われて、思い留まった。あーあ、実に済まないことをしてしまったと、自分を責めた。

みかちゃんの治療が済んでから、診療所に薬を貰いに来ていた人のオーバイでみすぼらしい平屋のバンガローに送って貰った。今日は此処に泊まることにし、みかちゃんをベッドに横たえ、安静にさせ、休ませた。

僕は車の処置をしなければならなったので、直ぐ外に飛び出した。運よくアイスキャンデー売りのおっさんのサイドカー付きのオートバイが通り掛ったので、しめしめと、それに飛び乗った。僕は事故の調書を取って貰うために、まず警察へ足を向けたが、所長は他で発生した事故現場へ出掛けた後で留守だった。仕方がないので、数回に亘り事故現場や警察署を駆け巡り、警察署長を探し回った。夕方になってやっとお寺にいた所長を掴まえる事ができた。そこには崖から落ちて死亡した２人の壮年の遺体が板の間に仰向けにされたまま並んでいた。

警察で僕の取調べが終わったのは、午後６時頃だった。警察にいた警官が僕がピンピンしていたものだから、僕に「何か良いお守りを持っているのでしょう。あんな高い崖から落ちて怪我もしないで助かっている人は、今までみたことがない。不思議だ」と言われ、「是非そのお守りを見せてくれ」とせがま

れた。僕がいくら「いいえ、そんな気の利いた物は何も持っていません」と言っても、信じてくれなかった。しょうがないので、最後に「僕の護身用のお守りはこれです」と言って、真面目な顔をして、自分の白髪が混じっていた胸毛を見せて「これが僕のお守りだよ」と言うと、みんなゲラゲラ笑い出してしまった。

バンガローに戻って見ると、みかちゃんはまだベッドの上で伸びていた。傷口が傷むらしく、顔を歪めて押し黙っていた。彼女の痛々しい顔を見つめていると、可哀想になってしまい、僕は「ごめんね」と頭を下げて謝った。

翌朝、バスでバンコクへ帰ることになった。彼女は起きてきたが、身体も痛いらしく、櫛を持っても自分で髪を捌けない有様だった。僕は見ていてたまらなくなってしまい、黙って彼女の髪を軽く捌いてあげた。バンコクに戻ってから、彼女が隠していた彼氏に電話で何気なく事故が起こったことだけを知らせておいた。

崖から墜落した愛車は、シームアン保険会社の素早い手配によって、車は次の日にはバンコクに届けられ、数ヶ月で綺麗に修理して貰い、今も使っている。1回エンジンを取り替えているが、１４００ｃｃだったエンジンを１６００ｃｃのエンジンにし、今も暴走族の仲間に負けない猛スピードですっとばしている。愛車は今年で丁度４１年になるが、エンジンの調子も快調であり、地方のどんな辺鄙な所へ行っても、まだ一度もエンジントラブルを起したこともない馬力のある素直な素晴らしい車である。

僕と運命を共にし、５０万キロの道程を疾走した愛車、三菱のランサーは、僕の目が悪くなりだした２０１２年末まで、タイの国内中を縦横無尽に疾走したが、今は我が家の玄関の車庫で大人しく大休止している。

■タイの戦国時代

タイ民族の起源は歴史家の伝説によると、元、中国の南東に当る広東省および雲南省にいたタイ族（当時タイ族は哀牢と呼んでいた）が、漢民族（中国）に侵攻され、南下し、現在のタイに移住し、国土を築き上げた民族である。と伝えられている。

タイの歴史の動きを大きく分けて区別すると、４つの時代の流れがある。即ち、パームアン王とバーンガラーンハーウ王による2人の王の協力の下に、クメール民族を追放した後、ヨム川の流域に都を置き、スコータイ王国を築き上げたスコータイ時代、このスコータイ時代は、１２３８年から１３７８年（暦仁1年から天援４年）まで、およそ１４０年間続き、１３７８年からはアユッタヤー王朝の属国となった。

アユッタヤー王朝は、戦略上周囲をチャウプラヤー川とパーサック川に囲まれたアユッタヤーに新しい都を築き上げた。このアヤユッタヤー王朝時代は、１３５０年から１７６７年（正平5年から明和４年）迄４１７年間に亘り、３４人の王様によって統治された。だが、１７６７年にビルマ軍に焼き討ちされ、敗北し、廃墟と化した。

ビルマに占領された後、戦術に長けたプラヤー・タークシン王が出現し、チャウプラヤー川の流域に

当る西側のトンブリーに都を築き、トンブリー王朝時代となる。タークシン王は１７６７年から１７８２年（明和４年から天明２年）迄、約１５年間に及びトンブリー王朝時代を保った。だが、最後には統治が乱れ、タークシン王は１７８３年に処刑され、終止符を打った。

トンブリー王朝時代が終わり、ソムデッ・チャウプラヤー・マハーカサッスックが４５歳で王位につき、１７８２（明和２）年６月プラプッタヨートファーと名乗り、チャックリ王朝のラーマ一世が誕生した。ラーマ一世は首都をトンブリーから、チャウプラヤー川を挟んだ対面の東に当る沼地だったバーンコーク（バンコク）に移し、チャウプラヤーの流域にきらびやかな王宮、ワッ・プラケーウ（エメラルド寺院）などを構築し、アユッタヤー時代の面影を再現した。

当時まだサヤーム（シャム）と言われていたタイは、この時点から、現在のバンコク王朝、ラッタナコーシン時代となり、現在国民の父とされ、タイの国民に尊敬されているラーマ九世王、プーミポン・アドゥンヤデート国王に至っている。

タイの歴史を振り返ってみると、アユッタヤー王朝時代からラッタナコーシン時代のラーマ四世モンクット王時代の１８６７年の頃まで戦乱が続いている。特にビルマとの国土の紛争も激烈を極めたが、タイの戦国時代でもあった。この期間中王子同士の権力争いも激しく、暗殺事件などが絶えない暗黒時代でもあった。

しかしタイは国内の騒乱以外にも、海外のフランスやイギリスの圧力にも、そのときの情勢に乗じて好みに切り抜けているし、第２次世界大戦中でも、ピブーン首相及びプリディー・パノムヨンの才知などにより、日本や、イギリスから難題を押し付けられたにも関わらず日本とは同盟を結び、終戦後も敗戦国にもならず、好みに身を交わし、最悪の事態を乗り切っている。

弱国であるタイは、どんなに窮地に追われたとしても常に自国の独立を守り通すタイ式民主主義を維持しているしたたかな偉い国家である。

■タイのクーデター

タイは昔から戦乱を潜り抜けてきた国だけあって、軍部の勢力は常に根強く、政治もほとんど軍部の圧力に委ねらわれている。国民の誰もが憲法を基準とした民主主義を望んでいる現在、２０１６年５月に至るまでにタイではクーデター未遂事件を含めて２７回もクーデターが発生している、世界でも稀に見る珍しい民主主義国家である。

第一回目に発覚したタイのクーデター未遂事件とは、若手の下士官などの組織によって結成されたローソー１３０グループである。後一息と言うときに、仲間の密告で、１９１１年２月２７日に、ローソー１３０グループ９３名の同志は、国王の命令によって一掃され、次のように処刑されたのである。

死刑３名、終身刑２０名、２０年刑３２名、１５年刑６名、１２年刑３２名がバンクワン刑務所、その他に投獄されたが、１３年ぶりの１９２４年１１月１１日に、国王の恩赦により、全員が無事に釈方されている。但し、仲間の２名は残念ながら投獄中に病死している。

１９２４年のローソー１３０事件以来静かに流れていたタイの君主制に変化が起きたのは、１９２７

年2月にパリに留学していたプリディー・パノムヨンが、ベトナムの革命家の留学生でズオン・ヴァン・ザオとも交流し、１９２５年にパリに留学してきたプラユーン・パモンモントリーと革命を誓い合い、後に１９２７年2月に7名の留学生同志と、パリで人民党を結成したのがきっかけとなった。

タイ（当時サヤム）では8年後の１９３２年6月２４日、軍部による立憲革命が発生し、民主主義を目指すプラヤー・マノーパコーン内閣が成立し、王制時代の君主制から立憲君主制へと変貌し、今年で８４年の歳月が経過している。

僕がバンコクでクーデターが発生しているのを初めて知ったのは、第2次世界大戦終戦後の１９４８（昭和２３）年、僕が１７歳のときだった。この年は珍しく2月、４月、１０月と3回も引き続きバンコクの王宮付近で、軍部のクーデターが発生している。

僕はこの時点から今まで８５年間にこのような政変を１８回にわたり現場を見て経験している。タイのクーデターは無血クーデターの場合が多い。だがこのうちの7回は市内で銃撃戦を交えた凄まじいものだった。

未だに記憶に残っているのは、１９４９（昭和２４）年6月２５日のプリディー・パノムヨンと海軍の仕官が首班となった、陸軍と華々しく銃撃戦を交えたクーデターや、１９５３（昭和２８）年6月２９日に発生した海軍によるマンハッタン事件などがある。

１９５３年の海軍が起こしたクーデターは、ピブーン首相がマンハッタン号受け渡しの調印式に赴いた際に、スコータイ号の海軍司令官マナッ・チャルパン少佐にホールドアップされ、チャウプラヤー川の真ん中に停泊していたシーアユッタヤー号の艦内に監禁された事件である。このときはチャウプラヤー川を挟んで凄い銃撃戦となったが、ピブーン救出に当たり、空軍機が飛来し、シーアユッタヤー号目がけて爆撃が開始され、ピブーン首相はこの爆撃のどさくさの際に川に飛び込み、川岸に泳ぎ着き、奇跡的に助かった。シーアユッタヤー号は激しい空爆に遭遇し、直撃弾を食いチャウプラヤー川の真ん中に沈められてしまったのである。

この頃のクーデターはどちらかと言うと、陸軍対海軍の勢力争いが主眼となり、双方の対立も厳しかった。当時、ウィタユ通りにも海軍の基地（現日本大使館周辺）があったので、クーデターが発生すると、このウィタユ通り付近でも、双方の銃撃戦が起こり、当時は道に沿う両側に運河が流れていたが、通りの並木が銃弾に抉られたりした。

プローンチッの英国大使周辺は陸軍が占領し、スクムウィッに行く鉄道の処に１０５ミリ砲を据えて、プラカノーンの方を向けて睨みを利かせていた。一方海軍は、プラカノーンの橋の上に陣地を敷き、対峙していたので、スクムウッ通りには人影は全くない有様だった。

今まで続いていた陸軍と海軍の対立は、この１９５３年のマンハッタン事件を最後に、一応終止符を打った。海軍は陸軍の徹底した制圧により、ずたずたに引き裂かれ、足腰をへし折られしまった。海軍の最盛期はこの時点から半減されてしまい、海軍独自でのクーデターは、１９５１年のマンハッタン事件を最後に完全に姿を消してしまったのである。

■民主革命の渦の中で

１９４８年（昭和２３）年４月７日、アパイウォン文民内閣が、総辞職して以来、タイの政治は、学性センターによる憲法要求革命が起きる１９７３（昭和４８）年までおよそ２５年間に亘り、陸軍の独裁政権によって牛耳られていた。

当時のタイの政治、経済、国防は１９４８年４月１５日以降、ピブーン・ソンクラーム元帥や、独裁者だったサリッ・タナラッ元帥、タノーム・キッティカチョーン元帥、プラパート・チャルサティヤン元帥ら、４人の手腕によって委ねられていた。

タイ軍部内の勢力争いは実に複雑なもので、ピブーン首相は、閣僚だったサリッや、タノームに寝返りを打たれる破目となった。サリッ少将（１９４９年中将となり、１９５６年元帥となる）は、当時勢力を盛り上げてきたパウ・シーヤーノン警察局長と勢力争いを繰り広げていた。だが、パウ大将がクーデターを起寸前にサリッ元帥が先手を打ち、１９５７（昭和３２）年９月１６日に、クーデターを決起した。このクーデターで当時首相だったピブーン元帥は日本へ亡命した。日本で余生を送っていたピブーンは、１９６４（昭和３９）年６月１１日。日本で死亡し、タイには再び帰れぬ身となった。

独裁政権を采配したサリッ元帥は、家に放火した犯罪者などを見せしめに、一般市民の目前で、サナームルワンの広場で死刑に処したりしたために、犯罪率は低下し、町のチンピラグループや一般市民に恐れられる人物となった。サリッ元帥は女好きでもあったので、美人の妾を１０８名も囲って豪遊していた、と言われているが、１９６３（昭和３８）年１２月８日、プラモンクッ９病院で病死し、終止符を打った。

サリッの跡を受け継いだタノーム及びプラパートは、１９７１（昭和４６）年１１月１７日、一族の私欲のために、自分たちで反政府クーデターを起こし、制定されていた憲法を破棄し、完全な独裁政権を打ち出した。

タノーム一族が取った政権は、１９７２（昭和４７）年１２月に暫定憲法を公布し、タノームが首相兼国防最高司令官兼外相を兼任し、プラパートが副首相兼陸軍総司令官兼内相のポストを牛耳り、タノームの長男であり、プラパートの娘婿に当るナロン大佐が共産主義掃討作戦司令部及び国家行政監督局長官のポストの地位につき、肝心なポストを完璧に押さえてしまった。タノーム政権は手にした権力を悪用したために、政治は乱れ、汚職は益々酷くなる一方だった。この他にも、１９７３(昭和４８)年４月末には陸警高官によるトゥンヤイ禁猟区内での密猟した獲物を積んだヘリが墜落したために事件が発覚し、国民の不満を買った。それに６月にはこの秋で定年になるプラパートの定年を１年（タイの定年制は６０歳）延期する草案を出した。

この問題がきっかけで、ラームカムヘーン大学生グループによって軍政を批判した書物が出版された。この他にも、チュラー大学や、タマサート大学からもいろんなビラなどが配られていたが、９人のラーカムヘーンの大学生が逮捕された事件が起きた。この逮捕事件に対し、学生や民衆から軍政に対する批判の声が高まった。６月２１日夕方サナームルワン広場におよそ４万人に上る学生や民衆が集まり、９人の学生釈放、サック(ラームカムヘーン大学学長）学長の解任、民主憲法早期交付の３項目に関する要

求を叫ぶ、軍政に対する抗議集会が開始された。民衆の反発にタノーム政権は止むを得ず９人の学生を釈放したが、この時点から民衆の後援を得た大学生は、ティラユッ・ブンミー、チュラーロンコーン大学の書記長を筆頭に、タイ全国学生センター（ＮＳＣＴ）は勢力を盛り上げ、団結し、反軍事政権運動の火蓋を切った。

１０月６日、民主憲法に関するパンフレットを配っていた１００人、百人委員会のグループ、大学生、知識人、大学の講師たち１１人が非合法集会で逮捕された事件が起きた。後に更に２人が逮捕され、１３人となったが、これが１０月１４日の「血の日曜日」流血事件へと発展した。９日からタマサート大学構内の広場で抗議集会が開かれ、当初２万人ほどだった群衆は、１４日にはおよそ２０万人の大衆に膨れ上がっていた。ＮＳＣＴの指令車を先頭にタマサート大学からデモ行進が始まり、ラーチャダムヌーン通りを群衆の波で埋め尽くしてしまった。

プラパート元帥は、ナロント大佐と共にこの群衆の鎮圧作戦に掛かった。まず、バンコクの部隊を出動させ、続いてロッブリーの特別軍事センターから戦車隊及び、歩兵隊を繰り出し、戦車を先頭に、素手で集会している民衆に銃弾の雨を降らせた。一方陸軍のヘリポートから飛び発ったヘリは、上空からサナームルワン広場や、タマサート大学構内にいる大衆目掛けてバリバリと機銃掃射を浴びせ、遠慮会釈もなく殺傷を試みた。

しかし、民衆は怯まなかった。学生の一人は給水車を運転し、戦車に体当たりを決行し、勇敢に抵抗した。民衆の一部はガソリンスタンドを占領し、火炎瓶を作り、出来上がった火炎瓶を税務局ビルや、ロットリー（宝くじ）局ビル、首都警察本部などに投げ込み、ビルを次々に焼き払った。

僕はこのときサナームルワンに近いラーチャダムヌーン通りで取材をしていたが、遠くから戦車が向かってくるのが見えたので、カメラのレンズを２００ミリの望遠に付け替え、写真を撮ろうとした瞬間だった。

戦車の後ろにくっついてきた歩兵隊にバリバリと乱射された。その途端に僕の目の前にいた学生が(男と女）２人が真っ赤な血を浴びてバッタリと倒れた。弾はビューンビューン飛んで来るし、もう取材するどころの騒ぎではなかった。僕は自分が狙われているのがわかり、そのまま伏せの姿勢で中腰になり、ジグザグに後ろに向かって走り、マカームの木（タマリンドの木）の後ろに伏せた。銃弾は木の幹にビシッビシッと当ったが、そのときはマカームの木が身代わりになってくれたので運よく助かり、ホッとした。

僕はこの辺にいると危ないと思いと、身の危険を感じたので、ラッタナコーシン・ホテル（ローヤル・ホテル)の中に駆け込み、ホテルの一室を空けて貰い。ホテルのバルコニーの所に立って取材を始めた。其処の位置からは三方の見通しがよく利く、絶好の場所だった。写真を撮っていると、APや、タイの知っているカメラマンが入って来たので、４人でバシャバシャと、写真を撮っていた。すると、また例の戦車が今度は間近に現れた。僕が望遠でその戦車を覗いていると、戦車の機関銃の銃口が僕たちがいる上の方へ向けられたので、僕が「危ないっ、戦車から撃ってくるから伏せろっ」と叫んだと同時だった。バリバリッと乱射され、挙げ句の果てには催涙弾ガスまで撃ちこまれた。部屋中真っ白い煙に包まれて

しまった。目が痛くなり、大粒の涙がポロポロと溢れ、どうにもならなかった。僕はそのまま階下に駆け降り、外に飛び出した。ハンカチを水に浸して目に当て、暫くじっとしていた。

此処でも僕の機転で４人が助かったが、殺気立った田舎の兵士は実に獰猛だった。「デモの群衆はコマニッ（共産主義者）だから皆殺しにしろ」と上官に命令されていた田舎の兵士は、上官の命令どおり、容赦なくバリバリと群集目掛けて撃ち込んできたのである。

１５日まで続いた史上最大の「血の日曜日」流血事件は、国王の介入により、タノーム、プラパート、ナロン一族が海外へ亡命し、２５年に及んだ軍事独裁政権に終止符を打った。一方、国王と会見した学生は勝利を得、憲法を基礎とする民主主義を取り戻した。

しかしこの流血事件で４４４名が行方不明となる惨事となった。この動乱でＮＳＣＴ（全国学生センター）は民衆から当時３億４５００万円にあたる献納金を受け、大資本家となった。だが、この運動資金が後に災いをもたらす原因ともなった。

学生と民衆による民主革命は腐敗しきったタノーム独裁政権を倒し、待望の民主主義を取り戻した。サンヤー・タマサック（元タマサート大学総長）首相による文民政権が発足し、明るい民主主義時代が訪れるかに見えた。その夢は学生同士の分裂もあったが、後に起こった１９７６年の１０月６日の「血の水曜日」事件で軍部の巻き返しなどにより、残念ながら長続きしなかったのである。

■初めての日本

僕は生まれて初めてパスポートを手にし、２万円の大金と１０ドルを懐に突っ込み、タイ航空機の座席にちょこんと座り、ドーンムアン空港から香港経由便で第二の故郷、日本へと、飛び立った。機内は香港行きの観光客でごった返していたが、香港でうるさい邪魔者を吐き出してからは、嘘みたいに静かになった。

真っ暗な何も見えなかった視界に無数の明りがキラキラとちらつき、綺麗だなあ、一体何処だろう、と、思って見とれていたが、其処は大阪の上空だった。此処でも数人の乗客を降ろし、最後の終点羽田空港に着いたのは午後１１時頃だった。

パスポートチェックも、税関もスムーズに難なく無事に通過したのはよかったのだが、右も左もわからぬ方向音痴。さて、これからどちらへ行けばよいのやら、と思いながらフラフラしていると、「モノレール乗り場」の文字が目に飛び込んできた。何処まで行くのか、行き先もわからなかったが、何はともあれと、がら空きのモノレールの細長い座席に収まった。初めて乗った乗り心地は快適だった。

終点でみんながさっと降り出したので、何処だろうと思って降りた所が浜松町駅だった。僕には何の当てもなかったので、金魚のうんちみたいにみんなのお尻にくっついて歩き出した。すると、みんなが他の電車に乗り換えたので、僕もみんなに見習い、その電車に乗り込んだ。車内はわりに空いていたが、最終電車だったらしく和服を着た女の人や、商社マンが疲れた表情で吊り皮に掴まってフラフラ揺られていた。座席の所々に飲みすぎた数人の酔い潰れた連中がだらしない格好で引っくり返っていた。

電車はゴーゴーとスピードを出して走っているが、外は真っ暗で何も見えない。例え見えたとしても、

何処だかわからないに決まっているし、現に何処へ向かって走っているのかすらさっぱりわからなかった。行く先も目的地もなかったが、ふと、これから朝日新聞社へ行こうと思い付いた。

朝日新聞社の所在地もわからないままに、適当な駅で電車を降りた。深夜の大都会、東京をフラフラ歩いていると、バナナ売りのおっさんがいたので、朝日新聞社へ行く道を聞いてみた。「此処からまだ大分あります、遠いですよ、タクシーで行った方がいいですよ」と言われたが、大体の方角がわかったので、街頭の灯りを頼りに有楽町を目指した。

朝日本社に辿り着いたのは午前1時頃だった。社の入り口で「僕はタイから来た朝日支局の助手をしている瀬戸です。石川巌さんに会いたいのですが……」と言ったが、朝日の警備員は、深夜に色の黒い変な人物が現れたので、警戒してなかなか通してくれなかった。

すったもんだして、やっと外報部の当番の人が迎えに来てくれたが、石川さんは帰宅したあとだった。初対面の当番の記者も、こんな時間にとか、石川さんに会う条件や、石川さんの電話番号は教えられないなどと、くどくどと下らぬことをごたごたと言い出し、僕をうさんくさそうな顔で凝視していた。

僕にして見れば、本社からバンコクに来る連中には例え初対面の人であっても、いつも大事に取り扱って面倒を見てあげているのに、本社では何故こんな態度をとるのか、何だ生意気な奴だと、思って、睨みつけてやった。すると、その記者が僕から視線をそらせた。僕をどう扱えばよいのか迷っていたようだったが、やっと重たい腰を上げて石川さんに連絡を取ってくれた。

鶴の一声と言う言葉があるが、石川さんの一声で、急に肢体がクニャクニャに柔らかくなり、表情まで綻び、普通の人間様の顔になった。直ぐに朝日専用の旅館をアレンジしてくれ社旗の付いた朝日の車でその旅館まで送ってくれた。その日の深夜物語は、これでひとまず無事に幕となった。

朝目が覚め、旅館の二階から初めて見る東京の風景を眺めると、梅雨の冷たいお名残雨がシトシト降り注いでいた。何処を向いても、傘、傘、傘、傘の波が忙しそうに揺れ動いていた。僕の愛用のカメラは、バンコクを発つ前に質屋に入れてきたので、写真が撮れないのが残念だったが、その光景は今でも実に印象的に頭に残っている。

僕はその日から二週間ほど藤沢市辻堂に家を構えていた石川さん宅で、お世話になることになった。石川さんの家族は奥さんと、小さな可愛い娘が一人いる3人暮らしだった。僕は階下の海に面した部屋を占領して勝手気ままに出入りしていた。

僕は早速石川さんのカメラを借りて、飛び歩き、写真を撮り歩いた。が、タイミング的に僕が日本へ行った時期が１９６９（昭和４４）年6月２６日だったので、まだ毎日のように憂鬱な雨が降り続いていた。

或る日の夕方、辻堂駅でみんなの後ろにくっついて行儀よく並んでタクシーを待っていたときだった。また例の雨が春雨式に静かに降りだした。僕は傘なんて気の利いた物を持っていなかったので、そのままカカシみたいに突っ立っていた。すると、後ろにいた小柄な和服姿の淑やかな女性が僕に傘を差し出してくれた。あーぁ、何と有り難いこと、女神にでも出合った心境だったが、お礼を言って、タクシーに乗り込んだ。

僕は7月初めに神戸にいる弟子のサコン君に会いに行った。まず電車で大阪まで行き、大阪で取引先の貿易の社用を済ませ、夜中に取引先の社長の車で神戸駅まで送って貰った。午前1時頃だったので電車はもう姿を消していた。

僕は寝静まった神戸駅のベンチに身を寄せて休んでいた。すると駅員の係りの人が「悪いけど此処はやくざなどがいて危ないから他へ行ってください」と、うまいことを言って駅から追い出されてしまった。しょうがないので、フラフラ歩き出したが、道端に木がこんもりと茂った階段のある屋敷が目についた。ようし、今晩は此処だ、と決め、その木陰で寝ることにした。運よく一匹の蚊も蟻もいなかったし、憂鬱な雨も降らなかったので、ぐっすり眠れた。まだ薄暗い何処だかわからない歩道を散歩がてらに一時間ほど歩き回った。歩いていると、何寺だか知らないが、お寺があったので、境内の腰掛に腰を下ろし、其処で大休止していた。すると、柄の長い箒を持ったお坊さんがまるで舟を漕ぐ様な仕草を繰り返し、地面に落ちている枯葉をガサゴソ掃きだした。

神戸では、サコン君が借りていた居間兼、食堂兼、寝室といった目茶目茶に狭い下宿先で寝泊りした。当時、サコン君は小さな貿易会社に勤めていたが、日本語は上手になっていたので嬉しかった。

僕が辻堂の石川さんの所に戻ったときは、もう7月初旬に入っていた。丁度近くのプールでプール開きがあったので、僕は石川さんの自転車を借りて泳ぎに行った。しかし、ものの２０分も泳ぐと、「上がってください」と言われ、全然泳いだ気がしなかった。

僕は自転車で東海岸通りを潮風に打たれて走り回った。鎌倉や、江ノ島周辺まで足を伸ばし、楽しい一時を過ごした。日本には細い自転車専用の道があるので、安全で実に便利だった。僕は初めての日本で楽しい思い出を残し、７月１０日に日本を去ることになった。

最後の日はまだお金が少し余っていたので、タクシーで羽田空港まで行った。高速料金を含めてタクシー料金を払ったら、何と、たった１００円しか残らなかった。

■成田空港の素顔

タイ人の弟子Ｎと日本の博多で会う約束を交わし、一足先にと「ＪＡＬのおはよう便」のゆったりした座席に収まる。親戚にあたる弟の取り計らいで、生まれて初めて「ファーストクラス」とか言う席に乗せて貰ったのだが、流石にサービス満点、まずパーサーが「ハウ・ドゥーユードゥー」と、しっかりと手を握り、後は午前3時頃まで美しいエアホステス嬢の至れり尽くせりのサービスに敬服。やっとネンネさせて貰えたかと思った途端に、もう成田空港の上空をブーンブーンと旋回していた。

結局は一睡もしないうちに地面に降ろされ、パスポート・コントロール・セクションへ直行。此処で係りのお偉さんから、うさんくさそうな視線でジロリと一瞥され、やっと第一線の地獄門を無事通過し、ヤーレヤレと安堵の胸を撫で下ろしたのが失敗の元だった。

出口近くのカストタム・セクションの長蛇の列に仲間入り。前に並んでいるのはニッポン人ばかり、瞬く間にスムーズにチェッが済み、みんなホッとした顔でガラス扉の外へと姿を消してしまった。さて、いよいよ自分の番となり、小さなボストンバッグとカメラバッグ、それと一千ワットの大きな変圧器を

細長い台の上に並べて、そおっとタイのパスポートを差し出した。
すると、待ってましたとばかりに、蛙を捕らえた蛇のような目をした係りのおっさんが、英語で、「同伴者はいますか。マリファナ、ヘロイン、覚醒剤、麻薬、武器、ピストルなどを持っていますか」と、矢継ぎ早に質問の雨を浴びせ掛けてきた。最後には、英語で書いた規制品目がずらりと並んでいるプラカードみたいな物まで見せられた。
こちらも、片言の英語で「いいえ、そんな物騒な物は持っていません、no、no、no 」と、能無しみたいに「ノー、ノー、ノー」とだけ、答えていたが、係りのおっさんは、同僚に「おい、こいつは怪しいぞ」と言いながら、バッグの底まで引っくり返し、フイルム入れのキャップまで全部外し、望遠レンズを入れているカバーの底まで引っ剥がして獲物を捜しまくっていた。洋服のポケットに入っている細々した物までも全部提出しなければならない破目になった。だが、何も出てこないものだから、変圧器の中に隠しているらしいと睨らんだらしく、同僚に、「これはエックス線が通るか、中身をチェックしてくれ」と、会話のやり取りをしていた。これはいよいよ面白くなってきたぞ、と思っていると、変圧器を指差して、「これはなんだ」と言うので、「電圧をあげたり、下げたりする物なのです」と答えたが、それでもわからないので、こちらも面倒臭くなって、日本語で「変圧器です」と答えると、係りのおっさんがギョッとした顔で、今度は日本語で「何のために持ってきたのですか」と、問われたので、「市村先生に頼まれた物です」と、ニタリと微笑みながら答えた。
やがて重たそうに変圧器を抱えた同僚が戻ってきて「中には何も入っていなかった」と告げた。最後に「日本語が旨いけど、何処で習ったのですか」と問われ、「タイで習いましたが、まだそんなに話せません」と答えると、「お仕事は何ですか」と聞かれたので、「バンコク朝日支局の顧問をしています」と言うと、「それはどうも済みませんでした」と、ピョコンと頭を下げて謝った。
ついさっきまで僕を軽視し、散々苛めておいて、今更謝ることもないであろうに、まだ犯人でもないのに、タイ人であり、外国人の身であるがためにこんなに冷たい扱いを受けなければならないのであろうか。空港は玄関の入り口、鏡であるはずの日本の係りの担当者は何故こんなに傲慢で生意気な態度示すのであろうか。
外国人の顔がみんな犯人に見えるのかもしれない。だが、過去においてタイからの不法入国者が多かったので、このように警戒され、冷たい取り扱い方を受けるのは当然かもしれない。しかし、これが有名な成田空港で受けた第一印象であり、実に不愉快な思いで腹が立った。
勿論、現在タイからはビザ無しで日本に2週間滞在できるようになったので、割りに穏便になったが、昨年（２０１６年１２月３日）日本へ行ったときは、羽田空港のパスポートチェックで、指紋を撮られている最中に「日本円を幾ら持ってきましたか。ホームステイするのですか」などと、今まで一度も聞いかれたこともなかった質問を受けた。

■浅草の朝

早朝からわざわざ成田空港に迎えに来ていた写真部の朝日の松本逸也さんが「随分遅かったけど、と、

怪訝な顔をして聞くので、「ヘッヘッヘッーヘーヘッヘー税関で随分搾られたよ、まるで犯人扱いさ」と言うと、「そうだろうな、その風貌だと、どう見たってマフィアのボスだよ」と、からかわれてしまった。

「さて、これから本社へ行く」ときたから、「嫌だ、僕の好きな雪姫（篠原由樹）に会いに行く。浅草の有名なN社に勤めているから其処へ連れて行って」と、強引に車をそちらに回して貰う。

車内から松本さんにN社に電話を入れて貰ったのはよかったのだが「朝日新聞」と言ってしまったものだから、雪姫ちゃまが部長様に呼ばれて「朝日が取材に来るそうだが、君は何か悪いことでもしたのか」と、N社では大騒ぎ。「バンコクの猿が来たのです」と聞き、一段落したとかで、申し訳ないことをしてしまった。

お腹の虫が「お腹が空いたょー」と、メソメソ泣き出したので、浅草界隈を歩き、食べられそうなものを探し回ったが、食堂は何処も全部「只今準備中」と書いた表札が入り口の所に掛かっていて立ち入り禁止。仕方がないので喫茶店に入ったけど…、タイだったら早朝から至る所に屋台が顔を出していて何でも売っているのに、その点日本では何処も全部時間制になっていて不便である。

■市村家にて

夕方剣道家の元気溌剌とし篠原由樹ちゃんと新宿駅で待ち合わせて、曰く付きの重たい変圧器を彼女に持って貰い、市村先生宅へ連れて行って貰う。

猿が現れるのを手ぐすね引いて待っていたタイが大好きな市村家では、いつも眠そうな顔をしてポツリ、ポツリ語る市村敏幸先生、象のような可愛いおメメをした里江奥様、「話して、話して」と、話の催促ばかりする亜悠ちゃん、ペラペラよく喋るアナウンサーの拓斗君、涙が出ない泣き方の名人汐里ちゃん、それに隣近所の人たちが僕が来るのを待っていた。アーァ、まるで猿芝居でも見物にこられたみたいで、見世物にされてしまった。

奥様お手製の美味しいご馳走を突っ突きながら、ブツブツ、モソモソ話しているうちに夜も次第に更け、一人ずついなくなってしまった。特に、僕と話したい、と言っていた肝心な先生はコックリ、コックリとダウン。最後まで付き合ってくれたのが、奥様と、雪姫だけとなり、とろんとした目つきで朝まで話込んでしまった。

一睡もしないうちに、市村先生のお尻にくっついて先生が教えている学校まで一緒にお供する。静かな歩道を歩いていると、からすが4、5羽カーカーとわめきながら飛んでいった。いやー、懐かしい声だ。バンコクの都市からとっくの昔に姿を消してしまったからす。それが日本ではまだ元気よくカーカー鳴きながら羽ばたいていた。数年ぶりに聴く懐かしいからすの鳴き声に耳を傾けた。

■移動事務所

ラッシュ時間を外し、東京駅から博多行きの新幹線にスーウッと乗り込む。乗客が少ないガランとした自由席のシートに腰をおろし、他人様の仕草を見ていると、むっつりと新聞や本を読んでいる人や、会社の書類に目を通している人、見積書を見ながら計算器でガチャガチャやっている人や、何か原稿を

書いている人などがいて、みんな真剣な表情で仕事に熱中している。時々ピンポンパーンと、車内アナウンスがあって「〇〇社の〇〇様お電話でーす。〇〇号車までおこし願いまーす」と、可愛い声が流れてくる。猛スピードで疾走する新幹線はまるでビジネスマンの移動事務所みたいなものだ。

寛いで外の景色を眺めている人や、ペチャペチャ喋っている人はほとんどいない。流石はよく教育された勤勉家の、社に忠実な実によく働くニッニポン人である。

■博多にて

友人の紹介で旧赤線地帯の朝食付きの安宿に泊まる。朝、食堂に顔を出し、コーヒーを一杯注文すると、係りのおばさんが、「和食はただですけど、コーヒーは実費でお願いします」と言われ、「コーヒーの方が安いのにケチだなー」と思ったが、仕方がない。たった３００円のコーヒー、他よりは安いけど、タイのバーツに換算すると、約９０バーツもするんだ、高い高い。

古びたソファーで新聞を読んでいると、〇〇大学柔道部の体格のいい威勢のいい学生グループが１０人ほどドヤドヤと入って来て、僕の回りを取り囲み、大声で遠慮会釈もなく喋りだした。そのうちにセックスの話になった。引率してきた先生曰く、「今日の若者でセックスしない人は誰もいないさ。男も女もみんな適当にセックスして楽しんでいるんだ」と、説明していた。

アメリカナイズされた日本はフリーセックス時代なのだ。自動販売機から自由に選べる雑誌、週刊誌ひとつにしてもそうだけど、ポルノ雑誌や、変な大人用の漫画や、ホテルの寝室のある１００円コインを入れるビデオに至るまでセックス、セックスで酷い国に堕落してしまっている。

後進国のタイでは、小さな子が煙草をスパスパ吸い、よくないと思われている。だけど、先進国日本ではそれどこではない。小さい子がセックスに関する絵や本を見て楽しんでいる。しかも誰も「いけません」と、注意する人も、止める人すらいない自由な国である。

自分の子供を育てている両親にとっては頭痛の種ではないかと思うのだが、このままほったらかしておいていいのであろうか。

■弟子と共に

夕方、朝日新聞社前の博多駅へ弟子を迎えにゆく。大きな鞄をさげた弟子が、体をくねらせてやっとこさと、電車から降りてきた。生憎雨となり、「傘は持ってきたか」と聞くと、「いいえ、持っていません。雨が止むまで待ちましょう」と、呑気なことを言う。「おい君、日本の雨は一日中降り続くんだ、タイとは違うんだ、だから傘だけは忘れずに持って来いと、あれほど言ったじゃないか」と言ってみたが、ピントくるはずがない。駅から歩いて１５分ぐらいの距離だったが、トランクは重いのでタクシーでホテルまでゆき、最低料金５６０円を払うと、「１４０バーツもするの、高い」とびっくりしていた。

ホテルでチェックインを済ませ、「僕は先に風呂に入ってくるからね」と風呂に入り、いい気持ちになって部屋に戻り、「次ぎは君の番だ、行っておいで」と言うと、弟子は素直に「はい、行ってきます」と、威勢よく答えたので、「風呂場は階段を降りた左側の一番奥にある。裸になってみんなと一緒に入るんだ

よ」と言うと、「先生、僕行きません。恥ずかしくては入れません。部屋の中で浴びます」ときたから「おーい、みんな同じ倅をぶら下げている男だよ。何も恥ずかしいことなんかないじゃないか」と言ったが「いやです」と言う。「だったら女の前で裸になるのは恥ずかしくないのか」と聞くと、「それとこれは別です」と言う。「だったら女の前で裸になるのは恥ずかしくないのか」と聞くと、「それとこれは別です」と、どうしても駄目だった。

夕食を済ませコーヒーを啜りながら弟子と雑談していると、弟子曰く「東京駅の新幹線の乗り場まで友人に送って貰って空いていた3人乗りの座席に一人で座っていたんです。すると、電車は途中で込みだしたんです。乗客の人たちが自分の目の前まで来ると、立ち止まって日本語で何かしきりに話し掛けてくるのです。だけど、何を言っているのかわからなかったので、何か聞かれるたびにずっと首を横に振っていたのです」と話すので、おかしくなって「それで君の横には誰か座ったの」と聞き返すと、「いいえ、博多まで空いていたので楽でした」と、真面目な顔で答える。「それはね、その席は空いていますかと、聞いていたんだよ」と説明すると、「なるほど、そうだったのか」と、苦笑していた。

次の日は広島に寄り、広島の駅から写真を撮りながら広島平和記念館まで歩いた。弟子は靴磨きのおっさんを見つけてパチリ、パチリ写真を撮り始めたのは良かったのだが、靴磨きのおっさんが「こらっ、なんで俺の写真を撮るんだーっ」と、カンカンになって怒り出した。しかし、弟子はまた何か言っているぐらいな気持ちでシャッターを切っていたので「おい、おっさんが写真を撮るなと怒っているんだ」と注意すると、「へーぇ、どうして怒るんだよ。日本人はタイに来てみんな好き勝手に写真を撮っているじゃないか」と、憤慨していた。

広島から大阪へ行き、大阪のターミナル・ホテルで悪友の同窓生と会い、夜みんなと一緒に繁華街の料理屋で食事をしたが、落ち着いて食べている暇もなく、「閉店しますので」と、店主から追い出されてしまった。日本は随分冷たいんだなぁ、と、物足りない気がしたが、国が違うのだから仕方があるまい。今夜は福井久子ちゃん宅に潜り込むことにし、電車に揺られて西宮の久子ちゃんの家に辿り着く。まずはお風呂に入れて貰い、弟子にも「おい、いいお風呂だよ、入っておいで」と促すと、「いや、いいです」と言うので、「此処は個室だから大丈夫だよ」と言うと、やっと安心して風呂に入っていた。

弟子が「奈良へ行きたい」と言うので、久子ちゃんのご主人に案内して貰い、同窓生一同と共に遠足気分ではしゃぎながら奈良の旧跡巡りをした。だが歩いているうちに、弟子は疲れたらしく「日本人はよく歩くんだなあ、疲れないのですか」と、ブツブツ溜め息を突いていた。

帰りに奈良駅の近くまで歩いてくると、一人の坊主が立って物乞いをしていた。通行人が知らん顔して通り過ぎて行ってしまうのを見て、弟子が「日本人は何故タンブン（お布施）しないんだ。あんなに立たせておいてお坊さんが可哀想じゃないか」と、怒りだしたので、「おい、おい、此処は日本だよ、タイとは違うんだからね。別にお坊さんを侮辱している訳じゃないから、怒ったって始まらないよ」と、慰め役。

風邪気味だった弟子は参ってしまったらしく、「もう先生と一緒に歩くのは嫌です」と、嫌われてしまった。別に苛めているわけでもないのに仕方がない。大阪ターミナル・ホテルで彼の友人にバトンタッチして別れた。

■東京の渦の中で

東京都内で人の大衆に押され、渦の中に巻き込まれてウロウロすれば「犬も歩けば棒に当る」とかと言われている諺がピタリと当る場所である。そこで「猿も歩けばおもろい物に突き当たる」てな新語を勝手に決めて、フラフラーッと一人歩き。

新宿でタクシーを停めても短距離だと、自動ドアをバターンと閉めて、風船みたいにプイと、膨れた顔をして行ってしまう。やっと載せてもらった運ちゃんに何か話し掛けても、ツンとして返事もしない。タクシーメーターを覗いて乗車料金を払っても、やはり知らん顔。「ありがとう」と、一言いったって損もしないし、疲れもしないだろうに……、運ちゃんがみんな同じだとは言わないけど、これが日本のタクシーマナーなのかも知れない。これから日本でタクシーに乗るときはオシになるべし。

地下の隅々まで蜘蛛の巣を撒き散らして走っている都電電車は実に便利な乗り物である。ラッシュ時に飛び乗ると、押すなおすなの肉体マッサージ、美女の香水やら、野郎どもの汗臭い体臭で揉みくちゃにされてしまう。お年寄りが乗ろうと、小さな子供をおんぶしたおばちゃんが目の前に立とうが、私は知らん顔。トロンとした目付きで携帯電話と目と鼻先にくっ付けて睨めっこしているか、さもなければ、揺り籠に揺られた心地で仮寝のコックリと居眠り。

新幹線が移動事務所なら、都電はコーヒーやお弁当は出ないけど、みんなの憩いの場ともなる、チーンチーンゴーゴー、ゴットンガッタンとスピーディーに走る缶詰電車なり。

東京で弟子の松村みかちゃんに案内して貰い、久し振りに銭湯に入った。料金３３０円と結構いい値段である。眼鏡を外し、洋服を脱ぎ、スッポンポンになり、小さな手ぬぐいを肩に引っ掛け、白い群像が蠢く中へ仲間入りしょうと、フラフラ歩き出すと、あれ不思議、無数の視線がジロリ、ジロリと、僕を見つめているではないか。「僕だってみんなと同じ物を持っているのに、一体何がおかしいんだ」と、口には出なかったけど、ハッと思い当たる節があった。なほどそうか。僕の体はバサバサした箒みたいな白髪を除き、頭の天辺から足先まで真っ黒いクロンボーなのだ。だけど、お尻の部分だけが真っ白で、真ん中にぶらぶら下がっている細長い倅が、これまた真っ黒だからみんながギョッとした顔で見ていたんだなー、よーし、今度はこっちが見てやる番だぞーと、まずは石鹸で体の垢を洗い落とし、湯船に体をざぶんと漬け、大きな目玉をギョロギョロ光らせてみんなをジロジロ眺めれば、アーァ何と、都会のサラリーマンたる若者は運動不足でブヨーンブヨンとしたひ弱な体だった。

■懐かしい須佐の町

都会の騒々しい雑音と、混雑する人波に飽きてしまい、また地方へと、ぶらりと出掛ける。地方の山間を縫い長閑な農村地帯を走る普通電車はテンポものろくゴットンガッタン、チーンチーンとのろのろ走る。乗客も田舎のおっさんや、おばちゃんが多く、みんな笑いながら打ち解けた表情でのんびりと喋っている。歩道で道を尋ねても、親切に教えてくれるし、駅員の人も優しい眼差しで話し掛けてくる。畑で野良仕事をしている農夫に声を掛けても気持ちのいい返事が跳ね返ってくる。

数年ぶりに訪れた須佐には、数台のタクシーが走るようになっていた。父が世話になっていた茂刈家へ転がり込み、温かい焼き立ての餅をご馳走になる。

カメラを肩に引っ掛けて人通りの少ない町をフラフラ歩き、写真を撮っていると、学校が終ったらしく、家へ帰る子供たちに出会う。子供たちと擦れ違うたびに、誰もが明るい元気な声で「おじいさん、さようならー」と、元気よく挨拶して遠ざかってゆく。

父の墓参りを済ませ、墓地の側に咲き乱れている桜の花を見つめていると、育英小学校の可愛い小学生に出合った。無邪気な美しいキラキラ輝く瞳をした子供たちと暫く遊び、別れ際に「さようならー」と声を交わし、手を振って別れたが、あの、何とも言えない純真な子供の瞳が何故か脳裏に焼き付いている。地方にはまだ長閑で心温まる日本の姿がある。これが本来の日本の美しい姿なのだ、と、ホッとする。

■敗戦後父が辿った道程

最後にはマラッカ病院の院長をしていた父は、１９４５（昭和２０）年8月１5日の日本の敗戦をマラッカで迎えている。茂刈スズさんと一緒だった父はマラッカに留まったまま僕の元へは帰って来なかった。

敗戦後マラッカにいた父は、英軍の取調により、ソンクラーで英軍の飛行士3名を処刑にした戦犯犯罪者として、２２９７番の重みのある戦犯容疑者番号を背負わされてシンガポールのチャンギー刑務所に放り込まれていた。

父は、チャンギー刑務所に連行される前日に、水兵服を着て写っている僕の写真を一枚、自分の洋服の裾に縫い付け、写真を忍ばせて刑務所に入っている。その写真は僕が5歳のときソンクラーの写真館で撮ったものだった。

父はこの僕の写真を肌身離さず大事にして日本まで持ち帰っている。マラッカで全てを英軍に没収され父が日本へ持ち帰った全財産が、この僕のたった一枚の写真だけだった。今まで左団扇で豪華な暮らしをしていた父にとっては、独房での刑務所生活は辛かったらしく、心身共に参ったようである。

チャンギー刑務所で英軍から厳しい取調べを受けていた父は、戦時中に助けたことがある地元の華僑や、マレー人が定出した嘆願書により、運よく戦犯容疑を免れ、無罪で釈放され、およそ2年間囚人生活を送った父は１９４７（昭和２２）年１０月、４０年ぶりに自分の故郷、串本の潮岬の実家に帰ってきた。

潮岬に戻った父は、マラッカでスズさんと一緒に同棲していたことはみんなに隠し、シンガポールから送還された際引揚船の中で知り合った人がいるので、山口の須佐へ行って来るからと偽り、栄口乃恵子さんと一緒に須佐へ赴き、スズさんを連れて来て潮岬の実家で一緒に暮らすようになった。

父がスズさんと、正式に結婚届けを出したのは、それから2年後の１９４９（昭和２４）年2月１４日だった。

父の家は１９４５（昭和２０）年6月２２日、米軍の空爆を受けて破壊されていたが、補修して何と

か住めるようになった。父には先祖代々瀬戸孫治郎さんから受け継がれてきた家、畑、山などの資産がまだそのままそっくり残されていた。従って働きさえすれば日常生活に支障をきたす要素は見当たらなかった。

しかし、父は何もしない怠け者だった。毎日タイで懇意にしていた芝さんたちと、花札合わせをしたりして遊び暮らしているだけだった。それに父の身体には麻薬中毒に侵されていたのか、それとも糖尿病だったのかは知らないが、毎朝自分で自分の腕に注射を打っていたそうである。

怠け者だった父のお陰で苦労したのは優しいスズさんだった。可哀想なスズさんはまだ暗いうちに起きて遠くまでゆき、ニコヨン（日雇い労働者）の仕事に出掛けなければならなかった。仕事を終えて帰宅する時間はいつも真っ暗になってからだった。その頃の日当は、一日僅か２４０円だったので、スズさんの収入だけではとてもじゃないが食っていけるはずがなかった。

父は自分の家を次々に抵当にいれ、金を借りて日々の生活を送っていた。しかし、借金の返済ができなかった父は、最後には資産を全部没収され、祖先代々に亘って守られてきた家から追い出されてしまったのである。

父は帰国後、僅か６年後に自分の資産を全部食い潰し、瀬戸家の親戚一同に対し肩身の狭い思いをさせ、スズさんの実家、山口の須佐へ去ることになった。行き場がなかった父は自分の故郷を去るに当り、懇意にしていた藤井サナさんの家に世話になり、２日目の朝電車で須佐へ発つことになった。

藤井サナさんはまだ５歳ぐらいだった可愛い娘、潤子ちゃんの手を引き２人で駅まで父夫妻を見送りにきてくれたのだった。医師であり、特務機関だった自分の人生に失敗した父は、親戚からも顧みられず寂しかったに違いない。別れ際に涙を潤ませ、たった２人の見送り人、藤井さんに「落ちぶれて　顔に涙のかかる時　人の心ぞ知る」と言い残し、電車がゆっくりと動き出すと同時に、お互いに手を振り、涙に泣き濡れ、切ない思いで別れたのだった。

父夫妻が山口の須佐へ発ったのは、１９５３（昭和２８）年だった。須佐の茂刈家に転がり込んだ父は、其処で「瀬戸商店」を開業し、パン、ジュース、氷かきなどを売っていたが、そのうちに裏で養鶏を始め、卵を売ったりして生計を立てていた。

父がシンガポールから故郷の潮岬に帰ってからは、ずっと義理の母、テルと手紙のやり取りをしていた。だが、父が須佐で暮らすようになってからは、何故だか、僕と直接文通するようになった。

初めの頃だったが、父から貰った手紙には「瀬戸家の家を売り払い、須佐に新しい家を買って引越した。今は裏で鶏を飼い、卵を売ってスズおばさんと２人で暮らしている。正夫も帰って来ないか」といった、内容の文面だった。

何の事情も知らなかった僕は、素直に父は金持ちなのだなあ、と思った。だけども時々、一万円ほど送金してくれ、と、言ってきたりしたので、変だなぁ、と、不審を抱いていた。父は日本軍の特務機関の仕事をしていただけに、口は堅く、人を騙したり、利用したりする話術は大したものだった。

父は、僕の実母のことについても、僕には、「プーケッで正夫を生んだシヤン（陳）は死んだ」と言ってきた。しかし僕自身は、父が何と言ってきても全然信用しなかった。必死になって母を探し回った。

そして最後に、１９６１（昭和３６）年2月中旬に遂に母を見つけ出すことができたのである。

父は僕の実母がプーケッにいることを良く知っているくせに、何故僕に嘘をついたのか知らないが、僕としては全然理解できなかった。考えれは考えるほど無性に腹が立った。ヨーシ、と決心した僕は、父に僕の母が生きている証拠写真を送ることにした。僕は自分の強い正義感の意志を示すために、手紙も何も書かなかった。僕はプーケッの母の家で撮った母の写真を一枚と、「正夫を生んだ母は、もう死んでしまった」と、ペンで認められてあったインクが滲んでいる偽りの手紙をそのまま同封して送った。

僕がこの怒りの手紙を出したのが、３月初旬だった。この手紙が僕が父に出した最後の手紙となってしまった。父は僕のあくどいやり方にショックを受けたらしく、長年続いた文通は、時限爆弾が爆発したかのようにそれっきりブッツリと切れてしまった。

その後、僕のことで悩み、ずっと僕のことを思い続けて海ばかり眺めて物思いに耽っていた父はそれから3年後の１９６４（昭和３９）年１２月１６日の夕方、７５歳でこの世を去った。

最後まで優しかったスズおばさんに見守られていた父は、息を引き取る間際に「正夫はシャムにいてこられないから」と、言い残しているし、父は死ぬ瀬戸際に、神戸から見舞いに駆けつけた従姉妹の栄口乃恵子さんにも僕が岩の上から田圃を見下ろしている写真を一枚渡し、「もし、正夫が羽田に着いたら、迎えに行って面倒を見てくれ」と遺言を残して死別している。

■父の墓参り

僕が父の面影を求めて博多から午前１０時４３分の電車で須佐へ赴いたのは１９７７（昭和３２）年１１月８日だった。電車が待望の目的地、小さな須佐駅にピタッと停まった。僕がプラットホームに降り立つと、マラッカで2、３回会ったことがある懐かしいスズおばさんが笑顔で立っていた。マラッカで別れて以来３５年振りの再会だった。スズおばさんは相変わらず元気そうで全然変わっていなかった。車で迎えに来ていた茂刈夫妻を紹介され、同じ敷地内にある父がいた家に案内された。

裏には父が元気な頃養鶏をやっていた鶏小屋が侘しそうな姿で残っていた。僕は父が愛用していた広い部屋へ通され、そこで寛いでいた。すると、スズおばさんは直ぐに神棚に線香を立ててチーンと小さな鐘を叩き、両手を合わせて「シャムから正夫ちゃんが会いに来たわよ」と、透き通った声で父に伝えた。

その日の夕方、僕はスズおばさんと2人で桜の並木道を歩き、近くで眠っている父の墓参りに出掛けた。須佐の墓地は紹孝寺に近い桜の並木が生い茂った小高い山沿いにあった。父の墓はその山の麓の一角にポツンと建っていた。スズおばさんが、墓石に水を掛け、花を飾り、此処でも「正夫ちゃんがお参りに来たわよ」と父に告げた。僕は墓標に「瀬戸久吉」と、刻み込んである父の墓の前に蹲いた。両手を合わせ。目を瞑り、１１歳のときに別れたときの父の面影を思い浮かべた。今は何も語れない仏となった父とはあれから３５年振りの再会である。

父はこんなに静かな美しい自然に包まれて眠っている。しかもこんなに優しいスズおばさんに見守られている父は幸せ者である。過ぎ去った過去はもう二度と戻って来ない過去なのである。「お父さん、安

らかに眠ってね。僕また会いに来るからね」と、心の中で呟いた。

僕は父の墓参りが終ってから紹孝寺の本堂で昔の武士のような容貌をした長い顎鬚を生やした体格のがっしりした住職、勇道大機（本名、田口勇雄）さんに会った。住職は、父にはいろいろとお世話になったとかで、「瀬戸の息子さんですか」と言って、とても懐かしがっていた。

次の日の夜、勇道さんの取り計らいで、当時父と親しかった友人が2、3人集まり、スズおばさんと一緒に料亭でご馳走になった。その晩は父の話題で話が弾み、料亭を出た時刻はかなり更けていた。一歩外へ出ると、冷たいからっ風がビューヒュー吹き付けていた。半袖姿で歩いていた僕の姿を見た勇道さんが自分の首に巻いていた襟巻きを外し、「瀬戸さん寒いでしょう」と言って、その襟巻きをそっと僕の首に巻きつけてくれた。毛糸で編んだその襟巻きはとても暖かかった。

僕はスズおばさんの家で3日間お世話になった。食事は隣同士だった茂刈さん宅でご馳走になり、お風呂も茂刈家の凄く熱いまるい五右衛門風呂に入れて貰った。茂刈さんには未だ小さかった二人の可愛い富江ちゃんと、二三枝ちゃんがいたが、恥ずかしがってなかなか出てこなかった。

僕は須佐には僅か3日しか滞在しなかったが、スズおばさんや、茂刈さんには実に親切にして貰った。僕が須佐を去る日、スズおばさんはわざわざ須佐駅まで見送りに来てくれた。

スズおばさんは人気のない静寂なプラットホームに佇み、いつまでも「さよーなーらー」と手を振っていた。その悲哀に満ちたスズおばさんの姿が次第に遠ざかり、３５年振りにあった懐かしいスズおばさんとは、それが最後のお別れとなってしまった。

「おばさん、大変お世話になりました。どうも有難うございました。お元気でね。また逢いましょうね、さようならー」と、簡単に交わした約束の言葉、しかしその約束の言葉は永遠の別れとなってしまったのである。

父のために苦労したスズおばさん、今は父と仲良く並んで眠っている。あのこんもりとした桜の並木に見守られて安らかに眠っている。父やスズおばさんの死に目にも巡り合わなかった親不幸な僕ではあるが、過ぎ去った過去のことを思い出すと、涙がジワジワと滲み出てくるものである。

■父の親戚を探し求めて

須佐の茂刈家の親戚関係の人には一応みんなに会えたが、潮岬にいると思われる、父の親戚関係の消息が全然わからなかった。僕は父と関係があった人や、その他いろんな伝を通して父の親戚を捜し求めた。当時、まだ朝日新聞大阪本社の社会部にいた宇佐波雄策記者にも「何とかして父の親戚を探してください」と、頼んだことがある。宇佐波さんは電話帳を捲り、串本にいる数百人に及ぶ瀬戸姓の家へ一軒ずつ電話を掛けて調べてくれたが、父「瀬戸久雄」の親戚を見つけ出すことはできなかった。

後で判明したことだが、父の名は「瀬戸久吉」だったために、どんなに逆立ちしても捜せなかったわけである。

でも神の恵とでもいおうか、ＴＢＳ（東京放送局）の取材班が我が家に取材に来たときのことだった。そのとき、初対面の島津愛介さんと巡り合ったのがそもそも運のつきはじめだった。

僕の取材が終わり、一段落し、雑談をしていたときだった。予期していなかった島津さんから、彼が僕の父の経路を追っている話が飛び出した。お陰で、彼から従姉妹の栄口乃恵子さんが神戸の須磨区にいることや、従姉妹の勝山千恵子さんが串本にいることがわかった。僕は早速文通を開始し、２人に会いに行くことにした。

長年捜し求めていた父の親戚に初めて会ったのは、１９９０（平成２）年５月２０日だった。午前１１時、三ノ宮のプラットホームで栄口さんと会う約束になっていたので、僕は早目に行って待っていた。どんな人が現れるのであろうかと、胸を弾ませて待っていると、一目で僕だとわかったらしく、栄口さんが顔を綻ばせて迎えに来てくれた。駅の出口で、わざわざ串本から出てきた勝代さんと落ち合い、その日は三ノ宮ターミナル・ホテルで一泊することになった。

昼食を済ませてから３人で外へ出て見ると、丁度神戸祭りのある日だったので、神戸の街角はお祭り気分で浮かれている真っ最中だった。街の一角の道路を通行止めにし、いろんなパレードが行進していたので、僕は人垣を掻き分けて、パレードの側まで接近してカメラのシャッターをバシャバシャ切った。

日本でお祭りの写真を撮るのは初めてだったが、タイの明るくて派手好みでドンチャン、ドンチャン踊りながら騒ぐ祭りと比べると、若者が少なく、なんとなく活気がなく地味だった。

その晩は、音もなく過ぎ去った５９年間の過去の話を、しんみりした気持ちでポツリ、ポツリと語り明かした。栄口さんは父のお陰で随分苦労したようであったが、話を聴いていると、可哀想なくらい胸に迫るものがあり、センチメンタルな気持ちに駆られてしまった。勝代さんも１２歳のときに父を亡くし、母の手で育てられている。急な崖の下で水汲みをさせられたりして、苦労している。僕もタイにいて苦労したけど、まだましな方である。父はこの寒い日本でみんなに並々ならぬ苦労を掛けていたのかと思うと、悲しかった。

栄口さんは僕に会う前に、田圃の所に父が現れて「正夫を頼む」と言って、父が消えていった夢を見て、ハッとしたそうである。それが僕と会える虫の知らせだったのかもしれないが、その夢は実現したのである。その夢の中に現れた田圃の映像は父が死ぬ日に、見舞いにきた栄口さんに渡した僕の写真だった。しかし何故か、秘密主義者だった父は僕の住所をきちんと教えていなかったために、連絡が取れず、僕が探し出すまで行方不明となっていたわけである。

次の日は、僕にとって初めて行く有馬温泉へ出掛けた。六甲山ケーブルカーに乗り、美しい六甲山の景色を眺め、がら空きの有馬ビューホテルで一泊した。客室の方は実に静かなものだったが、日帰りの大衆風呂のある方は凄く混雑していた。娯楽室がある舞台ではスポットライトに照らし出された歌手や俳優が歌謡曲を歌ったり、昔の寸劇を演じたりしていた。見物人はほとんどがおじいちゃんや、おばあちゃんたちばかりだった。みんな寂しいのか、僕は数人の年寄りの連中から、自分達の家庭の事情や、身の上話を聴かされた。

客室専用の広い清潔な風呂場には若い男の人が一人しかいなかった。真っ黒い僕が入っていくと、怖いのか、いつまで経っても俯いたまま顔も上げずにもじもじしていた。僕は相手のことなどはお構いなく、大きな湯船にドップリと体を漬け、何十年も溜まっていた謎に包まれた辛苦の疲れを癒した。

僕の実母、シヤンがまだ生きていた頃だったが、「僕にはまだ言えない秘密がある。その秘密は時期が来たら正夫に教えてやるから」と言った、手紙を貰ったことがある。だが、母はその秘密を僕に明かさずにあの世の人となってしまったので、僕の心に燻った物が残っている。

これでやっと自分の父が誰であるかも大体わかったし、自分自身が何者かもわかり、今までもやもやしていた心のしこりがやっと解け、すっきりした気分になった。しかし、我が身にがんじがらめに纏わりついた秘められた謎の糸口を一本ずつ解き解すのに、何と５９年もの歳月が流れ去っている。

短いようで長かったこの年月。何のためにこの世に生まれて来たのかと、悲観し、自殺まで考えたことがあった。しかし、どんなに苦しい心境に立たされていても、自分に定められた運命に素直に従うしかなかった。

次の朝、美しい思いで深い有馬温泉に別れを告げ、その足で、栄口さんの神戸の須磨の実家へ赴いた。自宅では８４歳（１９９０年時）になるふくよかな綺麗な顔をした目元の美しい伯母の富江さんに会った。

富江さんは寝たきりで記憶力もかなり喪失していたが、元気だった。お互いに会話ができなかったのが残念だったが、栄口さんと勝代さんが交替で、僕は久吉の息子だよ、と言うと、富江さんは一生懸命に僕の顔を見つめていた。が、何か過去のことをふと思い出すらしく、時々涙を溜めて頷いていた。そのいじらしい姿に、心にズキーンと響くものを覚えた。

僕が父の故郷串本に訪れたのは、次の年の４月１８日だった。栄口さんと白浜駅で降りて、車で迎えに来ていた勝代さんの車で、さすみ町の南紀憩いの村和歌山に一泊し、ゆっくりと寛いだ。

翌朝、雨雲が垂れ込めた車があまり走っていない海岸沿いのハイウェーを、時々雨に打たれながら串本に向かって走った。

途中で元タイにいたことがある小川平さんにも会い、戦時中のマレーの虎と言われていたハリマオ（谷豊）の話などを伺った。

父がいた串本は小さな静かな町だった。勝代さんのお母さんや、家族にも会い、２、３の親戚の家へ挨拶回りをした。僕は何処へ行ってもおじいちゃんの孫次郎にそっくりだと言われたが、その孫治郎がだれだかわからなかった。父がお世話になった藤井サナさんにも会い、海の側にある潮風がビュービュー吹きまくっている先祖代々の墓参りも済ませた。

僕は小さいときに父から「此処がお父さんがいた潮岬灯台だよ」と、懐かしそうに語りながら、潮岬灯台灯台の絵葉書を見せて貰ったことがある。

僕はその思い出がある、天に聳えていた真っ白い潮岬灯台にも案内して貰った。何十年間も海を見守り続けて来た灯台の絶壁に、太平洋上のプーケッから怒涛の如く押し寄せる荒波が、ザブーン、ザブーンと岩に体当たりし砕け散っていた。荒波に揉まれて生き抜いてきた男の運命、６０年間の歳月を掛けた自分のルーツ探しはこれで完璧に終止符を打ったのである。

■僕のニックネーム

タイ人であればほとんどの人たちがチュー・レン（ニックネーム）を持っているし、親しければ親しいほどニックネームで呼ばれている。デーン（赤）、ダム（黒）、ムーゥ（豚）、メーゥ（猫）、ウワン（でぶ）、ポーム（やせっぽち）などと、まだ沢山あるが、このような愛称で呼ばれている。但し、みんなが持っているニックネームはほとんどひとつしかない筈である。

しかし、僕の場合は水泳や日本語の先生をしていたので、みんなからいろんな有り難いニックネームを頂戴している。子供たちからは、でめきん先生、目玉でっかち先生、骸骨先生、むなげ先生、ＥＴ先生、鋼鉄禿マン先生、ツルツル先生、禿つる先生、チョンチョン先生、面白い先生、へんちくりん先生、おこりっぺ先生、ガミガミ先生、猿先生、ゴリラ先生、などと呼ばれている。

ジャーナリスト仲間や、友人関係では、オー、偏屈、秘密兵器、生き字引、手長猿、ガンジー、幽霊、お化け、仙人、神様、鉄人、元帥、親父、和尚さん、ゴッドファーザー、爆弾などと、そのときの時と場所によって好き勝手に呼ばれている。

このように僕みたいにこんなに沢山のニックネームを付けて貰っている人は少ないのではないかと思うけど、あだなを付けてくれる皆さんは流石に凄いいべテラン揃いである。

昔からバンコクにいる旧友連中は、まだ何処へ行っても「正夫ちゃん」と呼び、まだ小さな子供みたいに可愛がられ、アイドルにされている。

但し、戦後７０年の節目になってからは、更に、「戦争の生き残り」だとか、「少年兵の生き残り」又は「生き字引」だとも言われている。

■甘い汁はあとが怖い

僕は何処へ行っても他人様から信用されやすいタイプらしく、みんなからいろいろと、飛びつきたくなる様な話や、相談を受けている。

シンガポール、香港を股に掛けて飛び歩いている知人の怪しげな武器商人から「一緒に仕事をしないか」と、誘われたこともある。タイ湾の沖合いで密売されているシンガポール経由で流されているガソリンの密売の話も飛び込んでくるし、某地で警察署長をしていた弟子から、「女を日本へ輸出しないか。女は何人でも手に入るから日本の代理店を見つけてくれ、やくざでもなんでもいいから、是非頼む」と言ったケースや、別口の女性の弟子からは、「先生、女の娘を２、３人ずつ日本へ連れて行って貰えないか。成田空港を無事に通過するだけでいいの、お礼に一人頭３万バーツあげるから」と、飛びつきたくなるような悪の世界の話が幾らでも飛び込んでくる。

この他にも、これはまともな話だけど、警視庁の友人から「私服で秘密警察官になって貰えないか」と言ってくるかと思うと、税務局から「日本企業が隠している機密書類を差し押さえて、脱税違法になる書類を見つけ出して罰金を支払わせる仕事を手伝って貰えないか。書類を摘発した場合は罰金の金額を対象にした全額の４０パーセントをお礼として出すから」といったような話が舞い込んでくる。だけど、僕としては日本人を売るようなことはできませんからと、きっぱりと断っている。

日本企業からも時々、友人を通して、「瀬戸さん、土地を買いたいのですが、名義を貸していただけま

せんでしょうか、お礼は〇〇万バーツ差し上げますから」と、言って来る企業もある。
しかし、この場合は、田舎の村長に頼み、何百ライもする貧しい農民の土地を金の力で安く買占め、大事な農地から農民を追い出す結果になるので、僕には、そのような弱い者虐めは可哀想で、できないと、断っている。

■情報網の世界

世界の各地では休む暇もなく、毎日様々な生臭い事件が発生している。そのひとつひとつの事件を正確に速やかにキャッチしなければならない。そのためには大勢の仲間の力を借りなければならない。各地に親しい友人を作り、情報交換をしなければならないし、常に自分の努力が必要である。
僕はフリーランスとして朝日支局の手伝いを始めて今年で４９年になる。僕の場合は自分の国籍問題で地下組織の連中とコネがあったお陰で、タイ共産党ゲリラグループ、ラオスゲリラグループ、カリヤン（カレン）、モーン、などのゲリラグループ、イスラム地下組織グループ、南タイの海賊グループや、友人で殺し屋のボス、軍部にいる弟子たちの取り計らいで無数の貴重な情報を頂戴している。
僕は運がいいことに、ゲリラの連中と地雷が埋まっているジャングル地帯を歩き回って取材したこともある。
それにタイ側にある外部の者が入れない北部の山岳地帯の秘密基地にも潜り込んだことがある。
北部の或る山の頂上にヘリポートが２ヶ所設備された基地があった。そこにはタイ人、ビルマ人、ラオス人、中国人などの通信部員が交代で近隣諸国から流れてくる暗号の解読を手がけていた。みんな手際よくてきぱきとやっている仕事ぶりは実に立派なものだった。このように情報網まで張って、近隣諸国の情勢をキャッチし、常に国防に備えているタイはやはりしたたか者である。
僕は何処にも所属していないフラフラしたフリーの身である。しかし、仕事の都合上、川村支局長時代から記者証が必要となり、朝日の記者証を携帯するようになった。お陰で国境近辺を警備している軍部内も、軍の許可さえ取れば自由に出入りできるようになった。僕は記者証を持っていても、他人様みたいにそれを悪用したことは一度もない。朝日に汚名が掛からぬように常に気を付けて取材に当っている。事件が発生するたびにどんなに危険な所へも飛び込んでゆき、日本の締め切り時間に間に合うように気を配って取材している。
大事件が起こった時点でバンコクに支局長がいなかったときも数回あったが、写真なんかも（社に電送機がなかった頃）中央郵便局から電送できなくなるのを見越して、短時間で現場の写真を撮り、真っ先にドーンムアン空港へ駆け付けてＪＡＬのカーゴー便で未現のフイルムをアラカンで本社の写真部宛に送ったこともある。そのような事態になると、僕の勘は実によく当るので事件の写真が新聞に掲載されているのは、朝日一紙だけだったこともあった。
大事件が発生するたびに、いつも各方面から大勢の記者やカメラマンが応援に駆けつけてくる。が、記者は後から来ても事件の真相を聞きだして記事を書けばいいのであって、記事は何とか書けるものである。

しかし、可哀想なのはカメラマンである。カメラマンは現場へ行かない限り写真は一枚も撮れないのである。従って、遅れて来た場合はもう後の祭りで何も撮れない辛い立場に立たされるのである。手ぶらで本社へ帰れば「お前は一体何をしてきたのだ」と、容赦なくお叱りを受けるのを百も承知していたので、僕はいつも、そおっと救いの手を差し伸ばすように心掛けている。

僕は地方へもよく出掛けたが、僕と一緒に行動する特派員は、取材目的に応じて僕が即座に場所を決めて行動を開始するので、取材は短時間でスムーズに終わるケースが多かった。カメラマンが一緒のときも、カメラが故障したり、長い望遠がなかったりしたときは、僕のを貸してあげたし、撮影禁止区では僕が囮になり、写真部員に大事な目玉となる写真を撮らせるように心掛けた。

僕は横堀支局長時代に、本社に暗室を作る予算を申請したことがある。が、けちな本社から「だめだ」と、拒否されてしまった。仕方がないので、僕の案で、女房に黒地の布を買わせ、黒い二重幕の垂れ幕を作って貰い、支局に即製の暗室を作った。現像タンクも、引き伸ばし機も何も無かったので、引き伸ばし機の小さいのを購入し、我が家で使っていた現像タンクや、バットを運び、いつでも支局で現像できる態勢を整えた。あとは電送機を揃えれば万事ＯＫとなる段階まで漕ぎつけた。

僕はタイ・カンボジア国境でタイの兵士に手を引っ張られて地雷を踏み損ねて助かったこともある。本社の特派員と取材に行くときは、ケースバーイケースでお礼を貰っているときもある。が、僕は一人で勝手に地方へ出張することもある。

ほとんど自分の車で飛び回っているし、取材用のフイルムなどもほとんど自分で買っている。しかし、未だかつて一度もガソリン代を請求したり、「お金をください」と、手を差し延べたことはない。但し、僕の原稿が掲載された場合は、ちゃんと原稿料を頂戴している。朝日の本社では、僕に「顧問料を払うから」と言うが、僕の方が「嫌です」と辞退している。僕は何事についても自分の身を束縛されるのは嫌いなので、この方が気楽でいいし、好きである。

為田さんが総局長をしていたときに、一度、何とかして僕を巻き込もうとしたが、話が纏まらず、最後に「棺桶を出すから」と言われた。が、僕は「純金の棺桶でなければいやだ」と断ってしまった。朝日の中江利忠社長がバンコクに視察に来たときも、社長から「瀬戸さん、終身でお願いします」と頼まれた。しかし僕がお世話になった当時の支局長だった石川巌さんも川村哲夫さんも、もう定年で社を去っている。これからも僕が知っているお世話になった特派員が退社していなくなっている。なんとなく僕独りが取り残されているような感じでセンチメンタルな気持ちになってしまう。

僕自身も今年で８５歳になり、緑内障を患い目も悪くなり、動作も鈍くなってしまい、あんまり役に立たない身になっている。

今までに僕がやってきた役割は、道案内兼、ドライバー兼、通訳兼、ボディガード兼、顧問兼、カメラマン兼情報収集などである。

僕が朝日の助手をしていた同窓生の泉芙美代さんの紹介で、石川巌さんの通訳兼道案内役を頼まれて、朝日の手伝いを始めたのがきっかけだったが、そのまま朝日のフリーランスとなってしまった。朝日には自由に出入りしていたし、取材も面白く、居心地も良かったので、知らぬ間にそのままズルズルべっ

たりと朝日のフリーランスになってしまい、今日に至っている。僕は朝日の手伝いを始めてからいろんな情報を集めるために、１９８５年頃まで、田舎の主だった各地の地元紙を取り寄せ、ラジオやテレビ、無電を取り揃え、寝るまで情報収集で明け暮れる日々を過ごし、現在に至っている。

現在、バンコクは支局から、１９８７年１０月１日にアジア総局となり、人数も増えたので、僕は目も悪いしもうほとんど何もしていない役にたたない古参兵である。

だけど、今でもいざとなれば、時代遅れの４台のラジオと、３台のテレビがあるし、カメラも古いフイルム様のカメラが２台もあるし、新製品のデジタルカメラも３台とズームレンズなども揃っているので、いつでも取材できる態勢になっている。僕は未だ余り役に立たないフリーの身ではあるが、誰にも負けない精力を持っている。怖い物知らずで冒険が好きなのでどんな所で平気で入って行く。だけど取材のために死んで名誉を立てる意志は毛頭ない。常に世界の人々に真実を伝え、最後まで結果を見届けなければならない義務がある。従って、どんなにベストな特種を取ったとしても、死んだのでは意味がない。情報マンであるからには、例え歩けなくなったとしても、喘ぎながら這ってでも、生き抜いて世間に真実を伝えなければならない義務があるのだ。

僕の娘ヌイも現在タイの記者になっているが、流血事件の怖さなどを知っているだけに、事件が発生すると、僕には家から外に出ないように、取材に行かないようにと、注意するようになった。時々、最愛の我が女房にも言われるのだが、「危険な所へは行かないで。死んだらどうするの、朝日が面倒をみてくれるの」と、真剣な顔で聞かれたこともある。家族にしてみれば、無鉄砲な僕の気性を知っているだけに、当然であろう。

僕は朝日の正社員でもなんでもないし、ローカルスタッフでもない。自由なフリーの身である。僕が死んだからと言って、朝日新聞社が僕の面倒を見る筈がない。ただ親しい友人が「瀬戸はとうとう死んじゃったのか、可哀想に」と言って、みんなが香典を出してくれるだけなのだ。

しかし取材中に、仮に僕が死んだとしても、僕には何の悔いもない。自分で好きなことをして死ぬのであるから本望である。

僕は時々ゲリラ活動をしていたタイの東北部や、北部の山岳地帯の共産党ゲリラ地区に潜り込んだり、タイと国境を隣接しているビルマ反政府軍のカレンゲリラ基地（ＫＮＵ）や、スリーパゴダにいたモーン族解地区の基地に潜り込んだりして、ゲリラ兵士と一緒に蚊帳も何もない密林で雑魚寝したりしたこともある。

解放区に潜り込むからには生命の保証などはない。小銃や機関銃の弾は真っ直ぐ飛んでくるのでバンカーさえあれば安全だけど、怖いのは迫撃砲や大砲の弾は上から落ちてくるので避けようがない。砲弾が何処に落ちてくるかは運次第である。それと、もうひとつ気を付けなければならないのが何処に埋めてあるのかわからない地雷である。従って、仮に流れ弾に当って死んだとしても、遺体が見付かればいいけど、運が悪ければ行方不明になるだけである。

僕は１９８０年代の、あの悲惨なカンボジアの内戦で、何の罪もない純真な同胞であるクメール民族を１５０万人も１８０万人殺害した、と言われている、中国の武器を重たそうに背負って闘っている悪

魔のポル・ポトゲリラ殺人鬼部隊と一緒に鬱蒼とした冷え冷えしたジャングル内を、一列縦隊に並んでサッサと歩調を合せて山間地帯の凸凹した山道を歩き回ったこともある。

僕は真実を追究するために、現場を歩き回り、解放区でも何処でも平気で潜り込んでいる訳である。お陰で、僕が解放区でうろちょろしている姿を、タイ当局のスパイ活動をしている情報マンの連絡により、タイ国警視庁情報捜査課から呼び出しがあり、取り調べられたことがある。僕の顔写真を６枚提出し、僕の出生地、車のメーカー名、車の色、鑑札ナンバー、預金している銀行名、口座ナンバー、親兄弟姉妹、家族関係の名前や職業などに関し、細々した身元調査をされている。

右派であれ、左派であれ、何であれ、僕は誰とでも広い範囲に渡って付き合っている。国内でクーデターが起こるたびに我が家の電話は盗聴され、酷いときは手紙までも検閲され、紛失してしまうことすらもある。地方では何回も尾行されたりしたこともあるが、僕は自分がしたいことを正々堂々とやっているだけのことであって別に僕は気にしたこともない。僕には僕に忠実に尽くしてくれる弟子が大勢いて協力してくれるので、大助かりである。お陰でいろんな面で得をしているし、知らぬ間に命拾いをしていたこともあったのである。

それは、１９８５（昭和６０）年９月９日の、ヤング・ターク・グループによるクーデターが発生したときのことだった。僕は、クーデター側の数台の戦車隊がいる目の前で取材をしていたときだった。

なんとなく本能的に危険を感じた僕は、死にたくなかったので、近くに停めて置いた愛車に飛び乗り、其処から一目散に逃げ出してしまった。

僕が姿を消してから間もなくだったが、僕がいた場所は戦車砲の砲撃を受けて外人のジャーナリストも含め数人の人が射殺されたのだ。

そのときは僕までが死んだ、と言う噂が飛び、支局に戻った僕が電話が鳴るので受話器を受け取ると、「瀬戸さんは流れ弾に当って死んだそうですね」といった電話が掛かってきたのである。

クーデター後、後から水泳を教えていたことがある弟子から聞いた話だが、クーデターが発生したあのとき、戦車隊の戦車砲の砲手をしていたのがその僕の弟子だった。彼は上官から「撃て」と、命令を下されたとき、僕が前方でうろちょろしていたので、速く何処かへ行ってくれないかなと思い、僕の姿が消えるまで待っていたのだと、明かしてくれた。

チャート・チャイ文民政権時代に、常に数百万バーツの現金を手提鞄に突っ込み、チャート・チャイ首相と歩き回っていた顧問役のピタック・インタマラ君も僕が保証人になってアメリカへ留学させた弟子の一人である。戦場を市場へと、キャッチフレーズに唱えたチャート・チャイ政権は後に、１９９１（平成３）年１月２３日、スチンダー大将一派による陸海空軍及び警察共謀のクーデターによって潰されてしまったが、弟子は健在である。

僕が地方にも情報網を張っていた頃は、面白いほどいろんな情報が入ってきた。バンコクのテレビ局で日本向けに何か衛生中継した場合でも、直ぐ連絡が入ってくるので、みんなが何をしているのかが手に取るようにわかった。

１９８７（昭和６２）年１１月２９日に起こった大韓航空機爆破事件のときもそうだったが、僕が仲

間から得た情報は「飛行機は海に落ちた」だった。

他紙は地元紙も含めてみんな「飛行機はカーンチャナブリーの山の中に落ちた」と報道し、落ちた現場らしき場所へ殺到した。朝日は「飛行機は海に落ちた」と報道し、僕の判断で現場へは誰も行かなかった。事件発生から数日後に、友人から飛行機が海に落ちた緯度まで教えて貰った。しかし、これは秘密だから誰に漏らさないでくれ」と頼まれた。僕は実情を誰にも言えなかったので、本社の写真部に理由も何も言わずに漠然と「水中カメラを一台送ってくれ」と頼んだ。だがこれは残念ながら実現しなかった。

１９８９年（平成元年）３月初旬に起きたラオスへ誘拐された浅尾事件のときも、最初に浅尾吉昭さんが生存している情報をキャッチしたのは僕だった。そのときはいろんな話題が生じたが、朝日と日本大使館及び本庁の外務省との関係もあったので、内密に打ち合わせがあり、浅尾さんが生存している記事が発表されたのは、それから3日後だった。

タイではこのような大事件が発生した場合、タイ当局は2、３本の囮ニュースを流し、誰が何処の餌に引っ掛かるかを監視し、誰がどのルートと密接な関係があるのかを監視しているのである。

この浅尾事件が発生した当初は、丁度総局長が交代する時期で総局には特派員は誰もいなかった。僕が独りで総局を守り、宇佐波記者が旅行客に託してくる写真を電送したり、国内情報の収集。それに、ラオスから宇佐波さんと松井記者が伝言式に電話で送ってくる原稿を書き止めて、又それを書き直して更に本社再送したりした。兎に角一人でてんてこ舞いで間に合わなくなる恐れがあったので、最後には受話器から直接録音機に録音し、更にそれをそのまま本社へ再送し、何とか間に合わせていた。待ちに待った本社から新任の増子義孝総局長をはじめ、応援がバンコクに駆けつけて来たのは、その日の締め切り間近の夜の１０時頃だった。

この浅尾事件は、タイ・ラオスを股に掛けた事件だった。最後にタイ領で警官と犯人の銃撃戦が展開され、犯人が射殺され、浅尾さんは無事に救出されて幕となった。

様々なトリックが仕組まれた事件だったが、首班のボスは未だにノーカーイの町で悠々と暮らしている。本人の名前や、住所もわかっているが、書けば消されるので書けないのが実情である。

■日本の戦争を顧みて

僕は子供の頃戦争とは一体何なのか、何故戦争して、人間同士が殺し合いをしなければならないのかと、疑問に思っていた。

僕はソンクラーにいた頃から、戦争ごっこは大好きだった。よくタイ人の仲間とワイワイ叫び、パンパン、ドーンドンと鉄砲で撃ち合う真似事をし、死んだ振りをしたりして楽しく遊んだものである。

僕は血みどろな死が伴う実戦の怖さも何も知らずに、バンコクの日本人学校に放り込まれた。純真無垢だった僕は8歳のときから日本の敗戦の日まで、神の子として、正規の軍人による厳しい軍事教練を受けた。敵と見なした相手を殺す方法も学び、最後には竹槍で突撃し、名誉の戦死を遂げる大和魂精神を骨の骨髄まで叩き込まれた。お陰で命知らずの敵愾心に燃えた大日本帝国軍国少年に鍛えられた。

僕は自分は神の子であると信じ、神様である天皇陛下のために、お国のために生命を捧げ、いつでも死ぬ用意ができていた。だが、日本はポツダム宣言を授諾し、１９４５（昭和２０）年８月１５日、連合軍に無条件降伏したために、僕は命拾いをし、今日まで生き延びることができた。

あの悲惨な辛苦を嘗めた敗戦の日から７１年の歳月が過ぎ去った。拡大な太平洋上及びアジア諸国では荒れ狂った戦火に巻き込まれ、アジアではおよそ３０００万人（ドイツの欧州戦線も同じく約３０００万人）にも上る人々が生命を落としている。

あの悪夢のような日本の戦争は一体何だったのであろうかと、今でもふと思い出すことがある。もう一度冷静な気持ちになって悲惨な戦跡の傷跡を振り返ってみると、当時、地獄の世界へ追い込んだ軍国主義国家大日本帝国は、人を平気で騙し、人を平気で殺し、同胞を生きた武器にし、人も国家も平気で破壊し、破棄する実に酷い国家だったと思う。

日本は１９４５（昭和２０）年８月１５日、連合国に無条件降伏し、日本本土はアメリカ軍に占領された。だが、日本は敗戦と同時に「終戦とし、日本占領軍を「進駐軍」と称し、実に旨い表現の仕方で国民の感情を和らげている。だが、悪く言えば、言葉で上手い具合に国民を騙したことになる。

戦時中の日本の人口にしても、そうだったが「一億一心火の玉だ」、「米英打倒」、「打ちてし止まむ」、「欲しがりません勝つまでは」、「一億総懺悔」と、大本営が口を酸っぱくして叫んだ一億人だったはずの日本人は、実際には大東亜戦争が始まった１９４１（昭和１６）年１２月８日の時点で、７２２１万８０００人。敗戦時の１９４５（昭和２０）年が、７２１４万７０００人だった。あとの２８０００万人は一体何処から湧いてきたのであろうか。

それは、恐らく当時日本の植民地だった台湾（５００万人）、朝鮮（２０００万人）の人口を含めて１億人としたのではないかと思う。それならば、日本の法律に従って強制的に自国の姓名を日本名に変更された台湾人も、朝鮮人（当時）も、当然純然たる日本人だった筈である。それは日本本土にいてもいなくても、絶対に日本人だった筈である。

当時、台湾で日本軍として採用されていた軍人軍属は、志願兵１万６０００人、徴兵２万３０００人、軍属１６万８０００人、計２０万７０００人だった。このうち３万３０００人が日本の国家のために尽くして戦没している。

日本に苛められた可哀想な朝鮮の場合はもっと酷かった。国家総動員法を公布し、志願兵２万３６３１人、徴兵２０万９２７９人、計２３万２９６０人、それと、軍要員として南方に派遣され、活躍した人が１４万５１００人に上り、このうち１５万人が死亡している。この他にも、労務者６６万７６８４人（約６万人死亡）を強制連行し、食糧も満足に与えず酷使している。

朝鮮では、この労務者の問題だけではなく、本国から騙されて戦場の果てまで駆り出された哀れな従軍慰安婦がおよそ２０万人（うち約１万５０００人が死亡）もいたのである。この罪もない哀れな女性は一人で１日に、３、４０人に上る日本軍将兵の性の奴隷にされ、身体は台無しにされ、最後には何の保障も顧みられず、捨てられたのである。

中国では、南京殺害事件（約３０万人）と言われている殺害事件や、７３１部隊による中国人、ロシ

ア人、朝鮮人を細菌戦の実験台にし、丸太として研究され、死亡した約４０００人を含め、戦火に巻き込まれて１２００万人余の人が死んでいる。アメリカはこの細菌データーを、早速７３１の部隊長、石井四郎軍医中将から入手し、石井隊長を軍法会議から除外している。

細菌戦使用については、１９２５（大正１４）年に成立した議定書により、毒ガスなども含めて戦争犯罪であるとされ、禁止されている。が、厳守されていないのが現状である。

タイの周囲を取り巻くアジア諸国で戦災に遭遇し、戦争で犠牲にされた国々を見つめてみると、フィリッピンが約１１１万人、ベトナムが約２００万人だが、ベトナムの場合は、米は山ほどあったのにほとんどが餓死である。ベトナム人が死んだ原因は軍部の手先となった三井物産がベトナムのトンキン米を、米不足だった日本へ輸出し、日本人に食べさせるために、１９４０年から４５年の間に３５９万４０００トンに上る米を、農民から取りあげたからである。しかも稲刈りをしたあとには、黄麻栽培と、とうもろこしを植えさせた。場所によってはやっと実り始めた稲まで強制的に刈り取らせ、涙を流して哀願する農民を殴りつけ、叱咤して黄麻を植えさせたのである。

シンガポールやマレーシアでは、シンガポール華人殺害を含め、約１０万人が犠牲になっている。インドネシアでは約２００万人が戦没し、インドの場合は１９４３年から１９４４年に掛けてベンガル地方で３５０万人強が食料難でミイラと化し、路上でバタバタ倒れ、空しく散って逝ったのである。

初めから中立を宣言していたタイは、日本とは不可侵条約を結んでいた。しかし、日本軍はタイの承諾も得ず、一方的な思考と行動によりタイとの不可侵条約を破り、１９４１(昭和１６）年１２月８日未明マレー半島のコタバルに敵前上陸を開始すると同時に、タイにも早朝の寝静まった南タイのシンゴラ(ソンクラー)、パッタニー、ナコーンシータマラート、チュユンポーン、スラータニー、プラチュアプキリカンに一斉に奇襲上陸を決行したために、双方で激戦を交える結果となった。

タイは日本の圧力により日本と同盟を結び、英米に宣戦布告し、共同戦線を張ると同時に、セーリータイ(自由タイ)組織による連合軍とも密接な関係を保ち、東北の山地帯で連合軍の近代兵器を投入し、数ヶ所の秘密キャンプで外人将校による軍事教練ガ実施され、敗戦間近には日本軍に寝返りを打つ時期を待っていたのである。

ソンクラーでは日本軍が上陸を開始した１２月８日の日に英軍機数機による空襲があり、日本軍の戦闘機と空中戦が展開され、英軍機数機が落とされた。

タイの場合、連合軍の空襲のみで国内戦は皆無だったので、平穏無事だったのではないかと思った。しかし、タイ軍の資料によると、日本軍がソンクラーに上陸した１２が８日の初日の連合軍の空襲を皮切りに、タイ国内の空爆は１９４５（昭和２０）８月１５日の日本の敗戦の日まで続いたのである。

バンコクは、翌年の１月８日午前４時頃２機の英軍機の飛来による初空襲があり、ヤワラーの中華貝フワラムポーン中央駅などが爆撃された。その後バンコクは敗戦の日までに３４回爆撃されている。

チヤンマイの初空襲は１９４２年３月６日(昭和１７)年３月６日だった。機体に中国のマークを付けたＰ５１マスタング７機が１５時頃北方より飛来し、工事中だったチヤンマイの飛行場目掛けて集中攻撃され、現場で通訳をしていた波多野秀さんが運よく助かったのである。

チヤンマイは翌年の１２月２１日にもＢ２４の編隊を組んだ空襲に見舞われ、チヤンマイ駅、日本軍の米倉、一般の民家などが爆撃され、約３００人が死傷。

サラブリーの日本軍が駐屯していたケーンコーイ郡も、１９４５(昭和２０）４月２日午後４時頃数機の爆撃機の飛来によりサラブリー駅、大衆市場、ケーンコーイ寺が爆撃され、市場は炎上し、数百人の住民が爆死している。

ケーンコーイ寺では今でも毎年４月２日の午前中に盛大な慰霊祭を行っている。このケーンコーイ寺の境内には、明治２７年時代に第１次、２次移民として来タイし、病死した１８柱の日本人の移民の碑も安置されている。

タイも１９４４(昭和１９年)の１１月頃からＢ２９が青空を銀翼を揃えて編隊を組んで飛んで来るようになった。米陸軍航空第２０爆撃機集団のＢ２９空軍機が編成され、昭和１９年１月から昭和２０年１月までに２５０回に及びタイの上空を荒らし回っている。

タイは第２次大戦の１９４１(昭和１６)年１２月８日から１９４５(昭和２０)年８月１５日の敗戦の日までに受けた空爆の被害は、延べ２９５０機により４０００回に亘り１万８６００発の爆弾と、６１００発の焼夷弾が投下され、爆撃による死者は１９００人、負傷重軽傷３０００人、建築物被害９６００軒、全壊１２００軒、空爆その他を含み、戦時中の戦没者は軍人５５９５人、警官８８人、市民３１０人、合計５９５７人である。

大東亜共栄圏を唱え、日本が侵略したアジア及び太平洋上の戦争を振り返ってみると、当時の日本は実に無茶な酷い戦争をしたものである。家庭の柱ともなり、力ともなる男性を赤紙一枚で招集し、７４０万人の精鋭を従軍させ、戦火の火の海と化した中国大陸や、太平洋上に点在している孤島へ部隊を送り込んでいる。しかも日本の戦法は、兵站や野戦病院はあっても名ばかりで、後方から戦場への補給ルートは皆無に等しかった。戦場で敵の獲物を分捕り、戦闘を続けなければならない酷いものだった。マレー半島攻略のときのように鉄道の便もあり、敵が逃走する際に残して行った足となる車両や食料、武器弾薬、医薬品が至る所に無数に転がっている場合は速やかに進撃できたかもしれない。

だが、険悪な山岳地帯のインドのインパール作戦に参加した精鋭は、後方からの補給はほとんどなく、将兵を地獄のドン底で待ち受けていた死地に追いやるようなものだった。ビルマの有名な白骨街道が出来た餓死のインパール作戦に投入した日本軍は約７万８０００名だったと言われている。だが、この内ひもじい思いをして戦った没者が約４万９０００名におよび、およそ６０パーセントが餓死だったのである。

ビルマのように陸続きにいた部隊は、まだそれでも喘ぎながらでも逃げ道はあった。しかし、日本々土の大事な防衛地となっている太平洋上のマリアナ諸島や、他の島に守備隊として送られた将兵もやはり後方からの補給はほとんどなかった。

各々が自給自足で島を守り、まるで島流しにされたようなものであった。数倍に当る敵の機動部隊の物資豊かな猛火に遭遇すれば、逃げ場のない哀れな将兵は飲まず食わずで飢えを凌ぎ、気力だけで奮闘し、最後には弾尽きて全滅する悲惨極まりないものだったのである。

敗戦間際の日本は艦船はほとんど沈められ、制海権も肝心な制空権も連合軍に牛耳られていたために、物資不足だった本土自体も完全に封鎖され、身動きできない状態だった。

日本本土はマリアナ諸島の本土の防衛線となっていたサイパン島、テニアン島、グアム島が１９４４（昭和１９）年7月から１０月に掛けて、日本軍はアメリカの優秀な機動部隊の猛攻に遭遇し、全滅し、大事な防衛線を占領されてしまったのである。

アメリカは空の要塞と言われた1万メーターの上空を飛ぶＢ２９大型爆撃機の基地を急増し、日本本土の爆撃を目指した。６月１９日マリアナ基地を飛び発ったＢ２９数機による北九州を皮切りに爆撃が開始された。

安全だと思われていた東京は、昭和１９年１１月３日、２機のＢ２９偵察機が飛来し、空中写真を撮り、飛び去った。そして、東京は１１月２４日に１００機のＢ２９機による初空襲に見舞われ、それ以来日本全土は敗戦の昭和２０年８月１５日まで延べ１万５０００機（３４００機説もある）による１７万トンの爆弾と焼夷弾が落とされ、主な都市は瓦礫と化したのである。

日本は毎日マリアナ諸島のティニアン島のＢ２９空軍基地から飛来する数１００機のＢ２９を途中で食い止める余力もなく、我が物顔で堂々と飛来する爆撃機により、民家や軍需工場は目茶目茶に破壊され、死傷者が続出した。

児童生徒は親元を離れ、食べ物も無くお腹を空かせて侘しい思いで地方へ疎開されていた。疎開都市で児童数が一番多かったのは、東京の２３万４８０５人、次が大阪の８万２３０６人だった。各都市から地方へ疎開された総勢は４１万１３６０人だった。この中には両親を亡くした可哀想な戦争孤児が１２万人もいたのである。当時の幼い児童生徒は、小国民、軍国少年、１４歳ともなれば少年兵と呼ばれ、大人並の特攻隊の特訓が実施されていたのである。

米軍の本土空爆で受けた被害は、広島原爆で１９万９Ｉ３８人、長崎原爆で７万５２１５人、空爆による都市、東京９万２７７８人、大阪１万２６２０人、愛知１万２１９２人、兵庫１万１２４６人、建築物２億４７８平方メートル、鉄道・軌道１８３１キロメートル、自動車２万１９０７台、非軍事船舶１万５５０８隻、一般道路４５８万平方メートル、国宝史跡名所勝７億７５００万円、総額４９７億円。

本土では昭和１９年の頃から食糧難で、お腹を空かせた若者が日比谷や上野公園で、飢えで餓死者が出現すようになった。だが如何せん、助けるにも食べる物もなく、どうすることもできなかったのである。

戦争のお陰で餓死で死亡したのは人間だけではなかった。１９４３（昭和１８）年頃からだったけども、既に上野や他の動物園では、カバ、ライオン、虎、熊や、可愛がられていた可哀想なジョン象も、動物に与える餌が無く、動物もひもじい思いをして死んだのである。

食糧は隣組組織ができて配給されていたが、主食となる米は何処にあるやら、一粒も見当たらない現状だった。家庭で使用する日常製品は衣類をはじめ全て切符制度によって販売されていた。

一方、物資不足の日本は、１９４１（昭和１６）年に、軍艦や武器を造るために金属類回収令が公布され、家庭で使用している鍋、釜、門、看板、鉄、銅、金属製の郵便ポスト、公園のベンチ、鉄柵、大

小様々なお寺の鐘などが軍部の手によって回収されたのである。

それに、鉄製品の生産が制限され、陶製のアイロンその他の製品、ガラスの材料が確保できなくなり、黒い牛乳瓶などの子供の玩具全てが奪われてしまったのである。

満州事変以来本土では国家総動員、国のために尽くす様々な組合や団体が誕生した。昭和５年度の女性人口は、３２０５万人だった。このうち１５０９万人が働く女性で、６０パーセントが男に代わり、農業関係の仕事に従事し、工業関係に所属したのは１４３万人いたが、軍需工場に回され、機械の取り扱い不慣れで負傷者が続出した。

後はタイピストなど職業婦人が５６万人、失業者が３００万人だった。当時の日給は僅か1円だった。

男子の事情はどうだったのかと見ると、１９３７（昭和１１）年7月の支那事変（日中戦争）以降昭和１６年の大東亜戦争が勃発するまでに１６歳から３５歳までの働き盛りの元気な農村男子６８万人が赤紙（当時１６歳から５５歳までが兵役）で招集され、中国戦線へ狩り出され、この他に１５０万人の男子は工場で働かされていたのである。

軍人不足だった日本では、子供を生めや増やせよと盛んに宣伝し、昭和１３年1月1日から軍国の母、陛下の赤子として、子宝部隊が誕生、昭和１５年5月から１０人以上の子宝に恵まれた1万６２２家庭に、子宝部隊の表彰式を行っている。

昭和１５年5月には全国に隣組組織が編制され、隣同士で仲良く助け合ってゆく意味を含め、回覧板を回すようになった。

隣組組織は、その後海外のバンコクにもできた。昭和１６年の時点で未亡人が３０万人以上に増え、昭和１６年8月、戦争未亡人を保護する財団法人助成会が誕生。昭和１６年荒鷹母の会発足、大日本婦人会２０００万人、愛国婦人会６００万人、国防婦人会１０００万人、女子青年団１６２万９７５４人に及ぶ団体が発足し、全国総動員となった。

昭和１８年に１４歳から２５歳までの未婚女性に対し、国民勤労報国協力令で、勤労奉仕が義務付けられ、幼い手つきで軍需工場の生産に従事させられる破目となった。

乙女会と全国処女会も発足したが、のちに合弁し、昭和１７年大日本青少年団となり、昭和２０年5月には、大日本青少年団は日本学徒隊に編成され、国民義勇隊となり、昭和２０年には国民義勇戦闘隊先兵とされ、第一線で闘うことになった。

敗戦時の女性有業者は５２３万人、挺身隊員は４７万２５２３人だった。この他に、戦場の野戦病院で医薬品の欠乏で苦労した従軍看護婦の団体があった。従軍看護婦の組織は、「日本赤十字社所属」、「陸海軍所属」、「陸海軍看護婦の会」の３グループに別れていた。日本赤十字社所属が派遣した看護婦は９６０班、述べ３万３１５６人だった。このうち戦没者８３５人（看護婦、医師、薬剤師、書記、使丁を含む）。陸海軍看護婦1万１１５３人、このうち戦場へは、陸軍５５９３人、海軍３６９人が従軍。元陸海軍看護婦の会は１０８０人のうち戦場へ派遣されたのは、陸軍１０７２人、海軍は8人だけだった。

日本の戦没者は軍人軍属、準軍属が約２３０万人、国内の戦没者が約５０万人、海外の一般邦人が約３０万人、計約３１０万人となるが、このうち（硫黄島、沖縄を含む）で散った戦没者は２４０万人に

及んでいる。

なお、敗戦時海外にいた日本の外地部隊は（ソ連を除く）陸軍２３４万３４８３人、海軍４０万２６９０人、計２７４万６０７３人の兵力が命拾いし、無事に生き延びた一般邦人を含め、約６３０万人が瓦礫と化した祖国に辿り着いたのである。

敗戦と同時に満州、千島、サハリン（樺太）、でソ連に逮捕され約６０万人の同胞は、極東シベリア、ロシアなどに連行され、２０００数ヶ所の収容所に入れられた。帰国の目途もつかぬまま零下４０度もする氷点下で鉄道、鉱山、炭鉱、森林伐採などの強制労働を強いられ、約５万５０００に上る人たちが冷たい土と化している。

暖かい東南アジアでも１９４７(昭和２２)年の１１月頃まで１０万４５６７人の作業隊員が残され、みんなの身代わりとなり、ハードな労働に処せられた。それは、ビルマが３万５０００人、シンガポールが２万４２００人、蘭印が１万４３６７人、マレーが２万２０００人、タイが９０００人だった。残され奉仕隊は日本軍が侵略した戦災の復興などに従事させられた。

第２次世界大戦中各国の最大兵力、推定死傷者並びに行方不明数及び直接戦費の明細を参考までに記して置く。

国名　　連合国	最大兵力	死者及び行方不明	負傷	直接戦費単位百万ドル
オーストラリア	680,000	37,637	25,856	12,544
ベルギー	800,000	22,651	14,500	7,905
ブラジル	200,000	975	4,222	－
カナダ	780,000	42,666	63,145	25,131
中　国	5,000,000	1,500,000	2,000,000	51,348
チェコスロバキア	180,000	6,683	8,017	－
デンマーク	15,000	6,400	－	3,000
ギリシャ	414,000	17,024	47,290	－
インド	2,150,000	48,674	65,174	－
オランダ	500,000	230,177	－	12,032
ニュージーランド	157,000	10,764	19,345	3,200
ノルウェー	25,000	1,598	364	1,240
ポーランド	1,000,000	550,000	320,000	－
南アフリカ	140,000	9,500	15,000	2,692
ソ　連	12,500,000	6,115,000	14,012,000	116,266
イギリス	4,683,600	403,195	369,267	62,233
アメリカ	16,112,566	545,108	670,846	312,803
ユーゴスラビア	500,000	305,000	425,000	－
計	500,836,566	10,098,052	18,440,026	755,488
国名　　枢軸国	最大兵力	死者及び行方不明	負傷	直接戦費単位百万ドル
オーストリア	800,000	220,000	300,000	－
ブルガリア	450,000	18,500	19,000	－
フィンランド	250,000	76,893	265,420	－
ドイツ	9,200,000	3,250,000	7,250,000	265,420
ハンガリー	350,000	147,435	89,313	－
イタリア	4,000,000	380,000	225,000	26,440
日　本	6,095,000	2,565,678	326,000	51,590
ルーマニア	600,000	73,000	49,000	－
計	21,745,000	6,731,706	8,258,313	343,450
総　計	72,581,566	16,829,758	26,698,378	1,098,938

（明細出所　Colliers Encyclopedia vol. 23 1963）

第２次世界大戦時の将兵の霊は戦犯容疑者の霊を含めて靖国神社に祀られている。靖国神社は昔から官軍の霊が永遠に眠る神社である。複雑な気持ちだが明細を記して置く。

明治維新	７７５１柱
西南戦争	６９７１柱
日清戦争	１３、６１９柱
台湾征伐	１１３０柱
北清事変	１２５６柱
日露戦争	８８、４２９柱
第一次大戦	４８５０柱
済南事変	１８５柱
満州事変	１７、１７７柱
支那事変	１９１、２５６柱
大東亜戦争	２、１３３、９４１柱
合計	２、４６６、５６５柱

（資料西浦三郎手記より）

赤紙一枚で召集され、無念の思い出戦場に散った哀れな日本軍の将兵の霊はまだ約１００万柱が荒野に放置されたまま祖国へ帰れる日を待ちわびいている。

第２次大戦時中日本は物資不足で食糧難に直面していたのだが、大本営の国民に対するキャッチフレーズは、次の様なものだった。

鬼畜米英、一億一心火の玉だ、小国民、軍国少年、贅沢は敵だ、贅沢はできないはずだ、

日本ヨイ国　キヨイ国、　強い国　一ツノ神ノ国、　日本ヨイ国　強イ国、

世界にカガヤク　エライ国、欲しがりません勝つまでは、だが敗戦時は「一億総懺悔」

となったのである。

物資不足だった日本は米英連合諸国を相手取り、補給の無い無理な戦争をしたのではなかったのか。日本は太平洋戦争でアメリカ一国を相手にするだけでも勝ち目はなかったのではなかったのではないのか。

日本の境界線となっていたマリアナ諸島がアメリカに占領された時点で、何故早急に降伏しなかったのであろうか。念のため当時の、日本とアメリカの力比べを比較してみると、次のようになる。

日米軍事力の比較		
1941年末	日本	アメリカ
人員　軍人・軍属	242万人	188万1000人
航空機	4772機	１万2204機
艦艇（小艦艇を含む）	148万トン	131万3000トン
	（385隻）	（341隻）
1945年8月15日		
人員　軍人・軍属	826万3000人	1229万7000人
航空機	１万931機	４万810機
艦艇（小艦艇を含む）	70万8000トン	427万2000トン
	（341隻）	（918隻）
日米国力・資源比較		
人　口	7193万人	１億3167人
原油産出量	28万トン	１億8950万トン
石炭産出量	5647万トン	４億6391万トン
鉄鉱石産出量	76万トン	9389万トン
アルミニウム生産量	5万トン	28万トン
発電機	3万7606	20万8306
（百万キロワット/h）		

敗戦当初の記録によると、軍人軍属一般邦人を含めて戦場の各地で約１万人が逃亡している。タイでは約１０００人が逃げ回っていたと、言われていたが、実際には１００人ぐらいだったのではないかと思う。

タイの場合は英軍の指示により、逃亡者の首一人に５千から１万バーツの懸賞金（狙いは納骨堂に潜んでいた辻政信参謀だった）が掛かっていたが、江畑組の９３人を含めてほとんどが逃走中に逮捕されている。

部隊から逃げ出した将兵は「逃亡兵」又は「脱走兵」と言われ、世間から馬鹿にされ、変な目付きで見られた。しかし、みんなは国のために戦った日本人なのである。中には現地で逃げたために、未だに日本人と認められず、恩給すらも貰えないで嘆いている可哀想な同胞もいるのである。

ビルマ（ミャンマー）にいた元大日本帝国陸軍上等兵だった北村作之丞さんもその一人だったが、日本電波ニュースの橋田信介さんの汗と努力によってやっと日本の国家から日本人として認められ、日本の国籍に復帰し、恩給が貰える様になった人もいる。だが、これはごく稀な話である。このように僕等の同胞はみんな純然たる日本人なのだ。

日本本土から赤紙一枚で呼び出され、行きたくもない、死にたくもない戦場へ無理やりに連れて来た

のは誰なのだ。

敗戦のどさくさで様々な問題を抱えて逃げ出し、逃げ延びた同胞が現地人と結婚し、何十年現地に住もうと、元日本人だった人は飽くまでも日本人なのだ。

祖国のために尽くしたその日本人を、何故日本の国家は冷たくあしらうのであろうか。もっと自国の国民を大事にすべきである。

戦争中は、台湾人も朝鮮人もみんな日本人だった。両国の人たちは日本人になりたいと言って日本人になったのではない。日本に強制されたからなったのだ。日本に苛められ両国の国民は、姓名も日本名に切り換えなければならなかった。学校も日本式の教育を強いられ、文化も踏み躙られた。日本の軍隊に駆り出された人たちの給料は、日本の軍事郵便貯金に預金させられたのだ。

強制連行された人たちは休日も祭日もなかった。酷い住居に押し込められ、満足な食事も与えられず、奴隷のようにこき使われ、恨みを抱いて死んで逝ったのだ。

日本は１９５２年（昭和２７）年４月２８日、サンフランシスコ講和条約が発効すると同時に今まで日本人だった（ちゃんとした公式の証明書を持っていた）日本の国籍を持っていた朝鮮人や台湾人、琉球人を、日本人から排除する処置を取った。日本の国籍を剥ぎ取り、突如として、その日から外国人にされてしまったのである。日本が戦時中に取った対策は、朝鮮人や台湾人には、日本国籍を与え、正式な日本人とした。しかし国内の戸籍謄本には、日本人として入籍していなかった。「戸籍謄本に名前が明記されていない者は日本人と認められぬ」これが日本の逃げ道だった。

僕はタイのプーケッ島で生まれた二世の混血児ではあるが、ソンクラーにいた８歳のときに、バンコクの日本人学校から「日本人の子弟は義務教育を受けなければならない」との通知により、日本人学校に入学し、戦時中は軍事教練まで強いられ、１４歳で知らぬうちに少年兵にされ、実弾射撃の練習や、背嚢に２０キロの石を入れて背負い、布団爆弾だと称して、戦車に体当たりするハードな訓練を受け、日本人として軍国少年の誇りを持っていた。

僕は大日本帝国大使館から身分証明書４０１号（昭和２０年7月発給）並びに日本人であるという、証明書まで発給して貰っていたのだが、僕自身もこの日本の法律に引っかかったのである。戸籍謄本に名前が登録されていなかったために「日本の法律で決められていますので……」と言った理由で、日本の国家から見棄てられてしまった一人である。

義理も人情もない日本から外国人とされた、朝鮮人や台湾人は、軍人恩給、戦後保障法、各種社会保障制度や軍事郵便貯金など全てから排除されてしまったのである。今まで日本のために尽くした人々を、日本は利用するだけ利用し、もう利用価値がない、邪魔だとみれば、屑篭にポイとい棄てる。これが日本の軍国主義時代だった勝手な利己主義的なやり方なのだ。

問題はこれだけではない。戦時中に上官の命令で誠意を尽くした朝鮮人が２３人、台湾人が２６人戦犯として処刑されている。処刑された理由は日本人であり、日本の軍人だったからである。日本は、はっきりと「朝鮮人と台湾人は日本人ではない」と言明している。しかしそれならば、この処刑された４９人の人たちも日本人ではない筈である。しかし、日本は「この人たちは日本人である」と認めて、処

刑させている。犯人と見られた者がれっきとした日本人であり、犯人ではない一般人が外国人だと見做される、こんな馬鹿な話があってよいのであろうか。死刑にされた４９人が日本人であるのであれば、生き残った朝鮮人も台湾人もみんな同じ日本人と認めるべきである。

他国の国民を軽視する無責任な日本の国家。非人道的な行為を平気で示す我侭勝手な日本のような国家は、絶対に許せない。実にけしからん国家である。

■祭部隊の将兵

祭部隊の精鋭が、スリウォン通りの我が家の前にあったドーム式になったイギリス図書館に駐屯するようになったのは、いつ頃からだったのか定かでない。恐らく１９４４（昭和１９）年の２月初旬頃からだったのではないかと思う。

我が家の真ん前にいたお陰で僕は良く兵隊さんの部屋へ遊びに行き、みんなと親しくしていた。祭部隊がインパール作戦に出撃する命令を受けて、最後のお別れの日に、みんなからお守りや、千人針、写真やその他いろんな物を形見に貰い、涙の別れとなった。

祭部隊の精鋭約２万の将兵は汽車でチヤンマイへ行き、暫く駐屯した後インパール作戦へ進撃を開始することになった。

初めの計画では、道路工事中のチヤンマイ…メーマライ…メーホーンソーンのルートを通ってビルマに行く予定だったが、工事がまだ全然捗らず、鬱蒼としたジャングに遮られて行動できない状態だった。

そこで戦前から密かにビルマ国境周辺の地形を調査していた、チヤンマイの主と言われていた写真師の田中盛之助さんが祭部隊の道案内役を勤め、チヤンマイからラムパーンを通過し、ラムパーンからメーサーイの国境でビルマへ越境し、印度のインパール作戦へと遠征し、ビルマで他の部隊と合流したのである。

インパール作戦に直面した日本軍は後方からの補給もなく、飲まず食わずで戦い、最後には弾尽きて、栄養失調で病気や餓死者が続出し、大敗に帰し、総退却となった。悲劇のインパール作戦と言われた将兵の足並みは、ミイラと化し、フラフラした状態で、およそ１０００キロも離れたタイのメーホーンソーン県クンユアムを目指して退却したが、途中で精根尽きてバタバタと倒れ、密林に哀れな白骨街道ができたのである。

僕が知っている仲良くしていた祭部隊の兵力は２万５０８人だった。インパール作戦では食べ物がなくて餓死者が６０パーセントも出たと言われている。

祭部隊の場合はどうだったのであろうか。祭部隊の戦没者は１万５２７３人、帰還者は僅か５２３５人のみ、何と約７５パーセントに及ぶ将兵が、可哀想に戦死している。

僕に形見に、と言って、色んな物を残して行った兵隊さん、特に写真を残して行った松宮忠男さんなどは健在なのであろうか。優しかったみんなの笑顔や面影を思い浮かべると、自然と涙が溢れるものである。

僕はみんなから貰った物は全部大事にして、机の引き出しに入れてしまってあったのだが、１９４５

（昭和２０）年８月１５日の日本の敗戦で、家財道具は全部敵産管理局に没収されてしまい、しかもノンタブリー県のバーンブワトーン抑留所に放り込まれ、更にバーンブワトーン・キャンプからバンコクの日本の第１６陸軍病院に送還され、日本へ返される寸前に辛うじて残れたのだが、祭部隊の将兵から形見に貰った物で残っていたのは、松宮さんから頂戴した軍服姿の写真が一枚残っているのみだった。

インパール及びビルマ作戦の悲劇

補給なし飲まず食わずで戦った日本軍が大敗したインパール作戦（昭和１９年４月…７月）

日本軍の兵力	78,000	戦没49,000
インド国民軍	30,000	戦没 3,000

緬方面日本軍（森）	兵力	戦没者	帰還者
司令部直轄部隊	51,414	25,003	26,301
第２師団	18,610	12,748	58,062
第４９師団（狼）	16,472	8,826	7,646
第５３師団（安）	16,201	11,542	4,659
独立混成第２４旅団	5042	1394	3648
独立混成第１０５旅団	1959	646	1313
計	109,698	60159	49539
第１５軍（林）			
司令官直結部隊	12513	3790	8723
第１５師団（祭）	20508	15273	5235
第３２師団（烈）	23059	14845	8214
第３３師団（弓）	22316	15022	7294
計	78396	48930	29466
第２８軍（定）			
司令部直結部隊	6966	4322	2664
第５４師団（兵）	16575	12077	4500
第５５師団（忠）	20259	16311	3968
独立混成７２旅団	2992	2198	744
計	46825	34918	11907
第３３軍（昆）			
司令部直結部隊	8158	2854	5304
第１８師団（菊）	31444	20393	11051
第５６師団（龍）	28980	17895	11085
計	68582	41142	27040
総　計	303501	185149	118352

（資料 日本近現代史を識る会の見取り図より）

■紛失した謎の金塊

義部隊の司令本部は、サートーン通りの中華総商会にあったが、この司令部の経理を担当していた分室がナレーの旧川合さんがいた家（暫く学校になっていた)にあった。

日本軍は軍資金を調達するに当り、軍資金が欠乏してくると、タイ政府から現金を融通して貰うために、２トンの重量がある金塊を護衛付きでベトナムのサイゴン南方軍総司令部からタイに運んでいた。タイに持ち込まれていた金塊はタイの大蔵省に運び込まれ、其処でタイバーツの紙幣に交換されて日本軍の手に渡されていた。

日本の敗戦も間近に迫った８月１０日頃だった。またバンコクからサイゴンの司令部へ２トンの金塊を取りに行くことになった。このときは、連合軍と最後の決戦を挑むために、バンコクで昭和１９年に

召集され、軍事教練を受けていた武田薬局にいたＳ氏一行に金塊護衛の命令が下った。

Ｓ氏一行がサイゴンから重たい２トンの金塊を護衛し、バンコクに到着したその日に敗戦となった。Ｓ氏一行が運んできた金塊は無事にナレーの義部隊の分室に届けられた。しかしその金塊はタイの大蔵省へ運び込まれる直前に何処へ行ったのか幽霊のようにすうっと姿を消してしまったのである。

敗戦のどさくさで金塊が紛失して５６年ほど経ってからだった。或る日、敗戦のときに紛失していた金塊は無事にタイの大蔵省に収められているからと、日本の某外交官から訊いたことがある。

敗戦時、人の袴で相撲を取っていた日本軍は、タイから借用していた軍費は、１９億６５０万バーツにも達していた。だが当時日本軍が金塊でタイに返済した金額は、僅か４億バーツだけだった。

未支払い分の残額に対しては、戦後日本側の負担額を当時の相場で９６億円とし、１９６２年５月９日に調印された特別円の返済により、国防省衣服工場、ナームプン発電所建設、国鉄車両、船舶建造などに使用され、１９７０年５月に返済を完了したのである。

■ナコーンナーヨック最後の決戦場

敗戦間際のビルマ戦線は実に酷いものだった。ビルマ戦線へ向かった３０万３５０１人名の精鋭は各方面で英印軍の反撃に遭い、追い詰められ散々な目に遭遇し、僅か3年半で１８万５１４９名が悲惨な戦死を遂げ、１１万８３５２名の兵力に激変していた。ビルマ戦線が窮地に追い詰められ、タイで英第１４軍１７万の兵力と決戦を挑む方針を企画した日本軍は、ナコーンナーヨックで決戦を挑む方針を立てていた。

敗戦間近にタイの防衛に当っていた中村中将司令官が率いる第３９軍（後に昭和２０年7月１５日に第１８方面軍に編成された）は、第４師団約１万５０００名がラムパーンに独立混成第２９旅団約６０００名がバーンポーンに配備され、バンコク防衛隊約４８００名がバンコク周辺の防備に当っていた。しかし、これらの部隊は余り戦闘力のない部隊だった。日本軍はピサヌローク、カーンチャナブリー、チュムポーンおよびその他の地区にも守備隊が配備されていたが、兵力は不明である。

主力となる部隊はナコーンナーヨックの標高１３５１メートルあるカウ・キョウ（青山）など、山並みが連なっている４０キロ四方を千早城とし、山に立て籠もり、決戦を挑む計画を立て、現地で召集を受けた同胞が洞窟を掘り始めていた。

ナコーンナーヨックに終結した主力に当る兵力は、第１５軍が約８０００名、第４師団が約１万２０００名、第２２師団が約１万３０００名、第３７師団が約１万名、第５６師団が約１万１０００名、総勢約５万４０００名の精鋭が手ぐすね引いて待機していた。

しかし、タイは戦火に見舞われる寸前の１９４５（昭和２０）年８月１５日の日本の敗戦により運よく戦火から逃れることができ、ナコーンナーヨックの決戦場は、そのまま英軍に管理された軍部関係の捕虜収容所となったのである。

捕虜収容所となった千早城には、後から更にドーンムアン空軍基地にいた航空隊、それに海軍や自動車部隊など、約1万６０００名が追加され、最終的に約７万の将兵がのんびりと収容所生活送っていた。

ナコーンナーヨックの収容所には龍兵団、バンコクのイギリス・スポーツクラブに駐屯していた原兵団の部隊も収容されていた。周囲の山には「双子山」とか「ドリアン山」と名付け、各自の収容範囲内に「紀の川村」、「大和村」、「朝日村」、「赤坂村」「瑞穂村」、「敷島村」などと故郷を偲ぶ日本名の村造りをし、意地悪な英軍の管理下で、将兵は暇に任せて畑で野菜の栽培をしたり、演芸会などをして、故郷へ帰れる日を待ち侘びていた。

■愛馬の悲劇

ナコーンナーヨックの収容所には、はるばる中国の山西省晋西南部「晋南」から南下し、ベトナム、カンボジア、タイ、マレー半島までおよそ1万１８００キロの道程を遠征した世界最強の部隊があった。

それは、タイに応援に駆け付けた騎兵隊を主体とした第３７師団の精鋭だった。中国からハノイに掛けておよそ３０００回の転戦を繰り返し、敵を撃破し、蹴散らし、タイで決戦を挑もうとしていた世界でも稀に見るすばらしい実戦部隊だった。

この第３７師団がナコーンナーヨックの収容所にいたとき、中国戦線から運命を共にした愛馬が３１００頭（日本馬１８００頭、大陸馬約１３００頭）が 残っていた。このうち約２００頭の良い馬が英軍に引き取られ、そのうちの約１００頭が将校用の乗馬として使われていた。残り約１００頭に関しては、どうしたのかは不明である。収容所に残っていた軍馬約２９００頭は元気よく収容所内を嘶き歩き回っていた。部隊では日本への帰国も近付いていたので、馬をお世話になった村のタイ人たちにやる計画を立てていた。

だが或る日突然「収容所内に生き残っている馬を全部殺せ」と、英軍司令部から命令が下され、「一頭を一発で仕留めろ」と命令され、拳銃と一頭一発分の実弾が渡された。今まで生命を共にした我が子のように可愛がっていた大事な愛馬を殺せとは、実に残酷な話である。これは日本軍に恨みを持っていた英軍の紳士ぶった実に意地悪な非人道的な汚い報復手段だった。馬の飼育班の人たちは、自分が死ぬ思いで涙を流しながら、一頭ずつ殺さなければならない遣る瀬無い立場に立たされた。

日本馬はほとんどが拳銃で射殺し、大陸馬は十字鍬で撲殺されたが、馬も殺されるのをわかっていたようで、じっと立ったまま涙を流し、可愛い目で世話になった飼育係りの主の顔を見つめていたのだった。自分たちの手で育て、殺した愛馬は、更に自分たちの手によって大きな穴が掘られ、可愛い愛馬を埋めなければならない悲運な運命を背負わされたのである。愛馬の墓には、大きな木の墓標を立て、全員が日本へ引揚げる１９４６（昭和２１）年５月２８日の日まで、哀れな愛馬を偲び、涙を溜めて墓参りが繰り返されたのである。

あれから７０年の歳月が過ぎ去った。ナコーンナーヨックの捕虜収容所があった場所は、今は立派なビルが建ち、タイ国陸軍士官学校の敷地になっている。しかし其処には、今も生死を共にし、様々な思い出を忍ばせた愛馬の霊が大地の中に埋もれて眠っている。

現在も時々馬の死体が掘り起こされたりしているが、藤田豊さんを筆頭に、当時の第３７師団の戦友会の努力が実り、１９８９年3月２５日、ナコーンナーヨックのプランマニー寺に、旧日本陸軍第３７

師団の慰霊碑が建立された。

この第３７師団の慰霊碑には、中国や仏印で戦没した将兵７３３８柱及び、タイで病死した６９９柱並びに、タイ人５８２柱を含めた８６１９柱と、愛馬４３７４頭の霊が静かに眠っている。青春を犠牲にされ、祖国のために散った尊い霊に頭を深く垂れ、冥福を祈りたい。どうか安らかに眠ってください。

■思い出すがままに

僕は今年（２０１６年）の５月２３日で満８５歳になった。音もなく過ぎ去って行く月日の流れのなんと早いこと。自分ではまだ若いつもりでいたのだけども、いつの間にか周囲の人たちから「おじいちゃん」と、呼ばれるようになった。

「おじいちゃん」と呼ばれ、僕もとうとう老人の仲間にされてしまったのかと、思わざるを得ない。そう言えば、やはり齢のせいか、気付かないうちに視力はかなり落ちたし、階段を上がったり降りたりすると、多少疲れるようになった。

体力的には大した異常はないのだが、丁度８０歳になった時点で、大事な目に白内障と緑内障を同時に患い、視界全体が霧が掛かったように霞んで見えるようになった。白内障は治療済みで異常なしで大丈夫だけど、老人病だとされている治りにくい緑内障がまだ宿っているので、視力は毎年徐々に悪化しているようである。目が悪くなってからには、足元が余りよく見えないので動作も鈍くなった。車の運転もバックミラーが見えなくなっている。危ないので運転は８１歳から中止している。夜は明りしか見えなくなり周囲の建物も何に見えなくなる。タクシーに乗っても何処を走っているのか何も見えない方向音痴となるので、夜は外出しないようにしている。

僕は運がいいことに目以外は、体調の方は全然異常なし。１１歳のときにチフスの予防注射で死に損ない、大病をして以来今日に至るまで一度も病気らしい病気をしたことがない。

僕は１７歳の頃から暇さえあれば毎朝１０キロほど走っていた。今もまだ走っているが、目が悪くなってからは大股で跳ねて走ると視界が直ぐ霞んでしまうので、小幅で歩くぐらいの速さで走るようにしている。今も相変わらず１０キロほど走っている。但し、自分の体力づくりのために一番暑い午後１時頃走っている。もう5、６年ほどになるが、汗ダクダクになり約２時間ほど走っている。僕が本格的に毎朝１０キロ走るようになったのは、タイの国籍を取得した３２歳のときからだった。その頃から田舎へ行ったときや、日本へ行ったときでも、走れる所さえあれば、何処ででも自分のペスでゆっくりとスタスタと走っている。

僕は水泳も好きで今でも泳いでいる。終戦当初バンコクにはまだプールがなかったので、バンカッピ（現スクムウィッ）の所々にあった池で泳いだり、ルムピニー公園の池や、チャウプラヤー川で泳いだりしていた。水泳はプールがないと泳げないので、どうしてもいつでも何処ででも簡単に走れるジョギングコースになってしまう。数年に1回ぐらい風邪を引くか、下痢をするぐらいで４０度の高熱が出ても平気で泳いでいるし、下痢になっても、1日絶食すれば、薬を飲まずにほったらかしておいても自然に治ってしまう。僕の体内には一種の目に見えない不思議な魔力が潜んでいるのかもしれない。そのお

陰で元気で、経済的にも助かっている。

今の健康状態がいつまで維持できるかはわからない。これからは、子供の頃から得た僕の記憶が喪失しないうちに、８０年間の自分が遺り残してきた後始末を、後世に残すべき物をきちんと整理して残しておかなければならない年齢に達していると思う。

僕の人生は実に目茶目茶な普通にはちょっと想像もできない波乱万丈な人生を辿っていると思う。実際に生まれた時点から、人間としての人種登録もされず、その辺にうろちょろしている動物みたいに生みっぱなしにされ、３０代まで惨めな野良犬みたいに残飯を漁り、トボトボと生きなければならなかった。

国籍問題にしてもそうだった。僕が自分に国籍がないことに気付いたのが２０歳の頃だった。実際には生まれたときから無国籍だったわけで、タイの国籍を取得する３２歳まで無国籍者でさ迷い歩き、世間からも見棄てられた哀れな身だった。国籍がないためにいい職にもありつけず、常にタイ当局の目を恐れ、当時、無国籍者はコマニッ（共産党主義者）と見做され、道端で警官に身分証明書のチェックをされ、逮捕されていた時代だった。僕はいつも逮捕されないようにビクビクしながら日陰の人間として小さくなって暮らさなければならなかった。僕自身もこの手入れに2、３回引っ掛かり、詰問を受けたことがある。タイ在住のキャンプの残留証明書を見せて旨い具合にごまかし、その場を逃れたこともある。これが国籍のない人間、肩身の狭い風来坊の悲しい心境だった。

国籍問題も大変だったが、我が家のお家騒動も頭痛の種となり、僕の小さな心を悩ませた。マラッカで両親の別れ話から始まり、自分の実母探しに繋がり、やっとの思いで実母を見付け、ホッとしたと思った途端に、実母から父は日本人ではない、と言われ、今度は実父探しに丹念し、日本で父のルーツ探し。やっと、伯母や従兄弟、親戚関係の人たちを突き止めたのが２６年前の１９９０年5月僕が５９歳のときだった。

和歌山県潮岬の父の親戚からは、「正夫は孫次郎そっくりだ」と言われた。しかるに、此処で課題となるのは、父・久雄の証言を信じるか、実母・陳の証言を信じるかである。

いずれにしても、僕に日本人の血が一滴も混ざっていないとなると、苦労して探し出した父方の親戚はみんなアカの他人となってしまうし、それとは逆に僕に日本人の血が滲んでいるとしたら、プーケッの腹違いの兄弟や従兄弟関係もみんなアカの他人となってしまうわけである。僕の両親に当る尊敬すべき親は、自分たちで好き勝手なことをして楽しみ、こんなに厄介な難題を何も考えず僕に投げ付けたのは親たちの責任なのだ。

僕には、僕を育てた義理の母テルと、実母の陳、腹違いの義理の母、ラオー（季の本妻）誰だかはっきりしないけど、日本人の父、久雄（本名久吉）、中国人の父、季、実母と同棲していた義理の父、タン、何と両親と称する人物が６人もいることになる。こんなに複雑な 家庭はそうざらにはないと思うが、僕は一体誰の言うことを信じればいいのであろうか。今更ながら僕にはっきりと証言できる親はもうあの世へ他界してしまっていない。僕にはまだ裏に何か秘め事が隠されているはずである。

日本の国籍を破棄されたとしても、親だと思っていた親が親ではないとすれば、汚い偽りだらけの大

人の社会を切り離し、国籍も親もない架空の虫けら人間になり、別世界の無人島で何も考えずに安楽に暮らすしかない。

３０年間に及び自分が信じていた親に真実を打ち明けて貰えず、騙され、悩まされた家庭問題。出生届も何もされていなかったために、日本の国家からは罪悪人みたいに、日本国籍を破棄され、自殺まで考えた僕。

バンコクの狭い日本人社会からは目茶目茶に馬鹿にされ、信用ゼロ人間にされ、惨めな思いをした僕。

何をするにも、何処へ行くにも常にタイ当局の目を偲び、日陰の一匹の野良犬同然に過ごした３０年の苦難の道、どんなに苦しく辛くても、どんなに悲しくても、純真な気持ちで自然と共に愛を求めてドボトボと辿った茨の道。

アーァ、何と苦しかった人生航路。やっとの思いでタイ国籍を取得し、大手を振ってかっ歩できる人間として、一人前の人間になった。他人様よりも一足も二足も出遅れて人生の門出に立った僕は３０年間も遅れて1歳の幼児として、誕生したばかりの人間として、堂々と行動できるようになったのだ。

この手にした一枚の内務省の紙にタイ文字で記入された署名入りの国籍証明証。この一枚の紙の何と威厳のあること。このたった一枚の証明証によって人間の一生が大きく左右されるのだ。

僕は小さいときから呑気性だったので、今まで何をしてもストレスが溜まったりしたことはなかった。但し、寂しくなったり、孤独になったりしたときはいつも自然を見つめ、自然と語り、美しい自然に慰められていた。ソンクラーにいたときはサミラービーチの松林や、猫島、鼠島が見える綺麗な海を眺めて涙ぐんだりした。

バンコクの日本人学校にいたときもそうだった。寮に預けられていても両親は誰も面会にも来てくれず、お金もなくて欲しい物も買えず、感傷的になり、遣る瀬無い気持ちに駆られたりしたときは、学校の裏の池でスイスイ飛んでいるトンボや蝶々、それに綺麗な草花などを見つめて慰めて貰い、心を癒していた。

独りぼっちで自然と語り合っていた僕は、1日に万遍なく変化する無言で語りかける自然の美しい姿から様々なことを学び取った。自然は怒ると怖いけど、自然のように美しく、自然のように大らかな美しい心の持ち主になろうと思い、温かい人間になるために、自分で自分を教養し、人々のために善意を尽くし、悲哀に満ちた人々と親密な関係を持つようになり、今日に至っている。

僕の学歴は、後にも先にもバンコクのソーイ・サップにあった盤谷日本国民学校一校しかない。第２次世界大戦中に小学校を卒業してから、中学、高校、大学へと進学するのが一般の常識である。僕の場合は日本が仕掛けた太平洋戦争のお陰で、日本へも行けず、バーンブワトーン・キャンプに放り込まれ、教材も何もないキャンプの掘っ立小屋で高等科２年を中退しただけで学校とは永遠の終止符を打っている。運よくタイに残れたけど、将来のことも何も理解してくれなかった義理の母の一存で、タイの学校へは行かせて貰えず、涙を飲んで断念せざるを得なかった。従って僕の母校はバンコク日本人学校一校しかない。そのバンコク日本人学校は、今も「タイ日協会学校」の名前で残っている。

バンコク日本人学校にしか行けなかった僕は、いろんな思い出が残っている。僕はバーンブワトーン・

キャンプのバラック建ての小屋で勉強したのを含めて7年しか勉強していない。僕がお世話になった先生は、金井純雄先生、町田実先生、宮脇良憲先生、宮脇アキヱ先生、金庭康子先生、ウライ先生だった。敗戦後、キャンプ生活を余儀なくされ、昭和２１年６月１０日バーンブワトーン・キャンプからみんなが日本へ引揚げるときに悲しい思いで別れた同窓生が約１３０人、先生がたった６人だけで、僕の一生涯で得た学友は実に少ない寂しいものだった。

しかし、僕は運がいいことにこの６人の先生に親切にして貰い、可愛がって貰った。敗戦戦後、僕は日本へ行くたびに先生の家に泊めてもらったりしているが、先生も一人ずつ他界し、今はもう誰も残っていない。優しかった先生たちのことを思い出していると、あのバーンブワトーン・キャンプでの最後の涙の卒業式や、ポンポンポンとタックボートに引っ張られて徐々に遠ざかって行く艀の板張りの所に立って手を振っていた先生に小高い丘の上から大粒の涙を流しながら声を振り絞り「先生、さよーなら－」と叫んだ光景が、今でも昨日のようにありありと浮かんでくる。

僕はいつもそうだが、当時のことを思い出すたびに涙がジワジワーッと滲み出てくる。第２抑留所にいた宮脇良憲先生が第２キャンプの様子をスケッチして、第１抑留所にいた生徒に出した色褪せた一通の貴重な手紙が残っている。その手紙は第１キャンプにいた同級生だった池田実さん宛てに送られたスケッチなのだが、僕はその大事手紙を實ちゃんから貰っている。今も大事にしてしまってある。当時の第２バーンブワトーン・キャンプの様子を明確に表記したスケッチである。僕は第３キャンプにいた里見宗次さんからも、第３キャンプの様子を描いた貴重なスケッチを頂いている。

僕は、宮脇先生と里見宗次さんから頂いた２人の貴重なスケッチを持っている。今でもそのスケッチを見ていると、当時のことが走馬灯のようにありありと浮かび、懐かしい思い出が蘇ってくる。終戦後、僕が宮脇先生の自宅にお邪魔したのは、まだ先生が健在だった１９７７年１１月１日から４日までお世話になった。そのときは神戸にいた玉田恵美子さんと、博多にいた元メナムホテルにいた橋本ツタエさんが合流し、宮脇先生の家族を囲み、みんなで楽しいひとときを過ごした。

僕は宮脇先生から３万円の餞別を頂戴し、１１月４日の夜ビーちゃん(虹華）のお手製のすき焼きをご馳走になり、高松から別府行きの夜航船、関西汽船の「くれない丸」に乗船し、先生に別れを告げた。だが、桟橋まで見送りに来てくださった先生と別れるのが辛くて、シクシク泣き出してしまった。乗客を満載した「くれない丸」はポーッポーッと汽笛を鳴らし、闇夜の別府へ向かって出港した。僕は甲板から高松市の明りが見えなくなるまで先生の面影を追い、心地よい潮風に打たれて甲板に立っていた。お世話になった宮脇先生と、アキヱ先生とは、悲しいかなそれが最後の別れとなってしまった。

早朝に湯気がもうもうと立ちこめている別府に到着してからバスに乗り継ぎ、３０００キロの山間地帯の九州横断道路を、のんびりした気分で美しい景色を眺め、観光バスに揺られながら東京へ向かった。東京ではみんなが僕に会いたい、と言って、１９７７年１１月１８日にパレス・ホテルで敗戦後初めての同窓会を藤島健君たちの努力で開催して貰った。懐かしい町田先生や、渡辺幸治君たちに会うのは、バーンブワトーン抑留所で別れて以来３１年振りの再会だった。

金井純雄先生の場合は、先生が定年になった１９７１年にバンコクに訪れたときに、バンコクに残っ

ていた同窓生と、父兄会のメンバーにより、アマリン・ホテルで盛大な歓迎パーティーを開催した。金井先生はその後もちょくちょくタイに来ていたので、僕たちはその都度同窓会を開催していた。だが、月日の流れと共に先輩や後輩、それに先生方も一人ずつ他界してしまい、バンコクに３０人ほどいた仲間がほとんどいなくなり、同窓会を開いても、最近では４、５人しか集まらない有様で、親しかった友人が一人ずつ死んで逝くのは実に悲しく寂しい。みんなの希望では、「正夫ちゃんはみんなのお葬式の写真を撮ってから最後に死んでね」と、頼まれている。独りぼっちにされたら寂しいのに、みんなは勝手なことを言っている。

１９９４年１１月６日だったが、東京のニューオータニ・ホテルのトレーダーヴィックスで４９年ぶりに、バンコクと日本合同で盛大な盤谷日本国民学校の同窓会を開催した。今までは僕が日本へ行ったときに同窓会を開いていたが、今回のように企画を立てて大々的にやったのは、戦後初めてだった。総勢４０名（バンコクから９名）の同窓生や、当時のＰＴＡの方々が集まった。ほんのひとときではあったが、和気藹々とした楽しい同窓会だった。僕は４９年ぶりに再会した人もいたが、出来ることならばこのような同窓会を毎年続けたいと思う。

しかし、無邪気な小さな子供だった僕等の仲間も、月日の流れと共に齢を取り、もうみんな高齢者の年齢に達している。次回にこうしてみんなと会い、懐かしい元気な声を聞けるのであろうかと思わざるを得ない。

僕がバンコクに戻って暫くしてからだった。タイに帰る前に電話で話した清藤正男さん（７４歳、戦時中は戦闘機の操縦士だった）が他界してしまった。「また来るからね、今度会うからね」と、約束を交わしたのに、残念である。親しかった学友も一人ずつ減り、お互いに残した思い出だけが残り、実に寂しい空しい気持ちに駆られる。いつになったら自分の番が訪れるかわからないけど、みんな元気でいて欲しいと思う。

僕はみんなと同じように足並み揃えて大学まで進学したいと、美しい夢を描いていた。だがその夢は破れ、過去において学校に行けたのは、バンコクの日本人学校一校だけだった。僕は大学まで行きたかったけど、それは家庭の事情で無理な願いだった。だけど運がいいことにみんなに親切にして貰い、まるで一家の家族のようにして可愛がって貰った。お陰で現在の僕があるわけで、そのお世話になった恩師とはずっと文通を続けていた。だが僕を励ましていた年老いた先生が、一人、また一人とこの世を去って逝った。いつも「正夫、正夫」と、我が子のように呼んでいた先生と永遠に別れるのは実に辛いし、侘しい。タイ語の先生だったウライ先生とも過去６０年に亘り文通を続けたが、もうあの世へ旅発ってしまい今はもう誰もいない。

日本語もまだあまりよくわからない僕が一年生のときからお世話になっていた優しかった金井先生とは戦後もずっと行き来し、千葉の船橋の自宅にも寝泊りし、お世話になっている。現在も金井先生の遺族と家族同様に兄弟のように親しく付き合っている。そのお世話になっていた金井先生が平成元年３月３日に船橋の熊谷病院で静かに息を引き取った。享年７８歳だった。あの優しかった僕を我が子のように可愛がってくださった先生はもうこの世にはいない。あの優しい目をした先生の瞳を見たいと思って

も、もう見られない。あの優しい静かな口調で話す先生の声を聞きたくても、もう二度と聞けない。４９年間もいろいろと迷惑を掛け、面倒を見てくださった先生はもう手の届かない姿もみえないあの世へと逝ってしまったのだ。先生と一緒に過ごした過去を偲び、先生の面影を思い出し、大粒の涙を流し、泣きながら先生の冥福を祈るのみである。

先生、どうか安らかに眠ってください。僕を一人前の人間に育てあげてくださった今は亡き恩師に頭を深く垂れ、涙と共に冥福を祈ります。「先生、いろいろとお世話になりまして、本当にありがとうございました。

僕がお世話になった金井先生は国家公務員として４１年間教鞭を取った功績により、平成元年３月３日に竹下登総理大臣から従五位勲五等瑞宝章を授かった。

僕にはどうしても忘れられない人がいる。それは敗戦後汗水垂らして築き上げた財産を全部敵産管理局に没収され、裸一貫で再建を図り、昭和２７年に神戸からバンコクに舞い戻ってきたでっぷりした柔道家の日高秋雄（ひだかとしお）さんである。日高さんはいつもヘルメット帽を被り、自転車でお得意先回りをしていた。

僕がまだ仕事もなくて困っていた頃だった。僕が靴をすり減らしてテクテク歩いていると、いつも何処かで自転車に乗っていた日高さんに出会った。そのたびに、日高さんが元気な声で「正夫君頑張れよ、頑張れよ」と励ましてくれた。その日高さんが励ましてくれた声は未だに僕の心にしっかりと残っている。日高さんの声は僕の心をギュッと引き締めてくれる生きる力を与えてくれる実に心強い声であった。

僕には未だに忘れられない兵隊さんのことが頭に残っている。僕は兵隊さんと遊ぶたびにいつも兵隊さん、兵隊さんと呼んでいたので、残念ながら誰の名前も覚えていない。戦時中クアラルムプールのホテルで出会い、別れ際に悲しい思いで別れたあの元気な兵隊さんたちはどうしているのであろうか。そして、スリウォンの我が家の前に駐屯していた死のインパール作戦へ出動したあの若い祭部隊の兵隊さんたちの末路はどうなったのであろうか。あのときお守りや、千人針の腹巻きを形見に残して去った坊ちゃん育ちの兵隊さんのことなどが思い出される。あの地獄の戦場から無事に生き延びていてくれればと、祈っている。戦後足掛け７０年もの歳月が流れている現在みんなはもう９０歳過ぎでほとんどが他界しているのではないかと思う。それに、例え何処かで偶然出会ったとしても、もう顔も思い出せないと思う。全てがもう遠い過去のことなのだ。

僕が親身になって交際している友人関係の範囲は非常に広く、貧しいスラムの人々や乞食の層から大臣に至るまで大勢の仲間と付き合ってたいる。朝日関係もそうだが、日本へ行くたびにみんなに大事にされ、歓迎され、ご馳走になっている。僕は何処へ行ってもみんなが集まってくる。バンコクでも６０年ほど前に教えていたもう７０代過ぎになるタイ人の弟子と、今でも大勢集まって一緒に食事をしながらペチャペチャ喋ってはしゃいでいる。

僕には大学の特別講師になる資格も何もない。僕がチヤンマイやバンコクで京都精華大学や恵泉女学園大学の学生に講義をするようになったのは、２０年ほど前からだった。恵泉女学園大学の場合は、２０００年にスタートしたのだが、９月９日にチヤンマイ大学で恵泉の女学生に午前９時から１２時まで

講義することになっていた。しかし、講義が終り、昼食が終ってからだった。学生から「瀬戸さんの話は面白いからもっと聴かせて」とねだられ、また教室に戻り話し出したのだが、夕方の４時半頃まで話し込んでしまった。最後に、最後まで教室に残っていた５人の学生と、５０年後にチヤンマイ大学の池のほとりで逢う約束を交わし、記念写真を撮って別れた。

僕には恵泉女学園大学の可愛い５人の大学生と５０年後に逢わなければならない大事なデートがある。２０５０年９月９日にチヤンマイ大学の池のほとりで、佐藤織絵さん、小野寺峰子さん、大田真理子さん、駒場か絢子さん、本田めぐみさんと逢わなければならないので、どうしても生きていなければならない。「正夫は一体何を考えているのだ」と、みんなから笑われるかもしれないが、大きな希望を胸に抱いて生きていたいと思う。

僕は時々ぶらりと日本へ行き、懐かしい旧友に逢っている。日本へ行くたびに東京、奈良、須佐、千葉方面を独りで当てもなくフラフラ歩き回り、友人の家へ飛び込んでは、楽しみながら迷惑をかけている。

バンコクでソーイ・デーンウドムで別れたエコート・デ・ボザール・パリ美術学校を卒業したグラフィックス・デザイナーをしていた有名な今は亡き里見宗次さんと大阪ターミナルステーション・ホテル（現在はホテル・グランヴィア大阪）で会ったのは、１９９４年５月１８日、４７年振りの再会だった。その日は、後輩の玉田恵美子さんと福井久子さん３人で里見宗次さんを囲み、コーヒーを飲みながらバーンブワトーン抑留所の話に花を咲かせた。里見さんが第３抑留所でスケッチした素敵な絵を、僕の本に掲載させて貰う許可を得た。

僕は若かりし頃いろんな日本人に騙され、スッカラカンにされた苦い経験がある。だが僕は一度も恨みに思ったり、復讐してやろうと思ったこともなかった。いつも自分の無知さにまた騙されちゃったと、ハッハッハーと笑っているだけだった。

しかし、１９９５年１０月２０日に『父と日本にすてられて』の本を出版してくれたくそ真面目な顔をした、僕の掌を見て「やっと仏の手を持った人に会えた」と言った、かのう書房の竹内行雄さんに「印税は後から纏めて払いますから」と言われたが、彼に印税をごまかされてしまった。それも本が売れないのならともかく、もう絶版になっているのだ。僕一人をごまかすなら気軽に許してやるが、今回は許さない。何故かと言うと、僕の親友である朝日の写真部にいた松本逸也さん、アジア・プレスの野中章弘さん、それに僕の弟子の松村みかさん、この３人から出版記念パーティーが迫っていたときに「印刷所に払う金が足りないので」と、旨いことを言って、１００万円借りて、ドロンしているからだ。３人とも僕の気性をしっているので、僕には数年間内緒にしていたのだった。竹内さんには手紙を出しても、電話で伝言を残しても、なしの礫で雲隠れしている。男だったら正々堂々と出て来い。僕の友人から借りた借金も返済しない。僕の印税も払わない。こんな無責任な奴は許さない。今度会ったらただではおかないから覚悟しろ。

僕が生まれた所は南タイのプーケッの孤島だった。当時は今のようにプーケッ島へ渡れるサラシン橋もなく、周囲を海に囲まれた涙が出るほど美しい自然に恵まれた孤島だった。だけど、僕が育ったの所

は遠浅の小波が打ち寄せる綺麗な海に恵まれたマレー半島と国境を接したシンゴラ（ソンクラー）だった。子供の頃何も知らなかった僕は、シンゴラで生まれのだと思っていた。だけどバンコクの日本人学校に入って、初めて僕の故郷はプーケッだとわかった。だがプーケッで生まれて家庭争議を引き起こした問題児だとは全然知らなかった。

小さいときから美しい自然に憧れ、動物が好きだった僕は敷地がある広い所に住めば、犬、猫、猿、兎、白鼠、鳥、鶏、あひる。鵞鳥、がま蛙、魚などを飼っていた。特に犬とは縁が深く、今でも飼っている。

我が家の車を停める車庫は玄関の入り口にある。玄関には鉄格子を横に開け閉めできる鎧戸がある。１０年ほど前になるが、一匹の毛が一本も生えていない瘡蓋だらけの野良犬が車庫に舞い込んだ。毛はないしとても臭いので、何回も追い出したが、朝、部屋の扉を開けて覗くと、いつも車の下に潜り込んでいた。臭いので隣近所の人たちは「メン（臭い）と呼んでいた。追い出しても、追い出しても戻ってくるので、可愛想になり、飯を与え瘡蓋の化膿した皮膚に毎日薬を塗っていたら茶色の毛がだんだんと生えだし、臭みも取れ、毛のふさふさした見違える犬になった。

メンは外へ出たくなると、小さなキラキラした瞳で僕を凝視して、鼻をクンクン鳴らしながら、「外へ出して頂戴」と、話し掛けてくるし、僕が椅子に腰掛けたりしていると、膝の上に飛び上がってきて柔らかい舌で顔中をペロペロ嘗めてくれるので、僕も頭を撫でて可愛がっていたが、愛着があってとても可愛い利口な犬だった。

犬は数年前までは５匹いたが、病死したり、あの世へ逝ったりして今は禿ちゃびんになった年老いたよろよろ歩く犬が１匹と、何処からともなく舞い込んだ３匹の野良猫が我が家の４階建ての家の中を走り回りっている。猫と共同生活するようになってからは、悪戯盛りの我が家によく遊びに来ていた鼠は１匹もいなくなったし、夜になるとゴソゴソと現れていたゴキブリの大群も猫のお手玉にされ、姿を消してしまい衛生的にも清潔で助かっている。

僕が始めて未知な大人の複雑な暗黒の社会に向かって第一歩を踏み出したのは、抑留所から釈放され、バンコクに住むようになって間もない１５歳のときからだった。

スリウォン通りのあばら屋からヤワラー中華街の西野歯科クリニックにボーイとして勤めたのが初仕事だった。初日から義理の母からは１銭の小遣いも貰えず、お昼は水道の水で我慢し、次の日からお弁当持参となり、服装も、長ズボンを買う金が無かったので、半ズボンに運動靴を履き、足を頼りに人生スタートを切った。人生の門出から懐には１銭もなかった僕だった。大波小波に揺られて歩んだ８０年間の道程は短いようで結構長く様々な体験をし、辛苦を嘗めてきた。今はなんのし心配も無く温かい愛情に包まれた家庭の主として幸せに暮らしている。

今は、自分が欲しいと思っていた永住の地となる家も土地も持っている。１銭の家賃も掛からない自分の家がある。追い出される心配もない自分のアジトで自由に羽を伸ばし、好き勝手なことをしながら家族と安楽な人生を送っている。

人間の運勢とは自分に与えられた運勢だけを頼っていたのでは、どうにもならない。常にめげずに努

力に努力を重ね、自分の人生を作り上げ、大らかな優しい慈悲深い気持ちで微笑みながら人々のために尽くすことである。

タイは１９３２年６月２４日の立憲革命以来タイ式の民主主義政治が施され、世界に稀に見る２６回もクーデターが発生している国家である。革命当初は陸軍対海軍の対立があり、数年に亘り双方の権力闘争が継続していた。１９５１年６月２９日海軍が引き起こしたマンハッタン事件以来、海軍の首脳部は陸軍に徹底的に叩き潰されてしまった。それ以来今日に至るまで政治に難題が生じて行き詰ると、陸軍の権力者が独断でクーデターを起す天下となった。ただし、陸軍内部の権力争いもあり、陸軍同士のクーデターが発生することもあるし、一般大衆のデモに対して血生臭い流血事件を引き起こすこともある。

タイではローソー１３０グループによるクーデターが発生する直前に発覚し、全員が逮捕された未遂事件を含めると、２６回もクーデターが発生している。いつもデモが集会する場所は、タマサート大学校内、サナームルワン（王宮広場）、憲法記念塔があるラーチャダムヌーン通り国連ビルから、チュラーロンコーン五世王の馬に乗った銅像周辺にかけてであった。

軍部のクーデターは、無血クーデターの場合もあり、血生臭い流血事件のときもあるが、１９９２年５月１８日のスチン大将のクーデターのときまでは、兵士に対する上官の命令は「デモ集会の群集は共産主義者だから撃て」と、命令を下していたのである。

今まではクーデターが発生しても、内部の情勢がほとんど皆無に近かったのが、スチンダーのクーデターのときからは、充電器の重い携帯電話が出始めたばかりの頃だったので、様々情報が手っ取り早く入手できるようになった。

それと、いつもメインとなる集会所はタマサート大学だけだったのが、ラームカムヘーン大学でも正門にバリケードを築き、座り込み集会を始めたので、５、６０台のオートバイによる暴走族が出現し、バンコク中の主な四辻の街灯を拳銃でバンバン撃ち壊しながら気勢を上げて疾走するようになった。

１９３２年の立憲クーデター以来一般市民がデモ集会を始めるきっかけはほとんどが軍部の独裁政権に対する不満によるものだった。

しかし、２０００年のタイラックタイ(タイ愛国党）のタックシン・チンナワッ党首の出現以来、タイのデモ集会は軍政権の政治不満に反旗を翻すだけでなく、各政党の勢力争いによる利権問題などが絡み、与党に対する野党の反政府デモ集会が頻繁に起こるようになった。集会場所も商業都市の中心地となるシーロムからサヤームや、ラーチャプラソンの交差点から伊勢丹周辺にまで座り込み集会などとが数ヶ月の長期間に亘り展開されるようになった。与党に対する野党のデモ集会と言っても、主にタイラック・タイ(タイ愛国党)の２００１年に発足した赤シャツ組のタックシン派と、プラチャーティパッ（民主党）の王党派を示す黄色シャツ組のアピシッ・ウェーチャーチーワ２党による政治の乱闘である。僕に言わせると、黄色組は南部１４県とバンコクの中間層、赤組は北部と東北部を含めた草の根４４県の対立であるわけで、タイの南北戦争の始まりである。

このタイ人同士の南北戦争がいつまで続くのか分からないが、僕は１９７３年の学生革命流血事件、

１９７６年の軍部クーデターによる血の水曜日や、１９９３年のスチンダー軍部クーデターによる群衆に乱射した流血事件にも直面してきた。今までの経験では、デモ集会に集結している群衆はほとんどが素手で、ガソリンスタンドを占領し、火炎瓶を作って抵抗し、ビルを焼き討ちしていた程度で、武器を手にした者はほとんどいなかった。アピシッ政権に対する赤組の反独裁民主同盟（ＰＡＤ）の集会が始まった時点から、過去において一般市民のデモ集会で武器を手にし、反攻した集会は見たことがなかった。

しかし、２０１０年のアピシッ政権に対する赤組の反政府座り込み集会と同時にデモ行進が開始されてからは、赤組による発砲事件が発生するようになった。セントラル・ワールドセンター前のラーチャプラソン四辻の交差点に設置された舞台で、歌手だったアリスマンのスピーチがあったときだったが「今回我々にはボディガードが付いているから安心だ」と宣言しているし、一方、チャトゥポン・プロムパンも「いざとなったら俺が責任を取るからバンコクを燃やせ」と、叫んでいる。

この２人の宣言は正しいかどうかは別としても、実際にサーラーデーン駅に爆弾が撃ち込まれて１人が死亡し、邦人１人を含む８０人余りの人が怪我しているし、軍部の鎮圧部隊が装甲車を先頭に出動したときも、赤組と交戦している。

テレビの映像に捉えられた銃口を鎮圧部隊に向けた怪しげな黒服姿の人物も出現している。赤組が投降し、警官に連行された２０１０年5月１９日の最後の土壇場で、指導者最後の声明マイクを通し、「我々は降伏する。集会の参加者は自宅に帰ってください。警官は我々の味方だから心配無用」と発表し、最後に「バンコクを焼き尽くせ」と叫んだ鶴の一声で、待ってましたとばかりに、赤組の分子が黄色組みに支援している４０数ヶ所に及ぶビルが一斉に放火されたのである。

放火された主なビルは、パラゴン、セントラルド・ワールド、マリノンビル、クローン・トーイ発電所、サヤームスクウェー、サヤーム映画館、スカラ映画館、ビッグＣ、タイパニッ銀行、オームシン銀行、バンコク銀行１０ヶ所、クルンタイ銀行２ヶ所、カシコーン銀行２ヶ所、ナコーン・ルワン銀行、タイパニッ銀行３ヶ所、その他である。

今回のアピシッ政権による軍部の治安部隊による赤組に対する鎮圧作戦は双方の銃撃戦も激しかったが、悲惨な赤組の死傷者は、ロイター通信日本支局.の村本博之カメラマンを含めて９９人が街角の路上で血に染まり、１５００人余りが負傷した大惨事を招いている。

僕が勝手に考えたタイの政治家による南北戦争はいつまで続くかわからない。様々な利権関係に伴った汚職社会と欲を切り捨て、国家のために尽くす正義感に満ちた政党はいつになったら現れるのであろうか。

世界で話題となっているタイ式の民主主義とは一体何なのか。お互いの権力闘争で私欲を肥やすだけなのか。最終的な助け舟は軍部のクーデターによるものなのか、今後も民族同士のいがみ合いを継続するのだろうか、微笑みの国の民主主義ならマイペンライかも知れないが……。

１９４５(昭和２０）年8月１５日、日本の敗戦と同時に日本人は連合国の敵国人と見なされ、海外の

邦人は敵産管理局に資産全てを没収され、丸裸にされてしまった悲しい思い出がある。

敗戦当初は気がつかなかったが、１９４５(昭和２０)年４月にリヤプの発電所及びリヤプ寺の本堂が連合軍の空爆で直撃弾を受け、瓦礫と化したリヤプ寺境内に、明治時代に先輩が苦労して、２０サタン、３０サタン（銭）ずつ貯金して建造した金閣寺型（今年で建立８０年になる）の日本人納骨堂だけは運よく差し押さえられず、何の手も付けられずにそのままの姿でそっくり残っていたのである。

敗戦当時、辻参謀（辻正信中佐 のち大佐）は日高洋行の日高秋雄さんの密かな取り計らいで７人の部下と一緒にタイランド・ホテルで僧侶に変装し、難なく納骨堂に潜り込めたけど、もし敵産管理局に没収されていたとしたら、それは不可能なことだった。

従って辻参謀は運が良かったのだと言える。辻参謀は連合軍の眼を忍び、潜行するに当り、義部隊長の中村閣下とも打ち合わせをし、タイに派遣された５０人程の青年特攻隊員だった隊員で特攻機に乗る飛行機が無く、陸軍の地上部隊に転用された特攻隊員で、僧侶出身の７名をタイ僧侶に変装させタイの寺院に残る方針を立てた。一方更に、特攻学徒兵だった８名の志願兵を商社マンとして活躍することになった。

僧侶として選ばれた７名の部下は、久保厚仁(曹洞宗)、小林憲雄(浄土宗)、中島節也(日蓮宗)、小沢常敏(臨清宗)、富永徳孝(浄土真宗)、矢神邦雄(曹洞宗)、福沢孝(曹洞宗)。商社マンとして志願した８名は、日高洋行に岩崎恒、古川敏治、豊永和生、南洋倉庫に伊藤実、畠一平、弦岡確、中原報に飯沼治、個人商店に宮坂隆雄を潜らせたのである。７名の青年僧侶は１９４５(昭和２０)８月１５日の夜半に掛けて、まだ瓦礫と化したリヤプ寺境内の日本人納骨堂に潜り込んだ。辻参謀は青木憲信と変名し８月１７日の早朝に旨い具合に７人の青年僧と合流したが、納骨堂にいた７人の青年僧は、のちにマハーター寺の僧房２５号室に移転しお互いに連絡を取り合っていた。

連合軍の戦犯容疑者に引っ掛かっていた辻参謀は、納骨堂に潜入後、スリウォン通りの海南会館の看板を掲げた、地下工作をしていた中華民国国民党海外部の党員とコネを付け、北京へ潜行する計画を立てていた。

辻参謀は１０月２８日英軍に逮捕される寸前に、国民党のアジトに飛び込み、１１月１日国民党２人のボディガードに護衛されて、フワラムポーン中央駅で汽車に飛び乗り、ナコーン・ラーチャシーマー経由でウボン・ラーチャターニーへ脱出し、メコン川を船で渡り、バスでラオスの首都ヴィアンチャンに到着し、其処から更にターケーク、ハノイに到着し、昆明から飛行機で重慶目指し、１９４６（昭和２１）年３月１９日無事に重慶に到着したが、肝心な戴笠が３月２４日南京で飛行機事故で死亡したために、蒋介石と会見する夢は消え去り、７月１日に南京に移動し、国防第二庁職員に任命されたのである。

辻参謀は約２年後に上海の引揚げ船で１９４８（昭和２３）年５月２６日にこっそりと佐世保に上陸し、常に７人の青年僧に見守られながら、日本国内を転々と隠密行動を取っていた。

１９５０（昭和２５）年１月１日に、服部卓四郎の奔走もあり、辻参謀の戦犯容疑者の汚名が解除されたのである。

解放されてから潜行三千里の本を出版した辻参謀は一躍有名となり、１９５２（昭和２７）年には石川県第１区の衆議院に立候補し、１９６０（昭和３４）年５月の参議院全国区で無所属で立候補し当選した辻参謀は、１９６２（昭和３６）年４月４日辻政信参議院議員として、サイゴン４日から７日迄、プノンペン８日から９日迄、バンコク１０日から１３日迄、最後のヴィアンチャンが１４日から２０日迄の日程で視察を兼ねた訪問予定で日本を発った。

辻参参謀は４月１０日の朝、弟子だったバンコク大使館駐在の伊藤知可士一佐と飛行機でヴィアンチャンに飛び、ラオスで昭和３１年８月に開設された東京銀行支店に努めていた赤坂勝美と合流し、危険地帯となっているハノイ行きに関して話し合っている。辻参謀は「ホーチミン大統領に会ってベトナム戦争をやめるよう説得するからジャール平原を通ってハノイに行きたい」と意見を述べ、道案内を物色していた。伊藤知可一佐は４月１９日にバンコクに戻ることになり、後の世話役を赤坂勝美に任せてヴァンチャンを発った。

辻参謀は５月１０日迄に東京に戻らなければならないので、戻って来るものと思っていたが、遂に戻らず行方不明となり、大騒ぎとなった。最後に僧侶姿に変装した辻参謀と別れたのは、車でセタパレス・ホテルに迎えに行き、ヴィアンチャン郊外迄送り届けた赤坂勝美と大使館の金城運転手２人だけだった。

辻参謀が行方不明になった当時、香港の保蜜局（国民政府の諜報機関）の情報によると、辻参謀はラオスから船でメコン川を下り、ハノイに入り、ハノイからソ連の輸送機で北京へ飛び、北京の空港で入国ビザが無かったために密入国者として逮捕され、軍事監獄に放り込まれ、１９７０（昭和４４）年の初夏に病死した、と発表されている。確認は取れないが、間違いないと思う。

僕の手元に、西浦三郎さんに送って貰ったチヤンマイの主である波多野秀さんが綴った遺稿がある。多少違った箇所もあるがそのまま記載する。

波多野秀さんの遺稿より

『タイ国在住７０年、思い出すままに』

横浜の「野碕洋行」がシャムに支店を出すので、柳田亮氏と波多野章三と支店長の３人が初めてバンコクに来たのは、日露戦争が始まる３年位前の明治２５年の春でした。その当時のシャムには３人の他には日本人は誰もいませんでした。その時、章三は１４歳、３人はシナ宿に泊まって家探しに毎日出かけ、バンモーの一角に手頃な家を見つけて、１ヶ月９バーツの家賃で借りて開店しましたが、支店長がだらしなくて飲んだくれで、日本へ送金しないので商品が来なくなり、２年位で店は潰れてしまいました。

支店長は残った商品を競売に掛けて、柳田と彼と波多野を置き去りにして一人で日本へ帰ってしまいました。残された２人は食うに困ってセンベイ焼きをしてやっと命を繋いでおったそうです。

そうこうしているうちに、日本とシナの風雲が怪しくなってきました。今にも戦争が勃発するような噂がバンコクの街中に広まっていました。その頃のバンコクは何処もかしこもシナ人ばかりで、ロッチェク（シナ人の車曳き）うようよしとったので、外に出るのが恐ろしかった。その頃のシャムは、この

ロットチェクが唯一の交通機関でした。

毎日、恐々センベイを売りに街へ出かけておったそうです。或る日、小さな女の子を一人連れた日本人の夫婦に出会った。それが、上海を逃れてバンコクに来られた磯長海州夫婦でした。

同道して柳田のところへ紹介しました。磯長氏は上海写真業を営んでおられたが、風雲が怪しくなって来たのでバンコクで開業するという。そのお話を伺って力強く嬉しくなって、柳田が借家探しに出掛けました。

今の中央郵便局の前に大きな家を見つけて、そこで写真店をすることになった。その時に波多野章三も弟子入りして、明治４３年にその店を継ぐことになりました。現在の郵便局は、その頃は英国領事館でした。当時の郵便局は河ぶちの税関の横にありました。

「丁度その頃、英国人が建設中のバンコク・アユタヤ間の鉄道が完成して、試運転を行うことになりました。列車はバンコクを発して轟音を立てて、疾走そうしてアユタヤに差しかかった時、ジャングルの中にいた野象の大群が列車の轟音にびっくり仰天したものか、ジャングルから飛び出してきました。

大群がいきなり疾走中の列車目掛けて体当たりしてきたので堪りません。象は死に、列車は横倒しになって、死人、怪我人がたくさん出て、目も当てられぬ惨状だったそうです。英国人の依頼で磯長が四つ切りで撮影した十数枚の原版を章三が保存しましたが、バンブァトーン（終戦時、日本人が入れられた収容所）に収容される時に捨ててきたことを聞いて残念に思いました。

磯長の次に上海からやってきたのが角田の婆さんで、日本娘を５人連れて家が見つかるまで柳田の所でみなゴロゴロしておりました。急に日本人が増えて賑やかになり、美味しい物も食えるようになって、柳田はたいへんな張り切りようで家を探しておりましたが、その当時一番賑やかな交通の便が良かったサムエークの角を借りてフジホテルの看板を挙げ開業したのです。

当時のシャム女は、若いも老人も皆ザンギリ頭で皮膚の色は黒くて顔は角張って、どれもこれもビンロージュの実を噛んで赤い唾をペッペッと道端に吐くので、とても気持ちが悪かった。今は昔と比較にならないほどよくなりました。ピブーン総理以来力を入れてきた文化方面も高度に達成されて、市街もまた見違えるばかり整頓されて素晴らしくなりました。

そんな時代にキレイナ色白の日本娘を連れてきて店を開いたのだからたまらない。たちまちのうちに店は大繁盛して、毎晩押すな押すなと突きまくられて万客大繁盛したそうです。女装の婆さんは通称上海婆さんと呼ばれて一躍有名になり、これが日本娘のシャム進出の始まりです。

明治２７－２８年の日清戦争で大勝した日本は、一躍外国人から愛国心強い国民と称賛されて、シナ人も初めて日本人を尊敬してくるようになったので、肩身も広かったそうです。

日清戦争が終って間もなく、長崎出身の池崎さんという人が来られて、バンコクで池崎洋行を開店されました。これが野崎洋行に次ぐ二番目の日本人商店です。池崎さんは鼈甲細工師で、特にシャム宮内省に出入りされて、皇族や上流婦人のクシを鼈甲で作っておられました。

シャム政府は日清戦争で大勝した日本を認識するようになって、日本熱が勃興して、第１回の政府留学生として女学生２名、男子学生２名、計４名を明治３４年、池崎洋行の世話で日本へ留学させること

になりました。

女子学生２人は東京御茶ノ水大学校に入学して、日露戦争は日本で明治３５年に帰国しました。その時、２人の女学生はタボを使って日本式の髪を油って美人になって帰国したので、日本髪が有名になり、日本商店がタボを取り寄せて売るようになったのが、シャムで日本髪と呼ばれて流行した始まりです。

４人の学生が帰国して政府に報告していわく「日本の女性は髪を長くして美人揃いです。男も女も勤勉でよく働いて礼儀正しい国民です。益々日本熱は高まりました。この中の一人の女子学生は戦後チェンマイでスキヤキ屋を営んでおりました。もういい年のお婆さんでしたが、流暢な日本語話しておりました。

一方、ワンサランロムの中にありました皇族の学校の先生が、また池崎洋行くの世話で日本の華族学校を見学にいかれましたら、先生も生徒もみんな美人揃いだったので、目もくらまんばかりにビックリして帰国して、そのことを詳しく報告されましたら、ぜひ日本からも女の先生を招くようにということでした。

それでまた池崎さんが世話をして２名の先生を招くことになりました。２人の先生は日本髪に着物で茶のハカマをはいて来られましたが、期待に反して日本の先生は２人ともお多福だったので、皇族女学校の先生はがっかりしたそうです。これは池崎吉郎さんの話です。

しかし、お多福とか何とか失礼なことを言われたにも関わらず、美しい日本髪はとてももてたそうです。タイの上流婦人が彼女たちを可愛がってくれて、タボを入れた日本髪の結い方を習いに来られ、日本趣味が益々盛んになりました。２人の先生は無事２年間勤められて帰国されました。

この日本髪が何時とはなしにタイ地方にも流行し出しました。タイ人と違ってラオ人は色が白く、髪も長く衣装もシャム人とは全然違って上品で美しいので、この日本髪がとてもよく似合ったのです。チェンマイ地方で日本髪を結わない女性は時代遅れの人間のように言われたそうです。その位日本髪が大流行して、昭和５、６年まで売れ残りのタボを買いに来た人もおりました。日清、日露の役に大勝した日本は、シャム人、シナ人から一躍尊敬されて、益々肩身の広い思いでした。日露戦争が終って、田中盛之助が来られて暫く磯長方におられましたが、ランパンの王様と知り合いになって、王様と一緒にランパンへ行かれました。その当時はドイツ人の手で鉄道が建設中でナコーンサワンまで鉄道が通じておりました。ナコーンサワンから船でいくことになりました。一ヶ月近くかかってランパンに着きました。

ランパンで写真屋を始めていたら、米国人の医師・コート博士に会った。ドクターは田中に自分はキリスト病院を建設のためにチェンマイへ行くのだが田中も行かないか、と誘ってチェンマイの様子などを詳しく話してくれたそうです。

人口はランパンよりもずっと多く一万人余りもあって市場も繁栄している話を聞いて、田中はチンマイに魅力を感じて急に行く気になり、店を始末して行くことに決めたといいます。鉄道は勿論なく、船で上がると五日もかかるので、馬で山道を伝って一晩山小屋に泊まって翌日の夕方チェンマイに着いた。

チェンマイのワッケッという町はその当時一番賑やかな町であったそうです。船着場で運送屋が軒を並べて宿屋もたくさんあって、ひとまず其処に落ち着いて家を探し、ターペ・ロードに家を見付けて写

真屋を開きました。

ドクター・コーのキリスト病院は、間もなく米国婦人のマックコーミック婦人が来られて、婦人の資金援助で現在の広大な土地を買い、そこに病院を建設してマックコーミック病院と改名して、現在のごとく大隆盛した次第です。現タイ国王の御父君であるコムロアンソンナカリン殿下は、明治の末に米国留学から御帰国後、この病院に暫くの間お勤めでした。

チェンマイで写真屋は田中が一軒だけだと思っていたら、アヌサンというシナの写真屋がワッケッで営業しておった。後年彼はチェンマイ一番の金持ちになったといいます。銀行家のクライシー氏はアヌサンの孫に当ります。第二世界大戦勃発の際、彼の他のシナ人５人が捕まって取り調べられた経緯は、ここでは省略します。

田中の次に間もなく医師の三谷足平氏と渡部氏が来られて、日本から活動写真を持ってきてバンコクで活動写真館を開かれました。これがシャムでの活動写真の始まりです、シャム人はこれをナンジープンと呼んで大繁盛でした。済んだフイルムをチェンマイに送ってもらい、田中が役人倶楽部の近くに活動写真館立てて始めたら、大いに受けて大繁盛しました。

活動ものでクライマックスに達したとき、バクチクをパンパンと焚くと観衆絵は興奮して喜んだ。と田中の笑いの一つでした。活動写真は三年余り続けたそうですが、その頃シナ人が外国映画を輸入したので止めたそうです。この呼び名は何時までも残って外国映画でもナンジップンと言っておりました。

また、現在チェンマイとランプンでタイ・シルクやいろんな織物が大繁盛しておりますが、これは稲垣公使の賜物です。日本から先生を呼んでカイコや機織機を持参して指導されたのが始まりで、それがチェンマイとランパンで発展したのです。

少し遅れて日本から傘を作る先生が来て、チェンマイで紙造りから傘の竹骨まで指導されたのが、現在チェンマイで家庭産業として発展しておる次第です。

１９０５年に着工したバンコク・チェンマイ間７５１キロの鉄道工事は、１９１３年にドイツ人の手で完成して開通式が行われました。この鉄道の最大の難所だったのはランパンとランプンの中間のクンタン・トンネルで、長さ１キロありますが、この辺はマラリア熱の発生地でトンネル工事では多くの死者が出ました。

その途端に第一次世界大戦が勃発しました。昔からシャムとドイツは友好関係国の間柄であったのですが、仏、英、の強い要求によって連合軍につかざるを得なくなってフランスへ出兵したような次第です。

一方、シャム国内におったドイツ人は軟禁されましたが、シャム鉄道の恩人として客人同様に待遇されたそうです。戦後は益々両国の友好関係を深めたことは皆様ご承知の通りです。

バンコク・チェンマイ間の鉄道が完成したにも関わらず、使用者が大変少なかったのは、トンネル工事で多数がマラリアでやられたので、汽車に乗ってトンネルに入るとマラリアにかかるというデマが町中の噂になったからです。恐ろしがって２－３年は皆汽車に乗りませんでした。因みに、バンコク・チェ

ンマイ間の汽車賃は１２バーツでした。

また、その頃は治外法権があったので、その陰に隠れて悪いことをしたり、博打場の番人をしたり、何時も領事館の警部さんを手こずらせた奴もおりました。日本が率先して治外法権の撤廃に踏み切ったのも、こんなことが原因の一つだったと聞いております。シャム側には逮捕したり裁判する権利がないので領事裁判は何時も英国領事館で開かれたそうです。兄の店は英国領事館の前だったので、通訳に呼ばれて行ったが、じっと腰掛ているだけで1時間１５バーツも貰ったことを自慢しておりました。

私は大正３年９月にバンコク大山商会の宮田和一氏と一緒にシャムに参りました。明くる日、兄が日本倶楽部（現日本人会）に私を連れて行きました。倶楽部はニューロード・ブッシュレーンの小さなバンガローの家で、泉生太郎氏が書記でした。その左側の角は床屋の面田利平さんの店で、面田さんはコーラット鉄道建設工事の工夫で来られた最後の一人です。今は息子さんの初平君が後を継いでおられることと思います。

私は大使館付属陸軍部官富岡大佐の勤めで、昭和４年８月チェンマイ行きの急行列車でバンコクを発ちました。北上の途中、夜明けに目を覚まして窓の外を見たら、豪雨のため谷川の水は洪水の如く線路の上まで出水し、約４９０キロに差しかかった時に轟音と共に汽車は谷川に転落して、多数の死傷者を出しました。

私は幸い軽傷で済みました。この時一人の外人が気転を利かせて食堂車からウイスキーを一瓶持ち出して来て、傷の消毒をしてくれたのは嬉しかった。援助列車がランパンから来るのを１０数時間も人家のない山の中で待つのは全く辛かったです。チェンマイに着いたのは夜中の３時過ぎでした。

当時のチェンマイの町並みは、中央を大きな川が流れ、四方は山に囲まれて日本の田舎町そっくりで、丁度郷里福山の町のような感じでした。ラオ人は人情味も温厚で、ついそれに引かれて永住してしまった次第です。その当時のチェンマイには総督府があり、総督はプラオン・チャオトッスリウォン殿下でした。また、チェンマイの王様チャオケオナワラット王も健在で、お二人とも本当に日本趣味で、日本から金屏風を買われたり、スキヤキ鍋を沢山取り寄せよくすきスキヤキ会を催されました。私の結婚式は総督邸で執り行いました。その頃の日本人は田中の他に八木、長野、矢野、常本氏がおられましたが、現在では古い人は私一人になってしまいました。太平洋戦争少し前に日本領事館が設立されて原田領事と西野順次郎氏が来られました。またバンコクの日本人の会社、出張所が設けられて賑やかになりました。一月元旦に一同が領事館に集まって君が代を合唱したこと等は、まだ昨日のように懐かしい思いでの一つです。

昭和１６年１０月頃から、世界の雲行きが怪しくなってきたことを街のあちこちで噂し出しました。もし戦争が勃発すれば、蒋介石軍がランパンに攻撃してくることは日本人一般の常識と成っていたので、病気だった田中をマックコーミック病院に入院させ、我々一同は１２月６日バンコクへこっそりと一週間ばかり非難することになりました。

１２月８日の昼近くにバンコクに着きましたが、バンコクの駅にはもう日本兵が来ていたのを見て驚きました。私たち家族は5日目にチェンマイに戻ってきたところ、米国人や英国人はチェンマイからビ

ルマへ逃げ込んだということでしたが、昔からの英国人移住者の５名はまだチェンマイに家族と共に住んでおりました。

１２月中旬頃から日本飛行隊の地上部隊がチェンマイ飛行場に駐屯し始めました。間もなく祭兵団が進駐してきました。兵団長は山乃内中将でした。私の写真店の隣のキリスト教会が司令部になりました。

若い者はみんな通訳に駆り出されました。開戦７、８年前に田中が調査したことがあるメラマイ・メーホンソンの近道にビルマへ進駐する道路を造るために、工兵隊が着工し始めましたが工兵隊にはブルドーザーはなく、スコップとクワだけで始めたので遅々と進歩せず、結局兵団はインパール作戦に間に合わないので、チェンライからビルマ入りすることになりました

しかし、工兵隊は最後まで残って道路を完成させました。終戦間際にこの道路を利用して兵隊がビルマから下がって来ました。敗戦の一つはブルドーザーがなかったことだと言っても過言ではありますまい。

飛行場の地上部隊の方も、滑走路延長工事も、クワとスコップで苦力を百人余り集めて始めたが、これまた遅々として捗らず、４－５ヶ月かかって漸く飛行機が降りられるようになって、隼戦闘部隊が飛来して勇姿を現したのは翌年４、５月頃だとおもいます。

或る日の早朝、敵機数機が飛来し爆撃を始めたので、日本軍は２基の高射砲で応戦し、敵１機に命中して煙を吐きながら低空でランプンの方向に飛び去った。私たちはこの空中戦を店の前から眺められて全く壮観でした。日本軍は時を移さず走ってきて、私も一緒にランプンへ行ったら、黒焦げになって小川の辺りに墜落していた。すぐ兵隊を連れて来て丁重に祭り葬り「米国空軍勇士の墓」と書いた碑を建てて黙礼されたのには、側で見ていた私も頭が下がりました。昭和２０年頃から日本軍の旗色が悪くなってきて、ビルマからメサリエンに入り高い山を幾つも越えてチョムトンへでてきた兵隊は重病人が多くチョムトンの郡長が田中に知らせてくれるので、田中は薪を焚いて走る車を雇って２－３回往復したことがありました。終戦になってから、在チェンマイの日本人の財産は全部没収されて、我々はバンブアトンの抑留所に抑留されることになりました。陸を行くと顔見知りの人が多いのでみっともなく、田中の案で川下りと洒落込んでピン川を船で下がって２０日位かかって１０月の末頃にバンコクに着きました。バンブァトーン抑留所には一年近く抑留されましたが、日本軍の残した味噌、醤油等で豊富にあったので割合いに気楽にすごすことができました。

古くからいた日本人、女、子供を合わせて１００人余りの者が残留できることらになって、抑留所から解放されたのは昭和２１年１１月でした。終戦後間もなく、日本外務省の連絡事務所がバンコクに設置されて、タイ政府に没収された財産の明細書を提出するようにと通知がありましたので、明細書をだしました。

その時の話では日本政府が保証してやるとのことでしたが、その後待てど暮らせどなしの礫で、何の音沙汰もありません。今は他の古い者は極楽へ行ってしまい、私一人が残されてしまいました。日本政府の保証が貰えるものなら、生きている間に貰いたいものですなぁ。

最後にエコノミック・アニマルについて

この言葉は一次世界大戦当時はユダヤ人を指してジューだとかエコノミック・アニマルだとか言うとったのです。その当時のエコノミック・アニマルの意味は、守金奴といったような下品な意味に使われておりました。その当時の日本人は外国人からモンキーと言われておりました。

オッチョコチョイについて一言

戦後の日本人は民主主義を履き違えて、民主主義とはどんなことをしても自由だと考え違いして、政府の方針に従わず日本精神も忘れた教育を受けているので、無国籍者の如きオッチョコチョイが増えてヒッピーとか赤軍とか言うオッチョコチョイが海外にまで迷惑をかける。困ったもんでなすなぁー。

完

瀬戸の略歴

姓名　　瀬戸正夫　（せとまさお）
タイ名　　VIWAT　SRITRKUL　（ヴィワッ・シータラクーン）
出生地　　タイ王国プーケッ島　（当時はサヤーム王国）
生年月日　　１９３１年５月２３日

秘密にされていた家庭の内容
実母　　シヤン・セータン（陳）中国系マレー系タイ人、僕を２５歳の時に出産
日本人の母　田島テル　瀬戸久雄と同棲していたからゆきさん
日本人の父　瀬戸久雄　医師　特務機関　プーケッに１９１７年入国
中国人の父　季瑞清（スイチヤン）チャータッド銀行の頭取
（実母を仲良しだった２人の父が囲っていた。僕は誰の子か）

１９３３年
満州事変で中国人の反日運動発生十数人いた邦人は住めなくなる。父は一人で先にバンコクへ出稼ぎに行く。１年後に義理の母と２人で漁船でプーケッを後にし、トゥラン県のカンタンの漁港に上陸。１銭の金もなくトゥランの町まで歩き、医者をしていた河原先生宅に世話になる。金を借りて父がいるバンコクへ行く。当時バンコクは（バーンコーク）と呼んでいた。父は塩田さんが経営していた日の出病院に勤めていた。

１９３６年
バンコクから貨物船で南タイのシンゴラ（ソンクラー県）に移転。父はサーイブリー通りと、ペッキリ通りのソンクラー駅の近くの四辻に大きな洋館建ての二階家を借り、回生医院（ローンモーカイセー）を開業し、特務機関として日本軍部のスパイ活動を開始する。

１９３９年４月
バンコクの日本人学校から「瀬戸正夫は日本人の子弟であるから日本の義務教育を受けなければならない」との通知により、義理の母と汽車でバンコクへ行く。８歳まで無学、２年遅れで盤谷日本人学校に入学。日本語は余りできず、スリヴォン通りのメナムホテルに預けられ、独りぼっちの孤独な生活開始。

１９４０年４月
学校の４月の夏休みを利用してソンクラーの我が家へ戻る。或る日、父は船を借り切り２人で釣りに出かける。父はサミラービーチの真ん前に見える猫島、鼠島およびカウセーンの飛行場周辺の海の深さを測ってノートブックに書き込んでいた。別の日に、内海の湖になっている島々にも上陸し、地形の見取

り図や水を瓶に詰めて持ち帰っていた。

１９４１年１２月７日

マッカサンの日本大使館でピブーン首相を含めてタイの要人を招待した晩餐会あり、ピブーン首相はシーソーフォーンへ視察と称して雲隠れで出席せず。坪上貞二大使以下軍部慌てる。一方、日本人会では映画の夕べがあり、在留邦人は映画が終わってから、老人婦女子は日高洋行が用意したトラックに分乗し、三井ワーフに碇泊していた大阪商船のがんぢす丸に避難する。在郷軍人はバーンプー避暑地に上陸する吉田支隊を、途中で電話線を切りながら日高洋行のトラックで迎えに行く。

１９４１年１２月８日

１２月８日未明太平洋戦争勃発、日本は支那事変を含めて大東亜戦争、ドイツの欧州戦争を含めて第２次世界大戦となる。日本軍は１２月８日未明、マレー半島のコタバルとタイ湾に面したバーンプー避暑、プラチワプキリカン、スラータニー、チュンポーン、ナコーンシータマラート、パッタニー、シンゴラ（ソンクラー）に奇襲上陸を決行し、双方にかなりの死傷者が生じた。ナコーンシータマラートでは６人の邦人がタイの警官に射殺された。

１９４１年１２月１０日午前中にがんぢす丸より解散。お世話になったがんぢす丸の船員さんと別れを告げたが、最後の別れとなった。がんぢす丸は１９４２年５月２８日西貢付近を航海中敵の潜水艦の２本の魚雷により撃沈。船客１名と船員と日田船長を含め６名戦死。船客はタイの留学生１１名を含め７１名が日本の軍艦に救出された。

１９４２年１月８日

バンコクは午前４時頃英軍機２機による初空襲。初めて爆撃の怖さを経験する。

１９４２年１月中旬

メナムホテルで日本の軍医によるチフスの予防注射で倒れ、シーロム通りの木原病院に入院。一時息を引き取りあの世の花園をさ迷い、生き返る。それ以来霊感が宿り、霊が見えるようになる。

１９４２年２月末

ソンクラーの我が家から日本軍の軍用車でマラッカで警察署長をしていた父に義理の母と会いに行く。父に会ったのはこれが最後だった。敗戦時父はマラッカの病院長をしていた。父は戦時中にソンクラーの浜辺で英空軍機パイロット３名（Captain H C Wigjt、 Cap. R. Gordon、 Cap. E. Pege）の死刑に立ち合った戦犯容疑（背番号２２９７）者としてシンガポールのチャンギー刑務所に監禁されていた。だが地元の市民の嘆願書によって釈放され１９４７年１０月和歌山の故郷潮岬に帰国。英軍パイロット３名は、偶然だったが２００４年にカーンチャナブリーの外国人墓地で眠っていたことを発見。

１９４２年４月

ソンクラーのハートヤイからバンコクに戻り、日本人学校の敷地内に新築された学校の寮に預けられ、孤独な学生生活再開。戦時中学校は慰問や軍事教練が主体となった。音楽の時間には今まで習っていた唱歌はほとんどなく主に軍歌ばかり習うようになり暗記しなければならなかった。体操も武道となり昭和１８年頃から軍事教練が厳しくなった。相撲、柔道、剣道、銃剣術、弓、薙刀、水泳、町田流古式泳法、水中格闘などが取り入れられ、日曜日毎にルムピニー公園で外池部隊の将校の指導の下に軍事教練が実施された。男子は切腹の仕方、女子は手榴弾で自決する方法まで指導された。

１９４５年３月２０日

小学６年卒業。高等科（現中学）１年に進学。卒業したときは１４歳だった。だが戦時中は数え年で数えられ、１５歳で知らぬ間に少年兵にされ、大人の中に混じって実弾射撃の練習までさせられた。

１９４５年４月１４日

バンコクのワッ・リヤプ発電所と、サームセーンの発電所が空爆で終戦の日まで暗黒のバンコクとなる。専売局ではタバコの生産ができず家庭でタバコ巻きアルバイトが始まった。父からの送金もなく僕は毎晩夜更けまでタバコ巻きのアルバイトをした。１００本巻いて１１バーツだった。

１９４５年６月

日本の戦況太平洋上は玉砕（全滅）続き、敗戦色強くビルマ戦線やインパール作戦も失敗に終わり、タイにも英印軍の空挺部隊が攻めて来る恐れありと予測され、バンコクの在留邦人老人婦女子およそ１００名を当時タイ領だったバッタンバン（プラタボーン）に疎開させることになった。だが７月末になって希望者だけとなり、８月の敗戦間際になって取り消しとなった。

１９４５年８月１５日

早朝バンコクにＢ２４空軍機が１機低空で飛来し、日本が降伏したことをタイ語で印刷した無数のビラを撒く。日本敗戦無条件降伏。邦人は敵国人とされ、海外の邦人は全財産を敵産管理局に没収され、裸一貫にされ悲惨な目に遭う。

１９４５年９月１７日

自宅軟禁 され、３ヶ所のバーンブワトーン抑留所に収容開始。

１９４５年１０月初旬

第２キャンプ２班１号室に収容される

１９４５年１０月末
第２キャンプに寺小屋教室開始

１９４６年３月２５日
盤谷日本国民学校最後の卒業式

１９４６年６月４日
キャンプの学校閉鎖、高等科２年中退

１９４６年６月１０日
３ヶ所のキャンプから残留組を残し、第一次引揚組約３０００名が英軍が管理していたクローン・トーイのNew Life Camp（新生キャンプ）に向かう

１９４６年６月１５日
新生キャンプで英軍の取調べを受けた同胞は１５日の早朝クローン・トーイ港から連絡線でコ・シーチャンへ向かう。乗船前にタイの政府からお土産に一人５キロのお米を貰い、コ・シーチャンで待機していた本船「辰日丸」に乗り換え、１６日の朝祖国へ向かって出港

１９４６年６月１３日
第２、第３に残った残留組は第１キャンプに移動

１９４６年８月１日
僕の父は特務機関だったのでスパイの子はタイに残せない、との理由で英軍のモーリス中佐の命令により第１キャンプから急にバンコクの日本軍が管理していた第１６陸軍病院に連行され、帰還船待ちとなる

１９４６年８月
陸軍病院で帰還間近になった時点で再度モーリス中佐に父のことは何も知らない、と泣きつきタイ残留を懇願する

１９４６年９月２３日
陸軍病院でタイ残留許可取得。第１６陸軍病院より開放され自由の身となる。その日から生活費一切自

分持ち家庭の柱となり、未知の社会人となる。

１９４６年１０月
自分に秘められた秘密を感知し、実母探し開始。誰が僕の母なのか、何処にいるのか、生きているのか、どうなのか消息不明のまま手当たり次第に実母探しに没頭。実母は何処に。

１９４６年１１月15日
ヤワラーの中華街で開業した西野歯科院でボーイの初仕事。給料僅か１５０バーツ。初日のめでたい初仕事無一文のルムペンなり。水道の水に救われた思いで深い日なり。生活費不足で小遣い稼ぎに竹とんぼを作って子供に売ったり、魚の餌になるボウフラを掬ってバケツに入れてヤワラー中華街の金魚屋に売りに行ったりした。当時の麺類やカウパッやカレーご飯は一杯５０サタンだった。映画は前列が僅か２.５０バーツだった。

１９４８年1月
フリーカメラマン及び水泳教室開始

１９４８年１１月
ラーチャヴォン通りの小野商会で使い走り業務給料３００バーツ

１９５１年
ソーイ・ピパッに日本の海外事務所開設。戸籍謄本に僕の名前がなく国籍問題でペンディングとなる

１９５２年6月
日タイ協会月刊誌にペンネームでタイの関連記事連載

１９５３年より
日本人会のボランティア・カメラマン今年で６３年になる

１９５５年3月1日
シーラチャーのＳＲタピオカ工場で通訳、給料１５００バーツ

１９５７年
新興産業でセールスマン

１９５８年7月１６日
住友商事勤務、入札、貿易輸出入その他何でもやらされた

１９６０年１１月
日本人学校のボランティア・カメラマン

１９６１年2月１７日
プーケッ島で初めて実母シヤンに巡り合う

１９６１年６月１５日
日本大使館の書簡により日本国籍を破棄される

１９６１年６月１６日
バンコクで一番高いお寺、ワッ・サケートで自殺寸前に思い留まる

１９６３年１１月14日
３２歳のときタイ国籍を取得しタイ人となる

１９６４年春
住友商事を辞職、フリーの身となり現在に至る

１９６４年
シータラクーン貿易会社を設立するが資金不足で解散

１９６７年６月
バンコクカレッジ（現大学）で非常勤日本語教師

１９６７年より
朝日新聞社の助手兼カメラマン兼顧問今年で４９年になる

１９６９年1月
親戚と夢の旅行社を設立するが資金不足で破産

１９６９年６月
日本初訪問、朝日の石川巌さん宅に世話になる

１９７１年４月
夜スラータニーの山の中で右目を撃たれて失明

１９９７年より
シャンティ国際ボランティア会（SVA）とシーカーアジア財団のボランティア・カメラマン。アジア子供文化祭などを含めたイベント撮影並びにスタッフに写真の撮り方や日本語を教えたりして現在に至る

１９４８年１２月末頃より１９５４年末頃まで約６年間肩身の狭い思いで転々と居候生活。この他に日本の国家には嫌われ、罪悪人みたいに国籍を破棄され、１９６３年にタイ国籍を取得する３２歳まで窮地に追われ、ドン底生活。日本人社会からはバカにされ「土人の子だ」とまで言われ、信用ゼロ人間。フラフラ人生スタート。

タイ国籍取得後の私歴は自分でも信じられないけども事実であり、次のようになる。この世に僕みたいに両親、国籍、血統まで一変してしまう人生行路を辿った人はいるのであろうか。僕はどんなに虐められ辛くて悲しい思いをしても、自分に定められた運命だと思い歯を食いしばって生きるしかない。

僕がタイ人になってからの略歴

	日本人だった時	タイ人になってから
姓名	瀬戸正夫	ヴィワッ・シータラクーン
出生地	プーケッ島	プーケッ島
生年月日	1931/5/23	1931/5/23
年齢	８５歳	８５歳
国籍	日本	タイ
父の名前	瀬戸久雄	季瑞清（リー・スイチヤン）
母の名前	田島テル	シヤン・セータン（陳）
血統	日本	中国
宗教	仏教	仏教

アルバイト関係の仕事

タイ語及び日本語の家庭教師、夜学で日本語教師、食堂のレジ（会計）、夜警、舞台の裏方、波止場のクーリー（労務者）、バーの歌手、ナイトクラブのボーイ、旅行社のガイド、車の運転手、テレビのコーディネーター、日タイ語の通訳、水泳コーチ、書類やテレビ映画の翻訳、映画のエキストラ出演、有名な劇団のカメラマン、商業文の代筆、移民局及び労働ビザの手続き代行、ラジオ局で日本語の歌の解説、

バンコクカレッジで日本語教師、京都精華大学及び恵泉女学園大学の特別講師、企業の商業登録、ボランティア・カメラマンその他。

メディア関係

朝日新聞、週刊朝日、朝日グラフ、アエラ、日本人会の月刊誌クルンテープで『写楽の旅』、Voice Mailで『瀬戸正夫の一枚の写真』、まるごとタイランドで『どこまでも東北タイ』の写真、東南アジア通信に写真掲載、東京のアジア・ヴェーブで『瀬戸正夫の東南アジア写真館』、バンコク日本人商工会議所の『タイ国経済概況年版誌』に写真、ちゃーおフリーペパーで『瀬戸正夫のチェンマイ回顧録』連載、Bangkok Lifeで『瀬戸正夫の一枚の写真』連載、Voice Hobby Club のFACE 季刊誌に『微風と戯れて』、日本人納骨堂８０記念誌に『戦火に奇跡的に残った納骨堂』、日本人会百周年記念誌タイと共に歩んで、に『バーンブアトーンキャンプの出来事と、太平洋戦争に巻き込まれて』及び写真、Facebookで『僕の独り言』、『写楽の旅』、『想い出のアルバム』を連載、アジア文化社の電子版で『タイに生きて』をオンラインしている。

著書に

『父と日本にすてられて』　かのう書房
『瀬戸正夫の人生上下巻』　東京堂書店、シーカーアジア財団（自費出版）
『バンコクの灯』　東京堂書店、シーカーアジア財団（自費出版）
『旅の道すがら』　東京堂書店、シーカージアア財団（自費出版）
『瀬戸正夫の一枚の写真』　東京堂書店、シーカーアジア財団（自費出版）
絵葉書４０種　東京堂書店、シーカーアジア財団（自費販売）
『チヴィッ・マサオセト１、２』　まるごとタイランド（タイ語版）

取材その他でお世話になった方々

金井純雄先生、町田実先生、宮脇良憲先生、宮脇アキヱ先生、金庭康子先生、飯塚ウライ先生、日高秋雄さん、日高邦夫さん、藤島健一さん、小谷亀太郎さん、大峡一男さん、里見宗次さん、藤島淳子さん、飯塚勉さん、金井栄子さん、波多野秀さん、波多野喜美子さん、滝川虎若さん、日田豊晴さん、柏優子さん、石田祐樹さん、吉川亨さん、日高百合江さん、日野悠紀江さん、椿賢志さん、池田實さん、泉三和子さん、末藤洋子さん、吉川米美さん、藤島健さん、山本健治さん、山本良子さん、南正一さん、岡部ツタエさん、福井久子さん、玉田恵美子さん、松尾信彦さん、蓑和嘉子さん、五十嵐勉さん、橋田信介さん、春木忠雄さん、新野敬一さん、新野郁子さん、河原錦二さん、泉芙美代さん、加藤千洋さん、宇佐波雄策さん、藤田豊さん、落合春一さん、西浦三郎さん、島津愛介さん、市村敏幸先生、松村みかさん、河合フミさん、藤井サナさん、栄口乃恵子さん、勝山千恵子さん、茂刈百合子さん、千秋智恵子

さん、高島伸欣さん、久松実さん、高田美恵子さん、長野瑞穂さん、藤原源吾さん、柴田広さん、大塚寿男さん、竹本憲司さん、大石芳野さん、八木沢克昌さん、松本逸也さん、野中章弘さん、大野良祐さん、坂井香奈さん、吉田圭助さん、山本利樹さん、シーカーアジア財団（ＳＶＡ）ボランティアの方々、David John Boggett さん、コークプーン・ネーオワクンさん、ナカリン・メークライテッさん、ワー・ヴティプームさん、サアート・カマスントーンさん、スワッタナー・レーンクルッさん。

あとがき

僕がバンコクで五十嵐勉編集長の好意で、東南アジア通信で連載していた『瀬戸正夫の人生上下』を本に纏めて自費出版したのは２００１年の夏だった。月日の流れと共に本は徐々に売れ、嬉しいことにやっと絶版になった。

僕自身も、もう８５歳になり、高齢者の仲間入りし、人生の分岐点をトボトボと辿っている現状なので、今のうちに後世に残す物を残しておかなければと思い、昨年末から『瀬戸正夫の人生上下巻』の再版作業に取り掛かった。

再版するに当り序でに新たに得た資料も盛り込み、改訂版にし、世界中の人々が何処に居ても自由に簡単に読める電子版で発表し、大勢の人々に読んで貰いたいと思う。本を出版すると言っても、そう簡単に実行出来る物ではない。結構大変なことである。

僕は常にお世話になっているアジア文化社の忙しい五十嵐勉編集長に、頭を下げてお願いかるしかない。従って、原稿を纏めて五十嵐さんに送っておけば一安心である。

過去において『瀬戸正夫の人生』を出版するに当り、日本へ何回も通い大勢の皆様から貴重な体験談を聴き、お世話になった。だが、年月の流れと共にもうほとんどの方が他界してしまい実に寂しく遣る瀬ない気がする。人生の運命線とは、歓喜のあとには悲しみが訪れる果かない宿命を背負わされているものである。

僕は美しい自然と共に様々な辛苦を嘗め、今日に至るまでどうにか無事に生き抜いてきた。今は大勢の心温まる親切な仲間に支えられ、元気で楽しい幸せな人生行路を辿っている。

編集は大変だったかと思うが、お世話になった五十嵐勉様、いろいろとお世話になまして誠にありがとうございました。今後とも宜しくお願いします。

毎晩夜更けまで打ち込み作業を続けた今回の『瀬戸正夫の人生』の改訂版は、眼が悪くなった僕の満８５歳誕生日を迎えた記念誌である。

２０１６年５月２３日

瀬戸正夫

参考文献及び写真

上東輝夫　タイ王国　原書房　１９８２年

タイの民衆の戦いの記録集委員会偏　血の水曜日　亜紀書房　１９７７年

田中広　在日外国人　岩波新書　１９９４年

チュラーロンコーン大学成人教育センター　タイ文化の魅力　１９９４年

村上吉男　バンコク秘密情報　朝日新聞社　昭和５１年

西野順次郎　日・タイ四百年史　時事通信社　昭和５３年

御田重宝　マレー戦・前編　徳間書店　１９７７年

防衛庁研究修所戦史室　マレー進行作戦　朝雲新聞社　昭和４１年

伊東隆　日本の歴史第３０巻　１５年戦争　小学館　１９８１年

岡野薫子　太平洋戦争下の学校生活　新潮社　１９９０年

藤田豊　ナコーンナョークの奇跡の碑　第３７師団記念出版会　平成２年

藤田豊　夕日は赤しメナム川　第３７師団戦記出版会　昭和５５年

藤島健一　激動する戦争の裏話　国際印刷有限公司　１９７７年

辻政信　潜行三千里　国書刊行会　昭和５３年

橋本哲男　辻政信と七人の僧　光人社　昭和６３年

生出寿　作戦参謀辻政信　光人社

中村明人　ほとけの司令官　日本週報社　昭和３３年

服部卓四郎　大東亜戦争全史　原書房　１９８２年

戦争史研究普及会　マレー作戦　第二次世界大戦史　昭和４９年

森村誠一　続・悪魔の飽食　第三部　角川書店　昭和５８年

富山泰　カンボジア戦記　中央公論社　１９９２年

近藤紘一　戦火と混迷の日々　悲劇のインドシナ　文芸春秋　１９８７年

熊岡路矢　カンボジア最前線　岩波書店　１９９３年

駒宮真七郎　戦時船舶史　平成３年

朝日新聞　データーで見るアジア・太平洋戦争１９９５年1月1日紙面

朝日新聞　資料室

西浦三郎　資料及び写真

アジアプレス・インターナショナル　アジア大道曼陀羅　現代書館

東京新聞　サンデー版　２００５年８月７日

東京新聞　サンデー版　２００５年８月１４日

高橋久夫　泰緬鉄道のアジア人　労働者

柴田直治　バンコク燃ゆ　めこん　２０１０年９月１５日

１億人の昭和史２　三代の女たち　毎日新聞

日本タイ学会偏　タイ辞典　めこん　２００９年９月１０日
タイ国国立図書館　資料写真
タイ陸軍編集　タイの英雄５０周年　仏暦２５３４年（１９９１年）
サヤームバン　Siam Almanac　仏暦２５３３…２５３４年
サアート・カマスントーン　日本がナコーンを侵略した日
オー・ソンクラーム　ビブーン・ソンクラーム元帥　第１巻…５巻
バンコクのセーリータイ博物館資料
プレー県のセーリータイ博物館資料
ラノーン県地元の資料
ドクター・プワンティップ・キャッティサハクン　The southern railways in the shadow of the raising sun